
空から魔神が！？

如月八日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空から魔神が!?

【Nコード】

N1282S

【作者名】

如月八日

【あらすじ】

人型兵器「マシン・リリーゼ機工戦騎」を駆る傭兵「キサラギ」は宿敵「レオン」との戦いの中で別の世界へと飛ばされてしまう。彼が辿り着いたのは魔族と人間が対立する剣と魔法の世界だった。しかも落下の衝撃で魔族と人間の境界「魔の森」を吹き飛ばしてしまう。おまけに両者から「魔神」と恐れられ討伐隊まで組織されることに……

武器は不調！ 機体は故障で空が飛べない！ それでも安心の機工戦騎！ 一雑ぎすれば一騎当千！ 突進すれば城門粉碎！ そびえ立つ姿はまさに魔神！ 空から落ちて来た魔神はこの世界に一体

何をもちたらすのか？

プロローグ

人類がその住処を宇宙へと進出させた時、戦争は変わった。核を筆頭にした戦略兵器の数々は滅びへの引き金は容易く引けるようにしてしまった。

相互不可侵の戦争の始まりである。

戦略兵器はその意義を失い宇宙という新たな広大な領地を前に人間の戦争は新たな姿へと変貌を遂げた。

過酷な宇宙環境に適した無人の戦術兵器の台頭と“人材”という資源の消費を抑えるべく戦場に送られる兵士の数は年々と減っていく。

戦場には指揮する為の僅かな人間と彼らによって指揮される無人兵器だけが残された。

惑星開拓による新たな資源を巡る無人機による戦争が続き、人々は“血を流さない戦争”にすっかり慣れてしまった。

それでも戦場に立つ人間は居る。戦闘指揮をする人間である。彼らは無人兵器を運用し指揮する為に一人は戦場に立っていた。

しかし人間の必要性が薄れてしまった国軍には数名の将校しか残されていない。そんな彼らが部下として戦場に送り出したのが金で雇われた傭兵達であった。

絶えず命を危険に晒す過酷な労働条件は同時に莫大な報酬が約束される。彼ら【傭兵^{イーガー}】は味方の無人兵器を指揮する一方で、自らもナノマシンを介した機体同調システムを搭載した人型機動兵器【機^マ工戦騎^{シネ・リーゼ}】で敵の無人兵器に対抗した。

キサラギもそんな金で雇われた傭兵の一人だった。

『メインシステム起動。生体反応をチェック　搭乗者をキサラギ本人と確認』

「時間が惜しい。機体状態のチェックを急げ。リート」

ディスプレイの灯る操縦席でキサラギは相棒のナノマシン管制用

AIに指示を出す。

彼が居るのは機工戦騎の操縦席である。彼が乗る戦騎名【シユナイト】は依頼主より預けられた艦内で静かに出撃の時を待っていた。機体状態を確認　良好。搭載武装を確認　全火器問題ありません」

「わかった。なら作戦内容の最終確認を頼む」

「了解。今回の作戦内容を説明します。今回の標的は敵の機動艦隊です。数は5隻と少な目ですが油断は出来ません。敵艦隊は哨戒任務中だった依頼主の無人艦隊と交戦。向こうは1艦も欠けることなくコレを撃破しています。なお、敵は傭兵を雇っているようです。新に入った情報によると対象の中に機工戦騎【テュラン】の存在が確認されています」

「ぐっ……なら向こうの大将はレオンの野郎かよ」

「現在の速度で航行すれば敵艦隊との接触ポイントはエリアY3宙域になります。目的は敵艦隊の撃破、もしくは敵防衛戦力の無力化です。こちらとしては最低でも【テュラン】の撃破はしなければなりません」

「あの殺人狂の相手は骨が折れそうだな」

「それだけではありません。交戦ポイントとなるエリアY3宙域は第一種危険宙域に指定されています。あの狂人の相手をするには些か不安な場所です」

「画面が切り替わる。新しく表示された作戦宙域の情報にキサラギは眉を顰めた。

「これは……断続的なホールルの自然発生だと？」

ホールルとはその名の通り宇宙空間にぽっかりと開く穴のことである。ホールルは見境なく周囲の物を呑み込む危険な自然現象で、宇宙空間を航行する際に留意すべき災害である。

規模は様々だが大きさによっては艦隊すら全滅させることすらあった。

しかし平時なら回避は難しくないが作戦中は話が別である。

『現在詳しい原因は不明ですがY3宙域はホールが発生し易い環境のようです。しかも艦主砲である荷電粒子砲はかなりの確率でホールが発生させる危険があります』

「艦主砲による一掃は無理なんだな」

『はい。使用は控えるべきです。また自然発生の兆候にも気を付けてください。こちらでも随時チェックはしますが、マスターの方でも計器には気を配ってください』

「わかった。主砲による援護射撃が望めないならしょうがない。レオンの野郎とは正面からやり合うことになりそうだ。両腕部武装を対機工戦騎用のライフルに換装。あとエリアY3は漂流物が多い。運搬用無人機【キャリアー】に予備の装備と弾を搭載しておけ」

『了解。換装作業は10分程で完了します。マスター』

「頼む。リート」

キサラギの了承と同時にハンガー内の無人整備機が換装作業を開始する。

この艦隊にはキサラギの他に人間は居ない。艦の操縦から機体の整備、清掃から調理まで全て作業をAエリートによってナノマシンを介して制御されている。

彼を雇った将校は長距離無線を通じてキサラギに大まかな指示を出すだけだ。そのキサラギにしても大抵の場合は無人兵器を相手に戦っている。

誰だって死ぬのは嫌だ。狙うのは無人兵器　そういう暗黙の了解があった。

まさに“血を流さない戦争”である。

「……だが奴は違う」

傭兵とは身寄りの無い孤児や生きる為に金を必要とする人間がなる職業だ。

しかしレオン・ブランデルは富裕層の生まれだ。彼は金銭が目的で傭兵をやっている訳ではない。レオンが傭兵をやる理由は単純である。

それは“合法的に人間を殺せるから”だ。

「ちっ……全く厄介な奴に目を付けられたもんだよ」

初めてレオンと交戦したのは半年程前になる。当時から既にレオンは同業者から頭のいかれた“殺人狂”として彼の愛機【テュラン】と共に有名であった。

“戦場でレオンに会ったら迷わず逃げろ”

キサラギも同業の傭兵にはそう忠告されていた。

「なんで俺なんだろうな。リート」

「恐らくマスターがああ男に正面から戦いを挑んだからだと思われる」

「やっぱりそう思うか？」

「はい。当時からレオンは明らかに傭兵の間で忌避されていました。戦うことが当然の傭兵業も命あつての物種です。進んで殺人狂の相手をしようとする者は稀でしょう」

「ぐっ……言われてみれば……」

「ですが、そう悲観的になるばかりでもありません。少なくとも今でも私はあの時にマスターがした選択は正しかったと思います。あの男に背を見せれば即撃墜されていたことでしょう」

「それが原因で今もあの狂人にストーキングされるようになってるか？」

「はい。それに何度も襲って来るのなら何度でも倒してやるまでです」

「簡単に言ってくれるぜ」

「大丈夫ですよ。マスターは負けません」

「その根拠は？ 悔しいがレオンは一流の傭兵だぞ」

「問題ありません。腕前ならマスターも十分に一流です。そしてマスターには一流のサポートAIである私が付いています。なら二人合わせて“超一流”です！」

「ったく……そう言われちゃ勝つしかないだろ」

長年の相棒から心強い言葉を貰いキサラギの心に闘志が漲る。

確かに相手は凄腕の強敵だが自分達は何度も撃退に成功している。

「よし！ 今日こそ奴との因縁を終わらせる」

「はい。マスター！ 換装作業完了。まもなく作戦宙域に入ります」

「あの野郎のことだ。恐らくは一騎討ちを御所望だろう」

「どうしますか？」

「勿論、討つて出るぞ！」

「了解。システムを戦闘モードに移行します」

「生体反応 良好」

「機体状況 良好」

「機体接続 良好」

「【シュナイト】 起動」

頭部カメラの単眼が赤く灯る。システムの移行と共にキサラギはスティックを握る。

リフトが起動し機体をメインカタパルトへと移動させる。

「カタパルトに接続 完了。敵艦より熱源多数 無人支援機【

スフィア】です」

「出遅れたか……こちらも【スフィア】を出せ。出た所を叩かれちゃ堪らん」

「了解。敵機の迎撃に向わせます。進路クリア ハッチ開きます」

正面ハッチが開きメインモニターに漆黒の宇宙が広がる。

リフトが味方艦隊から無人機を発進させる。それと同時にレーダーには敵艦から機工戦騎を表すマークが表示された。

「早速来やがったな。【シュナイト】 出るぞ！」

フットペダルを踏み込む。リンクしたカタパルトが作動。弾かれるように全長30メートルを誇る漆黒の巨人は因縁の戦場へと躍り出た。

現代における戦争とは無人兵器を主戦力とする物量戦である。

如何に安価で大量の戦力を用意出来るかが重要だ。故に機種による明確な役割分担と徹底した単純さが必要とされる。

その中でも最も戦場で幅を利かせているのが【スフィア】という

無人支援機だ。これは宇宙空間での機動を想定した球状の機体である。

小型で積載量が低く武装は一つしか取り付けられないが、その単純さ故に様々な装備が取り付けられる。また搭載する装備によっては攻撃支援から防御支援までこなせる高い汎用性から国を問わず広く支持されている。

「雑魚の相手は任せるぞ。リート」

『了解。その間は最低限の補助しか出来ません。お気を付けて』

無人機はナノマシンを介した量子通信で操作される。下手に人間が操作するよりリートのようなAIに任せてしまった方が適任だ。

何よりこれから戦うレオンは強敵だ。敵味方両方の意味で無人機に気を取られながらでは勝てない。

リートが操る【スフィア】に援護されながら【シュナイト】を駆る。

『敵機接近！』

「ああ………見えてるよ」

グリップを握り直す。リートに聞かずともわかっていた。既にメインモニターには敵機の影が小さく映っている。

どうやらレオンも雑魚は無視して一直線にこちらへ向って来ていた。

「ん？ あれは………」

背部にある二対の大型スラスタから噴射炎が翼のように広がる。見たことの無い装備だ。恐らくは機動力の強化を目的とした追加装備だ。

「ちっ………厄介な」

レオンは銃などの遠距離戦より剣を用いた接近戦の方を好んでいた。そうなる今回追加装備による機動力強化は侮れない。

だが今のキサラギに迷っている暇は無かった。両機の距離が近づく。

【シュナイト】は遠近のバランスが取れた汎用型だ。この距離で

はまだこちらが有利である。それに遠距離なら【シュナイト】の方が武装は豊富だ。

「当たってくれよ。そらあ！」

ライフルの射程に納めると敵機をロック。間髪入れずにトリガーを引く。エネルギーのシールドに護られた機工戦騎の装甲すら貫く一条のビームが撃ち出される。

しかし【テュラン】は機体をロールし難なくビームを回避してみせた。

「はん！ そう簡単には当たってくれないよ、な！」

回避されることも織り込み済みだ。素早くスティックを引きペダルを踏み込む。

機体の状態を起こし両足を前に蹴り出す。そのまま脚部のスラスタを噴かし急制動を掛ける。

「そらよ！ 喰らつとけ！」

【シュナイト】の両肩のポッドが開き多段式ミサイルがばら撒かれる。

勿論そのままではレオンに当たる筈もないが、直進するビームと違ってミサイルは敵を追尾する。

『は！ 随分なご挨拶じゃねえーか！ キサラギイー！』

共通回線を通じて響く歓喜の声 相手の顔を見て思わずキサラギは涙面を浮かべる。男の名はレオン・ブランドル。くすんだ金髪はその名が示す通り獅子のような獰猛な雰囲気を持つ男だ。

『今度はミサイルか！ だが甘えーぜ！』

【テュラン】は右手に装備した突撃銃でミサイルを迎撃する。

レオンは接近戦を好むが射撃の腕も十分に一流だ。

それでも全てを撃ち落すことは不可能である。咄嗟に上方へと逃れる【テュラン】だが間合いに詰め接近戦に持ち込むことには失敗していた。

「まだまだあ！」

一応はキサラギもレオンとの接近戦は予め想定はしていた。直前

に換装した対機工戦騎用のライフルには接近戦用の短剣が取り付けられている。

「ちっ……やり難い」

そもそも宇宙空間での運用を主眼とする機工戦騎は射撃戦を想定している。これは広大な宇宙空間では敵機を接近戦の間合いに捉えることすら困難だからだ。

それでも接近戦で数々の傭兵達を屠って来たレオンの腕前は本物だろう。

（だが奴に一泡吹かす為の策はある）

そのまま【シュナイト】は一定の距離を保つ。ミサイルを振り切る前に連続でビームを撃ち敵機を誘導する。

機動力は向こうが上だ。しかも武装は接近戦に特化している。

無策で挑むにはあまりに危険が大き過ぎる相手だろう。

『はんっ！ チマチマしたのは性に合わねえ……ぜっ！』

最後のミサイルを撃ち落した【テュラン】が突撃銃を腰に装着。左手に持つ盾の裏からビームを剣状に形成させたサーベルを抜き放つ。

『さあ、勝負だ！ キサラギイー！』

可動時の機工戦騎は常に薄いエネルギーのシールドで防御されている。

しかし【テュラン】の持つサーベルはシールドと同質のエネルギーで形成されていた。

つまり当たりさえすればサーベルは一太刀で機工戦騎を落とせるのである。

「うおおおー！」

だが自身へと肉薄する【テュラン】に【シュナイト】は正面から迎え撃った。

ライフルの短剣は実体剣で心許ない。

だがキサラギも【テュラン】がサーベルを使って来ることは百も承知だ。

「リート！」

『了解』

リートの短い応答と共に両肩の盾が可動し機体前面へと展開する。正面で合わさる2枚の盾は迫る【テュラン】のサーベルを見事に受け止めた。

【シュナイト】の両肩外部に装着された2対の盾。対ビーム用の加工が施されたソレは【テュラン】を相手に鉄壁の守備を誇る。

そのままキサragiは盾を展開したまま機体を押し込んでサーベルを弾く。

「これで」

空かさず盾を左右に展開、正面から両手のライフルを向ける。

『おっと、俺様を舐めるなよ。小僧！』

だがレオンも防御されたと見るや展開された盾を蹴って距離を取る。尤もキサragiの方もライフルを撃ち込んで【テュラン】を牽制することを忘れない。

「くっ……あれに反応するのかよ!?!」

『機体損傷 軽微。戦闘に支障ありません』

悪態を付きつつもキサragiは機体のバランスを立て直す。

しかし相手は高速機体だ。背部の翼型ブースター以外にも各部に補助ブースターが付いて入る。滑らかに体勢を整えると【シュナイト】へ突撃を再開する。

「ちっ……今度は牽制して来たか」

しかも今度は【テュラン】の方から撃つて来た。【テュラン】の突撃銃は実体弾でシールドを貫く威力を持ってはいない。それでも同じ場所に連続で被弾すればシールドを抜かれる危険はある。

キサragiは直撃を避けるよう動き回りながらもライフルで反撃する。

近付けまいとライフルで牽制する【シュナイト】は未だ致命の一撃を当てられない。

射撃を掻い潜り接近しようとする【テュラン】も致命の一太刀を

浴びせあぐねていた。

だが一見すると均衡しているように見える戦況は密かに傾きつつあった。

『敵スファイア 残り4』

「ああ、頼りにしてるぜ。相棒」

リートの報告を冷静に受ける。周辺で交戦していたAI制御による無人機同士の戦闘はこちら側に軍配があるようだ。

『任せてください。あの無感情AIには負けません』

「はは……」

同じAIとして敵愾心を燃やすリートに苦笑する。リートと同様にレオンのナノマシンにも管制用のAIが搭載されている。

名前はモニカと言ってキサラギは数回しか直に声を聞いたことはない。

しかしリートは量子通信を通して何度か言葉を重ねたらしいが、どうもモニカの人格は一般的なAIらしい機械的で冷めた人格らしい。何処か人間的なリートとは正反対である。

そしてリートは何かと交戦経験の多いモニカのことをライバル視していた。

『敵スファイア 全機撃墜しました!』

「よし、こっちのスファイアは何機残ってる?」

『3機です』

「それだけあれば十分だ」

敵無人機の増援を呼ばれる前に決着を付ける。

今まで距離を取ろうとしていたが【シュナイト】の軌道を変更。実体弾による牽制を掻い潜るように【テュラン】へと突っ込む。

『カハハッ! 全くお前は最高だぜ。まだまだ楽しませてくれよお

ー!』

迫ってくる【シュナイト】にレオンは臆することなく嬉々として突撃して来る。

【シュナイト】は速度を落とさず両手のライフルを乱れ撃つ。キ

サラギも別に当たるとは思っていない。少しでも奴の軌道を制限することが出来れば十分だ。

『やっぱりお前に目を着けて正解だぜ。あの時の依頼主には感謝したい位だ』

「そうかよ。俺は恨み言の一つでも言っただけやらないね」

降り注ぐビームを【テュラン】は危なげ無く回避。モニカのサポートを得て【テュラン】の機動力が増しているのは明らかだ。

そして再び両機が正面から激突する。

『さあー逝けるとこまでトコトン逝こうぜえー！？　なあ、キサラギよおー！』

再び【テュラン】のサーベルと【シュナイト】の可動盾がぶつかり合う。

「はん、逝くならお前一人で逝けよ」

【シュナイト】の機体越しに3機のスフィアが【テュラン】へとビームを放つ。タイミングは完璧。ギリギリまで【シュナイト】で射線を隠した。察知は不可能だろう。

スフィア単機のビームに【テュラン】のシールドを抜くような出力を期待は出来ないが、如何に機工戦騎の強固なシールドにも限界があった。

『敵機のシールド消失を確認　マスター！』

「おおおー！！」

故にその瞬間　キサラギは勝負に出た。

前面に展開していた盾を開放。そのまま衝撃で仰け反る【テュラン】へと右手のライフルを短剣ごと突き出す。

シールドの護りを失った今の状態なら実体型の短剣でも十分に必殺となり得る。

（この一撃で落とす！）

狙うのは腹部　動力炉の直ぐ下にあるのは機工戦騎の操縦席だ。乾坤一擲　裂帛の気合と共に放たれた必殺の一撃は、しかし中断せざるを得なかった。

『マスター！』

短い警告と同時にキサラギの身体が勝手に動く。ナノマシンによる神経介入だ。

機体負荷を無視して【シュナイト】が右にぶれる。

「ぐっ!？」

操縦者の安全性を考慮しない回避運動に猛烈な重力が全身を襲う。しかし直ぐにキサラギも自身に迫る危機的状況を理解することになった。

素早く体勢を立て直した【テュラン】の胸部装甲が展開し内部から迫り出す小型の砲身に紫電が迸って収束する。

『ハツハツハツ！ さあ、コイツはどうする!？』

「荷電粒子砲だと!？」

機工戦騎に搭載しているので【テュラン】のソレは艦主砲よりは幾分か小型である。

だが問題は砲身の大きさではない ソレを撃とうとする場所が問題だった。

『正気とは思えません！ この宙域で荷電粒子砲を使えばホールが発生してしまう！ あの男は死ぬ気ですか!？ モニカは何をしているんです!』

「ともかく回避だ。直撃すればホールの前にこっちが死ぬ」

荷電粒子砲は艦主砲にも用いられる強力無比な兵器だ。その一撃は機工戦騎のあらゆる防御を貫く程だ。直撃すれば【シュナイト】といえど大破は免れない。

『墮ちろおーキサラギィー!!』

そして破滅の光は放たれた。胸部から迸る荷電粒子の奔流は進路上の全ての物質を呑み込み消し去る。

「リート!」

既に回避運動に移っているが避けきれない。そう判断したキサラギは咄嗟に左肩のミサイルポッドをパージ 至近距離で起爆させた。

真横で炸裂する爆風に煽られ機体が激しく揺れる。

「ぐっ、機体状況はどうなってる。リート」

『荷電粒子砲の回避に成功。幸いシールドのお蔭で機体各部の損傷は軽微です。しかし左肩部の武装が無くなってしまいました』

「撃墜よりはマシか……」

安堵の息を付きたいとこだったが状況はソレを許さない。

宇宙空間の暗闇で一際暗い穴があった。

『ッ!? ホール発生! 至急この宙域から離脱してください!』
「わかつている!」

戦争などやっている状況ではない。それは周囲の物質を見境無く吸い寄せる。逃げ遅れてしまえば悪くて通る過程の衝撃で死亡。例え無事に通り抜けられたとしても何処とも知れない場所へ飛ばされてしまう。

『ぬっ……こ、これは……』

レオンは位置が悪かった。機動力では【シュナイト】に勝る【テュラン】も目の前に発生したホールから逃れられない。

『ち、畜生め……振り切れねえー!』

虚空に開いた奈落の穴は目の前に居た【テュラン】を呑み込む。

この期に及んでキサラギにレオンを気にする余裕は無かった。

だが

『おいおい、一人だけ逃げるなんて連れられないじゃねえーかよ』
「なっ」

機体に走る衝撃。気付いた時には【シュナイト】は穴から伸びる一本のワイヤーに拘束されていた。

『アンカーだと!?!』

「くっ……不味い。振り解けない!」

【テュラン】の左腕に装備された盾。裏にサーベル収納する他にも射出式のアンカーワイヤーを仕込んでいたらしい。伸びたワイヤーは【シュナイト】の胴体に完全に絡み付いていた。切断しようにも銃身の短剣では不可能。しかも吸い寄せられながらでは正確な射

撃も無理である。

なんとか踏み止まろうと出力全開でブーストを噴かす。

『だ、駄目です。マスター！ 出力が足りません。このままで』

「う、うおおー!？」

必死に足掻く【シュナイト】をホールは無情にも呑み込む。虚空に穿たれた黒穴は徐々にその大きさを縮め やがて最後には消えてしまった。

真の意味で無人となった戦場には無人の兵器だけが残されていた。

プロローグ（後書き）

今回は私の稚拙な文章をお読みいただきありがとうございます。現在執筆中の作品をこの場で発表させていただきす。まだまだ未熟者ですので何かご意見やご感想があればどんどん書いてくださると助かります。

1・来訪者

『…ス……！ マ…タ…！』

「痛ッ！ 俺は……」

聞きなれた相棒の声にキサラギの意識が覚醒する。どうやら頭を打つたらしく微かな鈍痛が頭を苛む。おまけに相当揺られたようで吐き気が込み上げて来た。

「最悪の気分だ」

『酔いなら直ぐに醒めます。それよりも一刻も早い状況の確認を推奨します』

投与されたナノマシンは常にキサラギの身体を最適の状態にする。ホールに呑まれた衝撃で頭部を強打。今までキサラギは気絶していたらしい。

「状況を報告してくれ。リート」

『はい。良い報せと悪い報せがあります。どちらから聞きたいですか？』

「……………良い報せから頼む」

『了解。喜んでください。私達は無事にホールを突破することが出来ました』

「ちよつとした奇跡だな。信じてもない神に感謝したくなるよ」
本来なら死んでもおかしくない状況だったが幸運にもキサラギは生き残れた。思ったよりも機体損傷が少ないのも救いである。

『では信仰に目覚めたマスターに次は悪い方の報せです』

「なんか嫌な予感しかしないな」

『冴えてますね。艦隊と連絡が取れません。依頼主ともです』

「つてことは……」

『どうやら遭難したようです』

「そうか……だが問題はソレだけじゃないんだろ？」

『はい。惑星の重力に捕らえられました』

「嗚呼……見えてるからな」

正面のメインモニターには青く美しい惑星がデカデカと映されている。

【シユナイト】はゆっくりと吸い寄せられ落ちて行く。

「現在の【シユナイト】で重力圏からの離脱は可能か？」

「推力が足りません。大気圏 突入します」

画面が真っ赤に染まる。仕様の上では機工戦騎は単独で大気圏を降下が可能だ。

しかし【テュラン】との戦闘、ホールの突破と機体の状態は万全とは程遠く最悪大気圏で燃え尽きる事態も想定される。

「畜生め！ 自動盾を展開。シールドの強度を上げろ」

『自動盾展開 そんな！ シールド強度が上がリません！』

「何、だと……故障か！？」

『原因は不明……つて、きゃあー！？ 動力炉の出力も低下してきます！』

「くっ……このままじゃ……」

墜落 即ち“死” キサラギの脳裏に最悪の映像が浮かぶ。

「まだまだ……まだやれる筈だ！」

窮地の中でもキサラギの脳は冷静に打開策を思案する。体内のナノマシンが脳内物質を操作して気分を落ち着かせる。だが彼が落ちて着いている理由はソレだけではない。

キサラギは15歳の頃から傭兵として戦場で生きて来た。命の危険に遭うのも一度や二度ではない。それらの経験が窮地においてもキサラギに冷静な思考力を与えていた。

「リート！ 今から突入コースの変更は可能か？」

『無理です！ 今のシールドの強度では……』

強行すれば機体が燃え尽きてしまうだろう。つまり落下地点の地形は選べない。固い山脈にでも激突すれば機工戦騎といえども無事では済まない。

『落下予測地点は森です。かなりの規模なので多少ずれても大丈夫

ですよ！」

「ちつとも安心出来ないけどな。しかし森かアレが使えるかもしれん」

『何かプランがあるのですか？』

「地表激突時の予想出力を割り出せるか？」

『現在のペースですと最大時の50パーセントまで出力が低下すると思われます』

「50パーセントでは厳しいな。衝突の瞬間に合わせて動力炉を臨^フ界駆動^{ルドライブ}させればどうだ？」

平時の機工戦騎は動力炉の出力を8割程度に抑えている。奥の手とも呼べる臨界駆動はその枷を解き放ち動力炉が本来持っている10割の出力を引き出すことが出来るのだ。

『この状態なら80パーセントの出力を確保することが出来ます。しかし……』

それは同時に危険な賭けでもあった。臨界駆動は圧倒的な力を得られるが、それに比例して機体に掛ける負担も大きい。今の【シユナイト】が耐えられるかは微妙である。

「他に手は無い。なら俺は打てる手を打つだけだ」

『了解。死ぬ時は一緒です。マスター』

「……縁起でもないこと言うな。まあ、俺も死ぬ気は無いさ」

『勿論です。頑張ってください。私も死ぬのは御免です』

「はは……そうだな」

機械なのに“死”を嫌がるリートの言葉にキサラギの口元が緩む。今は何処か人間臭い相棒の存在が何よりも心強い。

「本当、頼りになる相棒だよ」

自然とスティックを握る手に力が籠もる。大気との摩擦熱で機体温度が上昇。先ほどからけたたましい警告音が鳴り止まない。

「頼むぜ」

高速で迫り来る地表を目前にキサラギは覚悟を決めた。

その日　セルディオの大地に空から翡翠に輝く星が落ちて来た。

セルディオ大陸の中央には広大な森がある　“魔の森”と呼ばれる土地だ。

二つの山脈の麓に広がる大森林は人間の領域と魔族の領域を分かつ境界線でもある。

一年を通して深い霧に覆われたこの森は内部に凶暴な魔物が生息する天然の迷宮だった。

しかしその迷宮の最奥に一軒の屋敷が建っていることはあまり知られていない。

「ふ、ふあゝあ……徹夜明けは朝日が染みるわ」

屋敷の主である少女　ルシフェラ・セリクスはテラスで伸びをする。真つ赤なりボンで一本に縛った艶やかな黒髪と清潔感漂う白衣のコントラストが眩しい。少し幼さの残る端整な顔は職人が精緻を極めた人形の如き愛らしさがあった。

「あまり根を詰め過ぎないくださいませ。シエラお嬢様」

そう言って老人はシエラ　ルシフェラをテラスのテーブル席へと促す。その服装は黒の執事服で格好の通り老人は少女の執事だった。

「おはよう。いつもありがとうね。ブライ」

「いえ、執事ですから。当然のことです」

ブライは恭しく一礼するとテキパキと準備を始める。彼が押して来たワゴンにはシエラの為に用意された簡単な朝食とティーセットがあった。

メニユーは徹夜明けの少女を気遣って少しポリウムのある物になっている。いつもは小食のシエラも空腹の手伝いもあって、瞬間に平らげてしまう。

だからといって彼女の食事の様子に下品な感じは受けない。むしろあらゆる仕草に隠し切れない気品があった。

「ご馳走さま。今日もとっても美味しかったわ」

「ありがとうございます」

主人の食事が終わるとブライは自然な動作で紅茶のカップを差し出す。カップで揺れる琥珀色の液体が芳醇な香りを上げる。

「ん……ふうー」

一口含むとシエラは満足気に息を付く。お気に入りの茶葉を使って最高の従者が淹れてくれた一杯である。

それは彼女にとって至福の一時であった。

「あら？ アレは何かしら？ こんな朝から流れ星」

その直後 世界から一瞬あらゆる音が消え失せる。

天より落ちた漆黒の流星が世界を焼いた。

「おじようさまあー！ 盾よ、迫る脅威を止め！」

ブライがシエラを背に庇って短く詠唱する。唱えるのは大陸でも一般的な防衛魔術だ。

大気中に漂う“魔素”を体内に吸収し“魔力”に変換。ソレを“術式”^{マジック・シールド}を使って編み上げ現象を操作する 即ち“魔術”である。

「光壁魔術！」

詠唱と共に魔力で構成された光の盾が展開する。咄嗟の事態に大した魔力も煉れなかったが、元から屋敷に張ってあった結界魔術のお蔭で何とか持ち堪える。

「ぐ……ぬう……」

駆け抜ける衝撃で盛大に土埃が舞う。爽やかだった筈の朝の空気が一瞬で土っぽくなってしまった。

「ケホッ！ ケホッ！ もう！ 一体何なのよ」

「お嬢様、お怪我はありませんか？」

ブライは彼女の身を案じるがそれを振り解きシエラはテラスを見回す。衝撃でテーブルは倒壊。折角ブライが淹れてくれた紅茶が派手に床へとぶちまけられている。

普段のシエラなら烈火の如く怒り狂う所だが、今回はそうもいかなかった。

「な、ななな……」

「夢でも見てるようでございます……」

あまりの光景にいつも泰然としたブライが息を呑んで呆けている。彼には産まれた時から世話になっているシエラもブライのそんな姿は初めて見た。

「何なのよ……コレ」

理不尽な天災によって見慣れた筈の風景は彼女の知るモノではなくなっていた。

ずばり森が無いのである。見渡す限り広がっていた緑深い森林は随分と見晴らしの良い場所となっていた。

「も、森が消えちゃったわ」

それはあまりにも現実感の欠ける冗談めいた光景だった。

一つだけ確かなことは既に此処が“魔の森”と呼べる場所ではなくなっているということだ。立ち入る者を拒む深き森はただの荒野となっている。

「確かめるわよ。ブライ」

だが、いつまでも思考停止している訳にもいかない。徐々に冷静な思考力を取り戻して来た彼女は、ブライに指示を出すと部屋へと踵を返す。

「畏まりました。お嬢様」

ブライの行動は迅速だった。彼は数秒でテラスを片付け、馬車の用意を済まして主人を迎える。彼も準備は出来ていた。その腰には鞘に納められた剣を帯びている。

シエラを乗せるとブライは業者席に腰掛けた。

「では、参ります。お嬢様」

主人の意を汲みブライは馬車を走らせる。今はすっかり荒地となつた大地を馬車は驚くほど静かに走って行く。その理由は馬車の車体にあつた。高貴な品格を漂わせた馬車には所々に幾何学的な紋章のような物が刻まれている。

「うん。衝撃吸収の刻印は正常に機能してるわね」

非常時の中でもシエラは自分の研究成果に微笑を浮かべる。これ

らの紋章はシエラの研究である“刻印魔術”の産物だった。これは“付加”と呼ばれる系統の術である。

“刻印魔術”は“詠唱”の代わりに対象に“術式”を記号として刻むことで現象を操作する魔術だ。

「はあーこれからどうしましょうね」

しかし不意に少女の顔が翳る。それはブライに向けた言葉ではない。無意識に口を突いた彼女の本音である。ブライは敢えて主の言葉に口を挟まない。彼が促さずとも彼女なら正しい選択をするだろう。

「もう此処には居られそうにない……か」

窓から見える荒れ果てた森の姿にシエラは心を痛める。直にこの地にも人間か魔族のどちらかが乗り込んで来るだろう。

今もセルディオ大陸では人間と魔族は互いを憎み敵視している。

それは人間が魔族の国を滅ぼし彼らを“魔の森”の向こう側へと追いやったことで一時的に沈静化していたが、両者に根付いた憎しみは完全に消せなかった。

今でも両者は森を挟んで小競り合いを続けている。“魔の森”という邪魔な壁さえ無くなってしまえば、両者の衝突は秒読みに入ってしまうだろう。

「私は何処へ行けば静かに暮らせるのかしらねえ」

今のセルディオ大陸に“魔の森”以外にシエラの居場所は無かった。

人間と魔族の両方を拒む“魔の森”は内部に巣食う魔物さえ何とかしてしまえば、緑豊かで静かな理想の居場所であった。

だが、その平穏も空の彼方から訪れた落下物によって滅茶苦茶にされてしまった。

（絶対に原因を突き止めてやる。ただでは転ばないんだから！）

彼女は“刻印魔術”を研究する研究者である。天より飛来し一瞬で森を消し飛ばすようなナニカに怒りがふつふつと湧いて来た。

「お嬢様。これより先は馬車では危険です」

その言葉通り馬車は切り立った傾斜の手前に止まっていた。どうやら落下地点は発生した衝撃波で地面が半球状に抉れているようである。

「お嬢様。この先には私が一人で」

「いいえ、その心配はいらないわ。私は私の平穩を壊した物をこの目で見たいの」

「畏まりました。お嬢様」

主人に意向に従いブライは彼女の隣に並ぶ。本来なら身の安全を考慮して先頭を歩きたい所ではあるが、この目で見たいというシエラの視界を遮る訳にはいかない。

「なッ　!？」

そして少女はその目に焼き付けた。

大地に膝を突き、煙を上げる漆黒の巨人。

遙か空から現れし魔神の姿を

1・来訪者（後書き）

どうも如月八日です。早速書き終わった分を投稿します。
続きは現在執筆中です。ご意見、ご感想がございましたらどんどん
お願いします。

2・出会い

澄み切った青空の下でセルディオの大地に漆黒の巨人が跪いていた。

機工戦騎【シュナイト】の操縦席ではキサラギが身じろぎ一つせ
ずに固まっている。

「助かった……のか？」

「そのようです。少なくとも動力炉に暴走の兆候はありません」

リートの言葉に強張っていた身体の力を抜く。リートを通して機
体各部の情報を共有していたが、命の危険に繋がるような深刻な異
常は見受けられない。

とりあえずは安心だった。

「しかし無茶をしてくれたな。リート」

「勿論です。私の使命はマスターをサポートすることですから」

さらりと躲すリートの答えにキサラギは溜息を付く。確かに臨^{フルド}界
駆^{ライン}動を駆使してキサラギ達は無事に着陸することが出来た。

しかしソレは当初していたキサラギの予想を上回る成果だった。

リートはキサラギに無断で、機工戦騎に搭載されたある機能を使
用していた。

「まさか“炸裂障壁”^{バンシャー}を使うとはな」

本来なら防御用のシールドに過剰なエネルギーを供給し意図的に
炸裂させて攻撃に利用する機能だ。

『臨界駆動を用いたとしても生存率は50パーセントを下回ってい
ました。マスターにそのような分の悪い賭けをさせる訳にはいきま
せん』

結果はご覧の通りである。【シュナイト】は多少の損傷をこそ負
ったが大破は免れた。

そして代償は真下にあった森林である。【シュナイト】の落下地
点の周囲は生物の住まない不毛な荒野となってしまうた。

「しかし酷い有様だな。森が綺麗さっぱり消えてるぞ」

キサラギの良心が少しだけ痛む。宇宙からも見てもこの星は美しかった。その青さは人類の故郷 “地球” を彷彿とさせる。

そして同時にキサラギはあることに思い至った。

「リート。この星に人間は居ると思うか？」

『可能性は高いです。細かな調査はまだですが、この星の環境は“地球”の物と酷似しているように見えます。人間のような知的生命体が生息したとしても不思議ではありません』

「は、はは……なら落下地点に人間が居なければ良いけどな」

『ですが、それでも、私はマスターの生命を最優先します』

確かにリートの言う通り、余所の星の人間の為に死ぬことはないだろう。キサラギ自身そう感じていた。

それにリートがキサラギの為に手を尽くしてくれたのも事実だ。

「そうだな……助かったよ。ありがとう。リート」

『………当然の役目です』

素直に礼を述べるキサラギに照れ臭いのかリートの言葉が珍しく素っ気無い。

しかし今はのんびりしている暇は無かった。

「機体状況の詳細を視覚化してくれ」

『手元のモニターに表示します』

映し出された情報にキサラギは眉を顰める。依然として外部との通信は繋がらず、正常な筈の動力炉は5割の力しか出せていない。

原因は故障ではなくこの星の方にあるようだ。

「おいおい、これは直るまで飛べそうにないぞ」

また各部の故障も無視出来ないレベルで深刻だった。その中でも大気圏突入時に酷使したメインブラスターは完全に逝ってしまった。いる。

「それに関節部の損耗も激しい。戦闘は無理そうだな」

『はい。駆動に影響を及ぼす危険があります。戦闘行動は避けるのが賢明です』

「だろうな。機体は万全にしておきたい」

『しかし問題があります。機体の自己修復機能を使おうにも資材が足りません』

機工戦騎はナノマシンによって機体の自己修復機能が搭載されているが、当然ながら欠損した部分の修理には材料が必要だ。

そして機工戦騎には宇宙資源の代表であるレアメタルが豊富に使われている。

「ならレアメタルの確保が必要だな。周囲の調査を頼む」

『了解。ナノマシンによる地質調査を実行します』

「頼む。リート」

調査は信頼する相棒に任せて、キサラギは瞑目し今後の方針を考える。

外部と連絡が付かないが、そもそも依頼主に救助を期待するだけ無意味だろう。傭兵は使い捨ての戦力として扱われている。

（依頼を達成した後ならともかく、遭難して救助要請するだけ無駄だろうな）

それに作戦中に傭兵が死亡することは珍しくもなかった。孤児出身のキサラギには搜索を依頼するような家族も居ない。

（ならば自力で宇宙に戻るか？）

【シュナイト】では単独での大気圏離脱は不可能だ。そもそもメインブースターが壊れているから空を飛べない。どちらにしても機体の修復は急務だろう。

『妙です。マスター』

「どうした。何かトラブルか？」

『はい。外の調査に向わせたナノマシンとのリンクが突然切れました』

「何？ ナノマシンが壊された……訳じゃなさそうだな」

モニターで機体周囲の映像をチェックするが特に異常は見られない。第一に極小サイズのナノマシンを破壊するには空間を飽和攻撃するしかない。そんなことをすれば機体にも幾らかは衝撃が来る筈

だ。

「まさか……【テュラン】か!？」

『違います』

「そ、そうか……」

妙にリートの声が冷たい。キサラギの背に戦場で掻く汗とは別種の冷たい汗が滲む。

『しかし今の言葉は聞き捨てなりませんね。それではまるで私がモ二カのジャミングに気付かなかつたみたいじゃないですか』

「あーいや、俺は」

『マスター！ マスターは私がああ工場出荷品そのままの無感情AIに劣ると思っっているのですか!？』

「いやいや！ そ、そうだな。リートが気付かない訳ないよな」

『うふふ……そうです。分かれば良いんですよ。マスターは物分りが良いですね』

今後は自分の発言に気を付けよう。相手はそのままの意味で四六時中ずっとキサラギを監視しているのだ。声には出さずキサラギは胸中で密かに誓いを立てた。

「おほん、それで原因はわかりそうか？」

『推測ですが電波干渉だと思われませう。恐らくこの星に何か原因があるのでしょう』

管理AIであるリートは無数のナノマシンを統括しているが、本体はキサラギの体内にある一機のナノマシンだ。本体と無数の子機は量子通信のネットワークで繋がっていた。

「つまりナノマシン同士のネットワークが阻害されているってことか?」

『はい。本体との距離が近い子機に関しては正常に交信が可能です。距離が離れた物に関しては交信が途切れます。大気圏突入時の急な動力炉の出力低下といい、この星には何かあるのかもしれない』

両者の共通点はこの星に来た時を境に起きたという点である。こ

の星に何か原因があると考えるリートの推論は妥当なものだった。

「ん？ 機体の熱センサーに反応！ このサイズは……人間と同等の大きさです」

「モニターに表示してくれ。映像で確認したい」

メインカメラを通して外部の映像がモニターに表示させる。

「！？」

そこには顔を驚愕に染め息を呑む白衣の少女の姿が映し出されていた。少女の傍らには執事服の老人が付いており、程度の違いこそあれ同じ驚愕の表情を浮かべている。

「現地人のようですね。言葉はわかりませんが、白衣を着ている方はこの星の技術者でしょうか？」

「ああ、だが老人の方は剣を持つてるぞ。念の為に細工が無いか調べてくれ」

「了解。【シユナイト】のセンサーでスキャンしてみます」

キサラギの居た世界では剣は既に骨董品の部類に入る武器だ。しかしこの星は剣などに偽装した武器が存在しないと限らない。

「スキャン 完了。どうやら普通の剣のようです。刀身から算出した冶金技術の水準は地球でいう中世レベルですね」

「どうやらこの星の技術レベルは低いみたいだな」

「はい。宇宙進出のレベルにも達していません。機工戦騎のような機動兵器を製造する技術は無いと思われれます」

「そうか……ひとまずは安心だな」

事故とはいえキサラギ達の訪問の仕方は決して穏やかではない。

【シユナイト】は着地で森を丸ごと吹き飛ばしたのだから、この星の人間からすれば侵略者と思われるても不思議は無いだらう。

「どうしますか？ マスター」

「そうだな……」

モニターの向こうでは白衣の少女と老人が言い合いをしていた。

「

！

「！

」

！

「！

言葉はわからないので詳しい内容は不明だが、様子から察するに【シュナイト】に近寄ろうとする少女を老人が止めているようだ。

現在の【シュナイト】は万全とは程遠い。機体を置く人目に付かない安全な場所も必要になるだろうし、資材や物資の補給も重要だ。それに理由も無く同じ人間同士で敵対するのも気分が悪いだろう。「よし、接触するぞ」

『待つてください。マスター』

「どうした？」

『もしかしたらアレは人間に擬態した食人種かもしれません』

「は？ 流石にそれは無いだろ」

『いいえ！ 油断してマスターが彼らに近づいた所をそのまま……』

「パクッ！ と、食べられてしまう危険性があります」

「いや、それは無いだろ。まったく……お前はA IのクセにB級映画の見過ぎだ。娯楽作品を嗜むのは良いが、冗談は休み休み言え」

『そんな！ 私は本気でマスターの為を思っ……』

「いいから準備をしろ。今はその方が俺の為になる」

リートの冗談か本気が怪しい言葉を流して、キサラギは着ているパイロットスーツの襟を閉める。普段は着崩しているソレを正すのは場所が未知の場所だからだ。

『外部の環境状態が未調査なのでヘルメットの着用を進言します』

「そうだな。機体は直ぐに動かせるようにしていてくれ」

『了解。システム 待機モードに移行します』

「じゃあ、行きますか」

操縦席のベルトを外すと椅子の下からヘルメットを取り出す。本来ならナノマシンであらゆる環境に適応出来る筈だが、今回は生命維持装置付きのヘルメットを被る。

『待つてください。最低限の武装は携帯すべきです。マスター』

「はは……リートは心配性だな。たかが剣で俺が死ぬと思うか？」

『思いません。しかし自衛の手段は多い方が良いでしょう』

「はいはい。わかったよ」

冗談ではない真摯なリートの気遣いに、キサラギは苦笑しながらスーツの腰にナイフと拳銃を提げる。位置は相手を刺激しない為に正面から見えないようにした。

準備が完了するとリートが操縦席のハッチを開放し外に出る。視界に飛び込む青空が何処までも澄み切っていて綺麗だった。

ルシフェラ・セリクスは優れた“錬金術師”である。

セルディオでは“魔術”を扱う者を“魔術師”、その研究を専門に行なう者を“錬金術師”と呼ぶ。尤も“錬金術師”は“魔術”の才能が無い者を揶揄する意味合いが強い。

しかしルシフェラ・セリクスは研究者として優秀だった。人目を忍び“魔の森”で暮らす彼女は自身の研究成果を世間に公表することとは無いが、彼女の研究する“刻印魔術”はセルディオでも最先端の技術であった。

その彼女をしても目の前にあるソレは異常なモノであった。

「な、何よ……コレ」

遙か天空より飛来した漆黒の巨人。一体どれ程の馬鹿げた強度を持つのか、落下の衝撃だけで“魔の森”を吹き飛ばして尚もソレは原型を留めていた。

力なく大地に膝を付く姿はお伽話に登場する破壊の“魔神”を彷彿させる。

「これは魔神を模った置物？ それとも全身が金属の生き物なのか？ いえ、仮に生物だとしてもアレだけの衝撃を受けて生きているのかしら？ いいえ、やっぱり……」

脳内に存在する知識を総動員し思考する。これまで研究の為に読み漁ったどの文献にもこのようなモノは記載されていなかった。即ち“魔神”はこの世界において完全な未知のモノであることを意味する。

「ふ、ふふふ……コレは研究のし甲斐があるわあ」

この“魔神”のことが知りたい。狂おしい程の好奇心がシエラの脳裏を満たす。研究者の悲しき性なのか、既に彼女の脳内に隠れ家の森を吹き飛ばされたことも、ブライが淹れてくれた紅茶を台無しにされた事実も、綺麗さっぱりと抜け落ちてしまっていた。

例えコレが災厄を呼ぶ“魔神”であろうと関係ない。もっと近くで見てみたい。砂漠で一滴の水を求める旅人のようにシエラは“魔神”へと近付いて行く。

「お待ちください！ おじょうさま！」

「放しなさい！ 私はアレを研究するのよ！」

シエラは羽交い絞めにされながらも“魔神”へと手を伸ばす。彼女の求める声を通じた訳ではないのだろうが、今まで微動だとしなかった“魔神”に変化が起きた。

“魔神”の腹部を開き中から人影が出て来る。

「腹から何か出て来た!？」

灰色の表皮と兜のような形状の頭部。背丈は人と変わらないが、その異形の姿は“魔神”の腹から産まれた悪魔の子のようである。

「うぬぬ……化け物の腹から出て来るとは面妖な奴！ お嬢様、ここは私に任せてお逃げ下さい！」

「落ち着きなさい。どうやら向こうは私達に用があるみたいよ？」

「ですが、お嬢様！ あの面妖な面構えをご覧ください。もしや人型に化けた怪物かもしれません。お嬢様が油断して近づいた所をそのまま……パクツ！ と、食べるつもりですぞ」

「貴方、一体どこからそういう知識をつけて来るの？」

呆れるシエラを尻目に人影は“魔神”から飛び降りると両手を拳げて立ち止まる。その動作は自分の無害をアピールしているようにも見えた。シエラとは逆にブライは密かに警戒心を上げる。

「貴様……何者だ」

「」

「む、むう……」

「どうやら言葉が通じないみたいね。ブライ、お願い」

「畏まりました。お嬢様」

ブライはシエラの意志を正しく理解し“翻訳”の魔術を唱える。本来は魔物や動物と円滑に意思疎通する為の術だが試してみる価値はあった。

「!?!」

「安心して害は無いわ」

警戒し身構える相手にシエラは真摯に微笑みかける。言葉はわからないのだろうが、こちらに害意が無いのは通じたようだ。身構えるのを止めブライの詠唱を静観する。

“翻訳”の術が完成し淡い光が降り注ぐ。微細な光の粒が両者に浸透し互いの“意志”を相手に伝える。

「さて、これで話が出来るようになったかしら？」

訊ねるシエラに答えた声は、若々しい男性のものだった。

「なっ お前ら俺に何をした!?!」

「あら? どうやら殿方のようね」

異質な形をしているが、初歩的な魔術で驚く様にシエラは微笑ましさすら覚える。

「何故いきなり言葉が通じるようになった」

「翻訳の魔術よ。知らないかしら？」

「魔術だと? この地にはそんなオカルトみたいな物があるのか」

「ええ、察するに貴方は空の向こう側から来たのかしら？」

「そうなるな。まあ、落ちて来たのは不本意だが、な」

ブライがその言葉に息を呑む。それが真実なら目の前の人物はセルディオの外。しかも伝説にあるような天上の世界から来たことになる。

「そういえば自己紹介がまだね。私はルシフェラ・セリクス。シエラって呼んでくれて構わないわ」

「お嬢様! このような得体の知れない者に軽々しく」

「良いのよ、ブライ。彼には聞きたいことが沢山あるの。これ位は当然の礼儀よ」

「ぬう……私はブライ。ルシフェラ様の執事をして……おります」

「俺の名はキサラギ。苗字は無いから呼び捨てで構わない」

「わかったわ。キサラギ」

「畏まりました」

キサラギの自己紹介に丁寧に応えるブライだったが、内心ではキサラギへの警戒を解いた訳ではない。その証拠に彼はいつでも腰の剣を抜き放てるようにしていた。

「さて、自己紹介も済んだし早速だけど本題に入りたいのだけど？」

「俺もそれで構わない。こっちとしても時間が惜しい」

キサラギもブライに警戒されていることは察しているようで、気付いていた上で黙殺していた。従者の心配を余所にシエラは嬉々としてキサラギに問い掛ける。彼女の指差す先には膝を突き佇む漆黒の巨人があった。

「ねえ、アレは何なのかしら？ 生物なの？ それとも何かを模つ

た巨大な置物なの？」

「いや、あれは機工戦騎だ」

「ましね・リーゼ？ それがアレの名前なの？」

「違う。機工戦騎は総称だ。あれの名前は【シュナイト】 分か

り易く言うなら機械仕掛けの人形だ」

「人形！？ あの巨人が絡繰からくりで動く人形だって言うの？」

キサラギの口から出た思わぬ言葉にシエラは仰天する。あれ程の破壊をもたらず存在が人形 意志も持たぬ存在だということに驚きが隠せなかった。

「絡繰って……随分と古風な言葉が出て来たな。人形と言っても機工戦騎は立派な兵器だ。そして俺はその操縦者をやってる」

「アレが兵器ですって！？ しかも操縦者ってキサラギはアレを動かせるの！？」

「ッ！？」

純粹に驚くシエラの隣でブライが息を呑んだ。如何にブライが剣術や魔術に精通する一流の戦士であってもアレの相手をするのは不

可能である。何とかシエラだけでも逃がせないか悩むブライとは対照的にシエラは狂喜していた。

セルディオでも珍しい“錬金術師” 生粋の研究者たる彼女は目の前にある未知の技術に興奮していた。

(コレよ！ 機工戦騎……【シユナイト】さえあれば私の野望は成就する！)

機工戦騎さえあれば

この力を自分が手に入れれば

気付いた時にはシエラはキサラギの手を取っていた。

「お願い。機工戦騎を私に売って！」

「断る」

「どうして！？ お金なら言い値で出すわ。私にはアレがどうしても必要なの！」

短い拒否の言葉にシエラの頭に血が上る。思わず掴み掛かる彼女にキサラギは全く動じない。

「無理だな。第一に【シユナイト】は俺にしか動かせない」

「そ、そんな……」

彼の声は酷く平坦で彼の言葉が事実しか述べていないことを表していた。膝から力が抜ける。文字通り降って湧いたと思った希望は、幻のように彼女の手からすり抜けてしまう。主の絶望する様を見て黙っていられるブライではなかった。

「貴様っ！」

叩き斬る！ 訳にもいかない。主の要求を無碍にする無礼者でも彼が主の関心の対象であることも事実だ。この場は首の皮一枚で刃を止めて心胆を寒からしめてやる。

抜き放たれた刃は狙い変わらずキサラギの首の皮一枚だけを切り裂き止る。

「ぬ、お主……」

「……………」

だが、ブライの予想とは異なりキサラギの反応は皆無だ。身構え

もせず顔も見えないが眉一つ動かした様子が無い。

「あわ、あわわ……！」

むしろ従者の突然の凶行にシエラの方が慌てていた。

「……………」

無言で睨み合うブライとキサラギ　両者の沈黙を破ったのは、この場に居ない筈の第三者……少なくともブライやシエラにとつては予想外の声だった。

『環境調査完了しました。もうヘルメットを取っても問題ありません。マスター』

何処からともなく聞こえる女性の声にシエラとブライが啞然とする。リートの本体はキサラギの体内にあるのでブライの“通訳”の魔術は彼女にも一緒に掛かっていた。

「そうか、面倒を掛けたな。リート」

『いえ、遠隔操作が出来ないので手間取りましたが、その分だけ情報も手に入りました』

「はは……なら良いさ」

キサラギは姿の見えない誰かと話している。必死に声の出所を探すが話し相手は影も形もない。二人の視線は自然とキサラギへと向けられる。

「ふうーやつぱり外の空気は直に味わいたいよな」

異形の頭部　否。ヘルメットを脱いだキサラギの顔が晒される。風に揺れる短い黒髪と鋭く攻撃的な気性を滲ませる翡翠色の瞳。顔の造りや肌の色こそ若干の違いはあるが、目の前の男は紛れも無く人間であった。

「……に、人間！？」

二人の驚愕の悲鳴が更地となった“魔の森”に響き渡った。ふと風が少しだけ強くなる。吹き込む強い風は遠方より雲を運んで来るだろう。

それはやがて嵐となるか今はまだ誰も知らない。

2・出会い（後書き）

どうも、最近になって主人公の名前とペンネームが被ってることに気付いた如月八日です。ご意見やご感想は大歓迎なので気軽に書き込んでください。

3・雇用

セルディオ大陸　そこには二つの種族が独自の文明を築き暮らしている。

大陸北部に暮らす“魔族”　浅黒い肌に金の瞳と尖った耳を特徴に持つ彼らは、長い寿命と優れた身体能力、何より魔術を扱う技能に長けていた。

大陸の南部を統べる“人族”　彼らは様々な色の肌や瞳をしていた。“魔族”を凌ぐ高い繁殖力と知恵で長きに渡って“魔族”と対立して来た。

「あ、あああ……あなた人間だったの!？」

キサラギがヘルメットを脱ぐだけで随分と大袈裟に驚かれてしまった。訳が分からず困惑していたキサラギに、リートは二人に聞こえないよう小声で助け舟を出す。

『マスター。もしかしたら彼女達は人間ではないのかもしれない』
ん

「何？　だが外見はどう見ても人間だぞ」

リートにならってキサラギも小声で聞き返す。口を動かさずに声量も絞っているので、二人には怪しまれていない。

『人間と同じ祖を持つ生物なのでしよう。恐らくこの地では彼女達の種族と人間は仲が悪いのかもしれませんが』

確かにリートの推論通りならシエラ達の反応にも納得がいく。事実この時のキサラギは知らなかったが、シエラはこれまで人間や魔族と関わらないように隠れて生きて来た。キサラギの方にその気が無かったとしても、二人が正体を隠していた人間を警戒するのは至極当然のことだった。

(不味いな……警戒されちゃ話もまともに来ないぞ)

キサラギとしては機体修理の為にレアメタルを探さなくてはならない。現在の機体状態では満足に歩けるようになるまでもう少し時間が必要だ。

（少なくともその間に住む場所や食料を確保しなきゃならない。手持ちの携帯食料じゃ数日しか持たないからな）

その為にも現地人である二人に警戒されては都合が悪い。これでは協力を頼むどころかこの場で敵対されかねない。特にブライからは隙あれば直ぐにでも攻撃して来そうな気配が漂っている。

ともかく、キサラギは先に二人の誤解を解くことにした。

「何か勘違いしているようだが、俺は厳密に言えばお前らの知る人間とは違うぞ」

「ふん、人間の言うことなど信じられるか」

「止めなさい、ブライ。私が心配なのはわかるけど口を挟み過ぎよ」

「お、おじょうさまあ……」

ブライが主人に諫められ情けない声を上げる。

「さあ、話を聞かせてちょうだい」

キサラギはシエラと正面から対峙する。金色に煌めく彼女の瞳は、あらゆる嘘を見透かしているかのようだ。だからキサラギは自分が持つ在りのままの言葉で答える。

「俺は“キサラギ”だ。人間なんて名前じゃない」

それはとてもシンプルな言葉だった。

確かにキサラギは此処に来たばかりの部外者　シエラ達と人間にどんな確執があるのかも知らない。

「あ……」

シエラの口から短い声が漏れる。キサラギが持つ在りのままの言葉　飾りの無いぶっきらぼうな言葉　それはかつてシエラが必死に訴え続けた言葉だった。

「そう、貴方はキサラギ……人間である前にキサラギという個人だわ。今まで散々そのことで苦しんだ私が、キサラギに同じことをしちゃ駄目よね」

「お嬢様……」

シエラは何処かすつきりしたように笑う。そんな主の様子にブライは先程までの自分を恥じた。主の安全を想うあまりに彼は大変な間違いを犯すところだった。

「さて、その所を踏まえてシエラには相談があるんだ」

「私に相談？ 一体何かしら？」

二人の雰囲気や和らいだ所でキサラギは本命の話題を切り出す。元よりキサラギが彼女達と接触したのはコレが理由だったりする。

キサラギは悪戯っぽく口元を緩めて二人に言った。

「傭兵を雇う気は無いか？」

先刻とは場所を移してキサラギはシエラの屋敷に来ていた。

今のキサラギはパイロットスーツを脱ぎ、元から下に着ていた軍服姿である。キサラギ達はテラスのテーブル席で契約内容を話し合っていた。

「それじゃあ、契約内容はこれで良いかしら？」

シエラはテーブルに置かれた羊皮紙を差し出す。そこには以下のように書かれていた。

「依頼内容」

契約期間はキサラギがシエラ・セリクスの護衛をする。

「報酬」

契約期間はシエラ・セリクスが期間中のキサラギの衣食住を提供する。

キサラギは羊皮紙に書かれた内容を読むと満足そうに頷く。

「特に問題ないな。レアメタルの情報に関しては依頼達成の為に必要な情報だ。出来ればそちらに手伝って貰いたい」

「わかってるわよ。代わりに【シユナイト】のこと調べさせてね」

「しようがない。出来る範囲で、だぞ」

「ええ、それで十分よ」

「なら、契約成立だ」

「こちらこそ。よろしく頼むわよ。傭兵さん」

最後の確認が済むと、二人は固く握手を交わす。これで契約は成立だ。

今後の生活を心配する必要がなくなり安堵するキサラギだったが、それと同時にある事実思い至った。キサラギはリートに自己紹介するよう促す。

『ご挨拶が遅れました。私はリート。マスターのサポート用AIです』

シエラとブライに対してリートが簡単な自己紹介をする。リートの発声装置はキサラギ右手に巻かれた腕時計型の端末だ。

今は二人にもわかり易いように端末はテーブルの真ん中に置かれている。

「俺の相棒だ。少々口煩いかもしれないが、よろしく頼む」

『何かと面倒を掛けるマスターだと思いますが、よろしく願います』

保護者みたいなことを言うリートに顔が引き攣る（ひきつる）が、キサラギの脳内では別のことを心配していた。

（ま、科学が発展してない世界でナノマシンって言われもピンと来ないだらうけどな）

シエラ達にナノマシンという存在を理解させるのは難しいだろう。キサラギはどう二人に説明すべきか頭を悩ませたが、それも杞憂だった。

彼女達は意外と呆気なくリートの存在を認めた。理由を聞いてみると……

「なのましん？ よく分からないけど精霊みたいなモノでしょ？」

『違います。私はそんなオカルトな存在ではありません。私はナノ

マシン　人類の叡智の結晶です』

「そうなの？　キサラギの居た世界の人間って凄いのね。詳しく話が聞きたいわ」

『はい。シエラさんとは一度ちゃんとお話した方が良いでしょう。何故か意気投合する二人にキサラギは複雑な気分になる。リートとシエラが親しくなるのは構わないのだが、リートが他人と話すにはキサラギがその場に居る必要があった。

長々とあらゆる分野での専門的な話をされても退屈なだけだろう。それより今後の方針を決めよう。お互いに問題は山ほどある、だろ？」

「確かにキサラギの言う通りね。まずは私達の置かれている状況を説明してあげるわ」

そう言うところとブライが地図の横に立ち指示棒で中央部に広がる森を指し示す。席を立つと地図の横に立ち指示棒で中央部に広がる森を指し示す。「ここが私達の居る“魔の森”よ。西側の“キシル山脈”と東側の“ドグラ山脈”に挟まれていて、人間と魔族の生活圈を分断しているわ。ま、今は名前の前に“元”が付く有様だけだね」

『「……………」』
二人は都合の悪い情報はスルーした。

「さて、まずは南部ね。ここから下は全て人間の勢力圏よ。中でも“魔の森”に隣接する“ロキア王国”は魔族との戦争で連合の長を務めた大国だわ」

「なるほどな。確かに隣に住んでるのが敵なら必死にもなるか」

「そして森との境界にあるのが“グラナ砦”　人間側の対魔族戦の最前線ね。強固な城壁に護られた難攻不落の砦よ。内部は城砦都市になっていて500人からなる常駐群が駐屯している……………らしいわ」

「500人か…………それは多い方なのか？」

「常駐軍としては多い方ね。しかも常駐軍は精強と評判らしいわ。森の魔物や盗賊を相手にしているのか、実戦には事欠かないみたい

ね」

『人間の兵が何人居ようと私達には関係ありませんけどね』

「【シュナイト】が万全に動ければ、な」

落下地点に放置する訳にもいかず、現在【シュナイト】はシエラの屋敷の裏地に仰向けに寝かせてある。自己修復機能で簡単な修理は始まっているが、レアメタル無しでは万全には程遠いだろう。

「続けるわよ。北部は魔族や魔物が暮らしているわ。国家と呼べる規模なのは“魔の森”から少し北にある“ヴァーリス帝国”だけね。こちらモ森の直ぐ側に砦があるわ」

「つまり俺達は二つの勢力に挟まれている訳か……」

「そうね。私はどちらかに味方する気も無いわ。けれど“魔の森”という障害が消えた今、此処が戦場になるのは明白。巻き込まれるのは御免ね」

『逃げるという選択肢は無いのですか？ シエラさん』

「無理よ。何処へ行こうと……私に安息の地は無いの」

シエラは寂しげな顔で自嘲する。しかしソレも一瞬のことだった。向き直りキサラギを見詰める金色の瞳は決意の炎が揺らめいていた。

「だからお願い。私に力を貸して」

「わかっている。傭兵は一度受けた依頼を途中で投げ出したりしない」

「ふふ……頼りにしてるわ。キサラギ」

「ああ、任せておけ」と、言いたいのが正直に言っただけだ。『今更だ』

『せめて機体を動かせるようにしなくてはなりません』

「なるほどね。レアメタルだったかしら？ それを探さないといけないのね」

「そうだ。レアメタル無しでは【シュナイト】は万全の状態に出来ない」

『一応の代案はあります。様々な面でレアメタルに劣ってしまう可能性は否めませんが、他の金属を流用するという方法です』

万全という訳にはいかないだろうが、機体を動かせる位には出来

るだろう。何より事態は急を要している。一刻も早く【シユナイト】を動かせるようにする必要があった。

「幾らか金属を提供して貰えないか？ 使えそうなのが無いかりートに調べて貰う」

「なら、私の研究室に研究用に集めた素材があるから、そこから好きに使って良いわよ。代わりと言っちゃなんだけど……私にも【シユナイト】を調べさせてくれないかしら？」

「わかった。ただし、調べる時は俺かりートのどちらかがその場に居ることが条件だ」

「ええーどうしてよ？ 今のキサラギは忙しい身なんだから、無駄な手間は省いた方が良くないじゃないの」

『いえ、その気遣いは無用です。それよりシエラさんと【シユナイト】を二人切りで放置する方が危険です。貴方のような人種は放って置くと勝手に【シユナイト】を分解しかねません』

「嗚呼！ ショックだわ。私って信用されていないのね」

「俺もりートに同感だ。自覚は無いみたいだが、お前って相当マツドなタイプだと思うぞ」

キサラギにも覚えがある。【シユナイト】の修理を業者に依頼した時も、頻繁にドリルの装着を勧めて来る顔馴染みの男が居た。今のシエラの瞳には彼と同じ妖しげな光が灯っている。

シエラが渋々妥協すると、いつの間にか消えていたブライがテラスへ戻って来た。彼の手は銀のワゴンを押しており、微かに食欲をそそる良い匂いがした。

「お嬢様。昼食のご用意が出来ました」

「あら、もうそんな時間だったのね。キサラギ達の間もお願ひね」「はい。直ぐにご用意致します」

優雅に一礼。ブライはワゴンに載った料理を配膳する。最初からキサラギ達の間も用意してあったようで配膳は速やかに完了する。

「りート様の分はどう致しましょう？」

『私は食物を摂取する必要がありません。私の分はマスターに上げ

てください。マスターが食べてくれれば、それは巡り巡って私の糧にもなります」

「畏まりました。それではキサラギ様。どうぞ」

シエラに雇って貰ってからというもの、ブライのキサラギへの対応が激変していた。まるで客人を持って成すかのような態度で接して来るのだ。

「お、おう。悪いな」

「いえ、執事ですから。当然のことです」

キサラギとしては初対面からずっと攻撃的だったブライの心変わりに戸惑っていた。

しかし事實はなんてことは無く、シエラに出来た新しい味方であるキサラギのことを歓迎していたからに過ぎない。

尤も忠実な執事であるブライが彼女の意に反してキサラギの寝首を掻くことは無いだろう。そう結論付けるとキサラギの関心はブライから目の前の料理へと移った。

「さあ、小難しい話は後にして食事にしましょうか」

眼前の大皿には彩り豊かなサンドイッチが山のように載っている。リートの分も用意してあるのでボリュームは相当な物だ。それに付け合せとして赤いスープと果物の小皿があった。

「こ、コレは……飯……なのか？」

「ええ、そうよ。ふふ……ブライの料理はとっても美味しいんだから」

「へえ、これが飯、ね」

キサラギは大皿に載せられたサンドイッチを一つ掴み、しげしげと見る。ブライお手製のサンドイッチは、具はシンプルに肉と野菜のみだがパンの表面が軽く焼いてある。手間を惜しまず作られた一品は、ブライのシエラに対する献身ぶりが窺えた。

「大丈夫です。簡単なスキヤンをしましたが、有害な物質は入っていません」

「失礼ね。毒なんか入ってないわよ！」

「そ、そうだな。いただく、ぞ」
手にしたサンドイッチを頬張る。作りたてのソレはまだ温かい。
噛み締めればシャキシャキとした野菜の歯応えと口中に肉の旨味が
広がった。

途端にキサラギの身体に震えが走る。

「う、う、う、う……」

『ま、マスター？ 精神反応に不自然な乱れが……はっ！？ まさ
かシエラさん！ マスターの料理に未知の毒物を』

「違うわよ！？ 一体どうしたって言うのよ。キサラギ」

その突然の変化にシエラとリートが慌てふためく。何故か震える
キサラギを見てブライはニヤリと笑みを深めていた。シエラの脳裏
に最悪の想像が過ぎる。

「ブライ。貴方まさか……」

『マスター！』

慄くシエラとリートの叫びが重なる。

そして次の瞬間

「うー……まあ……い……ぞおお……！！」

キサラギはテラスのテーブル席から立ち上がった。その咆哮が荒
地となった“魔の森”へと響き渡る。

美味かった。

ブライのサンドイッチはとんでもなく美味かったのだ。コレに比
べれば今までキサラギが食べていた携帯食料はとんでもなく不味い
いや、もう食べ物ですら無いだろう。

それ程までにブライのサンドイッチと携帯食料の間には埋め難い
隔たりがあった。

「お、大袈裟な奴ねえ……紛らわしい真似しないでよ。もう」

『そうです。しかし失念していました。マスターはまともな料理を
食べるのは始めてでしたね』

正確にはリートがキサラギのサポートAIになった15歳の時か
ら見ての話だ。それ以前の彼の食生活についてはリートも知らない。

しかしリートの見る限りで5年間のキサラギの食生活は栄養補給目的の携帯食料だけだ。

事実としてキサラギはこの5年の間に他の物を食べたことが無い。そこへブライという一流の料理人による手料理である。

まさにこの瞬間にキサラギの味覚に革命が起きていた。こうなつては止まらない。キサラギは目の前の料理を片っ端から平らげている。

「はははっ！ お気に召しましたか？ キサラギ様」

「おう！ こんなに美味しい物は食べたことがない！」

「ありがとうございます。私も腕を揮った甲斐がありました」

「おう。 はぐっ、むぐっ……」

品性やマナーといった言葉を知らない野蛮人のような豪快な食いつぶりだった。そんなキサラギにブライは眉一つひそめず見守る。

どんな形であれ自分の腕前を褒められて嬉しくない料理人は居ない。ブライの顔には満足そうな笑みが浮かんでいた。

「ふうー美味かった。ありがとうございます。ブライ」

「いえいえ、お嬢様の為にもキサラギ様は英気を養ってください」

結局その後もキサラギは終止ブライの料理に夢中だった。

キサラギは今も食後に紅茶を飲みご満悦といった様子である。

『耳に入れておきたい情報があります。マスター』

「ん？ どうした、リート？」

『若干ですが子機とのリンクが復帰しています』

「何だと？ 妙だな。こちらは何のアクションも起こしていないぞ」

『はい。なので原因は環境の変化にあると思われませう』

「ねえ、そもそもリンクって一体何の話なの？」

シエラは不思議そうに首を傾げる。ナノマシンのことを理解していない彼女には本体と子機の繋がりを説明しても無駄だ。リートは要点を絞って質問することにした。

『この屋敷と【シユナイト】の落地点 何か大きな違いはありますか？』

「うーん……それは野外と屋内の違いという意味じゃないわよね」
『はい。具体的に言うならこの屋敷の敷地ですね。子機とのリンクが持つのはその範囲までなので……』
「屋敷の敷地？ それなら結界のことかもしれないわね」
「結界？ 魔術のか？」
「そうよ。この屋敷は侵入者や攻撃に備えて防御の結界が張ってあるの」

シエラの説明によると屋敷には敷地をすっぽり覆う程の結界が常時展開されているらしい。これはシエラの研究成果である“刻印魔術”の産物だ。屋敷の随所に刻まれた紋章は周囲の“魔素”を吸収。地下にある装置によって“魔力”へと変換され“結界”の術を展開し続ける。

『なるほど。常時展開されているのなら、屋敷内に限れば通信が可能ですね』

「それなら端末を使えばリートを別行動させることが出来そうだな」
「結界が切れなければ、だけどね」

『ならば【シユナイト】から携帯用端末を持って来ましょう。その方が何かと都合が良いです』

「そうだな。よし、直ぐに持って来る」

善は急げとキサラギは【シユナイト】へと向う。屋敷の裏手に寝かされた【シユナイト】はナノマシンによる自己修復が始まっているのか、機体各所で作業による火花が散っている。

「よつと、どれどれ……」

ハッチを開けて操縦席に飛び込む。椅子の裏にはリートの活動補助用の携帯端末が収納されている筈だ。

「お、あった。あった」

『マスター。後のことは私に任せてください。マスターは端末をシエラさんに渡して今日は身体を休めてください』

「おいおい、急にどうした？ 俺がこの程度で疲れる訳ないだろ」

今日のキサラギはレオンとの戦闘に始まり、大気圏突入にシエラ

達との接触ととても多忙だったのは確かだろう。だが、ナノマシンで強化されたキサラギはこの程度で疲労を感じることは無い。

『いえ、私が心配しているのは精神的な面です。環境の変化は精神面において多大な負荷を掛けます。先のことを考えるなら言う通りにしてください』

「む……しかしな……今は少しでも情報の整理が」

『情報収集は私の仕事です。マスターは傭兵。戦うべき時に戦うのが傭兵の仕事です』

「う、ぬう……わかった。言う通りにする」

勝ち目は無いと判断したキラサギは大人しくリートの言葉に従う。リートとの付き合いも長いからわかる。こういつ時の相棒に逆らっても無意味だ。

結局は最後にキサラギが折れることになる。

「悪いな。今日は先に休ませて貰うぞ」

「ええ、無理は身体に毒よ。ゆっくり休みなさい」

今日はもう休む旨を伝えるとシエラに端末を渡す。ナノマシンの子機が仕込まれた端末は屋敷内のどこからでもリートとの連絡が可能だ。

「それではキサラギ様。お休みなさいませ」

「おう、明日の朝飯も期待してるぜ」

「はい。では……」

キサラギの言葉にブライは微小を浮かべて退室する。キサラギが案内された部屋は客間らしく、掃除は行き届いているが使われた形跡が一切しない。

「ふう……」

新品同様のベッドに寝転ぶと途端に疲労感が込み上げてくる。どうやらリートの言う通り精神的には相当疲労していたようだ。

「お休み。リート」

『はい。良い夢を……マスター』

柔らかなリートの声に安堵してキラサギは安らかな眠りに落ちて

い
っ
た。

3・雇用（後書き）

どうも、如月八日です。今回も執筆終わった分を投稿します。
ご意見やご感想、何時でもお待ちしております。
気軽に書き込んでくれると嬉しいです。

4・波紋

翡翠に輝く“彗星”が“魔の森”を消滅させた。

そんな冗談のような報告が王都へと届けられたのは、“彗星”が“魔の森”に落下してから一夜明けた翌朝のことだった。

セルディオ大陸でも有数の大国“ロキア王国”を治める若き王ダリオ・ガ・ロキアは“グラナ砦”より早馬で伝えられた報告に顔を顰める。

「之は、まことの事か？」

王の疑うような言葉に、必死で報告を運んで来た伝令の兵は身を竦ませる。内容が内容なので兵自身も未だに信じられない心地だった。

しかし事實は事實。どんなに荒唐無稽な内容であったとしても、伝令の仕事は正しく情報を伝えることである。

「はっ！ 全て事実のことです」

「うむ……そうか、大義であった。お前はもう下がって良いぞ」

ダイオスは労いの言葉を掛けて伝令の兵を下がらせる。“グラナ砦”から王都まで一晩徹夜で馬を駆けさせて来た兵を気遣う。

それと同時に王は冷静に今回の事態を考察していた。

「今回の件を報せねばならん。“遠話の間”を使うぞ」

ダリオは指示を出すと玉座から立ち上がる。“遠話の間”とは離れた場所と“魔術”で互いに会話をする為に作られた部屋だ。

玉座の裏手から扉を開き部屋へと入る。室内には豪華な椅子が一脚と壁掛けの大きな鏡が二つ “遠話”の魔術が“付加”された特殊な鏡である。

「大気を漂う精霊達よ。我が声を彼の地に届け給え」

ダリオは椅子に腰掛けると始動の呪文を呟く。繋げる先は対魔族の連合に加盟している“ダイン共和国”と“セラス教国”だ。

「“魔の森”に落ちた“彗星”の件で新しい情報が入った」

ロキア王国は連合の長である。そして“魔の森”は“人間”と“魔族”を隔てる境界線であり、ダリオは加盟国の二人に報告する義務があった。

『グラナ砦から伝令が来たのですね。お待ちしていました。ロキア王』

右側の鏡に映し出されたのは白の法衣を纏う妙齢の女性だ。彼女はセラリス・ルミナ・キユクロス。大陸最大の宗教“キユクレ教”の法王を務める“セラス聖国”の才女だ。

『ほっほっほっ！ この地に“彗星”が落ちて来るとは珍しいのう。はてさてコレは吉兆か、それとも凶兆か……』

左の鏡で禿頭の老人が愉快そうに笑う。大陸一の経済力を誇る“ダイン共和国”を治める代表者 モーデイス・ハガートだ。

『笑いごとではない、モーデイス翁。予想よりも事態は深刻だ』
『ほう？ それは興味深いのう』

ダリオの言葉にモーデイスが目細める。三人の中では一番の高齢だが、老いて尚も商国を発展させ続けている老人の勘が、大きな商売の予感を告げていた。

「落下の衝撃で“魔の森”が消滅した」

『な、何と』

『し、消滅……ですか？』

告げられる真実に二人は啞然とする。“魔の森”の周辺に“彗星”が落ちたことは情報として把握していたが、その結果は二人の想像を遥かに上回る破壊をもたらした。

「これ程の威力だ。ただの“彗星”とも思えん。セラリス法王。貴国で何かソレらしい伝承が残されてはいないか？」

『申し訳ありません、ロキア王。聖国も昨日から地下書庫を総出で探させましたが、翡翠に輝く“彗星”に関する記述は見当たりませんでした』

「モーデイス爺はどうだ。何か思い当たる話を知らないか？」

『無理を言うでない。セルディオ最大の蔵書量を誇る聖国に無いの』

なら、わしにはもうお手上げじゃよ」

「ならば報告を待つしかないか。今もグラナの常駐軍に調査隊を編成させているが、恐らく完了するのは明朝になるだろう」

『“魔の森”じゃからのう。森が無くなった後に魔物がどうなったかも分からん。用心するに越したことはないじゃろう』

『それに“檻”が無くなれば“穢れ”どもが攻め寄せて来るかもしれません。奴らの動向にも気を配らねばならないでしょう』

セラリスの言う“檻”とは“魔の森”を指し“穢れ”とは“魔族”のことだ。“キユクレ教”の教義では“魔族”を世界に満ちる女神の恵み 即ち“魔素”を過剰に貪る“穢れ”た存在と定めている。

「しかしコレは好機だ。長年攻めあぐねていた“魔族”の連中を滅ぼす絶好の機会だろう」

『そうです！ まさに此度の“彗星”は天の采配 女神様の御意志に違いありません！』

『ふむ。神の意思かは知らんが、金が大きく動くことは確かじゃな』
「ふん。神も、金も、余には関係ない。奴らが攻めて来るのは時間の問題なのだ。余はロキアの王として我が国の民を護る、それだけのことだ」

何処までも毅然とするダリオの姿勢にモーデイスは人を食った笑みを浮かべる。

『ほほっ、さすがはロキアの“若獅子”は民想いじゃのう』

『ロキア王。国を代表する者が神を蔑ろにするようなことを言つて駄目です。今は全ての人間が団結し、目の前に迫る“穢れ”の脅威を退けなくてはなりません』

「わかっている。連中が攻めて来る前にこちらから先手を打ちたい。各地より兵を召集、王国騎士団に部隊の編成を急がせている」

『ふむ。ならば武器や防具、それに兵量が必要じゃな。安くしておくぞ。ロキア王』

「相変わらず抜け目無い爺さんだ……が、有り難い申し出だ。頼む」

『それならばモーデイス爺。聖国にも補給を頼みます』

『ほう、聖国もかのう？ こりゃ張り切らねばならんな。ほっほっほっ！』

思わぬ儲け話にモーデイス爺が相好を崩す。経済力で優れる共和国は残る二国を物資や装備の補給で支えていた。

「何れにせよ、調査隊の報告次第であろうな」

『はい。侵攻の際には報せてください。こちらも機を合わせて神殿騎士団を動かします』

セラリスは信仰心を

『吉報を待つておるぞ。ほっほっほっ……』

モーデイスは野心を

それぞれの心を胸に秘したまま、その日の三国会議は終わりを迎えた。魔力の供給を断たれた鏡には、ダリオの顔だけが映し出されている。炎のような赤髪と若々しく覇気に溢れる精悍な顔。隣国から“若獅子”と称えられる王の姿だ。

「ああ……決戦の時は近い」

鏡の向こうで“若獅子”が獰猛な笑みを浮かべる。

その胸に残る心は一体何だったのか　まだ誰も知らなかった。

「ふむ。美味い」

自分が原因で戦争を開始されるかもしれないとは露知らず、キサラギはテラスでブライの淹れてくれた紅茶を楽しんでいる。

そこへ目の下に濃い隈を作ったシエラがやって来た。

「今日は一緒に買い物に行くわよ。キサラギ」

会うなり挨拶も無しに用件を切り出された。しかも寝ていないのか酷い顔付きだった。

「買い物？ 俺がか？」

いきなり脈絡の無い話を降られてキサラギは首を傾げる。それを見かねたのか、リートがシエラの言葉を継ぎ、詳しい説明を補足す

る。

『マスターには修理に必要な資材を調達して来て欲しいのです』

「お？ なら修理に使えそう金属があったのか」

『はい。あくまで応急処置としてですが……ミスリルという金属です』

「なら、俺はミスリルを買ってくれば良いんだな？」

「簡単に言わないでよ。ミスリルは貴重な金属なの。拳位の大きさでも金貨5枚以上の価値があるんだから」

セルディオの通貨は金銀銅の3種類の鋼貨である。一般的な農民の一年間の生活費が銀貨1枚程度だ。これは農民の年収に当たる金額でもある。

「金貨か……それってどれ位の価値があるんだ？」

『金貨1枚は銀貨100枚。銀貨1枚は銅貨100枚に相当します』

「へえー詳しいな。リート」

『はい。昨日あれからシエラさんに基本的な常識は教えていただきましたので』

「ふふん、キサラギも買い物時に色々教えてあげるわよ」

シエラは得意気に胸を張る。小柄でまだ幼い顔付きの彼女がそうすると、何だか背伸びをしたがる子供のようにだった。

キサラギは見ていて微笑ましいと思ったが、呑気に笑ってもしらない。

「しかし弱ったな。俺は金なんて持って無いぞ」

『マスター……言い難いのですが、問題はお金だけではありません』
「そうよ。ミスリルは鍛えれば優れた武器や防具にもなるわ。だから貴重なミスリルは国が管理しているの。だからリートが言うような量を揃えるのは無理な話なのよ」

つまり単純な価値だけでなく、ミスリルは入手自体が困難な金属だということだ。

ならば何故、キサラギは買い物に行かねばならないのか？

その答えは意外にも今まで静観していたブライが教えてくれた。

「キサラギ様。あまり難しく考える必要はありません。お嬢様はキサラギ様と買物に行きたいだけなのです」

「ちょ、ブライ!? あ、あなた何を言ってるの」

慌てるシエラの姿にブライは優しげな微笑を浮かべる。ブライは何処か残念そうに、しかし同時にホツとしたように続けた。

「キサラギ様。“魔族”の私ではお嬢様を買物に連れて行けませんでした」

「魔族、か……」

「はい。私のように黒い肌と尖った耳……そして金色の瞳を持つ種族です」

「金色の瞳？ じゃあシエラは」

「私の身体には“魔族”の血が流れているの……」

「そうだったのか……なら俺と一緒に危険なんじゃないのか？」

外見だけに限ればキサラギはセルディオの人間と大きな違いは無い。だからと言って、キサラギと一緒にならシエラが安心出来るという訳でもないだろう。

小柄でまだ少し幼さが残るが、シエラの容姿は美少女と呼んで差し支えないレベルだ。

当然、周囲の注目を集める可能性は高い。そうすれば彼女の金眼に気付く者も必ず居る筈だ。

「ご安心を、キサラギ様。リート様が良い物を教えてくださいました」

「いえ、そんな大した代物ではありません。それに実際に作ったのはシエラさんです」

「ふっふっふっ！ 私の頭脳をもってすればこの程度の物は文字通り朝飯前よ！」

「自身満々だな。一体何を作ったんだ？」

「マスターもご存知の物ですよ。原理は単純ですから」

「ふふん！ 見なさい、コレが“からーこんたくと”よ！」

後ろ向いていたシエラがこちらに向き直る。その瞳は煌めく黄金

ではなく、透明感のある翡翠色だ。確かにコレなら彼女が持つ唯一の“魔族”の特徴を隠せるだろう。

「大変お似合いでございます。お嬢様」

「そう？ うふふ……瞳の色を変えるなんて我ながら画期的な発明品だわ」

「うーん。確かに似合うと思うけど……何か引つ掛かるんだよね」
特に翡翠色に既知感を覚えていた。まるで毎日見ているかのような気さえする。

『当然です。マスターの瞳の色を参考にしましたから』

「あーなるほど俺か。そりゃ見覚えあるよな。しかしまた何で俺なんだ？」

『兄妹という設定です。赤の他人よりも説明が楽でしょう？』

「まあ……そうだな」

ちゃんと筋の通った合理的な理由にキサラギは一応の納得した。そしてシエラは身支度をすると自室へと引っ込んでしまう。

キサラギも出掛ける為に準備をしなければならない。

「どうぞ。こちらをお召しください」

「悪いな。ブライ」

「いえ、執事ですから。当然のことです」

キサラギはブライに借りた外套を羽織る。下には昨日も着ていた紺色の軍服を纏っている。パイロットスーツよりはマシだが、軍服はセルディオでは十分に目立つ格好だろう。

「キサラギ様。どうか、どうか、お嬢様をよろしくお願ひします」

「わかった。わかったから笑顔で睨むのを止めてくれ」

ブライの迫力に負けた訳ではないが、外套と軍服の中には拳銃とナイフを隠してある。なるべく使わないよう心掛けるつもりだが、備えは必要だろう。

「それじゃ、しっかり留守番を頼むぞ。リート」

『はい。【シュナイト】は私が絶対に護ります。マスターの方こそボ口を出さないようにしてくださいよ？』

「安心しろ。俺はプロの傭兵だぞ」

『だから心配なんです。あまり無茶苦茶やって目立たないようにしてください』

「くっ……信用されてないな」

「私、何だか不安になって来ました……」

キサラギはその後もリートの小言や不安げなブライに何度も念を押された。ようやく開放される時には既にシエラは準備万端で屋敷の正門で待っていた。

「悪いな。小煩いのに捕まってた」

「遅いわよ！ キサラギ！」

不機嫌そう口調でそっぽを向くシエラだったが、口元が微かに微笑んでいた。町に買い物に行けるのが余ほど嬉しいのだろう。

「ふん、まったく……さつさと行くわよ」

昨日のような華美なドレスを避けたのだろう。シエラは動き易さを重視したシャツに短パン姿で上にはキサラギと同じように外套を纏っている。

今の二人は傍から見れば“旅人の兄妹”に見えなくもない。

「すまん。馬に乗ったことが無い」

「はあくわかったわよ。私の後ろに乗りなさい」

結局、シエラの乗る馬の後ろに乗せて貰った。

リートとブライはそんな二人の様子に、どちらが年上役かわからず苦笑した。

二人が向う先は“マオルベルグ” “ダイン共和国”が誇る大

陸一のスリル炭鉱の町である。

“マオルベルグ”は“ドグマ山脈”を越えた先にある。シエラの屋敷は“魔の森”でも“ドグマ山脈”寄りに位置しているので目的地まで馬で半日と掛からない距離だ。

現在のキサラギは馬に乗れないのでシエラと二人乗り中である。

彼女の細い腰に手を回す ちよっと力を入れれば折れてしまいそうだった。

年頃の男女なら甘い雰囲気になりそうな構図ではあったが、どう考えても騎手の配役が逆だろう。

「ちよつと何処を触ってるのよ」

「腹だ」

「そこは“お腹”って言いなさいよ!？」

「意味は一緒だろ」

「言い方ってものがあるでしょ!」

何だかんだと二人の道中はそれなりに賑やかだった。道中では疲れたシャラに代わってキサラギが手綱を握ったりもした。リートのサポート無しでは瞬時に乗馬をマスターとまではいかないが、山を下りる頃にはキサラギも少し馬を操れるようになっていた。

太陽が天頂に輝く正午。二人は目的地“マオルベルグ”の手前に到着する。

「炭鉱の町って言うだけあって賑やかそうな町だな」

「そうね。この町は大陸でも有数の要所よ。最高の素材を求める一流の鍛冶師や職人達が集まるこの町は、“ドグマ山脈”から採掘されたミスリルを加工することで発展しているの」

眼前に見える町並みには切り開かれた森と山肌、大きな通りには宿屋も多く一流の商品を求める行商人や旅人で溢れていた。

「くつくつ……ミスリルかぁー楽しみだ」

翡翠の瞳をキラ付かせて町を眺めるキサラギの表情は　どう見ても面白い物に來た人間の顔ではなかった　後にシエラはリート達にそう語った。

4・波紋（後書き）

どうも如月八日です。執筆完了した時点まで投稿します。

ご意見、ご感想がありましたらお気軽にどうぞ。お待ちしております。
す。

次の話も出来上がり次第投稿します。

5・買い物

“マオルベルグ”は炭鉱の町である。大陸東部にある“ドグラ山脈”の麓に位置するこの町は、山脈から採掘される上質なミスリルが有名である。

だが、今でこそ栄えている“マオルベルグ”も昔は僻地の小さな炭鉱町だった。

それが発展した裏にはダイン共和国の指導者“モーデイス・ハガート”の存在が大きいだろう。モーデイスはミスリルを加工する職人に目を付けたのだ。彼の誘致によって“マオルベルグ”には大陸中から、ミスリルを加工する腕の良い職人が集められた。そして職人達が作り出す質の良い商品を求めて、各地から行商人達も頻繁に出入りするようになった。

「ま、そんな経緯で“マオルベルグ”には旅人や商人が多いのよ」「なるほどな。宿が多いのもその所為か」

キサラギとシエラは旅人を装い堂々と“マオルベルグ”の町に入った。今は中央の大通りから手近な宿屋を見付けて馬を預かって貰っている。

今日は日帰りの予定なので部屋は取らなかったが、宿屋の主人は嫌な顔一つされない。勿論、慣れているのもあるだろうがソレだけでは無いだろう。

「じゃ、食事はうちでとってくれよ。サービスするぞ」

そう言つと宿屋の主人は、どこか生暖かい笑顔で二人を送り出してくれた。

その原因は明白である。

「さて、それじゃ行きましようか。キサラギ」

「……………」

ウキウキと楽しみに前を歩くシエラ。その身に纏う服こそ旅人のように控え目だが、彼女が持つ咲き誇る花のような気品は隠せてい

ない。その幼さを残す整った顔にシエラは微笑を浮かべている。彼女は今にも鼻歌を歌いだしそうな程に機嫌が良さそうだ。

そんな浮き足立つシエラの姿を見てキサラギは思う。

（完全に目立ってるな。しかも俺は何もしてないし……読みが外れたな、リート）

道行く人々は皆、シエラという少女の美しさに目を奪われていた。時々その後ろを歩くキサラギにも目線が来ているがその視線に含まれる感情の種類は違う。

セルディオ大陸は西洋系の人種が大多数を占めている。そしてキサラギは日本人の血を引いているので大陸の“人間”とは肌の色や顔付きが少々異なる。

尤もそんな違いはシエラという美少女の前には霞んでしまつらしく、周囲の者達は楽しげに歩くシエラを遠巻きに見守るだけだった。「最初はその店にしましょうか。キサラギの服も買わなきゃいけないしね」

「安物で良いぞ。服なんて着ればどれも一緒だ」

「はあくわかつてないわね。キサラギは私が雇った傭兵なのよ？」

この天才シエラ様が雇うのだから、みすばらしい格好なんて許さないわ」

「なら適当に頼む。服の良し悪しなんて俺にはわからん」

「ふふ、この私に任せて置きなさい」

妙に自信満々なシエラに手を引かれキサラギは服屋の扉を潜った。「いらつしゃいませー」

店員らしき中年の女性に笑顔で出迎えられる。この店は富裕層を客の中心とする店のようで、広々とした店内には見本となる上等な服が大量に並べられていた。

「旅をしているのだけど彼に丈夫な服を買いたい。見繕ってくれるかしら」

「はい、予算は如何ほどまででしょうか？」

「銀貨一枚までよ」

「畏まりました。それではこちらの棚をご覧ください」

店員の示す棚には装飾の少ないシンプルな作りの服が並んでいる。丈夫な服が欲しいというシエラの要望に応えたのだらう。あまり派手な服を着る気の無かったキサラギにも有り難い選択だった。

「これなんて良いんじゃない？ キサラギに似合うと思うわよ」

「うーん、もっと迷彩色の擬態効果の高い服とかないのか？ 明るい色だと目立って支障が出る」

「何に支障が出るのよ……今買おうとしてるのは普段着。仕事とは関係ないわよ」

「そうか……なら、コレが良い」

「結局、大人しい色を選ぶのね」

キサラギが選んだのはやや暗めの草色の服だった。頭から被って腰紐を結ぶタイプのセルデオでは割とオーソドクスな服である。

選んだのは偶然だったが、旅人の装いとしても一般的で違和感の無い物だ。

「それじゃあ、この服と……その服を買っわ」

「はい、畏まりました。それではサイズを寸法しますね。外套を脱いでいただけますか？」

「わかった。少し持っていてくれ」

シエラに外套を手渡すと店員にサイズを測って貰う。キサラギの纏う見慣れない格好に衣服を扱う者として興味が惹かれたのか、店員の女性は興味深そうに軍服を観察していた。

「ほーこれは珍しい服ですね。生地も見たことがございませんし、どこかの地方の民族衣装か何かですか？」

「旅先で買ったんだ。俺も詳しくは知らないんだが着心地が良くくな」

「そうなんですか……世界は広いんですね。……はい。それでは仕立て直すのに半日程かかりますがよろしいですか？」

「ええ、夕方には取りに来るわ。それまでにお願いな」

「畏まりました。それではお代は銅貨20枚になります」

「それじゃ前金に銅貨10枚を渡して置くわね」

「はい。確かにお預かりしました。お名前を窺ってよろしいですか？」

「ルシフェラ・セリクスよ」

「はい。ではまたの来店をお待ちしております」

シエラが店員に名前を教えたと二人は服屋を後にする。キサラギは外套を羽織り直すと前を歩くシエラの隣に並んだ。

「あー……何だ……」

「どうしたのよ。キサラギ？」

「い、いや……その……」

話しかけたは良いが、いざ面と向うとキサラギは言い淀んでしまう。言葉を捜すキサラギの煮え切らない態度にシエラは眉根を吊り上げる。

「何よ？ はつきりしない態度ね。何か言いたいことがあるんじゃないの？」

「まあ、そうなんだが……何と云うか……」

「ああーもう！ 男ならはつきりする！」

あつさりと我慢の限界を迎えたシエラに怒鳴られ、キサラギは半ばやけくそ気味に言い返した。

「あ、ありがとよ！」

「はあ？」

あまりに予想外の言葉がキサラギの口から出たので、思わずシエラは間の抜けた声で聞き返してしまう。

「き、急にどうしたの？」

「初めてなんだよ。その……物を貰って礼を言うのは、さ」

キサラギも柄でも無いことを言った自覚はあるのか慌てて言い繕う。まだ照れているのか顔が赤い。キサラギは孤児出身で幼い時から傭兵として働いており、報酬以外に他人から物を貰った経験がなかった。

勿論、二人で買い物に行ったことなど皆無である。

「あら？ そうなの……って、そう言えば私も誰かに物をあげるのは初めてね」

またシエラもキサラギと同じである。彼女も幼少の時よりブライト二人で“魔の森”に隠れて住んでいた。そして従者に贈り物を贈ったことは無かった。

「……………」

二人は気恥ずかしくて黙り込む。道行く人々は往来の真ん中で俯く二人に怪訝な視線を向けて通り過ぎる。

先に復活したのはシエラの方だった。

「そ、そろそろお昼時ね。さっきの宿屋で食事にしましょう」

馬を預けた宿屋の主人の言葉を思い出し、シエラはキサラギに提案する。

その言葉にキサラギは目の色を変えて飛び付く。

「何ッ！？ 飯だと！？ よし行こう。直ぐ行こう！」

「はあ……行きましょう」

シエラが力の抜けるような溜息を付く。彼女の中でキサラギの評価がどんどん微妙なものになっているのだが、知りもしないキサラギは呑気に昼食の料理に思いを馳せていた。

『うーん。これは…………』

同時刻、シエラの屋敷ではリートが【シュナイト】の修復に頭を悩ませていた。

彼女の本体は現在キサラギの体内から【シュナイト】へと移されている。ある意味でこの星で最も安全な場所に居ると言えるだろう。修復は難しそうですね。分解して資材に転用しましょう」

「調子の方はどうですか？ リート様」

ブライトが仰向けに寝そべる【シュナイト】を見上げて声を掛ける。彼もシエラから屋敷の警備を任されているのだが、朝から作業に没頭するリートを気遣って定期的に様子を見に来てくれていた。

「やはり本体の修理にはミスリルが必要です。マスターとシエラさんに期待するしかありませんね」

「やはりそうなりますか……しかしミスリルは国が管理しています。大量に入手するのは難しいですね」

「疑問に思っていたのですが、シエラさんの持っていた研究用の素材は、一体どのような経緯で入手した物なのですか？」

「あれは“魔の森”で野垂れ死んだ侵入者から私が拝借して来た物です。お嬢様は純粋に素材を求めておりましたので、鎧や剣は鑄潰してインゴットにしてからお渡しました」

ミスリルは上等な装備の材料に使われている。また“魔の森”は強力な魔物が生息しており、“人間”と“魔族”の双方から難所として有名だった。

「なるほど、それならマスターに剣の一本でも買って来て貰うべきでしたか……」

「いえ、ミスリル製の剣は少なくとも金貨5枚はします。銀貨20枚しかお持ちでないお嬢様では買うのは無理でしょう」

「買・う・の・はですよね？」

「まさか、キサラギ様は」

含むようなリートの言葉にブライは顔を青褪めさせる。確かにキサラギは同業者の中では真つ当な倫理観を持っている方だろう。

だが、セルディオの倫理観に合わせてキサラギが行動する保障は無いのだ。

「騒ぎは控えるよう言い含めました。ですが、効果があるかは微妙です」

「嗚呼……私、頭が痛くなりそうです」

「慣れるしかありませんね。気休めですが、一応は騒ぎになってもシエラさんの安全は保障しますよ？」

「はい。問題がないことは存じております」

「わかるのですか？」

「それでも剣士の端くれです。私の一閃を眉一つ動かさずに見切っ

たキサラギ様の眼力は見事でした。キサラギ様も相当お出来になるのではないですか？」

そう言って老執事はニヤリと笑う。なるほど一流の剣士の眼力も侮れない、とリートはブライに感嘆の言葉を送りたくなる。

彼の言う通りナノマシンで肉体を強化されたキサラギは、セルデイオの“人間”とは肉体の持つ性能が違う。セルデイオでは一流の剣士であるブライによる神速の一閃も強化された動体視力が完全に捉えていた。

『マスターは強いです。しかし過信するのも危険でしょう。セルデイオには“魔術”という未知の力があります。チンピラ程度にはまづ負けませんが、ブライさんのような実力者を相手にするような危険は冒さないでしょう』

キサラギは人間相手の実戦経験に乏しい。こういった実力者が持つ観察眼や剣士の勘と言ったモノは持ち合わせていない。それはリートの力でも再現不能な“経験”の産物だ。

「お嬢様には是非とも面白い物を楽しんでいただきたいものです」

『申し訳ありません。先に謝らせてください。きつと今頃マスターはシエラさんの買い物物の盛大に邪魔をしていることでしょう』

「は、はは……杞憂だと思つのですが……はは……」

自信が無いのかブライも目が泳いでいた。早くも悪い意味で信頼されているキサラギだった。

『右肩部ミサイルポッドの連結を解除。信管をロックして保管ですね』

ブライと話ながらもリートは【シュナイト】のテキパキと修復作業を進めている。修理の難しい装備をパージ。使用されている材料を再利用すべくナノマシンで分解し、機体を動かせるレベルまで修復させていく。

『自動盾の修理は諦めましようか。アームの修理に回せる材料もありませんし……』

大気圏突入時にアームが折れた自動盾は盾の部分だけを残して資

材に分解する。残された盾は材質がレアメタルなのでそのまま取って置くことにした。

「先程からコレは一体何をなさってるのですか？」

傍から見れば【シユナイト】の装備がひとりでに外れて、消えているようにしか見えないのだろう。

ブライの疑問にリートは端的に事実のみを説明する。

『使えそうな装備の選別です。補給が望めない現状では修理が難しい物も多いので、それらは材料に戻しているんです』

「なるほど、私にもわかります。武人にとって武具の手入れは大事なことですから」

『まあ、現在は利用価値の低い装備も幾つかありますからね。マスタ―が不在の内にある程度は絞っておきたいんです』

特に対機工戦騎用のライフルは動力炉の出力低下で撃つことすら出来ない。動力炉に依存するシールドは強度も落ちているし、地上に降りるときに使用した“炸裂障壁”に至っては使用すら不可能だ。『何か良い装備があれば良いのですが……』

特に自動盾やライフルの代わりになるような主力となる武装が足りない。今の【シユナイト】は銃身に付けられた短剣しか接近用の武装が無いのだ。

「そういえば“しゅないと”の装備に剣は無いのですか？」

『丁度そのことについて考えていました。何かアイディアを貰えないでしょうか？』

「私の、ですか？ 私は“ましね・リーゼ”に関しては完全に素人ですよ」

『関係ありません。むしろ剣士としてのブライさんの意見が欲しいのです』

「そういう考えならわかりました。そうですね。これだけの巨体ですし」

ブライという一流の剣士に意見を仰ぎながらリートは機体の修復を進める。

手の掛かる主が戻る前に、少しでも【シュナイト】を使えるようにしておく為に

「げふつ！ まあ、ブライの料理の方が美味かったな」

「はっ、一人で5人前も食べた癖によく言うわよ」

馬を預けた宿屋で昼食をとったキサラギ達は再び大通り歩いていた。“マオルベルグ”の町は全ての店舗が大通りに面しているので、全ての商店を見て回りたければ真っ直ぐに大通りを歩いて行くことになる。

「ははは……悪いな。ご馳走になって」

「そう思うなら少しは遠慮しなさい。もう、食事だけで銅貨20枚も使っちゃったわ」

「一食で銅貨20枚か……そんなに高い店だったのか？」

「十分過ぎる位におまけして貰ってこの金額よ！」

「うお、やぶへび藪蛇だったか」

キサラギも流石に食い過ぎた自覚があるので、今度からは出掛ける際にはもう少し加減しようと思った。

「さあ、買い物が続きに行くわよ」

「へいへい……仰せの通りに」

キサラギはやる気の無さそうな態度で返事をするが、その後は大人しくシエラの荷物持ちに徹する。

行商や旅人が多いだけに“マオルベルグ”には、大陸各地から珍しい石や薬草の他にも様々な物が売られている。

「いや〜こりゃあ大漁だわ。あっはっはっ！」

さっきの不満はすっかり忘れているようで、シエラは研究用の素材が沢山買えたようでご満悦の様子だ。

時刻は既に夕暮れ時となっており、道行く人の数はだんだん疎らになっていく。後の予定は服屋にキサラギの服を取りに行くだけだ。切り出すなら今しか無いとキサラギは思った。

「なあ、少し鍛冶屋に寄りたいたんだが良かったか？」

「鍛冶屋？ 残念だけどミスリルは買えないわよ。もう服の代金以外は手持ちに銀貨1枚しか残ってないんだから」

「大丈夫だ。金は掛からない」

「何よ。剣でも見に行く気なの？ ま、見るだけなら無料だし良いわよ」

「……………なら、服屋の後はこの先の鍛冶屋に行こう。腕が良いと評判らしい」

「は？ あんたこの町に来るのは初めてよね。そんな情報どこで仕入れて来たのよ」

「昼飯の時だ。店内で旅人風の男達が話していたのを聞いた」

「凄まじい地獄耳ね。一体どんな聴力してるのよ」

キサラギの出鱈目な能力にシヤラは呆れる。服屋でキサラギの服を買った後は約束通りに評判の鍛冶屋へと向う。

「おい、ジジイ！ 剣が売れねえーとはどういうことだ!？」

二人が目的の鍛冶屋まで来ると店の扉越しに男の怒声が聞こえて来た。どんな客かは知らないが、店内が修羅場と化していることは容易に想像出来た。

「う……………」

「大丈夫だ。行くぞ」

荒事の予感に入るのを躊躇うシエラを置いて、キサラギは何の気負いも感じさせずに鍛冶屋へと入って行った。

「あ……………ま、待ちなさいよ。ちよっと、キサラギ……………」

置いていかれるのも心細いのでシエラもキサラギの後に続く。

扉を潜り最初に気付いたことは、有名店にしては室内が閑散としていることだった。

本来ならミスリルの輝きで満ちる店内は、鎧どころか剣一本すら見当たらない。

「はあーだから言っておるじゃろう。ワシの店にお前さんに売るミスリルの剣は無い」

「金ならちゃんと用意した。金貨30枚だ！ 頼む、俺にミスリルの剣を売ってくれ！」

煌びやかな鎧を纏った大柄の男が、店主らしき老人に詰め寄りカントーに金貨を叩き付ける。淡く神秘的な輝きを持つ男の鎧にシエラは息を呑んだ。

「嘘……あの男の鎧　ミスリル製だわ」

「アレがミスリルなのか……綺麗な色だな」

シエラの呟き通りなら男は相当の実力者なのだろう。全身を覆うミスリルの鎧は凡夫に纏える代物ではない。

「はぁ……くどい奴じゃ、幾らあるうと関係ないわい。この店にミスリルの剣は無い。残念じゃが帰ってくれ」

頭に血が昇っている男に比べ老人の態度は醒めていた。何度も同じようなやり取りを経験したのか溜息を付くと男に帰るよう促す。

「ふざけるな！ こっちはあんたの評判を聞いて剣を買いに来たんだ。その剣を売ってくれるまでは帰らないぞ」

「まったく……これは売り物じゃないわい」

呆れる老人の後ろの壁には一本の剣が展示されている。淡く螢火のように煌めく銀色。その剣は見る者を魅了する魔性の光を放っていた。

「アレがミスリルの剣か……始めて見るが惹かれるモノがあるな」

「何言ってるのよ。キサラギはミスリルを見たことあるでしょ？」

「は？ そりゃ何時の話だよ」

「だってブライの剣もミスリル製よ？　しかし驚いたわね。こここの店主は噂通り大した腕利きみたい。ブライの剣には及ばないけどアレも相当な業物だわ」

「いや、むしろ俺はブライの剣に驚きだよ」

あの剣は少なくとも金貨30枚以上の価値があるのなら、ブライの剣は一体どれ程の価値があるかキサラギには見当もつかない。

二人がそれぞれ違う意味で驚いている間にも、店主と男の会話は白熱していく。

「この町にあるミスリルの武具は全て“ロキア王国”に売ったんじゃない。お前さんに売る剣は一本も残って無いわい」

「それじゃ困るんだよ。俺にはミスリルの剣が必要なんだ！」
取り付く島の無い店主の態度に男はすっかり困り果てていた。

二人の会話に割り込むなら今のタイミングしか無いだろう。キサラギは一步進み出ると店主に声を掛ける。

「ちよつと良いか？」

「あ？ 誰だよ、お前は」

「用があるのはお前じゃない。店主の爺さんだ」

「何じゃ？ お前さんも剣を売って欲しいのか？ なら帰ってくれ
有無も言わず追いつ返されるが、キサラギも大人しく帰る気は無い。それに先程の店主の言葉には気になる部分があった。

「いや、少し聞きたいことがある」

「ほう、聞きたいことか……何じゃ言ってみる」

「ミスリルの武具が無いのは“ロキア王国”に全て売ったからなんだな？」

「そうじゃ！ “マオルベルグ”はモーデイス様のお蔭で発展したんじゃない。あの方の決めたことに逆らう商人はこの町には居らん」

「売った武具はもう“ロキア王国”に？」

「うむ、昼前に大々的に報せが届いてのう。兵士の助けを借りたから昼頃には店中の品を引き渡したわい」

「具体的に王国の何処へ運ぶかは聞いていないのか？」

「そこまでは知らん。じゃが、今朝方から大急ぎで武具を集めていると兵士が漏らしておったのう」

「そうか……ありがとう。邪魔をしたな」

「もう良いのか？ ワシが言うのもなんだが、お前さん鍛冶屋に何しに来たんじゃ？」

「ミスリルが無いなら用はないんだ。俺のことは気にしなくて良い。後はそつちの男と存分にやり合ってくれ」

驚く程にあっさりと踵を返すキサラギにシエラも続いて店を出る。

言葉にしなくともシエラは、キサラギと同じ考えらしく馬を預けた宿屋へと急いだ。

酒場としての業務で忙しい宿屋の店主に、二人は見送られて“マオルベルグ”の町から出て行った。

行きと同じようにキサラギはシャラの操る馬に二人乗りをしている。人通りも疎らな山道に入ったので、シエラは両目からカラ・コンタクトを外した。

陽が沈み周囲を暗闇が満たしたが、シャラが懐から取り出した自家製ランプで夜道も安心だった。

しばらく歩くと何気なく感じてシエラが声を掛けて来る。

「ねえ、キサラギ」

「何だよ？」

「……時間が無いわ」

「そうだな」

紋章の刻まれたランプは少し“魔力”を注ぐだけで薄く光を灯す。弱々しく揺れる光に照らされてシエラは心情を吐露する。

「さっきの話が本当なら、装備は全部“グラナ砦”に送られる筈よ」

「ああ……」

「きつと戦争を始める気だわ」

「ああ……」

「ちゃんと私を護れる？」

「……」

薄闇の中でシエラの金眼が揺れる。それはまるで水面に映る月のようだ。その光は儂げで美しく、やはり全ての嘘を見透かされるかのような錯覚に陥ってしまう。

キサラギの脳裏に昨日の会話が過ぎる。

「ふふ……頼りにしてるわ。キサラギ」

「ああ、任せておけ　と、言いたいが正直に言って今は厳しい」

キサラギは断言しなかった。今の【シュナイト】はお世辞にも万全の状態とは言えない。

そしてキサラギも安請け合いをするような男では無い。

だから今回もキサラギは、シエラに明言する気は無かった。

しかし 気が付けばキサラギの口から自然と言葉が零れていた。

「ああ、任せておけ。“俺”が絶対に護ってやる」

力強く断言する シエラと約束したのだ。傭兵にとって契約は絶対である。依頼は果たさなければならぬ。

「安心しろ。ミスリルの当てはある」

「キサラギ……？」

揺らめく金の瞳に見透かされる。だが、キサラギの心は穏やかだった。

何故ならソレは自分が持つ在りのままの本心だったから……

セルディオの地に落ちた“彗星”は、静かに目覚めの時を待っていた。

5・買い物（後書き）

どうも、如月八日です。今回は少し量が多目になってしまいました。前回は比べると長いです。ご意見、ご感想が頂ける嬉しい。

何かありましたら気軽に声を掛けてください。
それではまた次回も書き終わり次第、投稿します。

6・襲撃

「ニール隊長！ 魔物の襲撃です！」

悲鳴のような部下の言葉にニールはうんざりしていた。

彼が居るのは“グラナ砦”の詰め所だ。ニールは隊長を務める騎士で、彼の率いる隊の仕事は“魔の森”に面する城門の警備だった。 「またか……で、今度は何だ？ “スライム”か？ それとも“鎧アリ”か？」

今日はコレで6回目の襲撃である。ニールとしては愚痴の一つでも言いたいところだが、今は無駄口を叩く暇も無かった。

「いえ、襲つて来ているのは“ヘルハウンド”の群れです！」

「ちっ、新米共だけじゃ荷が重い相手だな。よし、2班に応援を要請しろ」

「はっ！」

部下は敬礼すると2班を呼びに別の隊が居る詰め所へと走って行く。開きっ放しの扉から一面に続く荒野が覗き見える。

そこは三日前までは“魔の森”と呼ばれる緑濃い大森林だった。

「はあー」

無意識にニールの口から大きな溜息が零れる。グラナは“魔の森”と隣接しているので、魔物の襲撃など日常茶飯事である。事実、彼が守備隊の班長に就任した時から、これまで何度も魔物の襲撃があった。

しかしソレも“彗星”の落下を境に激変してしまった。

樹木の大半が吹き飛んだ森からは、棲家を追われた魔物が昼夜を問わず砦に雪崩れ込んで来るようになってしまった。

以前はそれなりに退屈だった守備隊の仕事も、散発的に押し寄せて来る魔物の迎撃で、大幅な増員を余儀なくされている。

本来は2つの班で交代しながら任務に当たるが、今は5つの班で警戒に当たっている。

「今日はやけに回数が多い。嫌な感じだ」

先ほどの“ヘルバウンド”で今日はもう6回目の襲撃になる。昨日の襲撃は全部で6回。今は昼前なので実に2倍のペースで襲撃されていることになる。

既に森が消えてから三日経つ。“彗星”が落下した初日なら多いのも説明は付くが、明らかに今日のペースは異常だった。

「雨が……」

今日は朝方からずっと雨が降っている。小雨だが久しぶりの雨だった。天候はその日によって変わるもので、晴れが続けば雨の日だってあるだろう。

しかしパラパラと降り注ぐ雨粒にニールは言いよの無い不安を感じていた。

「何も起きなければ良いが……」

ニールは詰め所の小窓から雨空を見上げる。静かな室内に外からの雨音だけがゆっくりと染み渡って行く。降り頻る雨はまだ止む気配がない。

「やあ、辛気臭い顔をしているね。ニール」

難しい顔で俯くニールの下に青い腕章を付けた騎士が訊ねて来た。その腕章はニールと同じ隊長を意味するものだ。

「グレッグか。どうした？」

「差し入れだよ。ほら」

グレッグは苦笑して二つ持っていたカップの片方を差し出す。中はコーヒードだった。淹れたてなのかカップから暖かな湯気が立ち昇る。

夏も近いとはいえ、今朝は小雨で僅かに肌寒い。ニールは友人の気遣いに感謝した。

「ありがとう。しかし俺の記憶が確かなら、お前の隊は今の時間は仮眠中の筈だが？」

「少し気になることがあってね。ニールも感じていると思うけど？」

「最近……いや、特に今日は魔物の動きが妙なことから？」

「ああ、今日の奴らの襲撃頻度は異常だよ。休む暇もありやしない」
「そう思うなら、お前もちゃんと休める時に休んでおけ。後が辛いぞ」

「わかつてはいるけど、君の意見も聞きたくてね」

同僚の言葉にニールは先程まで考えていたことを口にする。

「魔物の動きからして森の奥で何かあったと考えるのが妥当だな」

「やはり君もそう思うか……しかし今日になって急に数が増えるのも妙な話だろ？」

「考えるだけ無駄だろう。悪いが原因を調べるのは俺達の仕事じゃない。それより急増した魔物の襲撃にどう対処するかが重要だ。違うか？」

「確かにそうだね。それに今日はご覧の通りに雨だ。まだ雨脚が弱くて小雨だけど、これじゃ視界が悪くなる。警戒を厳重にしないと魔物の取りこぼしがあるかもしれないね」

「魔の森”の敷地は広大だ。例え生い茂る木々が無くなったとしても、森の反対側は晴れの日でも霞んで見える。」

それにニール達が抱える問題は魔物の襲撃だけではなかった。

「それに王都じゃ騎士団の編成をしているらしい。まったく、面倒な話だよ」

「“魔族”を滅ぼすのは結構だが、ちゃんと目先のことも気にして欲しいものだ」

「そうだね。こっちは魔物の相手忙しい時に、余計な手間を増やさないと欲しいよ」

今のグラナは騎士団の駐留の準備で大慌てだ。二人としては攻めて来るかもしれない“魔族”より実際に攻めて来る“魔物”の方を優先すべきだと考えていた。

尤も二人のような考えはグラナでは特に珍しいものでもない。常駐軍の者なら皆同じことを考えていた。

「しかも“ダイン共和国”からあんなに装備を買って、どうかしてるよ」

今のグラナには“マオルベルグ”から馬車で送られて来たミスリルの装備が山ほどある。それらは全て砦内にある倉庫で嚴重に保管されている。

そしてソレらの装備は戦争の為の物資であり、砦の兵達は使用することが出来なかった。おまけに砦の兵は装備の管理も仕事の一つとして任されていた。

「俺達にもミスリルの装備を支給してくれれば大分楽になるんだけどな」

「そうだね。兵の中から不満が出ない筈がないよ」

声高に不満を叫ぶ者こそ居ないが、今回の件を面白くないと感じている兵が多く居ることも事実だろう。

「“魔族”と戦争か……ニールはどう思ってるの？」

「はん、そんなこと俺が知るかよ。騎士団の連中が道中の魔物をきちんと掃除してくれば、俺としては万々歳だけどな」

「はは！ それは良いね。だったら騎士団には一日でも早く来て欲しいものだよ」

気が滅入りそうな話を切り上げて二人は他愛もない冗談で笑い合う。魔物の連続襲撃に生憎の空模様と苦境は続くが、彼らは何とかなると思っていた。

「ん？ 地震か？」

「そうみたいだ。雨も強くなって来たみたいだね」

テーブルに置かれたコーヒーに僅かに波紋が広がる。

ドツドツドツドツドツ！

窓の向こうからまるで何かを叩き付けるかのような猛烈な雨音が聞こえる。

「待て、これは本当に雨音か？」

最初は小さかった揺れが徐々にその大きさを増す。それに比例するかのように音も大きさを増していく。

「グレッグ！」

「ああ、外に出よう！」

何かがおかしい。そう感じると同時に二人は外へと飛び出していた。

「なッ」

そしてソレの姿に言葉を失った。

力強く大地を踏み締める二本の足　それは大地を踏み碎き疾駆する。

大木のように太い二本の腕　広げられた両手が風を切る。

硬質そうな漆黒の体皮　降り頻る雨粒が外殻で弾ける。

不気味に灯る真つ赤な単眼　鮮血色の眼が真つ直ぐにこちらを視ている。

それは城壁のように巨大な　だけど完全に人型をした黒いバケモノだった。

「あ、ああ……」

アレが何なのかニールは分からない。隣で啞然としているグレッグも同じだろう。

しかしアレがやろうとしていることは理解することが出来た。

「そ、そそ、総員退避イイイイー！！」

咄嗟にニールが大声を張り上げる。恐怖で擦れたような声だったが、音として周囲に響いただけマシだったといえるだろう。

しかしその指示に反応することが出来た人間は少なかった。

バゴオオオー！！！！

馬鹿みたいに凄まじいまでの轟音が鳴り響く。

ニールの脳裏にグラナに初めて赴任した時の言葉が蘇る。

「この門は絶対に破られない」

それは皆に赴任した者が最初に聞かされる、グラナが誇る逸話だった。

当時の技術を集結させて建造されたグラナの城門は、森に棲む大型の魔物でさえ破壊することは出来ない。まさに難攻不落の“グラナ砦”を象徴する存在だった。

しかしソレを漆黒の巨人は体当たり（……）でブチ破った。

「ひっ……」

悲鳴が漏れる。力任せに城門を粉碎したバケモノがゆっくりと空を仰ぐ。

その直後 耳を塞ぎなくなるような大絶叫が響き渡った。

『G u u u o o o o o o o o o o A a a A a a a ! ! !』

バケモノがこの世のモノとは思えない咆哮を上げている。

その姿を見てニールは悟った。

「……アレだ。アレがやったんだ」

“魔の森”を消し飛ばしたのは目の前のバケモノだ。それは根拠の乏しい単なる推測だったが、一連の事態の紛れも無い真実を当てていた。

石造りの城門がボロボロと呆気なく崩れていく。激突の衝撃で城門の側にあつた城壁も一緒に崩れている。

凄まじいまでの怪力だった。アレだけの力があれば砦など数分で全壊されかねない。

「ま、不味い！ グレッグ！ おい、グレッグ！」

「あ……ああ、ニールか……どうしたんだ？」

ニールはショックで呆然としていたグレッグを揺り起こす。あまりに非現実的な光景を見せられた所為で自失しているが、ニール達には無駄に出来る時間は無い。

「馬鹿野郎！ 早く住民を避難させる！」

「え？ 避難って」

「あのバケモノが都市部に向つたらどうなる！？」

「はっ！？ ま、ま、不味いよ」

“グラナ砦”は城塞都市だ。森側に名前の由来である砦があり、その後ろ側には一般市民が暮らす都市部が存在する。

相手はあれ程の破壊を体当たりだけ行なつたバケモノだ。砦を破壊してしまえば、そのまま都市部を襲うのは明白であった。

「お前は砦内部の兵を指揮するんだ。住民の避難を最優先させる」

「わ、わかった。だけどニールはどうするんだよ？」

「俺は外部の兵と一緒に奴の足止めをする」

「む、無茶だよ！？ 死ぬ気か！」

「無茶は承知している。だからお前は早く住民の避難を完了させる」
騎士や兵士は国を護る為に存在する。ニールにとって護るべき国とは民だった。

この場に残って民衆が逃げる為の足止め役が必要ななら自分がやる。
ニールの決意は固かった。

「ぐっ……絶対死ぬんじゃないぞ！」

「早くしろ。俺達が逃げる暇が無くなるぞ」

「はん、ギリギリまで焦らしてやるからな！」

互いに軽口を叩いてニールはグレッグを送り出す。突然の襲撃に岩内も騒然としているだろうが、ニールもグレッグなら上手くやると信じていた。

「おい！ お前ら！ まだちゃんと生きてるか！？」

虚勢に過ぎないが、努めて余裕があるように軽い調子で声を張る。
先程の二人の会話が聞こえていたのか、近くに居た何人かの兵が集って来る。

「よし、生き残ってる兵はあのバケモノの足止めをする。俺はニール隊長だ。所属に関わらず隊長以下の階級の者は俺の命令に従って貰うぞ」

「わかりました。ニール隊長」

「頼りにしてますよ。隊長」

ニールの部下だった何人かが率先して従うことで、指揮系統の混乱は起こらなかった。

「相手は城門を正面から破壊しても無傷のバケモノだ。前衛の兵は回避と攪乱に専念しろ」

「はっ！」

彼の命令通りに剣や槍を持った兵士は漆黒の巨人を惹き付けるべく走り出す。

「矢が効くかもわからん。弓兵は眼や関節、それと前衛の援護に徹

しろ」

「了解！」

ニールは矢継ぎ早に指示を出す。弓兵達は残っている城壁や物陰から漆黒の巨人の隙を窺って矢を射掛ける。

「魔術士や攻撃の魔術が使える者はこっちに集れ。全員で一斉に術を放つんだ。タイミングは俺が指示する。あのバケモノを倒す鍵は“魔術”だ」

ニールの言葉に魔術士や攻撃魔術の心得がある者は頷く。ニール自身もそれなりに攻撃魔術を使えるので、彼らと共に必殺の術を決める役割だった。

「行くぞ！ 此処は俺達の砦だ。地の利はこちらにある」

短く激励の言葉を送ると、ニールは周囲の“魔素”を吸収して“魔力”に変換する。変換された“魔力”はある程度は体内に蓄えられるので術の下準備はコレで完了だ。

しかし強力な魔術は詠唱にも時間が掛かる。

「うおおー！」

「こっちだ。バケモノが！」

前衛の兵士は注意を惹き付けながら剣や槍を振るつたが、黒光りする硬質の外殻に傷一筋も付けられなかった。

「下がれ！ 矢を射掛けるぞ！」

その弓兵の声に前衛の兵士が一斉に離れる。巨人を囲むように配置していた弓兵が360度全方位から一斉に矢を射掛けた。

「なッ！？」

激しく降り注ぐ矢の雨を物ともせず巨人は前進する。強固な漆黒の外殻は降り注ぐ矢の雨すら容易く弾いていた。

「くっ……足止めすら無理だと言うのか」

状況は芳しくない。剣も矢も効かない相手に兵達の中に焦りが生まれ始めている。

幸いにも理由は不明だが巨人の動きは城門をブチ破った時に比べ遥かに緩慢だ。それでも彼らは遅々としたその歩みを止められず

にいるのだが……

「た、隊長！」

「これ以上は」

このままでは足止めすら出来ず、巨人は砦を壊して都市部へと侵入してしまつた。

既にニールの詠唱は完了している。後は全員のタイミングを合わせるだけだ。

「総員、準備は良いか!？」

ニールの問い掛けに全員が頷く。最初に動いたのは弓兵だった。彼らは効かないことを承知で一斉に矢を射掛ける。

やはり漆黒の巨人には通じないが、巨人の歩みが僅かに鈍る

「今だ！ 離脱しろ」

「了解！」

その隙に前衛が巻き込まれないように巨人から距離を取った。

「よし、総員、放てえー！！」

チャンスは今しか無かった。これまでの前衛や弓兵達の決死の努力を無駄にしない。

号令と共に炎や氷、雷撃や風といった多様な属性の攻撃魔術が放たれる。ニールを含めた魔術士や兵士 総勢15人による攻撃魔術の一斉掃射だ。

それは大型の魔物でさえ一瞬で粉微塵にする程の威力があった。

「……無駄だ」

だが、それは前触れなく巨人の周囲に発生した翡翠色の光によって弾かれた。

神秘的な翡翠色の障壁は、表面に雨が当たるとパリパリ音を立てて小さな稲妻が走る。

「ば、馬鹿な……」

ニールの咽から擦れた声が漏れる。彼らが頼る渾身の攻撃魔術ですら、巨人を傷付けることは不可能だった。

まるで“結界”の魔術のようなソレに魔術士の一人が堪らず叫ぶ。

「あれは……あれは“魔術”じゃない！」

「し、しかし奴は光の壁で魔術を防いだんだぞ！？　それが“魔術”じゃなければ何だと言うんだ!？」

「わからない。け、けど間違いない。奴からは一切の“魔力”が感じられないんだ！」

しかも巨人は“魔力”を用いていない。それは全くの未知の能力だった。

だが、何人かの兵はより重要な事実を聞き逃がさなかった。

「い、今確かに“無駄ダ”って……」

「あ、ああ……」

魔物は自力で言葉を喋ることは出来ない。例え“通訳”の魔術を掛けたとしても、彼らには“人間”や“魔族”のような知性は存在しない。

「ま、まさか……」

ニールの脳裏にある伝説上の存在の名が浮かび上がる。

どんな刃をも通さない硬質の外殻　目の前のアレは降り注ぐ矢の雨を弾いた。

一振りで山をも屠る怪力　アレは強固な城門さえ粉碎した。

その昔、天空の神々に敗れ地に落とされた巨人　アレは空から降って来た。

「ま、“魔神”だ……」

圧倒的な力を誇る漆黒の巨人　ソレは太古に“魔神”と呼ばれた伝説だった。

“魔神”は一度だけゆつくりと周囲を見回す。妖しく輝く深紅の単眼は皆を守る全ての兵士の顔を確認しているみたいだった。

そして再び“魔神”は不気味な声を発する。

『ヨコセ……みすりるヲ……』

その一言でグラナに居る全ての兵士は“魔神”の目的を理解した。

“魔神”は奪いに来たのだ。王都から管理を任された戦争の為に
武器を……

6・襲撃（後書き）

どうも、如月八日です。今回も執筆が終わった分を投稿します。今回は前回よりも短いです。また主人公の出番は少な目です。ご意見やご感想はいつでも大歓迎です。どうぞ気軽に書いてください。次話も執筆が完了次第に投稿します。

7・ミスリルを求めて

キサラギ達が“マオルベルグ”へ買い物に行ってから一日挟んだ翌日。

その日は朝から雨が降っていた。これまでずっと晴れの日が続いていたので、今日はキサラギがセルディオに来てから始めての雨となる。

「好都合だな。視界が悪ければ【シュナイト】の接近を気取られづらい」

『……………』

屋敷の裏地ではキサラギが【シュナイト】の操縦席で、機体状態の最終チェックを行っていた。

「リート。作戦内容の確認をするぞ」

『……………』

「おい、いつまで拗ねてる気だ。気持ちを切り替える」

シエラと買い物に行った日からずっとリートは臍へそを曲げていた。

当然それは留守番を任されたからではない。

「はぁーお前も頑固な奴だな。手っ取り早くミスリルを手に入れるにはグラナ砦から奪うのが一番楽だろ？」

『それは……………まあ、そうですが……………』

キサラギの作戦はとても単純だった。リートのお蔭で装備無しだが動ける状態になった【シュナイト】で、グラナ砦を襲撃して砦に運び込まれているミスリルの装備を強奪する。

機工戦騎の性能で正面からゴリ押しするだけの単純な作戦であった。

『しかし“グラナ砦”を襲撃すれば“ロキア王国”を　　総じて“人間”を敵に回すことになります』

「それが何か問題でもあるのか？」

『大有りです！　技術レベルが低くても国家は国家なんですよ。機

工戦騎があつても正面から喧嘩を売るのは危険過ぎます！」

「ならリートは他にミスリルの当てがあるのか？」

『そ、それは無いです。けど、だからって皆に攻め込むのは』

「時間が無いんだ。のんびりしていたら、こっちが逆に攻め込まれる。俺達の拠点は“人間”と“魔族”に挟まれてるんだからな」

どちらにしてもミスリルの確保が出来なければ、【シュナイト】はそう遠くない内に動かせなくなる。

『……………』

キサラギの言い分もわかるのか、リートは沈黙する。しかしその雰囲気から彼女がまだ納得していないことは明らかだった。

「ならリートはどうするのが最善だと思う？」

『そうですね。どこかに身を隠すのが一番だと思います。“人間”や“魔族”のどちらかに関わっても面倒になるだけです』

「それは難しいな。何せ一番身を隠せそうな場所を誰かさんが吹き飛ばしたからな」

『うつ……………そ、それを言うのは卑怯です。マスター』

「だから身を隠すのは却下だ。そして俺が小難しい腹芸が出来ない以上は宮仕えも無理そうだ」

単純な戦力としてなら最強である機工戦騎も、それを扱つのは生身の人間だ。国家という巨大な集団に属するには【シュナイト】は色々な意味で大き過ぎる。

ただの傭兵に過ぎないキサラギでは、権謀術数けんぼうじゆつすうで各国を束ねる王族を相手に上手く立ち回れる自信もなかった。

「リートの言う通り俺は“人間”と“魔族”のどちらの味方に付く気もない」

『しかしマスターの提案する作戦では“人間”と明らかに敵対してしまいますよ？』

「それで良いんだよ。俺はどちらか一方に味方する気が無いだけだ。適度に【シュナイト】の力を示せれば、後は向こうが勝手にこっちを恐れてくれるさ」

それに今回の作戦はあくまで砦にあるミスリルの奪取が目的だ。
【シュナイト】の力を“人間”に示しつつ力を維持する為には打って付けの作戦だった。

『確かにそうかもしれませんが……』

「それに“人間”と“魔族”の両方に肩入れしないんだ。なら美味しい飯や寝床を報酬に、シエラの味方をするのも悪くないだろ？」

『はあ……わかりました。マスターの意志を尊重しましょう』

「ありがとうな。相棒」

『やれやれです。最近のマスターは本当に食い意地が張って困ります。昔はもう少し良い子だったのに』

「なッ……つたく、お前は俺の母親かよ」

『私からすれば似たようなものです』

軽口を叩くリートにキサラギも表情を緩める。先ほどまであった微妙な雰囲気もすっかり霧散していた。

そろそろ正午 予定していた作戦時刻が迫って来る。

「よし、システムを起動させる。リート」

『了解。メインシステム起動。生体反応をチェック』

「起動行程を3番までカットしろ。どうせ俺以外に乗る奴も居ないし、武装も無いのだからやるだけ無駄だろう」

『了解。それでは作戦内容の最終確認を行ないます』

手元の画面に簡単な地図が表示される。シエラに見せて貰った地図をデータにしたものだ。森の入り口を囲うように城壁と砦が塞いでいる。

『目的地は“グラナ砦” 石造りの建築物です。“魔術”で補強

されているようですが、【シュナイト】なら単純なパワーだけで破壊可能でしょう』

「まあ、石造りだからな」

『そして守備の兵ですが、彼らは特に我々の障害にはならないでしょう』

「槍や弓じゃ【シュナイト】の装甲を傷付けられないから当然だな」

「はい、それに不確定要素だった“魔術”による攻撃も現在のシールド強度で十分に防ぎ切れることが分かっています。これも大した脅威とはならないでしょう」

「そうだな。昨日一日で試せるだけ試したからな」

昨日は一日使ってブライとシエラに協力を仰ぎ【シユナイト】のシールドが持つ魔術への耐久力をテストさせて貰った。

「敵戦力の詳細は未確認です。くれぐれも油断は禁物ですよ。マスタ―」

「まあ、大丈夫だろ。シエラの話じゃ宮廷魔術士なんて滅多に前線に來ないらしいぞ」

テストの結果では【シユナイト】のシールドは大陸でも五指に入るような宮廷魔術士クラスの使い手でもない限り突破は不可能らしい。

「よし、行くぞ。リート」

「了解。システムを戦闘モードに移行します」

「生体反応 良好」

「機体状況 良好」

「機体接続 良好」

「【シユナイト】 起動」

頭部にある単眼型のメインカメラが赤く灯る。システムの起動と共に物言わぬ人形に命が吹き込まれた。

「よし、機体を起こすぞ」

「了解」

キサラギは両手でスティックを握り直すと足元のペダルを浅く踏み込む。【シユナイト】は全身から低い駆動を響かせてゆっくりと立ち上がる。

「わぁー凄いいじゃない！ ちょっと私も乗せないよ！ キサラギ！」

「お、お嬢様！ 身を乗り出しては危のうございます！」

その様子を屋敷の中から眺めていたシエラは、雄雄しく立ち上がる【シユナイト】の姿に歓声を上げて身を乗り出すが、側に控え

ていたブライが必死になって止められる。

「まったく……シエラの好奇心も凄いな」

『……………』

「どうした？ 機体に不備でも見付かったのか？」

『いえ、違います。私が心配なのはシエラさん達に無断で作戦を実行することです』

今回の作戦をキサラギはリートにしか喋っていない。二人には単に動作テストを兼ねて近場まで散歩に行くとしか伝えていない。

正直に話せば二人には間違いなく反対されるので、キサラギは二人に黙って作戦を執行するつもりだった。

「こっちはもう報酬を貰ってるんだ。なら結果を示さないとな」

『そういうものですか？』

「ああ、そういうもんだよ。【シュナイト】 出るぞ！」

不安そうなりートを無視して、キサラギは【シュナイト】を進ませる。

その背を見守るシエラとブライはその行き先を知らなかった。

降り頻る小雨の中を【シュナイト】はグラナに向って歩いて行く。

関節部に負荷を掛けるのは極力避ける為に、目的地付近までは機動を制限していた。

「地面の上を歩くのは何だか新鮮だな」

『機工戦騎の主な戦場は宇宙空間でしたからね。慣れられそうもありませんか？』

「いや、直ぐに慣れるさ。それにブースターが壊れている以上は、嫌でも地上戦になる。慣れなきゃ今後もやっていけない」

それに相手は歩兵なので遠距離用の武装が無い現状は、地上戦で対応するしかない。

機動を制限しているとはいえ、巨大な機工戦騎が歩けば歩幅の都合でそれなりのスピードとなる。

数分もすれば“グラナ砦”をセンサーで感知出来る距離までやって来た。

「あれがグラナ砦か……意外に大きいな」

『魔術の恩恵ですね。使われている建築技術と実際の規模に齟齬があります』

幸い雨のお蔭でこの距離まで近付いても察知されていない。レーダーも持たないセルディオの人間では、今日のような目視が困難な雨天ではしょうがないだろう。

「そういえばアレの用意は出来てるか？ リート」

『あの合成音ですか？ それならちゃんと出来てますが……』

「よし、それなら仕込みは十分だな」

キサラギはニヤリと笑みを浮かべる。リートにとってはすっかり見慣れたキサラギが何か企んでいる時の顔だった。

「それじゃあ、一発ド派手にブチかますぞ！」

機動の制限を解除。景気良く声を張り上げて足元のペダルを全力で踏み込む。

ドツドツドツドツドツ！

隠す気の全くしない豪快な足音を響かせて【シュナイト】が大地を駆ける。

「「「なッ」」」

足音に反応したのか、城壁の扉から騎士らしき男が二人だけ出て来るが、砦へと突っ込んで来る【シュナイト】の姿に彼らは啞然としていた。

「そ、そそ、総員退避イイイイー！！」

髭を生やした不真面目そうな騎士が咄嗟に命令を叫ぶ。

【シュナイト】はそのまま減速することなく城門へ突撃した。

「シールドだ！」

『了解』

その瞬間に【シュナイト】はシールドを展開。突撃の衝撃からボディを護る。

バゴオオオー！ー！！

轟音と共に城門が粉碎される。

『城門の破壊を確認』

「よし、例の音声を流す。タイミングを合わせろ」

キサラギは機体の姿勢を制御し、【シユナイト】はゆっくりと曇天の空を仰ぎ見る。

『G u u U u o o O o o o O o o A a a A a a a ! ! !』

そして【シユナイト】の外部スピーカーから背筋の凍るような咆哮が流された。

さつきキサラギが確認していた合成音の中身である。キサラギはリートに頼んで守備隊を威圧する為の【シユナイト】の“声”を求めていたのだ。

これはシエラやブライとの出会った時の言葉をヒントにキサラギが考えた作戦だ。ロボットという概念を持たないセルディオ人には【シユナイト】は未知の生物であり、それが恐ろしい気な咆哮を上げれば、簡単に恐怖心を植え付けることが出来る。

「それにしても凄いい声だな。素材は何を使ったんだ？」

『古い映画作品から怪獣の音声を加工して作りました。それにしたつて元は楽器の音らしいですよ』

「お前の趣味が役に立つとはな……」

『ふふふ、これを機にマスターも見ろべきです。データはありますから』

「暇があれば、な。今は作戦を遂行する」

『了解』

キサラギの作戦は大成功だった。本来なら死力を尽くして砦を守る筈の兵士達は、まるで魂を抜かれたかのように呆然としている。

「何だ。案外と呆気ないな」

『いえ、どうやら気骨のある者も居るようです』

思考を停止させていた兵士達を鼓舞する者が居た。それは先程も声を上げて【シユナイト】の突撃を報せていた髭の騎士だった。

「なるほどな。あいつが守備隊の頭だな」

『踏み潰しますか？』

「必要ない。階級はそこまで高くなさそうだし、現場を仕切る隊長つてところだろう。あいつ一人を叩き潰すよりミスリルを探すぞ」
次々と群がって来る兵士の攻撃を無視して【シユナイト】は砦へと近付いて行く。

「うおおー！」

「こつちだ。バケモノが！」

剣で斬られようと槍で突かれようが、矢の雨が降り注ぐとも【シユナイト】には効かない。キサラギはゆっくりと絶望感を煽るように【シユナイト】を歩かせた。

「大人しくミスリルを寄こしてくれれば楽なんだがな。機体の消耗も抑えられるし」

『大した台詞です。見事な強盗の理屈です』

さつさと諦めてくれれば、その分だけキサラギの目的も達し易くなる。

しかし兵士達は諦めていなかった。先程の騎士と中心に何人かが一箇所に集っていた。

“魔術”に関しては素人のキサラギでもわかる。狙いは人数を利用した“魔術”による同時攻撃だろう。

「面白い。受けて立ってやる。変声機を使っぞ」

『了解。変声機 ON』

【シユナイト】の動きを止める為に弓兵が一斉に矢を射掛ける。キサラギは被弾のタイミングに合わせて一瞬だけ【シユナイト】の動きを止めた。

「よし、総員、放てえー！ー！」

それを好機と見たのか兵士達が準備していた攻撃魔術が放たれる。炎や氷に雷撃や風と様々な属性の“魔術”が、直立する【シユナイト】へと飛んで来た。

「……無駄だ」

被弾直前でシールドを展開する。数が多かろうと質の低い彼らの攻撃では【シュナイト】のシールドを抜くことは出来ない。

放たれた数々の“魔術”は翡翠色に輝く障壁の前に呆気なく掻き消される。

『むうー変声機ではあまり凝った演出は出来ませんね』

『いや、これで十分だろ』

周囲の何人かは“魔術”を防いだことよりも、【シュナイト】が喋ったことの方に驚いているのだが、この時の二人は気付いていなかった。

「ま、“魔神”だ……」

外部のマイクがまるで呻くような声を拾った。声の主はやはりあの騎士だった。

しかし聞き覚えのない単語にキサラギは眉根を寄せる。

「“魔神”だと？ セルディオには“魔神”という生き物が居るのか？」

『いえ、シエラさんもそのようなことは言っていなかったので、恐らくは“人間”に伝わる伝説上の存在ではないでしょうか？』

「なるほど……」

キサラギは【シュナイト】の頭部をぐるりと巡らす。それはきつと兵士達には“魔神”が自分達をねめまわしていると思っただろう。「もう一押ししてところだな」

『はい、マスター』

リートはその一言でキサラギの意図を察すると、変声機をONにして次のキサラギの言葉を外部へと流した。

『寄こせ……ミスリルを……』

少したどたどしい口調だったが、その方が迫力は増すだろうとキサラギは努めて機械的に話を続ける。

『ミスリルを……寄こせ』

そしてまたキサラギは機体进行操作して【シュナイト】を俯かせる。次いで両手を広げさせると上体を逸らし機体に空を仰がせた。

『G u u U u o o O o o o O o o A a a A a a a ! ! !』

同じようにリートが合成音声を流す。本物の“魔神”がどのような声と伝えられているかは知らないが、リート手製の改造音声は“魔神”の如き迫力があつた。

これだけ目の前で【シユナイト】の力を見せ付けてやれば、今の大絶叫は身の竦むような恐ろしい咆哮となる筈だ。

『すんなりと渡してくれるでしょうか？』

「大人しく差し出せばそれで良い。だが、もしも逆らうようなら」

『皆の人間を皆殺しにするんですね？』

「うーん……正直、虐殺はあまり気が進まない。大人しく逃げるようなら追わないさ」

『ま、アレを見る限りその心配は杞憂でしょうね』

リートの言葉と共に画面に映し出されるのは、どう足掻いても【シユナイト】に勝てないと悟って仲間を見捨てて逃げ出す一部の兵士の姿だつた。

『こつこつこのを見ると言いたくなりませんか？』

「ほう、何だ？」

『人がゴミのようだ、と……』

「はあーお前は映画の見すぎだ。アホなこと言ってる暇があつたら、ミスリルの保管場所を探すぞ」

とりあえずミスリルさえ奪つてしまえば、後は適当に皆を機能しない程度まで破壊して離脱する。それが一番後腐れのない判断だろう、キサラギはそう考えていた。

「装備の保管場所か……中世の砦は詳しくないからな」

『そうですね。こつこつ古い建築物については私も専門外です』

キサラギは頭部のカメラで周囲を見回す。保管場所は不明なので壁越しだが金属反応を頼りに手当たり次第でミスリルを探した。

数分もしない内に、正面にある塔から金属の反応があつた。

『センサーに反応有りです。この量は……90パーセントの確率で

目的の保管庫でしょう』

「なら話は早い。やるぞ」

『了解。変声機をONにします』

「ミスリルは……そこか……」

頭部の単眼を向けてわかり易いように何度か発光させる。先程の侵入時と同じようにわざと緩慢な動作で塔へと近づく。

「寄こせ……ミスリルを……」

その言葉に足元や塔の側から、兵士が蜘蛛の子を散らすように離れて行く。

何の予告も無く塔の壁をブチ抜いてやっても良かったが止める。

それは脳裏を過ぎる虐殺好きの傭兵の顔が原因だった。

「俺はあいつとは違う」

『マスター』

リートはその呟きを外部には流さなかった。

【シュナイト】は抜き手で壁を破壊する。壁の向こうは淡く輝く銀色で溢れていた。

「……見付けた」

恐らく倉庫であろう広めの室内には、“マオルベルグ”から輸送されたミスリル製の剣や鎧が隙間無く並べられていた。

「くつくつく……たんまり持つてるじゃないか」

『まるで盗賊みたいな台詞ですね』

「否定はしないぞ。俺は強盗に来ているんだからな」

キサラギは操縦席のハッチを開くと、【シュナイト】の腕で掴んだ装備を操縦席へと放り込む。

「リート」

『分解 圧縮』

キサラギは投げ込まれた装備に素手で触れる。ナノマシンの分解機能でミスリルを粒子レベルまで分解した後には圧縮。操縦席の足元には硬貨程度の大きさに縮められたミスリルが転がる。

「よし、どんどん行くぞ」

『はい。時間を掛けるのは得策では無いでしょう』

キサラギは【シュナイト】を操作して、掴んだ装備を片っ端から操縦席へと放り込む。

「は、腹からミスリルを食ってやがる!？」

次々と【シュナイト】の腹部へと消えて行くミスリルを見て、兵士の一人が絶叫する。

当然だが機工戦騎の【シュナイト】には口は無い。頭部にしても一見してソレと見える部分は無いので、セルディオの人間が腹部に開いた操縦席のハッチを口と勘違いしてもおかしくはなかった。

『これで最後です』

最後の鎧を圧縮するとリートは【シュナイト】のハッチを閉じる。ミスリルの搬入は5分と掛からなかった。

「よし、残るは砦の破壊だが……」

周囲を確認すると砦の兵士達は既に撤退行動に入っていた。“魔神”が食事に気を取られている内に大人しく逃げる気になったようだ。

「このまま作戦領域を離脱する」

『砦は破壊しなくて良いんですか？ 今なら守備隊も邪魔しないでしょっ』

「撤退の邪魔をする気はないさ。それに今は装備が無いからな。無駄に機体を消耗させる必要もないだろう」

機工戦騎なら素手でも砦を全壊させられるが時間が掛かってしまう。何より機体に無駄な負担を掛けてしまっ。

『それもそうですね』

「よし、本作戦は現時刻をもって終了。これより【シュナイト】は帰還する」

『了解。撤退時に追っ手を付けられると面倒です』

「ああ、わかってる、よ！」

【シュナイト】は取り付いていた塔の壁を左右に押し広げる。壁に空けられた穴から塔はポッキリと折れて崩れた。

「う、うわぁー！」

「退避！ 総員退避しろ！」

落ちて来る瓦礫に足元の兵士達が混乱している隙を突いて、キサラギは【シユナイト】を大きく後ろに跳躍させる。

軽々と砦の敷地外に出ると機体を反転させて離脱する。

こうしてセルディオを震撼させた“魔神”による最初の襲撃は幕を下ろした。

7・ミスリルを求めて（後書き）

どうも、これまでの後書きで「投稿」を「投降」と間違えて書いていた如月八日です。

俺は一体何回降参していたんだ……（汗）

それとは別に前回の投稿で本作では初の感想をいただきました。

この場でもお礼を申し上げさせていただきます。ありがとうございます
ます。

今回も執筆の終わっている分を投稿します。

そして一向に誤字が無くなりません（汗）

次回も執筆が完了しましたら投稿します。

“グラナ砦”が“魔神”の襲撃で陥落した。そのお伽話のような報せは“魔の森”を隔てた“ヴァーリス帝国”にも届いていた。

帝国の方針は定期的に帝都で開かれる諸侯会議によって決定されている。今回は緊急の案件で時期こそ外れているが、全ての諸侯が会議に参席した。

しかし肝心の会議は諸侯が真っ二つに分かれて激論を繰り広げていた。

「魔神”の存在は危険だ。直ぐにでも討伐隊を組織すべきだ」

「“グラナ砦”が落とされたのだ。こちらも直ぐに“魔神”の襲撃に備えるべきだろう」

“魔神”を危険な存在として排除、もしくは対策を講じるべきだと主張する否定派。

「いや、“魔神”は愚かな人間共を滅ぼす為に神が寄こした遣いじゃ」

「そうじゃ、伝承では“魔神”は人間共の信仰する女神の敵対者だったのだ。“魔神”が人間を滅ぼす使者なら、むしろ“魔族”は“魔神”と連携を取るべきじゃ」

伝説を信じて“魔神”と一緒に人間を滅ぼすべきだと主張する肯定派。

これら二つの派閥に分かれて会議は紛糾していた。

「はあー」

長机の左右に分かれて唾を飛ばし合う諸侯達を遠巻きに、“ヴァーリス帝国”を治める皇帝　アスラ・ヘイム・ヴァーリスは小さく溜息を付いた。

（ここで我が意見われを申すのは簡単だ……が、それでは駄目であろうな）

この場できちんと帝国の方針を話し合って決めなければ、諸侯の間に不和の芽を残すことになってしまう。

国の長である皇帝は、諸侯会議の席においては中立の調停者でなければならぬ。

「だが、厄介なモノが現れたものだ」

しかしアスラは“魔神”に対しては否定派であった。彼は肯定派の言うように“魔神”を楽観視してはいないからだ。

（古い伝承を鵜呑みにするのは危険だ。それに今回の“魔神”がアレと同質のモノとは限らぬ。迂闊な行動は慎むべきだ）

自然とアスラの視線は窓の外に見える“キシル山脈”へと向けられた。そこには歴代の皇帝にしか知らされていない秘密が隠されている。

（しかもグラナを襲った“魔神”は生きているのだ。既に動かないアレとは違う）

アスラも小さい頃に前皇帝であった父に連れられ一度見ただけが、アレの持つ威容は今でもはつきりと脳裏に焼き付いている。

（そもそも肯定派の大半は老人だ。止める、と言って素直に聞くかも分からぬ）

魔族が“魔の森”を境に北域へと押し込められたのはもう何十年も昔のことだ。

厳しい寒さと飢えに耐える今の生活も、それしか知らない若者には極々自然なことだ、“人間”を純粹に憎んでいるのは昔を知る老人ばかりである。

（何百年も生きた老人達からすれば、恐るべき“魔神”も“人間”を滅ぼす都合の良い口実に過ぎない、か……これは危険な傾向だな）

アスラが“魔神”を侮る老人達を危惧していると、折良くアスラの考えを代弁するような意見が出される。

「ふん、“魔神”が人間を滅ぼす使者だと？ 本気で信じている訳もないだろう。お前らは単にこれを機に“人間”を滅ぼしたいだけ

だ

声の主はユリ・ハイゼンベルグ 諸侯の中で唯一の女性だった。浅黒い肌の際立つ腰まで届く黒髪。端正な顔には少々吊り目の金眼と“魔族”の特徴である尖った耳。その身体は女性的な起伏に富んでいて、男ばかりがひしめく諸侯会議では荒地に咲く一輪の花のようであった。

だが、如何に相手が可憐な女性であつても会議の場では平等である。

「ほう？ これは、これは異なことを言うのう。ハイゼンベルグ卿「そうですな。わしらは純粹に帝国の為を思つて議論しているんじゃない。下らない怨恨に囚われている訳ではない」

「はっはっは、そんなことも分からないようでは、亡き父君も草葉の陰で泣いておるぞ」

その言葉に肯定派の老人達は声を上げて笑い出す。ユリの父は数年前に謎の病死を遂げており、それを笑いながら話すなど、彼女を明らかに馬鹿にしていた。

「口だけの老害共がよく囁^{くさくさ}る」

しかし対するユリは激昂することもなく、その視線はどこまでも冷やかだった。

「な、何じゃと!?!」

「無礼な小娘が、口の聞き方に気を付けろ!」

「貴様の家なんぞ潰すのは造作もないのじゃぞ?」

ユリの明らかな侮蔑に老人達が息巻く。肯定派の老人達は人数こそ否定派より少ないが、諸侯の中では強い権力を持つ有力者であり、帝国内での発言力も大きい。

一方のハイゼンベルグ家は、北端の小さな僻地を治める弱小諸侯だ。前当主だったユリの父親が死んでからは、更にその力も弱まり今では没落の一途を辿っている。

こうして同じ会議の席に座っているが、両者の間には明確な力の差があつた。

(これ以上は見過ごせんな……)

弱者、それも女性に徒党を組んで責め立てるのは、アスラにしてもあまり気分が良い話ではない。

「皆、静まれ」

先程の呟きとは異なり、アスラが良く通る声ではっきりと制止させる。

会議においては調停者の立場の皇帝だが、帝国の支配者であることに変わりはない。アスラの言葉を遮る者など誰も居なかった。

「まず先に言っておこう。ハイゼンベルグ郷はもう少し言葉を選べ」
「はい。申し訳ありませんでした。陛下」

アスラに軽く嗜められてユリは俯く。諸侯の中では最も若いユリは、長寿な魔族だからこそ外見はアスラと同じようだが、実際の年齢では父と娘程に離れている。

アスラは若く気概溢れるユリの姿を眩しげに見ていた。

「ふむ。陛下がお優しい方で良かったのう。ハイゼンベルグ郷」

「これからは軽率な発言は控えるように……」

アスラがユリを嗜めたことでアスラを肯定派だと思ったのか、老人達が追従する。

そんな老人達にアスラは侮蔑の視線で射抜く。

「勘違いするな。我は“魔神”の扱いについては肯定派ではない」

「何と!? それは一体どういうことです、陛下」

「そのままの意味だ。ハイゼンベルグ郷の言葉は留意せねばならん。我はお前らのように人間憎さで“魔神”を楽観視する気はない」

「しかし“魔神”はグラナ砦を落としたのですぞ!? 今は“人間”を滅ぼすには絶好の機会じゃ、このまま軍勢を率いて攻め込むべきじゃろう」

「だが、攻め込むには“魔の森”を通らねばならん。“魔神”の正体が不明な現状では、軽々しく軍を動かすべきではない」

「ぐ、ぬう……」

「グラナを襲撃した“魔神”が伝説のソレと同一である保障も無い。

それに今回の“魔神”は生きているのだ」

遙か昔に天上の“女神”と敵対していた“魔神”は激闘の末に下界へ落とされた。そしてセルディオの大地には戦いに敗れて死んだ“魔神”の屍のみが残された。伝説にはそう記されている。

それ故に伝説の中でも生きている“魔神”に関する情報は殆ど無かった。

「それに情報ではグラナサを襲撃した“魔神”は皆のミスリルを食い尽くしたそうだ。襲撃の目的が食欲だったとしても、“魔神”が“魔族”を食べないという保障もない」

「しかし陛下！ この機を逃がせば“人間”は間違いなく攻めて来ますぞ！」

「安心しろ。その時は“魔神”とやらが助けしてくれるのだろうか？」

「陛下！ お戯れは止めていただきたい」

「ふん、戯れてる自覚があるなら、今度からは馬鹿な発言を控えるんだな。若輩のハイゼンベルグ郷の方が、まだ帝国に有益な意見を述べてくれたぞ」

「……………」

皮肉の効いたアスラの言葉に、老人達がばつが悪そうな顔で視線を逸らす。彼らも感情に囚われて馬鹿なことを言っていた自覚はあるのだろうか。

「さて、それでは会議の続きをしようか」

アスラの号令で会議を再開するが、有力諸侯である老人達は先程の失態から発言を控えており、若い諸侯達からは両方からの襲撃に備えて防備を固めるべき。つまり消極的な意見しか出て来なかった。

「各領地から“魔の森”と隣接する領地へ援軍を出すべきでしょう」
「待て、地域によって魔物の脅威も異なる。全領地から援軍を派遣するのは不可能だ」

「ならば治安維持の為に最低限の人員を残せ。援軍の編成は諸侯の采配に任せるとしよう」

若い諸侯同士の意見をアスラが上手く纏める。

アスラとしては肯定派のように“魔神”を楽観視していないが、一方で否定派のように守備を固める受身のままでは駄目だとも思っていた。

やはりユリもそう考えていたのは同じだったらしい。彼女は居並ぶ諸侯を見回して意見を述べた。

「“魔神”に対して何も行動しないのは危険だと思う。アレが“人間”の味方になるとも限らない」

「我もハイゼンベルグ卿と同じ意見だ。“魔神”の正体がわからないのは好ましくない。不用意に刺激する訳にもいかないが、その正体を探る為にも調査隊は派遣すべきだ」

アスラもそれに同調して、さり気なく自分の意見を口にする。元々はユリの意見なのだが、周囲の諸侯達も皇帝の言葉には素直に従うようだ。

しかし老人達はユリの意見にある一点を付け足す。

「わしは調査隊にハイゼンベルグ卿を推薦しますぞ」

「おお、それは名案ですな。彼女は若くして宮廷魔術士の資格を持つ天才じゃからのう」

「それにハイゼンベルグ卿の領地は“魔の森”と隣接しておりまして、兵の数にも余力があるでしょう」

一人が言い出すとまるで示し合わせたかのように話が進められる。先程のような剣呑な雰囲気こそなかったが、明らかなユリに対する嫌がらせが目的であった。

(どうやら老人達は大層ご立腹のようだな。ハイゼンベルグ卿)

長寿な“魔族”は歳を増すごとに意固地でプライドが高くなる傾向が強い。

ユリは没落寸前の若輩者で、しかも女性だ。そんな彼女の意見が皇帝に採用されて、おまけに小馬鹿にされたとあっては、老人達の自尊心はズタズタだろう。

(だが、難癖と言うには一応の筋は通っている)

アスラ個人としては、女性だけを危地へ赴かせるのは甚だ不本意なのだが、誰かが行かなければならないのも事実だ。

そして彼女には任せるだけの實力があった。アスラはユリの“魔術”の腕前を信じることにした。

「頼めるかな？ ハイゼンベルグ卿」

「ユリ・ハイゼンベルグ 謹んでその任をお受けします」

席を立つとユリは恭しく礼をする。結局、ユリは一言も口を挟まなかった。

そんな彼女を見詰める老人達の瞳から不穏な光が窺い見える。

（何事も起きなければ良いが……）

“魔族”も同族を貶めることや殺すこともある。そこは彼らが見下す“人間”と何一つとして変わらない。

グラナを襲撃した“魔神”のことを話し合っていた筈なのに、アスラは帝国の内部に心配事が増えていた。

どちらも穏やかには終わりそうもない。

「はあー……」

アスラは二重の意味で物憂げに溜息を付いた。

「さあ、それじゃ“魔術”の講義を始めるわよ」

白衣姿のシエラが手にしたチョークで黒板を叩く。壁に掛けられた黒板の前に佇む姿は着ている白衣も相まって、本職の教師のようである。

しかしキサラギには分からないことがあった。

「どうして俺はここに居るんだ？」

『随分と哲学的な問いですね。マスター』

「そういう意味じゃない」

砦を襲撃した翌日、キサラギは手に入れたミスリルで【シユナイト】を修理しようとしていた筈が、どういう訳か屋敷の研究室で“魔術”の講義を聴かされることになっていた。

「今日は【シユナイト】の修理をする筈だったんだがな」

『大丈夫です。単純な改造なので作業は私だけでも出来ます』

「まあ、敷地内ならナノマシンの遠隔操作が出来るからな」

今回の改造箇所は関節部だ。内容自体は単純で、損耗が激しい箇所をミスリルで補強する程度の作業なのでリートだけでも大丈夫だろう。

「いや、でも講義はちよつと……なあ？」

『マスターが勉強嫌いなのは知っています。訓練校でも座学の際はサボろうとしていましたからね』

「うぐっ……」

凶星を指されてキサラギが小さく呻いた。

個人業と思われがちな傭兵だが、素人が一朝一夕で成れる職業ではない。新規の傭兵を養成する為の施設は存在しており、ちゃんと仕事を斡旋する為の仲介人も居る。

勿論、無一文の人間が金目当てになる傭兵に膨大な学費が払える訳もなく、彼らのような傭兵は訓練校を卒業した後も報酬の何割かを学校に還元している。

『それにこの星で活動する以上は、“魔術”について知識を深めることも必要です』

「はあくわかつたよ」

『頑張ってください。マスター』

「程ほどには、な」

「こら！ 私語は禁止よ。キサラギ」

「へいへい……」

溜息を付くキサラギを、目聡く見付けたシエラに吠えられる。大人しく腹を括ったキサラギは、改めて自分が座る机の周りを見回した。

室内にはキサラギが座る机の他にも、研究用の機材や素材が乱雑に溢れている。魔術的な物なのか植物や生物の一部。宝石や鉱石の類も数多く見受けられた。

「それじゃ、まずは“魔術”の元となる“魔素”について説明するわね」

言ってシエラは黒板に簡単な図を描く。

「絵下手なんだな」

「くっ……黙って聞きなさい」

シエラは絵心が無いようだ。線が安定せず歪んで見える図を見て、キサラギは何とか理解しようと努める。

恐らくシエラが描いているのは、大地と空、それに木と人間の絵なのだろう。

「“魔素”は世界中どこでも存在するわ。空の上や湖の底も、地の底なんかにも存在すると言われているの。一説では生命の源なんじゃないか、って話もあるわ」

「ふむ。しかし科学的には観測することが出来ない、と」

「そうね。“魔素”は存在を感じることは出来ても目視することは出来ないわ」

「今もこの部屋の中にあるのか？」

「いいえ、この部屋……と言うよりも屋敷内においては“魔素”は殆ど存在しないわ」

シエラが黒板に屋敷の絵を描き足すとその周りを線で囲った。

「屋敷内の“魔素”は殆どが“結界”の維持に消費される。だから屋敷内での“魔術”を行使することは難しいわ」

「へえー防犯的な観点では優秀そうだな。相手が魔術士に限定されるだろうけど」

「そうね。魔術士が相手なら例え結果を抜けられてもブライが遅れを取ることは無いわ」

それは屋敷がキサラギにも有利な立地条件であることも意味している。

「説明の続きになるけど“魔素”は体内で“魔力”に変換出来るの。“魔力”は“魔素”と違って淡く発光する性質があるから目視することが出来るわ。ほら」

シエラは小さく呟くと指先に米粒のような光が灯る。

「また“魔力”の変換は個人差が大きく顕れることでも有名よ。桁外れの変換効率で下級の術を連発出来る人も居れば、一度に膨大な量の“魔力”を蓄えられる人なんかも居るわ」

「ちなみにお前はどうかんだ？」

「……………普通よ」

何故か視線を逸らされる。どう見ても普通ではなさそうだった。

本人が誤魔化そうとしているので、キサラギも深くは聞こうと思わない。シエラは何事もないかのように再び講義を始める。

「“魔術”の行使には呪文の詠唱が必要よ。尤も高度な呪文以外の詠唱は、高位の使い手なら省くことも出来るわ」

「ふむ。それは厄介そうだな」

「ええ、戦い慣れしている魔術士は大半が無詠唱の使い手よ。下位の魔術は一瞬しか発光しないから、キサラギも万が一にも戦う時は周囲の“魔素”の流れに気を配ることね」

「無理を言うな。俺は“魔素”を感じられないんだぞ？」

「うーん。私からすればそこが変なのよね。“魔素”の感知は程度の差こそあれ誰でも感じられるのよ？ 赤子だって一月もすれば“魔素”の変化を感じ取れるわ」

「言ってくれるな。俺が赤子以下だと？」

「別にそういう意味じゃないわよ。むしろ興味深いわね」

「……………解剖させてくれとか言うなよ」

「あら、残念だわ」

ニヤリとシエラは口元を歪める。その笑みにキサラギは背筋が寒くなった。あの目は本気だ。あれは冗談を言っている人間の目じゃない。

キサラギは話題を変えることにした。

「そういえばお前は“魔術”を研究しているんだったな。どんな研究をしているんだ？」

「私の研究？ ふふ、そう。キサラギはそんなに私の研究の話が聞

きたいのね」

「いや、別にそこまで聞きたい訳じゃ」

「そこまで！ そ・こ・ま・で・言うなら、この天才が説明してあげるわ！」

得意分野の話題にシヤラは大袈裟に踏ん返り返る。先程とは別の意味で振ってはいけない話題を選んでしまったキサラギは、大人しく自慢話を聞かされることになった。

「私が研究しているのは“刻印魔術”よ。これは系統としては“付加”というタイプに分類されるわ。対象に刻んだ紋章を使って詠唱の手間を省いて、同時に“魔力”の制御を簡略化。殆ど自動で“魔術”を行使させることが出来るの」

シエラは研究室にあるガラクタの山から銃のような物を取り出す。

「これは小さな筒に紋章を刻んであるわ。取っ手を握って念じれば、手から“魔力”を吸収して魔力の矢を撃ち出すのよ」

「へえー凄いな。さながら差し詰め“魔術”の拳銃ってところか」

「そうよ。名付けて“刻印銃”よ！ ふふ……見てなさい。キサラギ」

自信有り気に笑みを浮かべるとシエラは銃身を壁の的に向ける。

何度も試射を繰り返したのか的の周りには弾痕らしき小さな窪みが無数に穿たれていた。

刻印銃は厳密には銃ではないので引き金は付いていない。しかし銃を構えるシエラの姿は意外に様になっていた。

「ッー」

詠唱は要らない。シヤラの意志が引き金となり、銃身から魔力が弾となって飛び出す。

パスッ

赤色に光る弾丸は狙い違わず的中心へ突き刺さる。威力はそんなに無いようで小さな音が鳴っただけだった。

「ふっふっくん、どうよ？」

「驚いたな。大した腕前だ」

実弾ではないので反動の計算こそ不用だが、初弾で命中させるのは難しいだろう。シエラのように当てる為には反復して培った射撃技術が必要だ。

「まあ、銃を撃つのが様になる令嬢ってのも変な話だけだな」

「煩いわね。射撃は趣味よ。研究で煮詰まってる時は気分転換するのが一番なの」

「なるほど、それで刻印銃は実戦に使える代物なのか？」

「屋敷内は“魔素”が薄いから殺傷力は低いわ。結界の外なら壁を凹ませる程度の威力ね。そもそもコレは武器じゃないわ。あくまで本来の用途は研究用なの」

言つとシエラは再びガラクタの山から何かを取り出す。

「腕輪？」

それは銀の腕輪だった。腕輪の表面には刻印であろう小さな文字がびっしりと刻まれている。また台座の部分には真っ赤な宝石が埋め込まれていた。

「はい。コレを身に着けて、今度はキササギがあの的を撃つてちょうだい」

「刻印銃は持ち主の“魔力”を使って弾を撃つんだろ？ 俺には無意味だろ」

「ふん、あまり天才の頭脳を舐めないことね。無意味なことなんてやらせないわ」

シヤラの剣幕に負けた訳ではないが、キササギは刻印銃を構える。本職の傭兵であるキササギは、当然ながら銃器の扱いにも精通していた。

素早く的の中心を狙い済ますと、脳内で引き金をイメージする。それと同時に腕輪の宝石が淡く光り出した。

照準が合つとキササギは頭の中の引き金を引く。
パツッ

先程と同じ軽い音が響く。銃身から飛び出した魔力の弾丸が的の中心を射抜いた。

しかも弾痕の深さからわかるが、明らかにシエラの時より威力が上がっている。

「どう？ その腕輪には“魔晶石”が使われているのよ」

「魔晶石？ この真つ赤な宝石のことか」

「それは“魔力”を生み出す性質を持つ宝石よ。厳密には無から有を生み出すのではなく、人体と同じで周囲から“魔素”を吸収して変換しているの」

「じゃあ、これが有れば俺にも“魔術”が使えるのか？」

「もう、キサラギは“魔術”を使ってるわ。さっき撃った刻印銃も立派な“魔術”よ」

シエラに言われてキサラギも初めて自覚する。“魔力”で半自動的に動くとはいえ、刻印銃を撃つということも一種の“魔術”なのだ。

過程に違いこそあれ、誰が使おうとも結果は同じとなる。

「つまり“魔術”を一般化することがお前の目標なんだな？」

「そうよ。“刻印魔術”の目指す到達点は“魔術”の汎用化。才能という埋めがたい差を無くし、全ての者が平等に使える力を開発する。それが私の野望よ」

そう言っつてシエラは不適に笑う。覇気に満ちた金の瞳が強く輝いている。

その姿はとても眩しくて、キサラギは知らずに目を細めるのだった。

8・会議（後書き）

どうも、お久しぶりです。如月八日です。

連休中に風邪を貰ってしまい、最近執筆が滞ってしまいました。

今回は投稿が大幅に遅れてしまい申し訳ありませんでした。

本作を楽しみにしていただいていた方には、本当に申し訳ない事を
してしまいました。

次話も書き上がり次第に投稿します。

これからも「空から魔神が!？」をよろしく願います。

「ふうー【シュナイト】の改修も一段落だな」

屋敷の裏地に寝そべる【シュナイト】の上で、改修作業を終えたキサラギは額に浮かぶ汗を拭う。季節は夏　空は抜けるように青く日差しが眩しい晴天だ。

シエラの講義から三日が経った。キサラギがセルディオに来てから既に一週間になる。

元々面倒見が良い性格のシエラはあの後も何度か講義を開こうとしたが、キサラギはその度に遁走した。

キサラギはシエラの目を盗んで【シュナイト】の改修作業が進めて、今日になってようやく作業が完了したのである。

『機体消耗の心配は無くなりました。そうなる後は“武器”が必要です』

「弾丸の生産は無理なんだな？」

『はい。機工戦騎用の重火器となるとサイズが違います。この屋敷にそれだけの設備はありません』

「まあ、ミスリルを確保出来ただけよしとするか」

グラナ砦から強奪したミスリルにはまだまだ余裕がある。それに【シュナイト】が元々装備していた盾やライフルは残っていた。

『ライフルは出力不足で撃てません。自動盾はレアメタル製なので加工すれば武器に転用することも可能でしょう』

「新しい武器か……」

勿論、機工戦騎用の武器なのでサイズも巨大だ。自動盾のレアメタルにも限りがある。必然として新しく製作する武器も厳選せねばならないだろう。

それにグラナ砦を襲撃した時も感じたことだが、今後も大型の建築物を破壊することもあるだろう。

『ここは、やはり接近用の武器を作るべきです』

「奇遇だな。俺も同じことを考えていたぞ」

『弾薬の製造が望めない以上、重火器は不要です。なら【シユナイト】の体格を活かせる格闘用の武装が理想的でしょう』

「その様子だと既に案があるんだな？」

『はい。ブライさんに聞いたのですが“剣”はどうでしょう？』
「なるほど剣か……」

真つ先に思い浮かぶのはブライの剣だ。二人と初めて出会った時に、喉元へ突き付けられた白刃。冷たい刃の感触はまだ記憶に新しい。

しかしキサラギは剣を使ったことはない。宇宙が主戦場となる機工戦騎は遠距離戦を想定した射撃武装を重視する。キサラギもその例に漏れず、これまで格闘用の武装は殆ど使用したことがない。

『接近戦の適正はあると思います。追いつめられれば、咄嗟に機工戦騎で“蹴り”を繰り出すようなマスターですし……』

「嗚呼……そんなこともあったな」

リートの言葉にレオンとの初戦闘を思い出す。あの時も接近戦を挑んで来る【テュラン】をキサラギは反射的に蹴り飛ばしていた。

「思えばあの野郎に目を付けられたのも、アレが原因だったのかもな」

『それでどうしますか？ マスター』

「うーん。俺が剣を使うのか……どうもピンとしないんだよな」

『難しく考える必要ありません。あくまで“剣”は選択肢の一つです。問題は何を仮想敵とするかですね』

「そうだな、セルディオの一般的な歩兵を仮想敵とするか。それとも【シユナイト】と同格の敵 【テュラン】を相手と想定すべきか」

『マスターはあの男もこの星に来ていると考えているのですか？』
「確証は無い。だが、あの男との因縁がこの程度で終わると思っていない」

『しかし【テュラン】の背部には追加ブースターが付いていました。

【シユナイト】と違って、この星の重力圏を離脱することも可能だったと思います」

「相手が普通の傭兵ならそうだが、相手はあのレオンだ」

レオンがキサラギに執着していることは明らかだ。そもそもキサラギがセルディオに來る切っ掛けとなったホールも【テュラン】の荷電粒子砲が原因で発生している。おまけにホールに呑まれた理由も【テュラン】だった。

「我ながら思い出すと腹の立つ話だな」

『もう過ぎたことです。それより今後のことを考えましょう。【テュラン】との戦闘を考慮するなら武装の選択はとても重要です。慎重に決めなくてはなりません』

「そうだな。【テュラン】が相手なら不慣れな武器では遅れを取る可能性が高い」

『あまり猶予は無いかもしれません。作業を急いだ方が良いでしょう』

「ああ、わかってるさ」

その為に多少目立ってしまう可能性を無視して、強引な手段でミスリルを確保したのだ。レオンを相手に出遅れる訳にはいかない。

この時のキサラギは認識が甘かった。彼はセルディオの住人が、自身を脅かす可能性を持つ“敵”だという事実を認識していなかった。

シエラの講義は今も時間を見付けては続けられていた。新しい装備の開発に行き詰ったキサラギは作業を中断して、彼女の研究室へと向かっている。

『煮詰まった時は気分転換も重要です。勉強は幾らしても足りません』

そんなリートの有り難い言葉を貰ったキサラギは足取りも重く扉を開く。今日もシエラは朝から研究室に籠って研究に明け暮れている。

た。

「あら？ キサラギが自主的に来るなんて珍しいわね」

「口煩いお目付け役が居るからな」

「はいはい、そうよね。突然あんたが修学精神に目覚める訳がなかったわ」

シエラは大袈裟に肩を竦める。それでも既に手慣れたもので、呆れながらも手際よく机の上を片付けて講義の用意を整えていた。

「そっだ。今日は講義して欲しいことがあるんだよ」

「め、珍しいわね。あんたが講義してくれだなんて……今日は槍でも降るのかしら？」

本気で気味悪がられた。普段のキサラギが講義に対して、如何に不真面目だったのかを窺わせる反応だった。

『自業自得です。普段の行いが悪いからですよ。マスター』

「あ、リートも居たのね」

『当然です。私は常にマスターと共にあります』

「ふふ、そっだったわね。それでキサラギは一体何が聞きたいのかしら？」

「“魔神”について聞きたい。教えてくれ」

「“魔神”？ それって伝説に登場するあの“魔神”？」

キサラギの口から“魔神”という言葉が出たのが、余程意外だったのかシエラは呆けたように聞き返す。

「買い物時にそんな単語を聞いたんだよ」

「そうなの？ だけど今更になって聞くなんて随分と唐突ね」

シエラもキサラギとの付き合いこそ浅いが、ある程度はその性格を理解している。確かに現実主義者のキサラギが、純粋な好奇心で伝説を聞きたがるとは思わないのだろう。

キサラギは尤もらしい理由をでっち上げた。

「傭兵は利用出来るモノなら何でも利用する。【シユナイト】はあの通りの外見だからな。敵が勝手に“畏怖”してくれるのなら、それを利用しない手はない」

「へえーキサラギもちゃんと考えて行動してるのね」

「……………」

シエラに自覚は無いのだろうが、彼女に無断で皆を襲撃したキサラギには耳に痛い言葉だった。

「そういう理由ならキチンと説明してあげる。セルディオで“魔神”と言えば伝説はコレしかないわね」

シヤラは本棚から一冊の本を抜き取る。黒い表紙のいかにも古めかしい本だった。

目的のページを開くとキサラギへと手渡す。どうやら今日はコレが教科書の代わりようだ。

「これは……随分と汚い本だな」

外見も古いが中身も相当古いようだ。日に焼けた紙面には記号のような文字で埋められている。また挿絵の載っている部分には、大地に倒れる翠色の人形と天に浮かぶ輝く女性が描かれていた。

「これが“魔神”なのか？」

「そうよ。天空に住まう“女神キユクレ”と“魔神”の対立による結末よ」

「“女神キユクレ”というのはセルディオで信仰されている神様ですか？」

「大陸で最も信仰されている神様よ。大昔の伝説にも名前が残ってるから分かると思うけど、今も広く信仰されているセルディオでも最古の、そして最大の宗教ね」

「ふん、宗教に興味はない。それでこっちの無様に倒れてる奴が“魔神”なんだな」

「無様つて……まあ、確かに“魔神”も伝説では噛ませ犬の扱いだけだね」

「噛ませ犬なんですか？」

「ええ、“魔神”の伝説は要約すると、女神と敵対していた“魔神”が戦いに敗れて大地に落されて朽ち果てたって話なのよ」

「争う経緯とかははっきりしていないのか？」

「大昔の御伽話だからね。そこら辺は色んな文献が存在していて、はつきりとした原典は残されていないわ」

『紙も無い時代なら情報の劣化や変質はよくある話でしょう』

「そうね。だけど“魔神”の伝説には共通する点もある」

そう言つてシエラは挿絵を指差す。それは先程の地に伏す魔神とそれを天から見下ろす女神が対照的に描かれていた絵であつた。

「前半部は不明でも話の最後だけはどれも一緒よ」

「“魔神”が負けて大地で朽ちた　か」

「そうよ。戦いに敗れた“魔神”がセルディオで朽ちたという記述は、どの文献にも共通して見ることが出来る特徴なの」

『こつ言つた御伽話は何らかの原型が存在するものです。何か名所や曰くがあるのではないですか？』

「ええ、リートの言う通りよ。“魔神”が何処に落ちたかは明確ではない。だけど伝説の通り“魔神”が存在した証拠なら存在する」

シエラが本棚から別の本を取るとキサラギへと手渡す。今度の本は先程の古書より幾分か新しい。あまり日に焼けていない小奇麗な表紙は近年に製本された物だつた。

「セルディオ秘宝辞典？」

金色の文字で書かれた題名は“通訳”の魔術でキサラギにも読むことが出来た。

“魔神”の伝説からどうしてお宝の話になるのか、理解出来ないキサラギは首を傾げる。

シエラは黙つてあるページを開いて見せた。

「“霸王の武具”……これが“魔神”と一体何の関係があるんだ？」

「関係なら大有りよ。それは“魔神”の亡骸から造り出された伝説の武具なの」

「これが“魔神”から造つた武具……」

それは挿絵なので判然としないが奇妙な武具だつた。

まず目に付くのは色だ。それはミスリルとも違う翠色の輝きを持つらしい。原料が生物とは思えないような金属質の光沢は、ミスリル

とは別種の存在感を持っていた。

「ん？ この色は……」

しかしキサラギはその色を何処かで見ただ気がした。それはリートも同じだったようでキサラギよりその早く答えを導き出す。

『マスター。紙の資料なので断定は出来ませんが、これはレアメタルではないでしょうか？』

「おお！？ 確かに外見はレアメタルの特徴と一致するな」

【シュナイト】は宇宙空間での隠密性を重視する為に黒く塗装しているが、本来のレアメタルは翠色をしている。

秘宝辞典に載っている“霸王の武具”は、原料のレメタルとよく似た色をしていた。

「ど、どうしたのよ？ レアメタルがどうか叫んだりして……」

「いや、レアメタルの当てが見付かったかもしれないんだ」

「本当！？ あ……でもそれならブライは無駄足だったかもしれないわね」

今日もブライは町で買い物と情報収集を行っている。確かに意外な所からレアメタルの情報が手に入ったので、彼の行動は無駄足だったかもしれない。

「ああ、それで“霸王の武具”は一体何処にあるんだ？ シエラ」

「勿論それは……あ」

不意にシエラが言葉に詰まる。それは何か大事な見落としに気付いたかのようだった。

表情が固まったシエラを気遣ってリートが心配そうに声を掛ける。

『やはり古い物なので紛失してしまったのですか？』

「いえ、それなら大丈夫よ。“霸王の武具”の所在ならはつきりしているわ」

「なら他に何か問題があるのか？」

「大有りだわ。“霸王の武具”は全てセルディオでも有数の国が管理している。つまり国宝級の代物なのよ」

「なるほど……それは確かに難しいな」

【 国宝を手に入れようとすれば、確実に国家と敵対してしまう。 シュナイト】の力があれば国一つを滅ぼすことも容易い。

しかし今のキサラギにソレを行う気はなかった。

「まあ、話を戻すが“魔神”の伝説は判然としていないことはわかった。それならある程度は好きにやっても誤魔化しが効くな」

「どうするつもりよ？」

「【シュナイト】の外見はセルディオじゃ目立つからな。伝説の“魔神”ってことにすれば外敵の撃退に少しは効果があるだろう」

「はは、ん、なるほどね。中々に良い手じゃない。確かに機工戦騎の巨体なら“魔神”と勘違いされてもおかしくないわね」

『そうですね。徹底した“畏怖”の対象となれば敵対しようとする者も減るでしょう』

「ああ、なら外観はソレっぽい方が良さだろうな」

新装備は“魔神”のイメージに即した物を選ぶのも良いかもしれない。

それからキサラギは日が暮れるまでの間、シエラとリートと【シュナイト】の新装備について話し合った。

キサラギがシエラに“魔神”の伝説について講義を受けている頃、ブライは“ポーレル”という都市にやって来ていた。

“ポーレル”は“ドグラ山脈”の険しい山肌を切り拓き作られた都市である。帝国領の端に位置する地方都市だが、それと同時に独立した一つの国でもある。

辺鄙な立地条件から都市としてあまり発展はしていない“ポーレル”だが、ここには他国のように他種族への規制が存在しない。なので“ポーレル”は“魔族”と“人間”の商人が、互いの品物を流通させて貿易することが可能な唯一の窓口であった。

「いつ来ても賑やかな場所ですね。ここは」

その為に“ポーレル”では“魔族”と“人間”の両方の情報が手

入る。ブライが買出しの場所に“ボーレル”を選んだのもソレが理由であった。

賑やかな露天商を冷やかしながらブライは、いつもの執事服である店を目指す。

そこはまだ開店前の酒場だった。彼は躊躇うことなく店内へと足を踏み入れる。

「お客さん。開店は日が沈んでからだぜ」

「そう言わないで下さい。これでも常連のつもりなんですよ?」

「おっと、ブライさんか。こいつはすまねえ」

入って来たのがブライだと気付くと、店主の男はグラスに酒を注ぎ出す。

「いえ、飲み物は水で結構です。何か面白い話を聞かせていただけませんか?」

真面目な従者であるブライは、毎度のやり取りに苦笑し手で制す。そんなブライに店主は呆れたようにお決まりの文句を口にした。

「相変わらず真面目な人だ。それで? 今日どっちの話が聞きたいんだ?」

「ええ、今日は奮発して両方の話が聞きたいんです」

「ほお、両方って言う結構長くなるぜ。良いのかい?」

ブライはシエラを守る使命がある。今までもこうして一人で買出しや情報収集に来ることはあったが、時間を気にして常に最短の間で済ませていた。

「構いませんよ。最近は心配事も一つ減りそうなので」

「そいつは良かった。なら、こいつはお祝いだ」

「これは……しかし今は仕事中です」

「気にするな。度数も低い安酒だ。それに魔族なら一杯だけじゃ酔いもしねえーよ」

「……そうですね。では、ご好意に甘えましょう」

ブライは差し出されてグラスを煽る。確かに度数も低い安酒なのだろうが、グラスには丁寧に砕いた氷が浮いており、程よく冷えた

酒が乾いた喉を潤す。

今日のような少し熱い日には嬉しい気遣いだった。

「さて、それじゃ先ずは南の方から話そうか。へへっ……南にはとっておきのネタがあるんだぜ」

ここで言う“南”とは大陸の南側　総じて人間の国家に関する話題である。

「驚くなよ？　何とグラナ砦に“魔神”が現れたらしい」

「ぶほッ!？」

「うお!？　お、驚くなとは言ったが、そんなに驚くことねえーだろ」

「ゴホッ!　ゴホッ!」

「もしかして酒は駄目だったか？」

「い、いえ……大丈夫です。続きを聞かせてください」

「お、おう。なんでも砦を全身真っ黒な“魔神”が襲ったらしくてな。保管してあったミスリルを全て食っちゃったらしい」

「……………」

「直接砦を襲われた王国は“魔神”を討伐すると息巻いてる。共和国は“魔神”の目的がミスリルだってんで、鉱山を含めた“マオルベルグ”の警備で手一杯。聖国は聖国で伝説級の化け物が現れて噂を聞いた信徒共の対応で、神官共は毎日お祈りしているらしい」

「……………」

「そんな訳で今の南は大慌てだ。とても帝国と戦争なんて出来そうもない。“魔神”だかなんだか知らねえーが、化け物が出て来たお陰でセルディオに暮らす者同士で殺し合う必要がなくなるってのも皮肉な話だよ」

そう言っって店主は物憂げな顔でグラスを磨く。しかしこの時のプライは彼に言葉を返している余裕など無かった。

「よし、お次は北の話だ。こっちは臨時で諸侯会議が開かれたらしい。さすがに詳細な内容は分からねえーが十中八九で“魔神”の件だろうな」

都市国家として独立している“ボーレル”も、形式上は帝国の領内に存在する。近隣の諸侯からあまり干渉されないが、逆に国内の情報は容易に入手することが出来た。

「各領地から援軍を派遣させて軍を編成しているらしい。それと噂なんだが老人共がハイゼンベルグ領で何かやらかす気らしい」

「ハイゼンベルグ領ですと？」

聞き慣れた地名にブライが反応する。衝撃的な情報に麻痺していた意識が覚醒した。

帝国領でも北端の小さな領地だが、シエラやブライにとっては馴染み深い地名だ。

「ああ、陛下の命令で領主の嬢ちゃんが“魔神”の調査隊を指揮することになったらしいんだが……どうやら嬢ちゃんの留守を狙って老人共が何か企んでいるらしいんだよ」

「何故そのようなことに？」

「会議で老人共の機嫌を損ねたみたいだな。最近になってハイゼンベルグにきな臭い連中が集められているらしい」

「……………」

「噂じゃ領主の留守を狙って野党共を暴れさせるんじゃないかって言われているぜ」

「そうですね……ハイゼンベルグの領主も大変ですね」

「ああ、若いっただけでも大変だろうに治める領地がああ荒れようだ。こりゃハイゼンベルグはもう終わりかもな」

同情するよ、と店主は他人事の様子でその後も話を続けた。それからブライは夕方になり酒場が開店準備を始めるまで店主から情報を聞くと、手早く買い物を買わせてシエラの屋敷へと帰って行った。しかしブライは店主の話に含まれたある事実を見落としていた。

普段の彼ならそんなミスは絶対に犯さないのだが、この時のブライは少なからず動揺していて、冷静な判断力を失っていた。

結局、ブライがその事実には思い至るのはもう少し後のことだった。

9 ・伝説（後書き）

どうも、如月八日です。今回も更新が遅れてしまいました。風邪も完治して体調も良好なのですが、最近は以前に比べて執筆速度が落ちて来ています。

なので以前のように4日おきの更新は難しそうなので、今後は週1更新を目指して投稿するつもりです。

勿論、早く書き上がれば直ぐにでも投稿するつもりです。

「お嬢様。一大事でございます」

夜になって帰って来たブライは青褪めた顔でシエラに報告する。寡黙な従者の常にならないような慌てぶりに、シエラは自然と作業の手を休めて話を聞く姿勢を取った。

「グラナが“魔神”に襲撃されました」

「……………そう、随分と大胆なことをしたのね」

シエラはブライの言葉を額面通りに受け取らず、その裏にある真意を瞬時に見抜く。

彼が言う“魔神”とは伝説のソレではない。

「キサラギを呼んでちょうだい。少し話したいことがある、と」

「畏まりました。お嬢様」

ブライは丁寧に一礼しキサラギを呼びに行った。

室内に残されたシエラの視線は雑多に物の置かれた研究室で、ぽっかりと空いている場所へと吸い寄せられる。

そこはシエラがキサラギに講義をする際の特等席だ。

「キサラギ……………」

セルディオの外から来た傭兵　シエラに雇われた人間。

無愛想で食い意地の張った青年　シエラに対しても遠慮なく物を言う無礼な男。

彼との出会いはまだ一週間程だが、シエラには彼が屋敷に居ることが既に当たり前ことのように感じていた。

「リート……………」

姿無き不可思議な存在　キサラギの相棒。

丁寧な物腰の女性　話の合う初めて出来た同性の話し相手。

彼女とはまだ話したいことが山のようにあった。

だが、今回の話は別だ。

「私に無断で砦を襲撃するなんて……………馬鹿な真似をしてくれたわ」

キサラギは“グラナ砦”を襲撃するという意味を理解していないのだ。あそこは“人間”が持つ対魔族の最前線。決して落ちてはならない防壁なのだ。

そんな所を刺激すれば敵にするのはロキア王国だけではない。下手をすればセルディオ中の国家を敵に回してしまふ。

そうなれば如何に機工戦騎が巨大でも勝ち目は無い。一国の軍が相手でも手に余るであろうに複数の国から軍を送られてはシエラ達の未来は破滅だ。

「きちんと説明して貰うわ。キサラギ」

彼らが何故そんな馬鹿げたことをやったのか、シエラには聞く権利がある。それは雇い主であるシエラが持つ絶対の権利だ。

そして事と次第によって、シエラは決めねばならないだろう。

「契約を解消するか、否か」

隠れ住んでいるシエラの立場としては、護衛を依頼したからには外でキサラギが派手に暴れるのは好ましくない事態だろう。

彼の申し開き次第によっては、シエラも本気で解雇を考えていた。

「お嬢様。キサラギ様をお連れいたしました」

それから数分もせずにブライがキサラギを連れて戻って来る。風呂上りなのかキサラギはいつもの軍服ではなく、以前にシエラが買った草色の服に着替えていた。

「遅れてすまん。作業で少し汚れたから先に風呂を借りてた」

『厚かましいマスターですいません。シエラさん』

いつもの調子でキサラギは気安く話し掛けて来る。そんなキサラギの態度にリートは申し訳なさそうに謝罪する。

そのやり取りを普段と何ら変わらない。この一週間ですっかり日常となったことだ。

「別に良いわ。それより聞きたいことがあるの」

シエラは僅かに生まれる躊躇いを胸の奥へと押し込むと、事前に用意していた問いを投げ掛けた。

「外でブライが面白い話を聞いて来てくれたわ。なんでもグラナ砦

を“魔神”が襲ったそうなのだけど……」

「げっ……」

『はあーだから私は反対だったんです』

改めて返事を聞くまでもなかった。キサラギは実にわかり易い態度で狼狽え始める。その一方でリートはこうなることを予想していたのか落ち着いていた。

「それでキサラギ。どうしてグラナを襲撃したの？」

「返答次第では」

背後に控えたブライが腰の剣へと手を掛ける。この距離は既にブライの間合いだ。

今回ばかりはシエラもブライを制止するつもりは無い。

「わ、わかった。ちゃんと説明する。だからまずは俺の話聞いてくれ」

「ええ、ちゃんとした理由を聞かせて貰いましょうか」

「うっ……早まったかもしれん」

『観念しましょう。マスター』

シエラの迫力にキサラギも腰が引けていた。リートの言葉に背を押されて何とかキサラギは弁明を始める。

「砦を襲撃したのはミスリルがあつたからだ」

「ロキア王国がマオルベルグから買い集めた装備のことね？」

「ああ、真つ当な手段じゃ俺が望む量は手に入りそうもなかった。だから手っ取り早く強奪することにしたんだ」

「そんな気軽に言わないで欲しいわ」

「いや、思った通り簡単だった。【シュナイト】で城門に突っ込めば一発だった」

「ねえ、あなた馬鹿でしょ？ いいえ、絶対に馬鹿ね。そうに決まってるわ」

「おいおい、酷い言われようだな」

「当たり前でしょうが！？ あんたが軽々しく突っ込んだのはセルディオで最も危険な門なのよ」

おまけに時期も最悪であった。両者が戦争を控えて一触即発の状態の時に正面から皆に殴り込むなど馬鹿げている。言語道断であった。蛮勇どころの話ではない。

しかしキサラギは先程とは一変して妙に落ち着いていた。

「傭兵は勝算のない戦いはしない。成功すると確信していたから実行したまでの話だ」

「成功ですって？」

「そうだ。ちゃんと目的のミスリルは奪取したんだ。【シユナイト】の修理も既に完了している。後は追加の装備を開発するだけなんだ」
「まだ話の途中よ。ブライ」

「……………」

咄嗟に剣を抜きそうになったブライを止める。ブライは無言で柄に掛けた手を下げる。

今のは危なかった。事態の深刻さをまるで理解していないようなキサラギの物言いは、ブライの神経を逆撫でし過ぎてている。

「キサラギ。あなたは自分がしでかしたことを理解しているの？」

「勿論だ。王国に喧嘩を吹っ掛けたことになるな」

「この」

この期に及んでまだ緊張感のないキサラギの言葉にシエラの思考が赤熱する。そのまま引っ叩かなかったのは、単にシエラが口で言うタイプだったからに過ぎない。

“錬金術師”として常に思慮深く物事を考察するよう心掛けているシエラは、あくまで心情を感じさせない静かな口調でキサラギに確認しようとした。

「ええ、そうよ。わかっているなら、何故そんな馬鹿げたことを

」

「それしか依頼を遂行する方法が無いからだ」

「なん……………ですって？」

「お前は最初に言った筈だ。この屋敷は“魔族”と“人間”の双方に挟まれている。そして自分は逃げるといふ選択肢はない……………何処

へ行くこうと安息の地は無い、と」

「確かに言ったわ。だけどそれが一体どうしたって言うのよ？」

「俺が受けた依頼は“護衛”だ。お前を護る為には力が必要。そして俺が持つ力とは機工戦騎 【シユナイト】をおいて他は無い」

「馬鹿！ あんたは何も分かってないわ。その為に王国を敵に回しちゃ意味がないじゃない！」

物分りの悪いキサラギにシエラは声を荒げる。

「いいや、違うな。分かってないのはお前らの方だ」

そんなシエラをキサラギは片手を上げて制し、言葉を続ける。

「お前らはきちんと機工戦騎の力を理解していない」

「機工戦騎の……」

「力……ですか？」

キサラギは堂々と言い切る。そのあまりに自信有り気な態度にシエラとブライは気圧されてしまう。

「どう噂されているかは知らんが、皆を襲った“魔神”は人間に退治されたのか？ むしろ守備隊を退けて無傷でミスリルを奪って行ったんじゃないか？」

「あ……」

シエラもその事実思い至り小さく声を上げる。

「気付いたようだな。それに今はミスリルが手に入って補給の当てもある。例え国家と敵対しても構わない。俺はそれを撃破する自信があるぞ」

不遜 国さえも敵にして勝利すると断言するキサラギの姿はどこまでも不遜であった。

（本気……なんだわ）

キサラギは自分の勝利を微塵も疑っていない。それは彼の態度を見れば一目瞭然である。シエラは自分が勘違いをしていたことに気付く。

（考え無しの馬鹿なら叩き出してやるつもりだったけど……）

キサラギは本気でそう考えている。シエラにとっては荒唐無稽な

話でも、それはキサラギという異邦人からすれば当たり前のことなのかもしれない。

結果として話は一つの要点に集約される。

（私がキサラギのことを信じるか　それとも信じないか）

シエラの取れる選択は二つに一つであった。

彼と出会ったのはつい先週のことだ。信頼という点でいえば、シエラとキサラギの関係など精々が出来たばかりの友人程度でしかない。

だからシエラが素直にキサラギのことを信じることは難しいだろう。

「本当に大丈夫なんでしょうね？」

しかしシエラには他に選択の余地はないのかもしれない。

機工戦騎という魅力的な研究材料　それは彼女が求める理想の

“力”だ。

その“力”の持ち主はニヤリと不適に笑う。

「ああ、任せておけ」

キサラギは力強く断言する。その姿に頼もしさを覚えてシエラは僅かに微笑む。

「……………」

お互いに仕える主の意を汲んでリートとブライは、そんな二人を静かに見守っていた。

それから明けた翌日。“ヴァーリス帝国”の最前線　“ゲシュト砦”でユリ・ハイゼンベルグは調査の準備に追われていた。

最年少で宮廷魔術士の試験に合格した才女も、元は僻地の弱小領主であることに変わりはない。今回のように皇帝直々の命令で“魔神”の調査を依頼された訳だが、実際に用意出来る人員は少ない。

魔物や盗賊の多いハイゼンベルグの治安を考えれば、ユリが調査隊に割ける人数はどうしても限られてしまった。

勿論、アスラ皇帝もそのことは承知している。彼女のような若い力を潰してしまうのは彼も本意ではない。だから彼女の為に助っ人を用意していた。

部下に指示を出していたユリの下へ禿頭とくとうの男がやって来る。

「ふむ、準備は順調なようだのう。ハイゼンベルグ卿」

そう言つて男は気軽な調子でユリへと声を掛ける。男は人間で言つと初老程度の外見で、頭部は草一本生えぬ荒野であつた。

対照的にその身体は屈強で衰えを感じさせない。帝国の象徴である黒の鎧を身に纏う騎士であり、肩には近衛騎士の証たる真紅のマントを羽織つていた。

ユリは相手の姿を確認すると居住まいを正して敬礼で応える。

「はい、もう間も無くて完了します。アルフォンス様」

アルフォンス・アルノルト 皇帝の剣である近衛騎士団の一角。西天騎士団の長を務める男だ。魔族でも高齢の100歳を超える老体だが、先代の皇帝より仕える忠臣でその剣腕は人間の国にさえ知れ渡る程の達人である。

「はは、こんな老骨に敬語は無用だぞ」

「いえ、アルフォンス様のような偉大な方に敬意を払うのは当然です」

「そうか……先日の会議では肝の据わつた女傑だと聞いておつたのだが、残念だ」

「何と言われようと駄目です」

しょんぼりするアルフォンスにユリは頑として譲らない。同じ老人が相手でも諸侯の狸爺共とは大違いの態度だつた。

元よりユリは規律を重んじる真面目な性格だ。アルフォンスのよくな立派な先達に対して相応の敬意を払うのは当然の反応であつた。「それで兵は後どれ程で出せるかのう？」

「大所帯では“魔神”を刺激する恐れがあります。それは陛下の本意ではないでしょう。今は西天騎士団から人員の選出を行つていきます」

「我が精鋭から更に絞ると言うか！ はっはっは、これは傑作だ」
「はい、陛下のご期待に応える為に必要ならば……」

ユリも自分が生意気なことを言っている自覚はある。西天騎士団
と言えば帝国でも精鋭しか入団を認められない最高峰の騎士団だ。
そんな誉れ高い団員に対してユリがメンバーの選定を行うなど反発
されてもおかしくはない。

それに団長の立場からすれば手塩に掛けて育てた部下を小娘に選
り好みされるのだ。あまり好い気はしないだろう。

「うむ。その意気や良し！ 存分に選ぶが良いぞ。うはははっ！」
しかしアルフォンスはユリの言葉を豪快に笑い飛ばす。さすがは
皇帝が最も信頼する騎士の一人だ。並みの騎士とは器が違う。ユ
リは心中で老騎士に対する評価を更に上げた。

（しかし陛下は随分と“魔神”を警戒しているようだ）

彼程の人材を調査に寄越すとは皇帝が掛ける相当の意気込みが感
じられる。

ユリは皆の城壁から眼下の様子を見下ろす。石造りの砦内を兵士
達が慌しく動き回っている。ユリやアルフォンスの目的は“魔神”
だが、彼がせつせと働いているのは“人間”の襲撃にも備えている
からだ。

そう思うとユリの脳裏に一つの疑問が浮かぶ。彼女は折角なので
偉大なる先達の意見を聴いてみたくなかった。

「アルフォンス殿は“人間”のことをどう思っているのですか？」

「ほう？ “人間”か、うーむ……」

老年の魔族なら過去の遺恨で人間を恨む者も多い。歴戦の騎士と
もなれば並みの老人達とは違う考えを持っているかもしれない。

そんな期待を込めてユリは答えを待っていた。

「斬れば真つ赤な血を噴く」

「は？」

想像もしなかった答えに思わず呆けて聞き返す。それは無礼な態
度であったが、あまりに予想も付かなかったアルフォンスの言葉に

ユリは軽く動揺していた。

「師匠の受け売りだ。人も魔族も斬れば等しく同じ色の血を流す。魔物だってそうだ。色が違うのも居るが斬れば皆一緒だ。血を流し止らねば……いずれ死ぬ。それだけだ」

「随分と変わった方だったんですね」

「そうだな。だが剣の腕は本物だったぞ。いや、あれはもう怪物と言うべきだな。弟子のわしらは稽古の度に毎回殺されると喚いておった」

「は、はは……」

乾いた笑いしか出なかった。帝国でも随一の使い手と噂されるアルフォンスにそんな台詞を言わせる師の実力は、魔術の天才と評されるユリにとっても雲の上の話であった。

「さて、今度はわしから質問しようかのう。卿は今回の“魔神”についてどう考えておる？ 単独で砦の一つを陥落させる程の力……恐ろしいとは思わんか？」

「そうですね。“魔神”を相手に自分の力が通じるとは思えません。が、帝国の脅威となるかは見極めておきたいと考えています」

「ほう？ 謙虚な答えじゃのう。卿のような才気溢れる若者なら多少の驕り位はあるものじゃが……」

「いえ、自分の実力はよく理解しているつもりです。分不相応な行いは我が身を滅ぼします。父が良い例でした」

ユリの父は領地の改革に乗り出して失敗。挽回すべく努力したが、幾年と続いた激務に耐えかねて病に倒れた末に死んだ。

「若い者は無鉄砲な位が丁度良いのじゃがのう」

「申し訳ありません。それでも領民の生活を背負っています。無茶は出来ません」

「そうか……なら尚のこと不思議じゃな」

「不思議、とは？」

「卿からは気負いが感じられん。口では無茶は出来んと言っておるが、今回の作戦はかなり危険じゃ……それはわしが増援として来た

ことからわかるじやろう?」

「はい。確かに調査任務にしては物々しいです」

調査隊にはミスリルの装備は支給されず、代わりに鋼鉄を魔術で何重にも鍛え上げた特製装備が支給されている。これでは調査というよりは尖兵だろう。

「実はな、わしは陛下から殺れるようなら“魔神”を斬れ、と命じられている」

「ッ!? それは本当ですか? アルフォンス様」

「ああ、最終的な判断はわしに任せるそうじゃがな」

「それは……」

つまり皇帝の期待するユリの仕事はアルフォンスの護衛だ。皇帝が調査をユリに任せたのも、彼女が諸侯の中で柔軟な発想を持っていたからに過ぎない。

自分は陛下に期待されている訳ではない。ユリは動揺したりしなかった。

元より分を弁えるという信条の彼女が、この程度のことに取り乱したりはしない。

「じゃがのう。正直に言つてわしは怖い」

「怖い? アルフォンス様のような方でも恐怖を感じるのですか?」

「そりゃそうじゃよ。今も震えて小便ちびりそうじゃ」

「……………」

「嫌そうな顔をするな。安心しろ、ここで本当にちびつたりせん」
おどけた調子であったが、アルフォンスの言葉は真剣であった。

ユリは自然と彼の言葉に耳を傾ける。

「さつきも言ったが、卿は“魔神”が怖くないのか? 相手は皆を破壊するような伝説の化け物なのかもしれんのだぞ」

「しかし陛下の命です。私は帝国の臣です。主君の命には命を賭して従います」

「ふむ。卿のような若者が命を賭けねばならん。嫌な時代になったもんじゃのう」

「そうですね。私もそう思います」

世を嘆くアルフォンスにユリは賛同し頷く。

しばらくするとアルフォンスの部下が彼を呼びに来て、この場は解散となった。

「……………」

去り行く騎士の背をユリは能面のような無表情で見送る。

「早く終われば良いんです。こんな時代は」

彼女の零した小さな呟きを聞き咎める者は誰も居ない。

調査隊が出発するまでもう時間がなかった。

10・信頼（後書き）

どうも、如月八日です。少し遅くなってしまいました但更新します。感想やご意見などがある方は気軽に書いてください。

まだまだ未熟者なのでご意見やご感想は大変参考や励みになります。次回も書き上がり次第に投稿する予定です。

11・侵入者

最近のキサラギは順調であった。懸念されていた砦襲撃の件も、シエラとの話し合いだけで無事に解決した。

今もキサラギは快晴の空の下で、鼻歌混じりに【シュナイト】へと新装備の取り付け作業をしている。降り注ぐ暖かな陽気は近くに迫る夏の到来を感じさせた。

機体の上部からキサラギは新しくなった【シュナイト】を見下ろす。

「よし、これで固定は完了だ」

『お疲れ様です。マスター』

「ああ、リートもご苦労だったな」

お互いに労いの言葉を掛け合う。キサラギは機体から飛び降ると背後に眠る相棒の新たな姿を視界に収める。

【シュナイト】の黒を基調としたボディはそのままだが、間接部の補強以外にも“魔神”を意識した改造が施されていた。頭部に増設された二本のアンテナは、まるで角のようで単眼式のカメラと相まって伝説の“魔神”を見事に演出している。

角や間接部はミスリルの銀色を残しており、機体色の黒によく映えていた。

「しかし、これはどうみても悪役だな」

『はい。少なくとも正義の使者には見えません』

キサラギの視線は新しく両腕部に装着された無骨な手甲へと向けられる。自動盾を流用し作られた手甲は、その色を残した赤色で機工戦騎の豪腕を堅固に覆っている。

『攻防一体式手甲 “シュライ”』

「有り合わせの材料で作ったにしては、よく出来ていると思うぞ」
肘の部分からは二本の刃が飛び出し、以前よりも禍々しさを増していた。キサラギの要望通り“魔神”を演出する上で文句の付けよ

うのない出来栄えである。

「へえー中々に強そうじゃないの」

様子を見に来たシエラが【シユナイト】を見て感嘆の声を漏らす。あの晩からシエラはキサラギ達の様子を頻繁に確認しに来るようになっていた。

驚き半分、呆れ半分といった様子のシエラにキサラギは待ったを掛ける。

「違うな。強そう、なんじゃない。本当に強いんだ」

「あーはいはい。わかってるわよ」

適当に流されてしまう。最近のシエラは慣れたのか、キサラギの言うことに一々と騒がなくなってしまった。

「ちっ、つまらん反応だ」

キサラギとしては大袈裟に反応される方が、傍から見ていて面白かったのだが、シエラがもう慣れてしまったのなら、それは詮無したことだろう。

不満げなキサラギを無視してシエラは要件を伝える。

「朗報よ。リートの仮説が証明されたわ」

『そうですか……それではやはり』

「ええ、リートの睨んだ通り“どうりよくる”の不調や“つつしんしょうがい”は“魔素”が原因と見て間違いないわ」

シエラは細かな原理は理解していないので言葉のニュアンスは変だったが、彼女にはリートの提供したデータを“錬金術師”の立場から検証して貰っていた。

「そいつは凄いな。さすがは自称“天才”だな」

「ふん、間違うわ。自称じゃなくて本当に“天才”なのよ」

「くっ……」

皮肉で返すシエラにキサラギは唸る。

「ふふん……」

シエラも優越感たつぷりの挑発的な笑みでキサラギを見詰め返す。『私にすればどちらも似た者同士です』

「「違う!」」

『ほら、息もぴったりです。説明を続けてください』

リートの仲裁で二人は一先ず互いの矛を収める。

「論より証拠を見せた方が早いわ」

シエラに促されキサラギは彼女の研究室へと足を運ぶ。相変わらず室内は雑然としているが、この数日で既に何度も通っているので驚きもしない。

「アレを見てちょうだい」

シエラが指差す先には二つのガラス容器、一見して中は空っぽだがそうではない。

「この二つの容器には、それぞれリートのナノマシンが幾つか入っているわ」

キサラギが注視していることを確認すると、シエラは左の容器を指差して短く呪文を唱える。

「光よ」

初歩的な光の呪文で容器の中が淡く発光する。しかし限られた空間内では直ぐに“魔素”が枯渇してしまう。直ぐに光は弱くなり、やがて完全に消えてしまった。

「これで左の容器の中は“魔素”が存在しない空間になったわ。後は内部のナノマシン同士で交信をして貰う。その結果を比較すれば一目瞭然よ」

言ってシエラは紙に出力された実験結果を見せる。当然ながらセルデオに印刷機など存在しない。半ばシエラの私物と化している携帯用端末で印刷したのだろう。

結果はシエラの言う通り明白だった。“魔術”を使って空間内の“魔素”を取り除いた方が、ナノマシン同士の通信が円滑に進んでいた。

「なるほど、これは決まりだな」

『はい。どうやら“魔素”には信号の伝達を妨げる性質があるようです』

機工戦騎に使われている動力炉は、主戦場である宇宙空間での使用を前提として設計されている。“魔素”が満ちるセルディオでは、その性能を十全に発揮することが出来ないのだろう。

「しかし原因がわかったのは良いが解決策はあるのか？」

「密閉された空間に限定すれば、初歩的な“魔術”の行使で“魔素”を取り除けるわ」

「よし、無理だな。うーん、他に何か良い方法は無いものか……」

「ちょ、ちょっとキサラギ！ 幾らなんでも諦めるのが早過ぎるんじゃない？」

「そうは言ってもな。俺は“魔術”なんて使えない。習得する芽も無い。つてのは、お前の言葉だぞ？」

「そうね。天才に二言は無いわ」

「なら他の方法を考えるのは当然だろ」

「はんっ！ 天才の頭脳を見くびらないで欲しいわね」

盛大に見得を切ったシエラは、白衣のポケットから黒い腕輪を取り出す。やはり表面に“刻印”らしき無数の文字が刻まれている。

漆黒の台座の上には青空のように真っ青な宝石が埋め込まれていた。色こそ違つが以前に見せて貰つた“魔晶石”の腕輪にそっくりだった。

「コレは？」

「ふっふっふっ……よくぞ、聞いてくれました。それは私の天才的な頭脳が生み出した成果にして、我が数十年に及ぶ研究の結晶！

ルシフェラ・セリクスを並ぶ者なき偉人と称すに相応しい」

「ああー能書きはいい。つまりコレは何だ？」

「“翻訳”の腕輪よ」

「“翻訳”？ それは初めて会つた時にブライが掛けてくれたアレか？」

今でこそ忘れがちだが、セルディオの住人とキサラギの間には言語の壁が存在する。

初日にブライが掛けた“翻訳”は消費魔力も少ない簡単な“魔術

”だ。術者の力量によって多少の違いはあるが効力は大体で三日程度である。

「あんたは気付いてないかもしれないけど、三日経った時点でブライが“翻訳”を掛け直していたのよ？」

キサラギの場合は丁度そろそろ切れる頃合であった。

「そしてこれにも“魔晶石”が使われているの。周囲から“魔素”を吸収、装着者に術を掛け続けるようになってるわ」

「なるほど、確かにコレは便利そうだ」

「はい、コレはキサラギにあげるわ」

「良いのか？」

「ええ、“翻訳”なんて日常的に使つのはセルディオでもキサラギだけよ」

シエラの口調は一見して素っ気無い風だが、“魔術”の汎用化を目指す彼女の研究内容を考えれば、“翻訳”なんて使用頻度の低い術を選んだりはしないだろう。

「そっか……なあ、シエラ」

「何よ？」

「ありがとっな」

今度は自然にお礼の言葉が口に出せた。シエラがキサラギ達の存在を当たり前に感じるように、キサラギもシエラ達との生活に愛着を持ち始めていた。

親しき者には感謝の言葉を　それはとうの昔にキサラギが忘れた言葉だった。

一方でシエラはキサラギの殊勝な態度に少し戸惑っていた。

「ふ、ふん。私の頭脳に感謝しなさい」

「ああ、そうだな」

口調が照れ隠しなのだろう。そう思うとキサラギは表情が綻ぶのを自覚する。

これまでのキサラギの人生で気安い仲の者など皆無であった。それは孤児として生まれ育ったからには仕方の無いことであり、特に

キサラギも気にしたことは無い。

しかしシエラとは雇い主と傭兵の間柄であるが、同時に歳の近い同居人でもある。

(これはこれで悪くはない、か)

自称“天才”の口煩い少女だが、他人を気遣う優しい人格はキサラギには眩しくて、それとは別に好ましくも思っている。

二人に自覚は無かったが、それは“友人”と呼べる関係だった。

「ふふ……」

そんな二人のやり取りをリートは微笑ましく見守る。手の掛かる主人に初めて出来た友人に彼女は心から感謝した。

同じ頃に“魔の森”では帝国の調査隊が【シユナイト】の落下地点の調査を進めていた。

そこは荒野の中でも際立って破壊の爪痕が深い。ユリ達はこの場所こそが彗星の落下した地点だと考えていた。

「まったく、“魔神”の力とは恐ろしいもんじゃ」

「アルフォンス様はコレが“魔神”の仕業だとお考えなのですか？
既にユリも同じ結論に達しているが、彼女はそのことを表情に出さない。未だに飄々とした態度の老騎士は、あくまで軽い態度を崩さず問いに答える。

「これ程の破壊じゃ、無関係ということはあるまい」

「ならば伝説の通り“魔神”は天上界から来たのですか？」

「それはわしにも分からん、が……“魔神”の住処は案外近くにあるかもしれない」

何気ないアルフォンスの言葉に調査隊の面々に緊張が走る。“魔神”の調査と言っても彼らはまだ“魔神”と遭遇していない。森に入ってから大した発見も無かったので、このアルフォンスの言葉は彼らに“魔神”が持つ脅威を思い出させるには十分だった。

「その根拠をお聞きかせください。アルフォンス様」

調査隊の大半はアルフォンスが連れて来た西天騎士団の者である。彼らは知勇兼備の精鋭ばかりだが、ユリが連れて来たハイゼンベルグの兵達はそうではない。

ユリは彼らの為にもより単純な説明をアルフォンスに求めた。

「理由は単純じゃ、この大穴を見るに“魔神”は空を飛べんのだろ。飛べるのなら地面に激突するような真似はせん、違うかのう？」

「確かそうですね。グラナ砦の時も空から襲撃されたと言う報告聞きません」

「そして“魔神”のような巨体が山を登れば嫌でも痕跡を残す。なら“魔神”の通り道は一つしかあるまい」

「つまり“魔神”はこの森の奥に潜んでいる、と？」

「確証は無いがのう」

そう言うアルフォンスの顔は確信に満ちていた。

調査隊は彼の推理に従って“魔の森”の奥へと進路を変える。薙ぎ倒された木々を避けながらユリ達は進む。本来なら凶暴な魔物と深き森に阻まれる険しい道も難無く通ることが出来た。

既に森の生態系は激変しており、微かに残る森には魔物は棲んでいない。そのことに気が付くとユリは隣で隊列の中央を歩くアルフォンスへと声を掛ける。

「アルフォンス様」

「うむ、卿も気付いたか」

「はい。いかに森の規模が縮小したとしても魔物が一匹も居ないのは不自然です」

「そうじゃな。わしも小型の魔物すら見掛けんのは変じゃと思っておった」

「それに微かにですが“魔術”の痕跡を感じます」

「ほう？ わしには“魔術”は畑違いじゃ。卿の意見を聞こう」

最年少の“宮廷魔術士”であるユリは“魔術”に対して特に鋭敏な感覚を持っている。

その感覚が先程から告げているのだ。

「この先……恐らくあの木を境に感覚を狂わせる“幻惑”の結界が張り巡らされています」

「ほう、“幻惑”の術か。差し詰め魔物除けと言ったところじゃのう」

「かなり巧妙に隠蔽されています。術式も相当に複雑な物でしょう。術者はかなりの凄腕です」

「卿にそうまで言わせるとはのう。術者は随分と大した奴のようじゃな」

「はい。しかし術の規模や式の複雑さに対して術の選択に違和感があります」

「違和感じゃと？ それは一体どういう意味かのう」

「“幻惑”は初步の“魔術”です。感覚が鋭敏な者や知能の発達した大型の魔物には大した効果が望めません。規模こそ大きいですが、侵入者や魔物除けには信頼性に欠けます」

話し合いながらも二人は隊を止める。精鋭ばかりの調査隊とはいえ、わかつている危険に無防備に飛び込む程に無謀ではない。

「どうしますか？ アルフォンス隊長」

「行くしかあるまい。他に“魔神”の居場所に心当たりはないわい」

「わかりました。それでは私はこの場に残り結界を解きます」

「そうかのう？ 初步の術ならば気合で抵抗出来るんじゃないが」

「残念ながら私の部下は西天騎士団のような音に聞く精鋭揃いではありません。常時結界なら内部の“魔素”も希薄です」

常時結界とは読んで字の如く常に発動するタイプの結界だ。常時結界は術者を中心とした円周状に結界が展開される。

必然的に空間内の“魔素”は術者によって使用されているものであった。

「私は結界の解除を優先します」

そして“魔素”の薄い空間で魔術士が戦闘を行うのは困難だ。それ故に魔術士がこのような事態に遭遇した場合は結界の解除が最優先とされる。

「わかった。なら部隊を半分にしよう。わしは先行して内部の様子を探る。卿は結界を解除、その後に残りの者を率いて調査　どうじゃ？」

「はい。ならばコレをお持ちください。合流用の目印です」

「ふむ、ではお互いの武運を祈っておるぞ」

目印の布を腕に巻くとアルフォンスは部隊の半分を率いて結界の中へと進む。

その場にはユリとハイゼンベルグの兵達、そしてもう半分の西天騎士団員達が残された。

「む？　これは侵入者ですか」

屋敷の台所でブライは迫る異常を感知した。屋敷の結界に侵入者探知よりの術式も組み込まれており、結界を越えて何者かが屋敷に入ってくれば、彼に伝わるようになっていた。

「まったく、誰かは知りませんが無粋な者が居たものです」

彼の格好は執事服の上に淡いピンクのエプロンと、完全な料理スタイルだった。目の前の机には今しがた焼き上がったばかりの焼き菓子が並んでいる。

「それで数の方は　ッ!？」

ブライのような達人ともなれば、敷地内に侵入する者達の大まかな数位は把握出来る。

その数の多さに彼は戦慄した。

「くっ、この数はただの賊ではない！」

判断してからのブライの行動は迅速だった。素早くエプロンを脱ぎ捨てると彼は駆ける。

その間に“魔術”で虚空より愛剣を取り出し腰に帯びることも忘れない。

「お嬢様は確かこの時間はキサラギ様の様子を見に行っている筈です」

シエラの屋敷は上から見ると凹の字型をしている。【シユナイト】の置かれた裏地へ行くには廊下を突きつて窓から外に出るのが一番だ。

しかしブライはあえて中庭を目指す。ここまで近づけば気配などを読まずとも知覚することが出来る。

中庭には若い魔族が四人、まるで周囲を窺うように立っていた。身に纏う鎧から彼らの所属が帝国であることを見抜くと、ブライは密かに胸中で舌打ちする。

「失礼ですが、どちら様でしょうか？」

そんな内心は微塵も感じさせずにブライは優雅な一礼で彼を迎える。所属が帝国である以上は連中に対して迂闊に手を出す訳にはいかない。

「な、何だ？ この爺さんは……」

「物凄い速さだったぞ」

「あ、ああ……団長みたいだった」

危険を承知で“魔神”の調査に来ていた調査隊は、礼儀正しく執事に出迎えられ目に見えて戸惑っていた。

「わ、我らは“ヴァーリス帝国”の調査隊である。この地には“魔神”の調査で参った。何か知らぬか？」

さすがは西天騎士団員 帝国が誇る精鋭なだけはある。湧き上がる疑問を押し込めて、彼らは己の職務を全うしようとした。

「調査隊……ですか？」

それに対してブライは彼らの言葉に自分が犯した失敗に気付く。

（私としたことが！ 帝国が調査隊を送り込んで来ることは、情報として知っていた筈なのに……不覚です）

今直ぐに主の下へ参じて誠心誠意に詫びを入れたかったが、今は無理だった。

帝国の調査隊 つまりは“魔族”の進入を許してしまった以上、彼らをシエラの下へ行かせる訳にはいかない。シエラの容姿を見れば彼らは気付いてしまう。

彼女はまた追われる身となるだろう。

(冗談ではない！)

そんなことは彼女の従者として 否、少女の親代わりの身として許せなかった。

ならばブライの選ぶべき道は一つである。

「残念ですがお引取りください」

鋭い眼光が騎士達を貫く。ブライはその場に立っているだけだ。彼は腰の剣には手さえ掛けていない。

「……なっ……」

しかし彼らは身動き一つとれなくなる。帝国の剣と呼ばれた天下の西天騎士団が、枯れ木のような老躯に完全に吞まれていた。

だが、彼らを驚かせていたのはブライから発せられる重圧が彼らのよく知る人物に比肩する程のレベルだったからだ。

「お引取りください」

ブライは淡々と同じ台詞を口にする。今度は腰の剣に手をやり軽く鏢を鳴らす。

騎士達は動かない。ある意味ではその行動は正解である。ブライは口では退けと言っているが、背を見せれば瞬き一つの間三人は斬り伏せてやるつもりだった。

屋敷の場所を知られた以上、一人たりとも生かして帰す気は無い。

「ほう？ これは意外な場所で懐かしい奴に会ったのう」

「ッ！？」

ブライは素早く身を伏せ転がる。数瞬遅れてブライの頭部があった空間を、一振りの白刃が通過した。

「はっはっはっ！ ブライよ。腕は鈍ってないようじゃな」

歯を剥いて笑うアルフォンスにブライの鉄面皮が歪む。忌々しうに吐き捨てる名はブライにとっても旧知の名前だった。

「貴様は……アルフォンス・アルノルト」

「そう嫌そうな顔をするな。お互いにしぶとく生きておったのじゃぞ？ もっと喜べ」

「会うなり斬り掛かって来るような奴がよく言います」

ブライの額に青筋が浮かぶ。彼にしては珍しい反応だ。この場にシエラが居れば目を丸くして驚いたことだろう。

「まあ、そう怒るな。数十年振りに門弟同士が出会ったんだ。ここは一つ刃を交えたくなるのは剣士の性じゃよ」

「まったく、厄介な客が来たものです」

ブライは油断無く立ち上がると腰から剣を抜き放つ。対峙するアルフォンスもゆったりと剣を構える。

「だ、団長」

「これは一体？」

「お知り合いなのですか？」

西天騎士団の者達は常に無い程に生き活きとした団長に、口々に疑問をぶつける。

しかし団員達の戸惑いをアルフォンスは一蹴した。

「お前らは下がっておれ。巻き込まれれば死ぬぞ？」

「……」

彼らは黙って距離を置くと二人の老剣士の戦いを見守る姿勢を取った。

(本当に厄介な客が来てしまったものです)

一筋の汗がブライの頬を伝う。それは彼の焦りを表しているかのようだ。

落ちた滴が地に着くよりも早く 二人の剣が衝突する。

かつてのライバル同士の対決が今再び火蓋を切った。

11・侵入者（後書き）

どうも、如月八日です。今回も完成した分を投稿します。
ご意見、ご感想は随時募集中です。

誤字などの報告でも結構です。お待ちしております。
次回の投稿も執筆が完了次第に投稿するつもりです。

12・宮廷魔術士

「はあああー！」

交差する刃が甲高い音と共に火花を散らす。

本来ならば屋敷の正面を飾る美しい庭園は、訪れる客人を華やかに迎える筈だったが、今は二人の老人が刃を交える物騒な空間へと変貌していた。

「でいえええあー！」

アルフォンスの直剣がブライを唐竹に割るべく、肉厚の刃が一直線に振り下ろされる。

“剛剣” その剣は彼の豪快な性格を表すかのように真っ直ぐだ。

「ふっ！」

風を切り迫る刃をブライは一寸の見切りで回避。空かさず鞘から剣を抜くと、アルフォンスの首筋へ鋭い一撃を繰り出す。

“柔剣” 最小限の動きで攻撃を捌き、急所への一撃で敵を屠る。合理的な思考を常とするブライの性格を表していた。

「おっと……」

しかし両者の実力は拮抗していた。アルフォンスはブライの一閃をまるで予知していたように避ける。

互いに必殺の一撃がやり過ごされる。

「はっ！」

ブライの蹴りとアルフォンスの拳が交差し、互いに腕と足で防御される。

全くの互角である。両者は互いに致命の一撃をいれるべく剣を交わし合うも、その攻防は完全な引き分けに終わった。

「う、嘘だろ」

騎士の一人が呆然と呟く。口に出したのは一人だが、周囲の者も同感である。

帝国屈指の剣士。その剣技だけで一兵士の身分から現在の地位まで上り詰めた尊敬すべき人物だ。

だが、今回の敵はそんな団長と互角の戦いを繰り広げている。それはアルフォンスの強さをよく知る部下達にとっては、まさに悪い夢のような光景だった。

二人の剣が交差する。もう何度目かわからない衝突は、やはり決着が付かずに終わった。

「……………」

二人は無言で剣を構える。両者の距離が開くと絶え間なく続いていた激戦に、一時だが空白が生まれる。

「くつくつく……………滾る。血が滾るのう」

「相変わらずの戦闘狂ですか……………変わりませんね。アル」

「ふん、変わらんのはお互い様じゃ。相も変わらず清ました顔をしておるが、お前も内心では楽しんでおる。違うかのう？」

「いいえ、私の使命はここを護ることです。闘争に喜びを感じる趣味はありません」

「ほう？ お前がそこまで入れ込むとは……………随分とこの屋敷に拘ってるようじゃのう」

「ちつ、勘の鋭さも衰えていないようですね」

アルフォンスは昔から勘が良い。それは先程までの戦闘においても遺憾なく発揮されていた。

「お前もこんな秘境に籠っていたにしては剣のキレは衰えていないようじゃな」

「こつ、無礼な客が多くては腕が鈍る暇ありませんよ」

「くつくつく……………“魔神”の調査で来てみたが、これは是が非でも調べたくなつたぞ」

「さつさと帰って欲しかったのですが失敗しました。これは長引きそうです」

数度だけとはいえ、ブライは剣を交えてみて理解していた。

剣や格闘ではアルフォンスの方に分がある。才能にも恵まれ、皇

帝に仕えて戦場で技を磨いてきたアルフォンスには敵わない。

それは彼らが同じ師を仰いでいた頃から変わらない事実でもあった。

(しかし勝敗は腕っ節だけで決まるものではありません)

ブライにはアルフォンスには切れない手札がある。

「すうー……はあ」

ゆっくりと息を吸い込み吐き出す。心を鎮めて周囲から“魔素”を取り込む。

体内で変換された“魔力”が燐光となってブライの全身から立ち昇る。

「大地よ」

起動の呪文を唱え“魔術”を完成させる。極々短い時間で紡がれたのは、己の肉体を強化する魔術だ。

「ふむ、やっと本気になったようじゃな。火付きの悪い奴め」

「性分ですからね。あなたも“魔術”は苦手でしょう？」

「わしには剣がある。小手先の技など必要ない」

「頭の固い人です。その小手先の技に勝てなかったのを忘れたのですか？」

「ふん、わしの記憶が確かなら負けてもおらん」

これまでの戦績は全戦引き分けに終わっている。数十年と会っていないかった二人だが、互いに同門のライバル同士 互いに決着を望んでいた。

「今日で決着を付けてやるぞ！ ブライ！」

「望む所です！ アル！」

二人は再び駆け出して行く。両者の激突で大気が震える。柄にもなく熱くなっていたブライは気付かなかった。

今も主の身に危険が迫っていたことを……

強引に結界を破ったアルフォンスの侵入はシェラにも感知されて

いた。

「ちっ、仕事よ。キサラギ」

「侵入者か？」

「そうよ。随分と察しが良いわね」

「ここは大事な拠点だ。屋敷内の情報は逐一入るようになってい
『主に私が頑張った成果です』」

屋敷内にはナノマシンの子機が無数に漂っている。結界内では“魔素”の干渉も受けないので、ナノマシンという“目”を持つリー
トに把握出来ない場所など無い。

「頼りにしているわ。きつとブライも迎撃に出ているでしょう。あ
んたは私の護衛を優先しなさい」

「了解した。敵の数はわかるか？ リート」

『正門から四人……いえ、五人です。とんでもなく強い老人がブ
ライさんと戦っています』

「ブライと？ 並の相手ならブライと切り結ぶことすら出来ない筈
よ」

「なら、敵は並以上の強さなんだろう」

『どうしますか？』

「そうだな……」

今のキサラギはいつもの軍服に拳銃とナイフしか装備していない。
相手がブライ以上の実力者である可能性があるなら頼りない戦力だ。
「弾数も心許ない。【シユナイト】の所まで移動する」

「ええ、エスコートは任せるわよ？」

「俺にマナーを期待するな」

シエラの軽口にキサラギは冗談で返すと彼女の手を引き裏地へ向
かう。シエラの格好はいつも通り白衣なので、あまりスピードを出
せそうもない。

二人は早足程度の速さだが順調に【シユナイト】を目指す。

しかし不意にシエラが歩みを止めた。

「え、嘘ッ！？ ちょ、ちょっと待って、キサラギ」

「どうした？」

目に見えて狼狽えるシエラの姿に、キサラギの脳裏に最悪の予想が過ぎる。

だが、事態はキサラギが考える“最悪”ではなかった。

「不味いわ。屋敷の結界が完全に解除されたみたい」

「何？ おい、それじゃまさか」

『マ…タ…！ 通……態が…』

リートの声にノイズが走った。彼女の本体は新装備の点検の為に【シュナイト】の中にある。

「“魔素”は空間に均一に存在しようとする性質があるの」

「くそつ、外から“魔素”が流れ込んで来るってことかよ」

“魔素”の濃度が高かければナノマシンの通信は阻害される。状況は奇しくも先程のシエラがした仮説を証明する形となっていた。

「良かったな。仮説が証明されたぞ。さすがは天才だ」

「もう！ 皮肉を言ってる場合じゃないわよ。強敵と交戦中とはいえ、プライが目の前でむざむざ結界の解除を見過ごす筈がないわ」

「なるほど、少なくとも結界を解除したのは別口……別働隊が居ると見る方が自然か」

生憎と今はリートと連絡が着かないので確認するのは無理だが、事態の悪化はキサラギにも理解出来た。

「ちっ！ 少し急ぐぞ」

「え？ ちょ、ちよつと、キサラギ!？」

キサラギはシエラの手を引き寄せると、その小柄な身体を小脇に抱え走り出す。シエラのペースに合わせる必要がなくなったので、キサラギもナノマシンで強化された身体能力をフルに利用して走れる。

殆ど飛ぶように屋敷の廊下を爆走するキサラギ、腕一本で抱えられたシエラには堪ったものではない。

「ちよつと淑女に対してこの扱いはないんじゃないの!？」

シエラは自分の扱いに憤慨する。確かに脇に抱えて運ぶ姿はまる

で荷物を扱おうようで、若い女性を運ぶにしているは色気が全くなかった。

「言っただろ？ 俺にマナーを期待するな」

「うがぁー！」

ニヤリと笑うキサラギにシエラの怒りが臨界点を超える。

手足を振り乱して咆える彼女だったが、【シユナイト】へ向かう途中で中庭に辿り着くと、その光景に息を呑んだ。

『グルルルツ……』

群れを率いて獲物を襲う魔犬“ヘルハウンド”が八匹 剥き出しの牙から涎を滴たらせてキサラギ達を出迎えていた。

「キ、キサラギ……」

シエラが不安げな瞳でキサラギを見上げる。

「こいつ等が結界を破ったのか？」

「違うわよ！」

キサラギは微塵も動じていなかった。

「こいつ等は森の魔物よ。結界が無くなったから入って来たみたいね」

「わかった。少し下がってる」

シエラを抱えたままでは戦い難いので、彼女を立たせると拳銃を抜く。無駄弾を撃つ気はないが、今は時間が惜しい。

『ガアアアア！』

キサラギを囲んでいたヘルハウンドの半数が一斉に飛び掛る。残る半数は獲物が避けた先へと飛び掛かれるよう身構えていた。

キサラギは素早く視界に入った二匹に狙いを付ける。引き金を引くのは二回だけ、弾は無駄にしない。

「ッ！」

放たれた弾丸は寸分変わらず魔犬の眉間を打ち抜く。威力が強過ぎるのか撃たれた魔犬は頭部が弾けて肉塊となっていた。

しかし二発では二匹までしか対処出来ない。

「はっ！」

逆手に持ったナイフを振り返りざまに一閃する。それだけで背後

から迫っていた二匹は首を刎ねられ絶命した。

ナイフには血糊一滴も残っていない。最先端の科学技術を凝らして研磨された白刃は、ナイフでさえもセルディオのどんな刃より鋭かった。

「グ、グルル……」

たった一度の攻防で魔物の本能は、キサラギとの絶対的な実力の差を悟らせる。機を窺っていた残りの四匹はすっかり及び腰になっていた。

「す、凄い……」

シエラは思わず感嘆の息を漏らす。ヘルハウンドを圧倒したキサラギの戦闘力は彼女が知るブライに匹敵するだろう。

「いいえ、もしかして身体能力だけならキサラギの方が」

シエラがぶつぶつと呟いている間、キサラギは油断無く残るヘルハウンドを睨み付ける。既に勝てないことを悟っている魔犬達は、キサラギの重圧に屈した。

一頭が踵を返すと残る三匹も後に続いて行く。

「行ったようだな。シエラ」

「な、何かしら？」

「他の魔物が侵入していると思うか？」

「ああ、それなら大丈夫よ。“魔の森”の魔物は縄張り意識が強いから、自分より強い者の縄張りを侵そうとはしないわ」

ヘルハウンドが侵入して来た以上は、他の雑魚が屋敷に近付くことはないだろう。それに大型の魔物は森の大半が消し飛んだ所為で、そもそも森から出てしまっている。

「そうか。ならこの足音は侵入者の方だな」

「は？」

状況が呑み込めず疑問符を浮かべるシエラに背を向け、キサラギは中庭を林へと銃を構える。その先には屋敷を囲む塀があった。

境界が消えた今、塀は乗り越えられる障害物でしかない。

「なっ!？」

そしてキサラギの言う通り、シエラ達の前で塀を飛び越え侵入して来る者が現れた。

侵入者の姿を目視したキサラギは眉を潜める。

「女、か」

侵入者は人間であれば二十代にも満たない少女の姿をしていた。

シエラと同じ艶やかな黒髪を腰まで伸ばしている。女性らしい起伏に富んだ身体から判断するにシエラよりも年上だろう。

何より少女の浅黒い肌と金眼を見れば、何者であるかは明白であった。

「魔族……帝国の輩か」

しかしシエラはキサラギとは別の点に着目していた。

「漆黒のローブ……宮廷魔術士ね」

「宮廷魔術士？」

初めて聞く言葉に背後に庇うシエラに視線をやる。無論、敵に付け入られるような迂闊な隙は作らないよう配慮する。

「魔術士に送られるセルディオで最高位の称号よ。“人間”と“魔族”が争う遙か昔から存在するの」

だが過去に比べて大陸内でも複数の国家が乱立し、南北で“人間”と“魔族”が対立するようになってしまっただけからは、その選定の基準も大きく変わってしまった。

種族的に“魔術”の扱いが巧みな“魔族”だけの国家では、“宮廷魔術士”の選定基準も厳しくなるのは必然である。

「この女が帝国の宮廷魔術士だとしたら……」

それはセルディオでも屈指の“魔術士”であることを意味していた。

シエラから講義を受けているとはいえ、キサラギにとって“魔術”とは未だに謎の技術であることに変わりはない。

「なるほど、それは強敵だ」

キサラギは油断なく右手で拳銃を、左手でナイフを逆手に構える。既に臨戦態勢を整えているキサラギとは裏腹に、少女は気負った

様子もなく、探るようにキサラギを見詰めていた。

その視線はやがて背後のシエラへと向かう。

「金眼の人間だと？ いや、そうか。そういうことか」

少女は一人で納得するように頷くと、途端に顔を顰める。その瞳には暗い嫌悪の感情がありありと浮かんでいた。

「貴様、出来損ないの混ざり物だな？」

「ッ！」

「ふん、こんな所にこそそと隠れ住んでいる筈だ。貴様ら混ざり物に安寧の地など無いからな」

「くっ……」

シエラは悔しそうに俯く。普段の彼女なら得意の頭脳で猛然と言い返しそうなのだが、今の彼女は好き放題に言われても黙って耐えていた。

「おっと、雇い主への暴言はそこまでだ」

「雇い主？ そうか貴様が……」

先程と同じ探るような視線が頭の上から爪先まで這い回る。少女は銃口を向けるキサラギに問い掛けた。

「一応だが名前を聞いておこう。人間」

「ただの傭兵さ。悪いが侵入者は追い出すよう言われているんで、な！」

威嚇の意味を込めて少女のギリギリ真横を通り過ぎるよう発砲する。

放たれた弾丸はセルディオでは考えられない速さで迫り 少女の近くで弾けた。

「何！？」

「馬鹿！ 魔術障壁よ！」

予想外の結果に僅かだがキサラギの注意が逸れる。

この時のキサラギは知らなかったが、戦闘時に“魔術士”は自身の周囲を変換した“魔力”を循環させて生み出した障壁で覆っているのだ。

「ちっ！」

咄嗟に横へ跳ぶ。直後に一筋の光がキサラギの横を通り過ぎる。

「あ、ぐう……」

「キサラギ!?」

シエラの声に反応したお陰で直撃は避けられたが、僅かに掠った脇腹から血が流れた。

駆け寄ろうとするシエラを制止し、キサラギは少女を見上げる。

「随分な挨拶だったな? 傭兵」

「はっ、生憎と育ちが悪くてね。マナーを期待するのはお門違いだ」「口が減らない奴だ。立て、その程度の傷は平気だろう?」

「ちっ、おまけに油断もしない、か」

苦悶に歪めていた表情を一転、キサラギは何事も無かったように起き上がる。

傷は既にナノマシンが修復している。掠り傷なら数秒で完治する筈だ。

だが、状況はキサラギにとって不利だった。

「信じられない。キサラギの銃を弾くなんて……」

シエラは先程のヘルハウンドとの戦闘を見ているので、キサラギが持つ銃の威力は理解しているつもりだった。

しかし少女はその銃弾を魔術障壁だけで防いでしまった。

「これが宮廷魔術士の力だって言うの」

“魔術障壁”とは詠唱も必要とせず、“魔素”の変換という術者にとつては呼吸同然の行為によって発生する。言ってしまうえば“魔術”の副産物でしかない。

その強度は術者の技量によって左右される訳だが、宮廷魔術士ともなると単純な物理的防御力では破城槌の一撃すら耐えると言われている。

「銃が効かないとは……」

まさかキサラギも“魔術”で拳銃の弾をあつさりと防がれるとは思っていなかった。

更に純粹な魔術士と戦った経験が無いこともマイナスだ。初戦から大陸でも片手の指で足りるような凄腕が相手では僅かな油断ですら命取りとなる。

「残念だったな、傭兵。少しでも魔力があれば別だが、物理的な力だけで私の障壁を抜くことは不可能だ」

「!?!」

不適に笑う少女にキサラギは違和感を覚える。

(何故そんなことがわかるんだ?)

セルディオの住人なら赤ん坊でも“魔素”を感知し、個人差こそあっても“魔力”に変換することが出来る。

だがキサラギにはそれが出来ない。セルディオの住人なら当たり前に出ることが出来ないのだ。

「まあ、尤も“魔神”のような巨体であれば力付くで抜くことも可能だが、な?」

(この女……何か知ってるのか?)

疑問は尽きないが、状況はキサラギに考える暇を与えてはくれない。

相手が何者であれ、少女にキサラギの攻撃が通じないのは事実だった。

(それにさっきの攻撃で、この女は詠唱をしていない)

キサラギが回避した先を盗み見る。その先にあった花壇は光の道筋に沿って大きく抉れていた。

もし少女が全力で“魔術”を行使すれば一体どれだけの威力があるのか想像も付かない。

「これが“魔術”……セルディオの力か」

キサラギの頬を一筋の汗が伝う。背筋に鉄の棒を差し込まれるような、その感覚はキサラギにとっては馴染み深くもあり、また最近では忘れがちだった感覚を蘇らせる。

それは“畏怖”　キサラギがこの星に来て初めて流す冷や汗だった。

12・宮廷魔術士（後書き）

今回も書きあがった分を投稿します。

ご意見やご感想があればご自由にお書きください。

次話も執筆が完了次第に更新する予定です。

13・障壁

「どうした、傭兵！ 威勢が良いのは最初だけか？」

ユリが正面のキサラギへ手を翳すと、彼女の掌から淡い光の矢が放たれる。

それは“魔力の矢”^{マジック・アロー}という下級魔術で、牽制から攻撃と幅広い用途で使えた。またある程度の実力があれば無詠唱で扱えることからセルディオで最も有名な攻撃魔術でもある。

だが、ユリの唱えるソレは僅かな溜めで連射が可能だった。

「くっ！」

鋼鉄すら貫く光の矢が頬の横を掠める。直撃していたらと冷や汗が滲むが、畏縮している余裕もない。

立ち止まればその場で即、串刺しだ。

「我が手は破壊の標！ 咆えよ、炎！」

ユリが翳した腕^{かざ}を薙ぎ払う。

「ちい！」

短い詠唱が耳に入る。それと同時にキサラギは大きくコースを変更、殆ど直角に進路を曲げて跳躍する。

直後　キサラギが居た空間を猛烈な勢いの炎が吹き荒れた。拡散する熱波が搔いたばかりの冷や汗を一瞬の内に蒸発させる。

「畜生、好き放題に撃つてきやがって、よ！」

反撃とばかりにキサラギが炎の壁へと銃弾を撃ち込む。ダメージを与えられるかは微妙であったが、キサラギの目的はあくまでシェラの護衛である。

案の定、キサラギの反撃はユリの魔術障壁によって無力化される。だが、彼女の注意を引くことは出来た。

（けど、このままじゃ不味いな）

キサラギは窮地に立たされていた。

今は紙一重で攻撃を回避しているが、キサラギの体力も無限では

ない。ナノマシンの補助こそあれども疲労が溜まればいずれは被弾してしまう。

（おまけに奴はまだ本気じゃない）

その証拠に開戦からずっとユリが使ってる魔術は下級の物ばかりだ。

（くそつ、大きいのが来たら避けきれぬ自信が無いぞ）

如何にナノマシンの治癒力を以ってしても一撃で即死させられてしまえば、そこからの蘇生は不可能である。

（どうする？ 俺だけで【シユナイト】を取りに行くか？）

機工戦騎のパワーならユリの障壁を力技で突破することが出来る筈だ。

（いや、駄目だ。奴の目的は知らないが、シエラを残して行くのは危険過ぎる）

キサラギはユリがシエラを見るあの冷たい目を忘れてはいない。

詳しい事情は知らないが、シエラに対してユリがあまり良い感情を持ってないのは確かだろう。

（何か、何か突破口は無いのか）

高速で思考しながらもキサラギはユリの攻撃を回避する。連続で撃ち出される魔力の矢は未だに衰えを知らず、彼女の魔力切れを期待することも無理なようだ。

「くつ、ちょこまかと良く避ける」

「はん！ 生憎と俺の攻撃は効かないからな。避け続ける以外に手は無いんだよ」

「良く言う。その目は反撃を諦めた者の目ではないぞ」

「まったく、厄介な相手だ」

ユリは攻撃の手を緩めない。自分が圧倒的に有利でも油断しない。「……………」

キサラギはゆっくりとシエラへとにじり寄る。攻撃に巻き込まないよう彼女と距離を置いていたが、勝ち目が薄い今は離れ過ぎるのは返って危険だとキサラギは判断した。

「キサラギ……」

キサラギがそばまで来るとシエラが不安げに見上げてくる。精緻を凝らした人形のように端整な顔が今は恐怖で曇っている。

「いざとなったら俺が時間を稼ぐ。その隙に逃げる」

それは傭兵として請け負った仕事を果たすべきだという使命感だけではない。

この一週間で変わったのはシエラだけではなかった。キサラギも、そして恐らくリートも屋敷での生活を気に入っていた。

「そんな……」

シエラの顔が絶望に染まる。如何にキサラギが身を挺して戦おうと、ユリは易々と逃がしてくれないだろうことは彼女にもわかっているのだ。

そんな彼女の姿にキサラギの胸が痛む。

（ちつ、そんな顔するな。これだから護衛は面倒なんだよ）

護ることは奪うことよりも難しい。傭兵として様々な仕事をしてきたキサラギは、そんなことは十分に理解しているつもりだった。

しかし今はその事実が嫌という程に重く押し掛かる。

（畜生、俺が軽率だった）

たった一度の襲撃だけでセルディオの戦力を過小評価し、“魔術”という未知の力を見誤ってしまった。

（生身じゃ勝てない。それに　　）

チラリと背後のシエラを見やる。

「う、うう……」

彼女は青い顔で震えている。そこに普段の不遜さは見る影も無く、小柄で華奢な外見通りの印象しか抱けなかった。

（せめてシエラだけは……絶対に逃がしてみせる）

キサラギが密かに決意を固めた。

「ふんっ……」

一方でユリはそんな二人を見て顔を面白くなさそうな顔で見ていた。

（出来損ないの混ざり物が）

“魔族”と“人間”の対立するセルデイオでは混血は禁忌として迫害されている。それは彼女のような若い魔族も例外ではない。

何よりも彼女が混血を憎む理由は別にあつた。

（父上……）

脳裏を過ぎる苦々しい記憶に胸が痛む。魔術士は常に冷静であることを信条とするが、この時の彼女は少しだけ冷静さを失っていた。

「……………」

現在の戦況は膠着状態にある。キサラギはユリの攻撃を恐れて迂闊な攻撃を控え、ユリは調査の名目で来ている以上、この場でキサラギを殺すつもりは無かつた。

その証拠に魔力の矢を始めとした下級の魔術しか使用していない。彼女が最初から殺す気なら問答無用で上級の魔術でシエラと一緒に吹き飛ばしている。

彼女はこの場に“魔神”と傭兵の調査に来たのだから

ユリは先程までのキサラギの動きを回想し、評価を付ける。

（確かに動きだけなら騎士団でも通用する　　が、魔力を扱えないのは致命的だ）

並みの魔術士が相手ならあの連射可能な銃で障壁を突破して打倒することも出来るだろう。

しかし予想通りユリのような宮廷魔術士が相手では勝利することは不可能だ。

（奴に勝機は無い。冷静な判断力があれば逃げることを選択する。勝つのは無理でもあれだけ動けるんだ。一人なら離脱することも可能だろう）

だが、現実はずう。キサラギはシエラを護る為に今もユリに立ち塞がっている。

「随分と義理立てするのだな？　傭兵」

気が付けばユリは目的とは関係のないことを口走っていた。

調査という意味では正しい問いだが、ユリが純粹にキサラギの行動に疑問を持っていたのも事実である。

まさかキサラギも戦闘中に話し掛けて来るとは思っていなかったらしい。それでも時間稼ぎになればと、あくまで警戒を解かず質問に答える。

「仕事だからな。傭兵業は信頼が命なんだよ」

確かに尤もらしい理由ではある……が、この場面で本物の命より信頼を優先する筈がないことは、同業者ではないユリにもわかる。

「くつくつ……少しお前に興味が湧いたぞ」

「そいつは光栄だね。“魔族”は“人間”が嫌いだったんじゃないのかよ？」

「ふん、それはお前には当て嵌まらないだろ？ 傭兵」

「……………」

ユリが挑発的な笑みで答えると、キサラギが目を細めた。どうやら頭も相当に回るようだ、ユリは自分の中でキサラギの評価を一つ上げる。

「いつまでも“傭兵”では呼び難い。少し遅れたが互いに自己紹介といこうではないか？」

「確かにお前じゃ呼び難いな」

「私はユリ・ハイゼンベルグ 帝国所属の宮廷魔術士だ」

「……キサラギだ。大層な肩書きは無い。ただの傭兵だ」

「ふん、ただの傭兵、か」

「……………」

キサラギの簡素な答えにユリは益々関心を深める。彼がユリとの会話を続けるのは頭の中で打開策を模索しているからだろう。冷静に自分の置かれる状況を分析して思考する姿は、帝国を牛耳る諸侯の老人達には無いものだった。

（あの老害共は自分達の驕りにすら気付いていないのだろうな）

そうでなければ正体不明の“魔神”を仲間だとは言わないだろう。

ユリはキサラギへ調査隊の目的を話した。

「この場所には調査の為に来た。尤も私は付き添いだがな」

「お前が付き添いだと？」

「ああ、そうだ。陛下の御下命を受け部隊を編成したが、私など所詮はお飾りだろう。調査隊の大半は西天騎士団の者だし、実質的な指揮を執っているのはアルフォンス・アルノルト様だからな」

ただしユリも団長のアルフォンスが、長年のライバルと決着を付けるべく絶賛私闘を繰り広げているとは夢にも思わなかったが……

「なっ、西天騎士団って、それにアルフォンス・アルノルトといえば帝国屈指の騎士！ エリート中のエリート部隊じゃないの!？」

予想外の大物の名前にシエラが悲鳴を上げる。

「ふん、あの小賢しい結界を張ったのは貴様か？ 術式は高度であったが術の強度が低過ぎる。簡単に解除出来たぞ」

「くっ！ ぐぐぐ……」

一瞬、シエラは状況を忘れ悔しさに歯噛みする。しかし無闇に敵を刺激するのは愚かだと、自分を戒めた。

「さっきも言ったが私の目的は“魔神”の調査だ。“魔神”について知ってることを話せ」

ユリはあえて断定するように話を進める。彼女の使命は“魔神”の実態を調査し、皇帝に報告することだ。

（だが、それだけでは駄目だ。折角あの老害共がくれた好機……みすみす逃すのは勿体無い）

人間達を恐怖され、今後も大陸を震撼させるであろう“魔神”……接触を図る機会は今からもそう多く持てない筈だ。

「“魔神”？ さて、何のことやらさっぱりだが」

「惚けるのは止せ。グラナ砦を落したのはキサラギ、お前なのだろう？」

「ッ!？」

ユリの核心を突く発言に二人は目を見開く。キサラギは直ぐに表情を消すが、シエラの方は明らかに動揺していた。

「“魔神”はこの屋敷にある（・・）のだろうか？」

「お前……………一体何者だ？」

ここに来て初めてキサラギの瞳にユリへの明確な敵意が宿る。翡翠色の瞳が真っ直ぐにユリを睨み付けていた。

ユリのセルディオの住人ならしないだろう言い回しから彼女への警戒心を強めたのだろう。

「ただの宮廷魔術士さ。まあ、地方の弱小領主でもあるがね」

「ちっ、簡単に教えてくれる気はないか」

「教えるのはお前の方だ、キサラギ。ここで私相手に時間を稼ごうと、直に他の隊員が“魔神”を見付け出す」

アルフォンスが駄目でも彼の部下達は既に屋敷内を調査している。“魔神”のような巨体がいつまでも見付からない道理は無い。

「さあ、大人しく“魔神”に関して知ってる情報を話せ」

ここに決着は付いた。まだユリもキサラギも共に致命傷を負ってはいないが、状況は彼女の勝利は揺ぎ無いと雄弁に語っている。

ユリはこの冷静で口の減らない傭兵が、一体どんな顔で悔しがるのか興味もあった。

キサラギへ視線を戻す……………が、事實は彼女の予想と全く異なっていた。

「それは……………良いことを聞いたな」

キサラギが薄く笑みを浮かべる。その笑みにユリは理由も無く悪寒が走った。普通ならただのハツタリとも取れる言葉だったが、ユリは微塵もそうは思わなかった。

「それは一体……………」

「どういう意味だ？」

そう続けようとしたユリの声は誰にも聞こえなかった。

『G u u u o o o o o o o o o o A a a A a a a a a ! ! ! 』

地を揺らすような咆哮が響き渡る。聞いたこともない声だった。一体どんな生き物が上げる声なのか、まるで魂に響くような不気味な咆哮は、ユリの声など容易く掻き消す。

そしてソレが一体何の声だったのか、ユリは直ぐに思い知らされる。

「ば、馬鹿な……何故、何故、“魔神”が動いている!?!」

見上げた先には悠然と立ち上がる巨大な影　漆黒の“魔神”の姿があつた。

ユリは知らなかつた。キサラギには“魔神”を動かせる相棒が居ることを

『G u u U u o o o o o o o o o o A a a A a a a ! ! !』

「ひっ!?!　な、ななな、何なのよ!?!　人様の屋敷で次から次へと……」

響く謎の咆哮にシエラが身を縮める。しかし緊張の連続で遂に糸が切れたのか、彼女はとうとう泣き言を漏らし始めた。

だが、キサラギはこの場に居ない相棒に密かに喝采を送っていた。
(よし、ナイスタイミングだ。リート!)

恐らく今まで裏地の【シュナイト】の中でキサラギの合流を待っていたのだろう。

一向に現れないキサラギに業を煮やしたのか、はたまた調査隊に見付かつたからなのか不明だったが、遂に一人で【シュナイト】を動かしたのだろう。

(ま、操縦者無しだから色々と機動に制限が掛かつてる筈だけどな)
しかし形勢は動いた。何せこちらには文字通り最強の援軍が約束されたのだ。

先程のユリの言葉にもあるように魔術障壁も機工戦騎のパワーなら突破出来る筈である。

「くっくっくっ……形勢逆転だな?　ユリ・ハイゼンベルグ」

「はっ!　そ、そうよ!　【シュナイト】が来るなら大逆転だわ!」

イヤッホオォー!　と、シエラは諸手を挙げて喜んでいたが、キサラギはそう樂觀視もしていなかった。

さつきまでユリは明らかいきサラギ達を下に見ていた。障壁の絶
対性から油断していたと言っても良いだろう。

だが、それとは逆に今の彼女は危険だった。

「……………」

魔族の証である金眼は鋭くいきサラギの挙動を観察している。そこ
には手加減など入る余地も無く、全力でこの苦境を打開しようとい
う決意が見えた。

(窮鼠猫を噛む、か……いや、この場合むしろ鼠はこっちか?)

いきサラギ達と【シュナイト】の距離はまだ遠い。そもそもユリが
搭乗する暇を与えてくれるとも思えなかった。

「シエラ。俺から離れるな」

シエラの細い腰に手を回す。彼女を連れていつでも逃げられるよ
う備える。

「え? あ…………う、うん」

いきサラギの真剣な様子から状況を正しく認識したのか、はしゃい
でいたシエラは頬を赤く染めて大人しくなる。

その向こうでは【シュナイト】が足元の侵入者を散らす為に足踏
みしていた。お陰で地面が揺れてしかたがない。

(ここはシエラの安全第一に……いや、待てよ?)

ふと、いきサラギの脳裏にある可能性が過ぎる。

それは買物物の時 あの時、彼女は腰に何を挿していた?

それは講義の時 あの時、彼女は何を見せてくれた?

「すまん。シエラ」

「ちょ、ちよつと、いきサラギ!？」

一言謝罪するといきサラギはシエラの腰周りを調べる。突然の奇行
にシエラが慌てるが、いきサラギは無視した。

「え? それって」

「しっ、静かにしろ」

うっかり口を滑らせそうになるシエラの口を右手で強引に塞ぐ。

ユリからはシエラの陰に隠れて見えないだろうが、いきサラギの左腕

には予想通りの物が確りと握られている。

「ちっ、時間を無駄にした。お前が“魔神”の主じゃない以上、のんびりとしている暇はない」

ユリはリートの動かす【シユナイト】を見てキサラギが持ち主じゃないと勘違いしたようで、手早く二人を始末することにしたらしい。

「直ぐに終わらせてやる。大気に漂う精霊よ。我が意に従い顕現せよ」

ユリの周囲に漂う“魔力”が淡く輝き増す。先程までとは比べ物にならない輝きだった。

キサラギの脳裏に先日講義でシェラが言っていた台詞が過ぎる。

『下位の魔術は一瞬しか発光しないから、キサラギも万が一にも戦う時は周囲の“魔素”の流れに気を配ることね』

(畜生、“魔素”の流れなんかわかるかよ！)

だが、逆に見えている物もあった。

「全てを燃やす灼熱の火よ。今ここに終焉をもたらせ」

(発光が継続している！それが意味するのは)

即ちユリが上位の魔術を放つつもりである、ということであった。そう判断するとキサラギの行動は迅速だった。

「うおおおー！」

左腕に握る切り札 刻印銃を向けて咆える。引き金を持たないソレは使用者の意思に反応し、銃身に刻まれた術式を起動させる。

それはユリが最後の呪文を唱え終わるより、僅かに先んじていた。「かはっ!？」

放たれた魔力の弾丸は、真っ直ぐにユリの魔術障壁を貫く。

魔力の籠らない弾丸ではユリの魔術障壁を破れない。だからキサラギは同じ魔力による攻撃を思いついたのだ。

だが、刻印銃を使うには一つだけ問題がある。

今のキサラギにはあの時のような魔晶石の腕輪は無かった。これでは肝心の魔力を銃に注ぐことが出来ない。

だが、結果はそうはならなかった。

「ば、馬鹿、な……」

信じられない、という顔でユリは力なく倒れ伏す。どうやら殺傷力は低くても、相手の意識を刈り取ることは出来たらしい。

倒れる彼女からは血の一滴すら零れていない。

「は……最高のプレゼントだったな」

キサラギの左腕で青い宝石の腕輪が煌めく。青空みたいに真っ青な宝石がはめられたソレは、シエラに貰った“翻訳”の腕輪である。魔晶石のはめ込まれた腕輪は、周囲の“魔素”を吸収し“魔力”へと変換する。

「ありがとう……シエラ」

「ふ、ふん。私の頭脳に感謝しなさい」

改めて礼を言うキサラギに、わかっているのかシエラは同じ言葉を返す。

それでも照れくさいのか、あの時と同じようにそっぽを向いた。

13・障壁（後書き）

どうも、如月八日です。

今回も書き上がった分を投稿します。

今回はサブタイトルがすんなり決まらず頭を悩ませました。

すんなり決まる時は呆気なく決まるのですが、悩む時は一時間近く
悩んだりした時もありました。

次話も書き上がり次第、投稿します。

14・暴走（前書き）

今回は少々残酷な描写があります。

人によっては大したことはないと思いますが、一応書いておきます。

14・暴走

『G U U U u o o o o o o o o o A a a A a a a ! ! ! 』

青空に木霊する恐ろしげな大絶叫が響き渡る。

その大き過ぎる咆哮は、前庭で剣を交わし合う二人の老人の耳にも当然届いていた。

「ぬう!?!」

「あれは……」

交差寸前で二人の剣が同時に止まる。一瞬の間が命取りとなる戦場ではまず有り得ないことだったが、二人は互いに不意打ちでの決着を望んでいないと理解していた。

しかしどちらの方が動揺していたかは明白である。

「あ、あれが……“魔神”……」

騎士団では豪胆なことでは知られるアルフォンスは、初めて目にする“魔神”の威容に珍しく完全に呆けていた。

(まあ、初めてアレを目にすれば誰だって似たような反応をします)

ブライは一週間前の自分を思い出し、微かに頬を引き攣らせる。

屋敷越しで下半身は隠れているが、ここからでは【シユナイト】の上半身を確認するのは容易である。

(それにあの声は何なのでしょう?)

キサラギの説明によれば【シユナイト】は生物ではなく“機械”

つまり生物を模した物だと言う。

しかしブライは魔族としても長く生きている方だが、鳴き声を上げ生物のように動き回る機械など見たことがなかった。

(もしま【シユナイト】様と呼ぶべきだったのでしょうか?)

だとすればお嬢様の従者として忌々しき事態だった。

(お嬢様の客人を屋敷の裏地で一週間も雨風に晒すなど言語道断です)

自らの不手際を反省するブライだったが、その思考がピタリと停

止する。

(はっ！ お、お嬢様は！？)

アルフォンスとの戦いに熱くなる過ぎて、すっかり鈍っていたブライの頭に冷静な思考力が戻り始める。

「ツーーーーー！？」

ブライが声にならない悲鳴を上げる。

「な、何事じゃ！？」

普段は冷静沈着で鉄面皮のライバルが、唐突に大口開けて顔面崩壊する姿を目の当たりにして、アルフォンスは先程とは別の意味で驚いていた。

(私としたことがとんだ失態です！)

ブライとしたことが熱くなるあまりに周囲への警戒を怠ってしまった。

気付けば二人の激闘を観戦していた騎士達の姿が見えない。彼らの目的を考えればどこへ行ったかは聞くまでもないだろう。

「やってくれましたね。アル」

「ふむ、わしが指示した訳ではないがのう。まったく、優秀な部下達じゃよ」

「こうしてはられません」

【シュナイト】のような巨体が、調査隊の目を掻い潜れる訳がない。ブライは剣を収めるとアルフォンスに背を向け走り出した。

「何故着いて来るのです？」

「わしの目的は“魔神”じゃ。それにあそこにはわしの部下も居る！」

見れば【シュナイト】は地面を踏み鳴らし暴れていた。その足元では調査隊が必死に逃げ回っているだろう。今まで気付かなかつたが、時折悲鳴も上がっている。

二人程の俊足を以ってすれば一瞬で目的の場所に着く。僅かに先行していたブライは、前方に見慣れた人物の姿を捉える。

「キサラギ様……」

軍服の所々が焼き切れていたが、彼はちゃんと自分の足で立っていた。

キサラギの周囲には戦闘の跡なのか、生々しい破壊の爪痕が深く刻まれている。ブライが毎日欠かさず手入れしていた庭園は今や見る影も無い。

「ん？ あれは……」

キサラギは油断無く銃を構えている。彼が銃口を向ける先には、シエラより少し年上位の魔族の少女が横たわっていた。

恐らく彼女はキサラギが撃退した侵入者なのだろう。しかしキサラギの陰から覗けたシエラの姿を目にした瞬間、ブライの意識はそちらに集中する。

「お嬢様！」

ここからでは細部の確認までは出来ないが、どうやらシエラは無事のような。多少の服の汚れは見られるが、目立った外傷は見られない。

「嗚呼……キサラギ様」

主人とキサラギの無事な姿を確認した安堵から、ブライは思わず気が抜けてしまう。

だが、その場に居たのは彼だけではなかった。

「むっ！？ いかん！」

後方を追走していたアルフォンスが慌ててブライを追い抜く。それを一瞬とはいえ気を抜いてしまったブライが制止することは無理だった。

「キサラギ様！！」

慌ててブライがキサラギに身に迫る危機を警告する。だが、それは既に手遅れだった。

「ふう……」

思わぬ苦戦を強いられたが、キサラギはユリに勝利した。

倒れ伏す彼女は血の一滴流していない。どうやら気絶しているようだ。

「どれ位で目を覚ますかわかるか？」

「あまり長くは持たないと思うわ。魔術士は肉体的には貧弱な連中が多いけど精神は強靱なの。剣で斬られたなら話は別でしょうけど、魔力弾で撃たれた程度じゃ少しの間だけ意識を奪う程度よ」

「そうか……」

シエラの説明にキサラギは思案する。この場でユリを殺すことは容易だ。無意識なら魔術障壁も無いので、このまま拳銃を撃てば簡単に始末できるだろう。

(だが、調査隊を殺せば本格的に帝国と敵対することになる)

ミスリル調達の為とはいえ、軽率に人間と敵対してしまったキサラギとしては、悪戯に敵を増やすことは翻意ではない。

(それにこの女には聞かなきゃいけないこともある)

彼女の言動の中には気になることが幾つかあった。

『“魔神”はこの屋敷にある(・・)のだろうか?』

セルディオでは一般的に生物だと思われる“魔神”に対して、“ある”という言い方をするのは違和感がある。

それにキサラギには一つの憶測があった。

(ま、出来れば外れてくれた方が嬉しいんだが……)

恐らく望みは薄いだろう。

「この女は拘束する。それで良いか？」

「ええ、この屋敷を血で汚して欲しくはないもの」

「了解。ボス」

ホッとした様子の子のシエラに軽口で答えてキサラギはユリを拘束しようとして近付いた。

急に意識が回復した時の為に、拳銃を向けることも忘れはしない。だが、今回はそれが仇となった。

「キサラギ様!!」

切迫したブライの声が聞こえた瞬間、背後を振り向く。キサラギの視界に剣を抜き突撃して来る老騎士の姿が映る。

「くっ、新手か!」

「退けい! 小僧!」

アルフォンスはキサラギに向かって真っ直ぐ踏み込む。彼にとつてキサラギが何者かは関係ない。

仲間に銃ユリを向ける敵を排除する。

アルフォンスの思考はその一点に占められていた。

(この気迫……正面から受けるのは不味い)

ユリの魔術障壁という前例もある。真っ直ぐに突撃して来るアルフォンスの勢いは、真っ向から受け止めるにはリスクが大き過ぎた。最善の選択は“回避”　そう判断すると同時にキサラギは気付いた。

「……ッ!?!」

キサラギの背後にはシエラが居る。一瞬の動揺がキサラギの反応を遅れさせた。

「ちっ……くしょうがあー!」

この距離まで接近されると銃は当てにならない。キサラギは腰からナイフを抜き放つと迫り来る剛剣を正面から迎え撃った。

刃と刃が甲高い音を立てて交差する。

「むっ!?!」

真正面から鏢競り合う形となったが、たかがナイフと侮っていたアルフォンスはその結果に視線を鋭くする。

高度な冶金技術で作られたキサラギのナイフは、純粋な強度ではセルディオの名剣を上回る　筈だった。

「小癩な、叩き斬ってくれ!」

裂帛の気迫を撒き散らしてアルフォンスが咆える。炎のような気迫に剣が応えるかのように、その刀身が淡い赤い色の輝きを纏う。

「金剛剣・断絶!」

如何なる術を用いたのか、輝く剣は今まで鏝競り合っていたキサラギのナイフを抵抗も無く切り裂く。

アルフォンスの剣がキサラギの肩口に深く食い込む。

「ぐっ！」

このままでは右腕を切り落される。瞬時にそう判断したキサラギは、残る左腕で刃を掴んで止めた。

（ま、不味い……）

足から力が抜けていく。斬られた傷の深さもあるが、ユリとの戦闘も含めて明らかに血を流し過ぎていた。

「くっ……」

急速に意識が遠ざかる。必死に抗おうとするキサラギの意思とは裏腹に、視界は闇に染まって行く。

「キサラギイイー！！」

倒れそうになる身体を抱き止められる。頼りない小さな腕に柔らかな身体、見えてなくともキサラギには、それが誰なのかがわかった。

「ぬ？ 女じゃと!？」

アルフォンスからは姿が見えていなかったのだらう。突如、現れた少女の存在は彼に敵の排除を躊躇わせる。

「くっ！ 世話の掛かる奴じゃ」

アルフォンスは短く舌打ちすると意識の無いユリを回収し、飛び退く。

「キサラギ様！ お嬢様！」

それと入れ替わるようにブライが泣き継る主人の下に駆け寄る。

「キサラギ！ しっかりして、キサラギ！」

シエラは必死にキサラギに呼びかける。普段の強気が嘘のように取り乱す彼女の姿に、傷口ではなく胸が痛んだ。

「心配……」

心配するな、そう言って笑ってやりたかった。

だが、その言葉は最後まで紡がれることはなく、キサラギの意識

はそこで途切れた。

「…………え？」

リートはその映像を見た時、彼女にしては珍しいことに呆然としてしまった。

「マスター？」

映像の中ではキサラギが肩口から剣で斬られ血を流している。

どう見ても重傷だった。刃は骨まで届く程に深く食い込んでいるし、傷口からは鮮やかな血が止め処なく流れ出している。

「キサラギイイー！！」

ゆっくりと倒れるキサラギの身体をシエラが支える。縋り付き名を呼ぶシエラの顔は涙で濡れていた。

「嘘…………ですよね？」

カメラが故障したのかと思った。むしろリートはそうだと思ったかった。

だが、キサラギの支援用AIである彼女に“勘違い”や“思い込み”という“逃避”は許されない。

「…………死んでしまう」

たった一人だけの大事なマスターが

掛替えの無い最高の相棒が

何より大切な自分の家族が 死んでしまう。

「…………許さない」

そんなことは許せる筈がない。

「許さない…………」

【シュナイト】が持つ全てのセンサーを駆使して周囲を索敵する。“魔素”の影響なのかカメラやマイク以外は使い物にならない。

「でも、私には関係ないです」

【シュナイト】は全長30メートルの巨体だ。敷地内を俯瞰^{ひかん}することが出来る今のリートに死角は殆ど存在しない。

「ふむ、そろそろ引き時じゃな」

そう呟くとキサラギを斬った老騎士が笛を鳴らす。どうやら撤退の合図だったようだ。

今頃になって【シュナイト】に恐れをなしたのか、侵入者達はそそくさと逃げ始める。

『逃がさない!』

リートは【シュナイト】を駆動させる。これまでのような近付く侵入者を追い払う為の緩慢な威嚇ではない。

今のリートに出来る全力全速を以って機体を動かす。

「な、何だ!？」

「魔神の動きが急に」

「おい! こ、こっちに来るぞ!？」

巨体から想像も付かない速度で走る【シュナイト】に調査隊が目を剥く。

『許さない! 許さない!』

彼らには目も暮れずリートは標的へと一直線に迫る。

狙うのはキサラギを斬った老騎士だ。

『許さない! 許さない! 許さなあああい!』

リートの絶叫がスピーカーを通して外部へと流れる。

突如として“魔神”から聞こえた女性の叫びに、逃げていた調査隊の動きが止まる。

「馬鹿者が! 立ち止まるな!」

アルフォンスが警告する。だが手遅れだった。

「う、うわあー!？」

「助け」

不自然に悲鳴が途切れる。彼らはもう悲鳴を上げることもない。

踏み潰したのだ。大樹のように太い足で、リートは逃げ遅れた者達を踏み潰した。

『よくも! よくもマスターを!』

しかしリートは足元の彼らのことなど頓着しない。

リートにとってキサラギを斬った老騎士以外は路傍の石ころ同然。気に掛ける必要のない瑣末な存在でしかなかった。

【シユナイト】は前進する……その度に調査隊が踏み殺されて行く。

「ち、畜生があー!!」

次々と仲間が踏み殺されて動揺した一人が、撤退から一転して【シユナイト】へと切り掛かる。

操縦者不在の今は【シユナイト】を護るシールドは展開されていない。

「ぐっ……な、何て堅さだ」

振り下ろされた切っ先が折れ飛ぶ。並の勢いで斬り付ければ曲がるだけなのだが、天下の西天騎士だけあってそれなりに技量は高いようだ。

「くっ……化け物め」

折れた剣を見て男は忌々しそうに吐き捨てる。そして剣の折れる甲高い音は、男の存在をリートに認識させる。

「誰ですか?」

【シユナイト】が歩みを止めて屈み込む。赤い単眼が忙しく動き音の主を探し出す。それは直ぐに剣を失った男を捉えると一度だけ光った。

「邪魔です」

無造作に腕を振るわせる。塔すら薙ぎ倒す豪腕がたった一人の為に振るわれた。

「ギ」

男の身体がひしゃげて飛ぶ。どう見ても即死である。

リートは一欠けらの躊躇も無く敵を殺した。

「総員散開! 全力で撤退するんじゃない!」

アルフォンスは声の限りにそう叫ぶ。信頼する団長の命令に怒り

で自失していた隊員達がバラバラの方向に動き出す。

屋敷の外には予め決めてあった合流地点がある。彼らはそこを指して散り散りに撤退して行く。

『許さない！』

“魔神”はアルフォンスへの呪詛を叫びながら真つ直ぐに彼を追って来る。意識の無いユリは既に部下に預けた。

自分が狙われていることを利用して部下達の撤退を支援しなくてはならない。彼が撤退するのは十分な時間を稼いでからだ。

「……………」

だが、目の前で可愛い部下が殺されて腸が煮えくり返っているのも事実だ。

しかしアルフォンスはあくまで団長として冷静に対処する。

『許さない！ マスターを斬った、お前だけは！』

“魔神”からは女の声で彼への呪詛が吐き出される。

(マスターとは……………あの小僧か)

唸りを上げる豪腕を巧みに回避しながらアルフォンスは考えた。

(調査のことなど忘れてブライと死合っておったが、コレはもしかすると)

不味いことになったかもしれない。

陛下から斬れそうならば始末しろ、と言われていたアルフォンスだったが、一人だけでアレを殺すのは無理がある。

(あの巨体とパワーで、このスピードは反則じゃ……………)

おまけにミスリル製ではなかったとはいえ、西天騎士の剣を完璧に弾く強固な外郭を持っている。

(討伐するには一個大隊……………いや、宮廷魔術士は必要じゃな)

頭痛のするような報告を持ち帰るのは、堪らなく憂鬱だがしょうがない。

それに報告は悪い物ばかりではない。それなりに気になる情報も手に入った。

(キサラギと言ったか……………)

“魔神”が主と呼ぶ者……傷付けただけで“魔神”が怒り狂うような存在。

少なくともアルフォンスには普通の人間に見えた。

『どこだ！ どこに行つたあー！？』

屋敷の外へ出ると同時に生茂る樹木の陰を伝つて移動して行く。

“魔神”が遙か上方からアルフォンスを俯瞰することが出来ても、木の陰に隠れるように移動すれば、その足取りは途端に掴み難くなる。

（ふむ、見失つたようじゃのう）

アルフォンスにとっては僅か数十秒の間だけでも稼げれば良かった。

既に部下達が安全圏まで避難する時間は稼げている。後は己の育てた部下達を信じて待つだけだった。

やがてその時は思いのほか直ぐにやつて来る。

右腕の布が淡く燐光を発する。これは特殊な染料で着色された魔術的な目印で、魔術士は遠距離から味方に魔術を掛ける際に、この布を用いるのだ。

『ご無事ですか？ アルフォンス様』

頭の中にユリの声が響く。アルフォンスの部下に起こされて目が覚めたようだ。

少し声の調子が不機嫌そうなのは、敵に不覚を取つたからだろう。

『位置は把握しました。転移魔術でこちらにお招きします』

あまり“魔術”の得意でないアルフォンスは、彼女に返事をする事が出来ない。

それは向こうも承知しているようで、今頃は転移魔術の詠唱に入っているのだろう。

後はユリが術を完成させるまで移動しなければ良いだけである。

「“魔神”よ。この借りはいつか必ず返してやる。それまで待つておれ」

やがてアルフォンスの全身が淡い光の粒となる。

一瞬の発光の後にアルフォンスは忽然と姿を消した。

14・暴走（後書き）

どうも、如月八日です。

いつも本作をご愛読していただき、ありがとうございます。

次回も執筆が完了次第に投稿する予定です。

「んあ？」

重い目蓋を開くと見えたのは天井だった。

キサラギは緩慢な動作で起き上がると周囲を見回す。小奇麗な室内には家具こそ少な目だが、それら全てが一級品であろう貫禄があった。

「ふあゝあ……リート、今何時だ？」

まだ眠い目を擦る。相棒へ声を掛けるが返事はない。

「ツ！？」

そこでキサラギの意識が覚醒した。

同時にもう一度周囲の様子を窺い直す。既に見慣れつつある内装から自室であることを確認すると、キサラギは周囲への警戒を解いた。

「はあ……」

だが、その口から零れたのは安堵ではなく、憂鬱そうな溜息だった。

意識が覚醒し記憶を思い出したキサラギは、一種の自己嫌悪に陥っていた。

シエラを護ると大口を叩いておきながら、生身ではユリ・ハイゼンベルグには苦戦し、不覚にも謎の老騎士には敗北してしまった。

プロとして致命的な失態だった。

「くっ……」

自分は傭兵として常に油断ないよう心掛けている。だが、心の何処かでキサラギは文明や技術力の低いセルディオを見くびっていた。所詮は科学や文明の劣る惑星だ、と

「シエラに謝らないとな」

キサラギが自室で寝かされているということは、既に侵入者は撃退されたのだろう。

「リート？」

確認しようと思棒に声を掛けるも返事が無い。

アレほどの深手を治癒させるにはリートの協力が不可欠だ。

どうやら本体は別の場所に居るようで、治療の後も意識が無いキサラギに代わって事後処理でもしているのだろう。

（ま、恐らく携帯端末でシエラがブライと話しているんだろ）

そう考えていた時、折り良く部屋の扉がノックされる。

「私よ。もう目は覚めているのでは？」

扉越しにすっかり馴染みとなった少女の声が聞こえる。

このタイミングの良さからして、リートがキサラギの覚醒を知らせたのだろう。

「邪魔するわ。キサラギ」

返事より先にシエラが扉を開けて入って来る。

「……………」

予想通りその後ろには携帯端末を持ったブライが続く。

（妙だな…………）

キサラギはブライの様子に違和感を覚える。これまでの行動パターンからして、今回のようにキサラギが依頼にしくじれば、ブライは真っ先に噛み付いて来ると思っていた。

「……………」

だが、今のブライは表情も暗く、その身に纏う空気も何処か淀んでいる。

執事として常に完璧を求めるブライからは考えられない状態だった。

（どうやら何かあったみたいだな）

負のオーラを撒き散らすブライもそうだが、心配性で口煩い相棒がまだ一言も喋っていないことも不自然だった。

嫌な予感がした。事態はキサラギが想像する以上に悪いのかもしれない。

密かに覚悟を決めるとシエラが口火を切った。

「ありがとう。キサラギのお陰で助かったわ」

「……………」

思わぬ言葉にキサラギの思考が停止する。

「その顔はわかっていないみたいね。傷が痛むの？」

鳩が豆鉄砲食らったような顔で見詰め返していたらしく、シエラが心配そうに表情を曇らせる。

キサラギの脳裏に意識を失う直前の泣き顔が蘇る。

「いや、もう大丈夫だ」

これ以上心配させる訳にはいかない。キサラギは改めて気を引き締めると話の続きを促した。

キサラギが持ち直したのを見てシエラが微かに口元を綻ばせる。

「あの時は庇ってくれてありがとう。改めて礼を言わせてちょうだい」

ありがとう。シエラはそう言うと頭を下げる。

彼女にそこまでして貰って、ようやくキサラギにもお礼の意味が呑み込めた。

「私からも礼を言います。キサラギ様！ お嬢様をお守りいただき、本当にありがとうございます！」

「お、おい。頭を上げてくれ。ブライ」

「いえ、もしキサラギ様が居なければ……………今頃どうなっていたことか！」

すっかり平身低頭するブライにキサラギはかえって気まずさを感じてしまう。

何故なら調査隊が屋敷に来た理由は“魔神”だったのだ。

そもそも“魔の森”さえ無事なら彼らが屋敷に辿り着くことも無かっただろう。

「傭兵として依頼を果たしただけだ。気する必要はない」

暗にシエラが気に病む必要もない、という意味も込めて言う。

それは正しく彼女に伝わったようで、シエラが柔らかく微笑み返してくれる。

「ぬう……」

面と向かって感謝される経験が無いキサラギは、何だか無性にこそばゆかった。

その後はシエラによって、キサラギが気絶した後に何があったのかを説明される。

キサラギとしても早く自分の置かれた状況を把握したかったので、シエラの説明は都合が良い。

だが、侵入者が撤退した経緯を聞くと思わず我が耳を疑った。

「リートが【シユナイト】で大暴れしただと？」

俄かには信じられない言葉に思わず聞き返す。

それを肯定したのは他ならぬリート本人だった。

『申し訳ありません。マスター』

すまなさそうにリートが力なく謝罪する。普段の澄んだ声とあまりにかけ離れていて、一瞬とはいえキサラギが気付かなかった程だ。どうやら本気で落ち込んでいるらしい。

「そう落ち込むな。俺が心配掛けたのがそもその原因だ」

『それは違います！』

「お、おう……」

強い語気で否定してくるリートに面食らう。何処か人間臭い性格をしたリートもAIである。彼女が主であるキサラギにここまで強く反論することは稀であった。

リートは言い難そうに己の非を懺悔する。

『あの時の私は私情に流されていました。マスターを傷付けた連中が許せず、彼らを……その……皆殺しにしてやろうとしました』

「あの時のリートは凄かったわ。ブライが止めなかったら【シユナイト】で帝都に殴り込んでいたでしょうね」

『すいません……』

「お前が俺を心配した気持ちもわかる。そう、気に病むな」

『しかし私の暴走で死者を出してしまいました』

「それはそうだが……」

グラナを襲撃した時もキサラギは犠牲を出さないよう努めていた。それは依頼の為でも人殺しを避けたかったからであり、同時に怨恨を残さない為の配慮でもあった。

だが、今回の暴走でリートは“魔族”を殺した。侵入者だったとはいえ、背を見せて逃げる彼らをリートは殺してしまった。

ユリや老騎士の報告にもよるだろうが、ヴァーリス帝国の“魔神”に対する認識は、今回の一件で殆ど決まってしまったと言える。

『マスターの努力を無駄にしてしまいました』

「過ぎたことはしょうがない。連中を侮っていた俺にも問題はある。今は後悔するよりも今後のことを考えるべきだろう。」

それにキサラギは忘れていなかった。

「帝国には気になることもあるしな」

「それってあのユリ・ハイゼンベルグって宮廷魔術士のことかしら？」

「ッ！？」

その名にブライの表情が一瞬だけ強張る。

二人は彼の変化には気付かずそのまま会話を続けた。

「奴は何か知っている風だった。もしかしたら厄介な奴と繋がりがあるのかもしれない」

「厄介な奴？ キサラギは知らないと思うけど、ハイゼンベルグは帝国でも僻地にある貧乏領地なのよ。彼女個人の力量は高いでしょうけど、地方の私有軍如きにキサラギが恐れるような人材は居ないと思うけど？」

事情を知らないシエラがキサラギの抱く懸念を否定しようとする。

「……………」
シエラの声は聞こえていたが、彼の脳裏には件の厄介な相手のこととで一杯だった。

「……………」

キサラギは神妙な顔で顔を黙り込む。考える姿は真剣その物で、その雰囲気は伝染したのかシエラも口を噤んで彼の様子を見守る。

室内に重苦しい空気が満ちる。一種の厳粛な雰囲気を持つ空間が形成されていた。

その沈黙を破ったのはキサラギだった。

「……………そういや、腹減ったな」

思わず腹の虫が大声で鳴き出す。

後で聞かされたが、キサラギは丸二日も気を失っていたらしい。

襲撃されたのが昼前だったので、丸々六食以上も抜いたことになる。それは腹も減る筈だった。

場所を移してすっかり恒例となったテラスのテーブルに腰掛ける。最初はシエラが病み上がりのキサラギを配慮して、自室での食事を提案したがキサラギの強い要望でいつものテラスで昼食となった。「はあ〜天氣が良いと気分が良いな」

今日の天氣は快晴だ。日傘の下とはいえ照り付ける陽光は少し強い。

だが、テラスには室内には無い開放感があった。

「う〜ん……………」

大きく伸びをして肩を鳴らす。二日も寝ていれば身体も強張る。キサラギは身体を解しながら、ニコニコと笑顔でブライの料理を待ち続けていた。

「呆れた。相変わらず食い意地の張った奴ね」

「は、はは……………昔はこうじゃなかったんですけどね」

すっかり元気なキサラギを見てシエラとリートが呆れる。

気落ちしていたリートも今はすっかり調子を取り戻していた。

「そういえばキサラギは長いこと傭兵をやってるのよね？」

「おう、プロとして仕事をするようになってもう五年になるな」

「ぶっちゃけて腕の方はどうなの？」

『ご安心を、シエラさん。マスターは同業者の中ではかなりの凄腕です』

何せ若手では一、二を争う腕前だ。座学の所為で訓練校の成績は

今一だが実技に関しては歴代でもトップクラスの成績を残している。そのことをリートが説明するとシエラは感心していた。

「へえー今の姿からは想像付かないわね」

『はい。マスターは凄いのです』

キサラギの話題で盛り上がる二人だったが、当の本人はブライの料理に御執心である。

「う、美味過ぎるッ!!」

フォークを握り締めながらキサラギは感動の涙を流す。彼の目の前には空の大皿が鎮座している。

本日の料理は鶏肉と野菜を使った冷製パスタだ。病み上がりであるキサラギの胃袋を考慮して、あっさりとした一品が選ばれている。尤もそんなブライの気遣いもキサラギの「腹一杯食いたい」という台詞によって、大皿で十枚以上という健康に気を付けるのが馬鹿馬鹿しい量になっていた。

「美味い。美味い」

キサラギは一皿空けることに語彙いひごの乏しい感想と一緒にそれを積み上げる。

一時間もしない内にテーブルには大皿の塔が建設された。

「はぁー食った、食った」

『マスター。挨拶とお礼がまだですよ?』

「くっくっ、そうだな」

母親のようなことを言うリートに思わず苦笑する。

キサラギは姿勢を正すとシエラの側に控えるブライに向き直る。

「ごちそうさま、ブライ。美味しい飯をありがとう」

「いえ、執事ですから。当然のことです」

キサラギのお礼にブライはいつも通りの台詞で答える。

こうしてキサラギの食べるような食事が終わった。シエラはキサラギが目覚める前に食事を済ませていたので、ブライの淹れた紅茶を楽しんでいる。

「は、はは……相変わらず凄い食欲だったわね」

それでも直ぐ前で餓死寸前の遭難者のような様子で食事をされるのは、食欲が失せる光景だったのか、複雑そうな表情で紅茶を飲む。食後のまったりとした空気が漂い始める、が……のんびりしている訳にもいかない。

満腹で頭に血が回りだしたキサラギは、自分から会話の口火を切ることにした。

「まず謝って置く。すまなかった。今回の襲撃　護衛を任せられた身として不甲斐ないばかりだ」

「今度はキサラギの番なの？　昨日からずっと私は謝らねばなishよ」

気にしてないと態度で表すシエラに、キサラギは一度きちんと頭を下げる。

シエラも元よりキサラギを責める気は無い。ちゃんとした謝罪が済むと話は必然的に今後の方針に移る。

「俺は拠点の移動を提案する」
『マスター！　それは……』

キサラギの提案にリートが言葉を濁す。護衛という依頼は単に対象の“身柄”を守るだけでなく、その“生活”を含めて守ることが条件になる。

命を守るだけなら何処かに引き籠もらせるか、ひたすら逃亡させ続ければ良いのだ。

「……………」
シエラは真剣に主張するキサラギの言葉を黙って聞いている。
「俺はセルディオの連中を舐めていた。【シュナイト】が有れば無敵だ！　絶対に負ける筈がない！……そうやって俺は慢心していたんだよ」

しかし今回の件でキサラギも学んだ。

セルディオが誇る猛者達を相手取るには生身のままでは分が悪い。「何より【シュナイト】は“防衛”に向いていない。機工戦騎に出来ることは相手を駆逐し蹂躪する　敵を倒す為の物なんだ」

護衛任務は【シユナイト】に向いていない。それがキサラギの行き着いた結論だった。

『確かにマスターの言うことは正論です。そもそも機工戦騎は歩兵との戦闘を想定していません』

リートの言う通り、これで護衛対象が戦艦や輸送船ならば話は別だろう。

だが、今のキサラギが守るべき対象はシエラであり、彼女の敵は機工戦騎より遙かに小さい“人間”や“魔族”だった。

「それに少なくとも帝国側には“魔神”の居場所が割れちまった。一箇所に居続けるのは危険だ」

そうなればキサラギは不利な状況での戦いを余儀なくされてしまう。

「キサラギの言いたいことは分かるわ」

本当は拠点を移す以外にもう一つだけキサラギには手があった。

だが、それをシエラに教える訳にはいかない。

(さすがに“皆殺し”は後味が悪い)

それに今は大っぴらに【シユナイト】を使ってるが、本来ならセルディオのような人間に近い知的生命体が原住する未開惑星での戦闘はご法度だった。

(一緒に落ちたのがレオンじゃなきゃ、な)

あの男が誰の届かない星で、律儀に決まり事を守るとは思えない。

キサラギがレオンのことを思い出していた。

「うーん。ハーフの私に居場所は……いや、でも“からー”こんなくと”を使えばあるいは」

一方でシエラも真剣に悩んでいた。今の彼女ならカラーコンタクトを使えば“人間”の町に住むことも出来るかもしれない。

少なくとも帝国と違って“顔”は割れていない筈だ。

「いや、だけどブライが一緒じゃないのは嫌。ならいっそ帝国に」

シエラが剣呑な顔でブツブツと独り言を呟き出す。どす黒いオーラを撒き散らしている。

これは助け舟を出した方が良くもしいない。そう思ったキラサギが動き出すよりも先に彼女の従者が行動した。

「お嬢様」

「何かしら？」

自称天才の頭脳をフル回転させて思案していたシエラは、ブライの進言に珍しく眉を寄せる。どうやら相当に煮詰まっているようだ。「私に良い案がございます」

そう言っつてブライは悩むシエラに道を示す。

彼は何故か微妙そうな顔をしていた。

15・反省（後書き）

どうも、如月八日です。

今回も書き上がった分を更新します。

ご意見やご感想は随時募集中です。

次回の更新も書き上がり次第に投稿する予定です。

16・冒険者

セルディオには“冒険者”と呼ばれる者達が存在する。

彼らはいわゆる“何でも屋”で、魔物の討伐や商人の護衛という血生臭い依頼から危険地帯での採取、果ては商店や家事の手伝いなど非常に幅広く仕事を請け負う。

ギルドはそんな冒険者と依頼人を橋渡しする為の組織で、一部の国を除いて大陸中にギルドの支部が存在している。

大陸北東部の都市“ポーレル”もその例外ではない。本来なら種族間の差別が原因で、帝国内にはギルドの支部は存在しないのだが、ポーレルだけは例外だった。

ポーレルは帝国に属する地方都市だが、魔の森を介さずに帝国領と行き来が出来る立地的な条件から、“人間”との貿易の窓口として半ば独立していた。

そんな理由からポーレル支部は他の支部とは少し毛色が違う。ギルド管理するギルドマスターこそ人間だが職員の中には現地で雇った魔族のアルバイトも大勢いる。

レニー・マルネルもその一人であった。

「それじゃ、後はよろしくね」

「はい。任せてくださいよ。先輩」

レニーは笑顔で同僚を見送る。時刻は正午で丁度昼飯時であった。ギルドは簡単な酒場も営業しており、まだ昼間だったが支部内では冒険者達が食事と一緒に互いの情報を交換し合っている。

「さて、午後も頑張りますか」

頬を叩いて気合を入れる。既に昼食は済ませているので夜まで休憩は無い。

レニーの仕事はギルドの受付嬢である。同僚の中には給仕の仕事と掛け持ちする者も居るのだが、彼女は受付嬢の方が性に合っていた。

今日もギルドは多くの冒険者で賑わっている。

「あら？」

その喧騒の中でレニーの目を引いたのは、今しがた入って来た若い男と少女の二人組みだった。

（兄妹……なのかしら？）

二人は黒髪と翠色の瞳という共通の特徴を持っている。

男の方は顔の造りや肌の色が違うので大陸の生まれではないのかもしれない。人間が住むボーレルでも若い人間は珍しく、周囲の冒険者が探るような視線を向けている。

また少女の方は別の意味で周囲の気を引いていた。

（ひゃー綺麗な娘ね。とんでもない美少女だわ）

艶やかに煌く長い黒髪に職人が精緻を凝らした人形の如き端正な顔立ち、華奢で小柄な体躯もあって本物の人形みたいな美少女だ。

（見ない顔だわ。それにしても二人とも華奢ねえ）

冒険者は依頼によって大陸中で活動する。商店や家事の手伝いをする場合があっても、彼らは総じて高い戦闘能力を持っている。だから腕っ節に自信のあるチンピラのような者が多かつたりする。勿論、紳士的な者も居るには居るが明らかに少数派だ。

（依頼かしら？ それとも冒険者志望の子かな？）

二人とも冒険者にしては華奢だ。おまけに“魔族”より寿命が短い人間とくれば、支部でも古株に入る受付嬢の自分が知らないベテランという線はありえない話だろう。

精々が依頼を持って来た依頼人が、新人希望の若者であろう。

そう予想したレニーの読みは正しく、二人は店内を見回すと正面の受付　つまりレニーの下へと歩いて来た。

「いらっしやいませ。冒険者ギルドにようこそ」

レニーは馴染みの滑らかな口上と、支部でも評判の営業スマイルで二人を出迎える。

新人でも依頼人にしても一度は受付嬢に話を通す。周囲の者による不躰な視線もあり、レニーは二人を緊張させないよう配慮し、まず自己紹介をした。

「私は当支部の受付嬢をしております。レニーです」

「キサラギだ。職業は」

「馬鹿！ 律儀にそこまで答える必要は無いの！」

「ぐっ……」

カウンター越しなので確認は出来なかったが、どうやら少女に脛を蹴られたようで、男は不自然に言葉を途切れさせる。

「ふふふ、仲がよろしいんですね。えっと……」

「シエラよ」

「はい。シエラさんに、キサラギさんですね。本日は冒険者ギルドにどのような御用でしょうか？」

二人の漫才に思わず笑ってしまう。それでも仕事はきちんとやらなければならない。

レニーは二人にギルドに来た用件を尋ねる。

「ギルドに加入したいの」

「キサラギさんですか？」

「いいえ、私もよ」

「シエラさんですか!？」

思いもしなかった言葉にレニーは驚きの声を上げた。

シエラのような小さな子供には務まらない。商店や家事の手伝いなら可能だろうが、当然ながら冒険者の仕事はそれだけではない。

「あの……もしかしてシエラさんは魔術士なんですか？」

魔術士なら肉体的な強さを補うことが出来る。実際に高名な冒険者の中には、体力の低さを魔術で補う者も沢山いた。

「残念。私は魔術士としては三流よ」

「うーん。そうなるうちよっ……」

あっさりしたシエラの返答にレニーが唖る。

ギルドは依頼人と冒険者の信頼を第一に考えている。ギルドは依頼人の求めるだけの人材をきちんと提供し、冒険者には依頼を精査し真つ当な仕事を斡旋するのだ。

ギルドとしては手伝いしか出来ない冒険者では、斡旋する仕事が

どうしても少なくなってしまう。

レニーがその旨を伝える。

「私はそれでも構わないわ」

思いの外にシエラはあっさり承諾した。

冒険者なら受けられる依頼が少ないのは歓迎出来ないことなのだが、シエラはそこら辺に対して執着がないようである。

どうにも首を傾げたくなるレニーだったが詳しい説明を始める。

「それでは簡単に冒険者についてご説明しますね。当ギルドに入会し冒険者になりますと、こちらのようなギルドカードが発行されます」

レニーはカウンター下に置かれた見本用のカードを二人に見せる。見本用だが材質から表記されている内容まで全く本物と同じだ。

「本人がカードに記入していただくのは名前だけで結構です。登録支部とランクについてはこちらで記入いたします」

「ランクとは何だ？」

「はい、ランクとは簡単に言えば冒険者の力量を表す目安です。EからAまでの五つのランクが存在し、ギルドは冒険者のランクに見合った依頼を紹介します」

「ふーん、そのランクはどう決めているの？」

「冒険者の仕事ぶりに応じてギルドの方から昇進の案内が来ます。また逆に何か問題を起こしたことが発覚すれば容赦なく降格されることも有ります。ご注意ください」

時折、二人の質問に答えながらレニーは説明を続ける。

「ギルドはランクにあった依頼をご紹介します。その代わりに成功報酬の半分を仲介料として当ギルドに納めていただきます」

「半分が……」

「その点に関しては納得して貰うしかありません。また注意事項になります。依頼中に達成不可能だと判断した場合は、速やかにギルドへ報告してください。一度受けられた依頼を達成せずに長時間放置されるとギルドの信用に関わります」

そうならない為にギルドは冒険者をランク分けしているのだ。

「お二人はEランクから始めて貰います。騎士団や高ランク冒険者の紹介があれば飛び級も可能でしたが……ご了承ください」

「ランク以上の依頼は絶対に受けられないのか？」

「うーん……原則的には出来ません」

「何か引つ掛かる物言いね。抜け道でもあるのかしら？」

「絶対に無い……とは言えません。ギルドとしては認めていない方法が存在します。えっと、ここだけの話にしてくださいよ」

レニーは声を潜める。若い二人への警告とはいえ、ギルドが認めていない裏技を説明するのは外聞がよろしくないのだ。

「ギルドを通さずに個人で依頼を受ければ可能です。先程も説明した仲介料もギルドを通さなければ発生しません。悲しいことですが、儲かるから 自分の力量に自信があるから と、理由は様々ですがギルドを通さずに依頼を受ける冒険者は存在します。」

「ま、ギルドとしては歓迎出来ない方法だな」

「そ、それだけが理由じゃありません！」

思わず大声を出してしまう。レニーは慌てて両手で自分の口を塞いだ。

もう見飽きたのか周囲の注目が薄れていたことが幸いした。周囲の連中はレニーの大声には気付かず、真つ昼間から騒いでいる。

「ギルドを通さない依頼には必ず裏があります。まず真つ当な依頼ではありません。後ろ暗い事情があるからギルドを通さないんです」
「なるほど、ヤバイ仕事ってことか……」

「キサラギさん、妙に納得顔ですね」

あまり褒められた話でもないが、後ろ暗い依頼を受けたことがあるのかも知れない。

確かにキサラギという若者は、新人にしては妙に落ち着いていた。

（ま、ギルドに来たってことは足を洗うってことですよな）

それに後ろ暗い者が冒険者になることは珍しい話ではない。

だが、念を入れて釘を刺しておこう。レニーは近頃ギルド内で流行

っている例の噂を話すことにした。

「気を付けてくださいよ？ 最近も大きな裏の依頼が募集していた
そうで、何十人という冒険者が失踪しましたから」

「失踪なのにどうして裏の依頼だつてわかつたんだ？」

「あまり大きい声で言えないんですが、失踪した人達は、その……
あまり評判のよろしくない人達ばかりでしたので……」

普段は気さくで明るい受付嬢と評判のレニーも思い出すと表情が曇る。

失踪した連中は冒険者とは名ばかりのゴロツキだった。腕っ節には自信があつたのだろうが、裏で隠れて怪しい依頼を受けていたらしい。

「……………そいつらが失踪した場所はわかるか？」

「興味本位で近付いちゃ駄目ですよ。噂ではハイゼンベルグ領らしいです」

「ハイゼンベルグ？ 何処かで聞いたような……………」

「……………」
首を捻るキサラギだったが、シエラは何やら険しい表情を浮かべる。

何か訳ありのようだが、客の事情を細かく詮索しないのが優秀な受付嬢の条件だ。

「さて、噂話はこちらまでにして説明を続けますね」

一度手を叩いて仕切り直す。随分と脱線してしたが、まだ説明の途中である。

「お二人にはギルドが用意する試験をクリアしていただきます。試験と言っても内容はとても単純です。ふもとにある“ラグル湖”に行つて水を汲んで来てください」

「何だ？ 随分と簡単だな」

「はい。道中には危険な魔物も居ませんし、盗賊なども出ませんので安心してくださいね」

そう言つてレニーはいつも通りの営業スマイルを浮かべる。

実は試験の説明には一っだけ嘘が混じっていた。道中に危険な魔物は出現しないが、盗賊は出るのだ。むしろ受験者は必ず盗賊に遭遇することになる。

何故ならギルドの職員が扮する盗賊に遭遇することが決まっているのだ。

これは単純に受験者の戦闘資質を計る目的以外にも、危険に遭遇した際の行動から受験者の精神面もチェックされる。

簡単に依頼を投げ出すような輩はギルドとしてもお断りだ。

「こちらが水筒になります。ラグル湖の水は特殊なのでこの水筒に入れて持ち運んでくださいね」

「ああ、わかった」

「この試験の期日はどうなのかしら？」

「一応の期限は一月です……が、早いに越したことはありません。

試験に要した時間が短い程にギルド内での評価が良くなります。早くランクを上げたい方は頑張った方が良いですよ」

ボーレルからラグル湖まで大した距離も無いので、徒歩でも半日で往復が出来る。

準備と移動を差し引いて平均で三日といった内容だ。

「それでは頑張ってくださいね。シエラさん、キサラギさん」

レニーは二人を笑顔で送り出す。ある意味でとても印象に残る二人組みだった。

だが、その印象が劇的な物になるのはもう少し先のことだった。

試験を受けてギルドを後にしたキサラギは、シエラと一緒に大通りを歩いていった。

冒険者ギルドのような需要の高い施設は都市中央の大通り側に建てられている。

「しかしこんな場所があるなんてな」

通りを歩く者達を横目にしながらキサラギは関心する。

一応は帝国領なので、道行く人々にも“魔族”が多いが“人間”の姿も何人か見掛けた。

「ここじゃ駄目なのか？」

今のシエラはハーフであることを隠す為に例のカラーコンタクトをしている。

キサラギは暗にポーレルならシエラも安心して暮らせないかと聞くが、結果は否定だった。

「無理よ。ここに“人間”が居ることが許容されているのは、あくまで“魔族”に利があるからなの。だけど私は」

ハーフだから 自嘲的に呟くシエラの言葉は喧騒に吞まれて消える。尤も聴力を強化されているキサラギにはきっちり聞こえていた。

「そうか……」

「キサラギが落ち込むことないわ。コレのお陰でこうやって街にだつて行けるんだもの。二人には感謝してるのよ」

シエラはそう言つて今は翠色の瞳を指差して微笑む。少し寂しげだったが、本当に嬉しそうでもあった。

「それにしてもマオルベルグとはまた別の意味で賑やかな場所ね」
彼女の言う通りポーレルの市場はマオルベルグとは違った意味で栄えている。

マオルベルグは採掘される上質なミスリルや職人によって加工された物を求めて客が集まるのだが、ポーレルはその逆だった。

中心部の大広場で開かれる市場には、魔族にとつては他国の品を手に入れる貴重な機会で、人間の商人からすれば帝国の品を仕入れられる唯一の場所なのだ。

黒山の大賑わいを見せる市場を遠目に眺めて、キサラギはポーレルに来た経緯を思い出していた。

(物と情報の集まる街、か……確かにブライの言う通りだな)

彼の良い提案とは自分が情報収集に行くポーレルに潜伏するといふものだった。

確かに“魔族”と“人間”が居ても咎められない場所は大陸中を探しても他に無いだろう。

「ねえ、キサラギ。少し買い物して行きましようよ」

「あそこに美味そうな屋台がある。アレで手を打とう」

「ふふ、良いわ。それで手を打ちましよう。傭兵さん？」

そうやって軽口を交えながら二人は屋台へと移動する。

キサラギの興味惹いたのは串焼きの屋台だった。市場にはこう言った露天を見物しながら手軽に食べられるような物が多い。

「はい。キサラギ」

シエラはさくさく串焼きを購入するとキサラギへと手渡す。串焼きはシンプルな味付けらしく、木の串に刺した肉と野菜には塩が塗してあるだけだった。

「うむ。美味しい」

素材の鮮度が良いのか焼き加減も絶妙で串焼きはとても美味かった。

二人はそのまま串焼き片手に露天を回る。食べ物にしか興味の無いキサラギとは違って、シエラは魔術に関する品を探しているようだ。

もう七件目を回ろうかという時、書物を扱う露天を後にしたシエラが溜息を付いた。

「はあー思ったより良い物が無いわね」

「何か探してる物でもあるのか？」

「うん、最近の魔術教本でも買おうかと思ってたんだけど駄目ね」

「俺は専門外だが、何が駄目なんだ？」

店の主人も帝都で評判の一冊だと言っていた。だがシエラは不満そうに口を尖らせる。

「全然駄目ね。問題外よ。教本なんだから万人にわかり易く書くことが大事なの。それがあの本の作者は何を勘違いしてるんだか、理論にもなっていない自分の経験談って自慢話を延々と書いてあるのよ？ 最初の数ページなんて飛ばしたわ」

「は、はあ……」

「そもそも“術式”を感覚で組むような奴が教本なんか書くんじゃないかねーって話なのよ」

「そ、そうか……」

物凄い剣幕で捲くし立てられてキサラギも啞然としていた。

以前から感じていたが、シエラは自分の得意分野になるとやけに饒舌になる。

『オタクってやつですね』

今まで黙っていたリートがボソリと呟く。彼女は最初からキサラギと一緒に居たのだが、キサラギが頼んで黙っていて貰っていた。

「お、おい。リート」

『わかっています。マスター』

セルディオでは精霊を使役する者 “精霊使い” という者が居る。非常に稀有な能力のようで、人目に触れれば軽く騒ぎになるレベルらしい。

だからキサラギは人目のある場所ではリートに話し掛けて来ないよう頼んでいた。

「シエラ。お目当ての物が無いなら帰ろう」

「そうね。いつまでも黙ってて貰うのはリートに悪いものね」

キサラギ達は賑わう大通りを後にした。

二人が向かう先は彼らの新しい家だった。

16・冒険者（後書き）

どうも、如月八日です。

今回も書けた分まで投稿します。

最近になって生活のサイクルが変わったんですが、次回の日曜にはきちんと更新することが出来そうです。

17・試験(前書き)

どうも、如月八日です。
今回は少し短めです。

キサラギ達は薄暗い裏通りへと入る。

彼らが暮らす新しい家は裏通りを抜けた先にあつた。

古い洋館だつた。長い年月でひび割れた壁を緑の蔦が覆っている。住宅が密集する地区からも外れた館は、近くに倉庫と街を覆う外壁しかない。

「うん、いつ見ても中々のカムフラージュだな。とても人が住んでいるようには見えない」

『いえ、マスター。これは擬装ではないと思います』

キサラギの勘違いを即座にリートが正す。

「ブライが使っていたのは随分と昔だつたんだな」

どう見ても廃墟の洋館を見ていると、キサラギの脳裏にあの日のやり取りが蘇る。

「私に良い案がございます」

言葉とは裏腹に何故かブライは微妙そうな顔で自身の考えを説明した。

彼の提案は大陸北東部の都市である“ボーレル”に身を隠すというもので、しかも潜伏先は既に目星が付いているそうだ。

「凄いな……いや、これも執事なら当然のことなのか？」

執事ですから、ブライのお決まりの口癖を思い出して、キサラギは自己完結しそうになるが、意外にも予想に反して彼は別の言葉を口にする。

「ボーレルには昔住んでいた家があるんです」

「へえ、そうなの？ 初めて聞いたわ」

「お嬢様にはあまり昔の話をしませんでしたから……」

何にせよ居場所が確保してあるのなら後は行動するだけだつた。

「キサラギ？」

気が付くとシエラが怪訝な顔でこちらを覗き込んでいた。

「悪い。少し考え事をしていた」

『ブライさんが待つてます。マスター』

シエラに何でも無いことをアピールして、キサラギは急かすリートに応えて館への歩みを速める。

年月を感じさせる扉を開いて館へと足を踏み入れる。

「ただいまー」

「戻ったぞ。ブライ」

「おかえりなさいませ。お嬢様、キサラギ様」

二人が声を上げて自分達の帰還を伝えようとしたが、既に接近を察知していたのか玄関ホールで即座にブライが出迎える。

ブライにはここ数日の間、館の清掃と食材などの買出しを任せていた。

彼の洗練された家事スキルによって、数日前まで廃墟同然に荒れていた館も内面だけは、以前の屋敷と同じ位には快適になりシエラは満足していた。

あれから数日しか経っていないが、キサラギも既に新しい環境に馴染んでいる。

「さて、二人ともお疲れでしょう。直ぐにお茶をご用意いたします」

「お願いするわ。ブライ」

「俺は食い物も付けてくれ」

「はい。それでは焼き菓子も一緒にお出しいたします」

言うつとブライは音も無く視界から消える。一流の執事はお茶の用意も迅速だ。

特に何も言わずとも二人はキサラギの部屋へ向かう。引越してからずつとお茶をする時はキサラギの部屋で　そんな暗黙のルールが出来ていた。

（きつと不安なんだろうな）

このお茶会もそうだが、最近のキサラギは四六時中シエラと一緒に

に行動している。正確にはシエラがキサラギの後を付いて回っている。

勿論、シエラとキサラギがより親密になったという見方も出来るのだが、キサラギはそうは思っていないかった。

（失敗は許されない。今度こそ俺が守ってみせる）

キサラギがまた決意を新たにする。

「ふふ……ブライの焼き菓子かあ」

シエラは真剣なキサラギには全く気付かずにブライの焼き菓子に思いを馳せる。

『……………』

空回りするキサラギをリートは複雑な心境で見守っていた。

「お二人ともお気を付けて行ってらっしゃいませ」

翌日、ブライに見送られて二人は館を出てポールを発つ。目的地のラグル湖は馬があれば半日で帰って来られる距離だ。

二人は馬を借りてラグル湖に向かうことにした。今回はシエラとキサラギは別々の馬に乗っている。

前回と比べてキサラギは経験者と呼んでも差し支えない程度には、一人で馬を操れるようになっていた。

シエラはそんなキサラギの様子に満足したのか頷く。

「うん。もうキサラギの乗馬スキルは完璧みたいね」

「ああ、シエラとリートのお陰だ」

『ナノマシンの補助があれば大抵の技能は習得できます』

「ま、魔術は無理だろうが、な」

『そ、それは未知の技術だからです！ 科学的にきちんと理論が解明されれば』

「あら、リート。私の講義にケチを付ける気なの？」

『い、いえ！ 違います。そうじゃありません。私はマスターと私ならいずれは出来るようになるという意気込みをです』

「あはは、冗談よ。そんなに慌てないでちょうだい」

『むむむ……シエラさんは人が悪いです』

リートがむくれてしまったが、黙っていても馬の歩みは止まらない。

二人を乗せた馬はそれなりの速さで降りて行く。

ボーレルは険しいドグラ山脈の中腹に位置する。それでも交易で栄える街なので、街へと続く山道は荷馬車の為にしっかりと整備されていた。

綺麗に均された道を進む。このままのペースなら昼過ぎにはラゲル湖に着くだろう。

「リート。周囲への警戒を怠るな」

『はい、マスター。魔素の影響で長距離の索敵は無理ですが、マスターの死角は補っておきます』

「頼む。ギルドの言うことを鵜呑みにする気はないからな」

キサラギは旅人用のマントの下にシエラに貰った草色の貫頭衣を着ている。だが腰には護身にナイフと拳銃を携帯していた。

これらはユリの魔術障壁の前になす術も無かった装備だが、現在は対策としてシエラに“刻印魔術”を施して貰っている。

「確かにキサラギの言う通り、試験が水汲みだけってというのは怪しいわね」

シエラはマントの下に動き易いようズボンを履き、キサラギと同じタイプの黒い貫頭衣を着ていた。

「いざとなれば私も援護するわ」

勇ましく宣言するとシエラは腰のベルトから刻印銃を引き抜く。

彼女の射撃技術と刻印銃の力なら攻撃魔術が使えない彼女でも、キサラギの援護が出来るだろう。

「それにしても【シユナイト】の研究が出来ないのは苦痛だわ」

「少しの辛抱だ。冒険者の資格さえ取れば後はどうでも良い。真面目に依頼を受ける必要は無いさ」

キサラギがギルドに加入する目的はギルドカードだった。

余所者のキサラギにはセルディオで身分を保証する物が無い。ギルドカードは生まれや種族に係なく誰でも入手することが出来る。ギルドの試験に合格する必要はあるが、キサラギが行動する可能性の高い人間の国で使える最も簡単な身分証なのだ。

「そっぴやシエラは何で一緒に試験を受けたんだ？」

「私もキサラギと同じ身分証目当てよ。ま、理由はそれだけって訳じゃないんだけどね」

「そっぴなんですか？」

意味深に笑うシエラにリートが興味を持ったらしい。キサラギとしても試験とはいえ、護衛対象を外に連れ出す理由となったことなので興味があった。

「別に大層な理由がある訳じゃないわ。両親が二人とも冒険者だったの。だから少しだけ興味があったのよ」

「ご両親がですか？ それは何と云うか意外です」

「あの屋敷だから………てっきり両親は貴族か商人だと思っていたぞ」

これまで一度も話題に上らなかったので、キサラギは彼女の両親が既に死んでいることには驚かなかった。

「ふふ………そっぴね。でも、あの屋敷も元は両親が冒険で手に入れた財宝や報酬で作った物なのよ？」

「へえー冒険者って成功すると随分と儲かるんだな」

セルディオに落ちて来た所為ですっかり忘れていたが、今も訓練校への借金を抱えているキサラギには雲の上の話だ。

「今の生活費だって両親の遺産を使ってるだから………って、どうしたの？ 変な顔して」

「……………」

まさか両親の残した遺産で養って貰っていたとは思わなかった。

キサラギとリートは一樣に気まずそうに沈黙する。特に食費という面で、シエラ達に多大な負担を強いていたキサラギはもう少し自重しようと考えを改めた。

思わぬ財源のカミングアウトに意図せず微妙な空気が漂ったが、幸いにも目的地には予想より早く到着した。

ラグル湖に到着した一行は深く青い湖面を一望する。

「今回は以前より随分と早く着いたな」

「この前は夜で天気は雨だったじゃない。なら当然の結果よ」

シエラの言う通りだった。今回は時間が陽の照らす日中であったことに加え、天候にも恵まれていたことが原因だろう。

ラグル湖はとても巨大な湖だ。澄んだ水は飲み水としては最高だろう。

だが、広く深い湖の底は陽の光すら届かない闇の世界でもある。

「リート。確認を頼む」

『了解』

キサラギは湖畔にしゃがみ込むと軽く指の腹を破る。流れ落ちる血が一滴の雫となってラグルの湖面に溶けて消えた。

血液中のナノマシンがリートと湖底に沈むモノを一時だけ繋げる。

『反応を確認。異常ありません』

「そうか。引き続き待機状態を維持させておけ」

『了解』

血の滴っていた指を湖につける。ナノマシンの力で既に傷は塞がっている。血を洗い落とすとシエラが水筒を手に待っていた。

「さ、次はこっちの用を済ませましょう」

「そうだな」

「キサラギの血が混ざると困るから別の場所で汲みましょう」

「あ……」

迂闊だった。ラグル湖の水が特殊なら不純物は混ぜない方が賢明だろう。

結局、キサラギ達はラグル湖の水を汲んで、日が沈む前にポールへと帰った。

道中で盗賊と名乗る連中に襲撃されたが、所詮はキサラギの敵ではない。

殺さない程度に手加減してぶちのめして、山道の端に置いて行った。

翌朝には二人はギルドに向かったのだが……

「お、おめでとうございます。キサラギさんとシエラさんの両名を、ギルドの冒険者として登録します」

そう言っただけでギルドカードを差し出すレニーの顔は引き攣っていた。何でも今回の盗賊役はギルドに依頼された冒険者だったらしく、完膚なきまでに叩きのめされてしまった彼らはすっかり自信を喪失してしまっていた。

ギルドを辞める者が続出して、昨日からギルドは大慌てだったらしい。

「随分と、その……っ、強いんですね」

「ふっ、プロだからな」

胸を張るキサラギをギルドの職員達は恨みがましい目で見ていた。しかしギルドに来たのは何もカードを貰う為だけではない。キサラギはそのままレニーから情報を引き出すことにした。

「実は人を探してるんだ。こいつに関する情報があったら提供して欲しい」

「へえー……これはまた随分と精巧な似顔絵ですね」

キサラギが差し出す似顔絵　リートの記録していた画像データを紙にプリントアウトした物にレニーは感心する。

「基本報酬はコレだけだ。あとは情報の中身によって判断する」

「はい。わかりました。……って！　ちよっ……情報だけで銀貨五枚も出すんですか!？」

「そうだ。特に居場所と誰と一緒に居るかを提供した奴にはでポーナスを付ける」

キサラギは無造作に金貨を出すとカウンターに転がす。掲示用にもう一枚の似顔絵も一緒に渡した。

あっさりと金貨を出したキサラギにギルド内が騒然とする。

「き、きき、金貨！ たかが情報だけで金貨ですか！？」

「ああ、そうだ」

別にキサラギにとってはこの程度の出費は問題でもない。元はグラナ砦から奪ったミスリルの一部を換金した物だ。

元手が無料なので、キサラギは痛くも痒くもない。

「毎日顔を出す。報告はその時に聞くから頼む」

「わ、わかりました」

「あ……それと依頼を受けるなら適当なことを言って、報酬だけ騙し取ろうとする奴には容赦しないと忠告しておいてくれ」

キサラギは嘘の情報に金を払うようなお人好しではない。

用は済んだのでキサラギが帰ろうとすると、これまで事態を静観していたシエラが口を挟む。

「それでキサラギ。こいつは誰なの？」

「そ、そうですよ！ 私も気になります。情報だけで金貨一枚って、この人一体何したんですか！？」

静かだが迫力のあるシエラと、噛み付くような勢いで捲くし立てるレニー、周囲の冒険者達も滅多にない高額依頼の背景を探ろうと聞き耳を立てていた。

隠すことでもないの、キサラギは有りのまま事実を教える。

「俺の“敵”だ。この世界で一番厄介者な奴だよ。あいつは必ず何かやらかす……いや、既にやった後かもな」

確証は無いが、心当たりなら付いていた。

渡した似顔絵を職員が掲示用のボードに張り付ける。

新しく張られたソレにはくすんだ金髪の男が描かれていた。

似顔絵の中で男が笑う。口角を吊り上げ獰猛に笑う姿は、名前の通りまるで獅子のようであった。

17・試験（後書き）

どうも、如月八日です。

前書きにもありますが今回は少し短めです。

もう少し書いてあったのですが、区切りが悪いので一度切りました。次回の更新はもう少し早い時間に投稿したいです。

18・胎動（前書き）

どうも、如月八日です。

今回は敵側で主人公が出ません。

ヴァーリス帝国の調査隊が“魔神”の逆鱗に触れ追い返された。そんな報告を持ち帰ったユリを待っていた物は自領での謹慎処分だった。

アスラ皇帝より直々に調査を任されたユリ・ハイゼンベルグは、魔神の逆鱗に触れて調査隊　総じて西天騎士団に大きな被害を与えた。実質的な指揮権はアルフォンスが握っていたのだとしても、体外的には皇帝より命を受けたのは彼女である。

実態はどうであれ彼女は苦しい立場へ追いやられてしまった。

だが、そうなると思んだのは諸侯の老人達である。

「ハイゼンベルグ卿。此度の失態どう責任を取るつもりかね？」

「聞けばアルフォンス卿は君を助けようとして魔神を刺激してしまつたそうじゃな」

「これは由々しき事態ですぞ！」

皇帝への報告の場に同席した彼らは声を上げてユリを批難した。

ユリ・ハイゼンベルグは最年少の宮廷魔術士にして、地方とはいえ若輩ながらもハイゼンベルグを治める領主だ。若い魔族の間では才能溢れる新顔と期待される一方で、保守的で頭の固い老人達からは嫌われていた。

彼らには自分の半分も生きていない歳の小娘が、宮廷魔術士で尚且つ領主として諸侯会議に参観するだけでも面白くないのだろう。

しかも彼女は会議の席での生意気な言動も含めて相当煙たがられていた。

そんな彼女に科せられた謹慎は罰というには少々甘い処置に見えるが、これは“魔神”や“人間”への対応と功を稼ぎ易いこの時期に中央から外されることも意味している。

老人達からすれば粹がっていた生意気な小娘が、出世のチャンスをついにしたと陰でせせら笑っていた。

「……………」
ユリは一人でバルコニーから故郷の大地を見下ろす。彼女の生家であるハイゼンベルグの屋敷は、築何百年も経っていてお世辞にも綺麗と言える見た目ではない。

謹慎を言い渡された彼女は一人でハイゼンベルグ領へと帰って来た。行きで率いていた部下は領地の警備に当たっている。今のハイゼンベルグに部隊を常備させる財力は無く、彼らは領地にある村の自警団に過ぎず、その本来の仕事は自衛である。

「この地に未来は無い」

眼下のハイゼンベルグの大地は痩せていた。土は痩せ寒さの厳しい土地柄もあり、ハイゼンベルグで農作物は期待出来ない。また周囲の森には強力な魔物が棲み付いている。

この地に来るのは脛に傷を持つ流れ者か、余程の変わり者くらいであった。

「ふっ………変わり者、か」

ならばハイゼンベルグに奴が訪れたのも必然だったのかもしれない。そんな益体も無い考えが浮かびユリは苦笑する。

「それは俺のことかな？ お嬢ちゃん」

噂をすれば影がさしたのか、彼女の背後には一人の男が立っていた。

青い眼は獲物を求める獣のように鋭い。くすんだ色の金髪は獅子を連想させ、その身に纏った赤い軍服は獲物を仕留めた返り血を浴びたようだ。

男の名はレオン・ブランデル……キサラギが探す彼の宿敵と呼べる男である。

彼はキサラギと同様にユリに雇われ彼女の屋敷に匿われていた。

「何の用だ？ レオン」

だが、二人の関係はシェラとキサラギの間柄とは決定的に異なっていた。

二人の間にあるのはキサラギ達のような親愛ではなく、お互いの利害が一致しているだけだった。

「お前には東部のミスリル鉱山の制圧を任せていた筈だぞ」
前領主である父がまだ生きていた頃のハイゼンベルグは、東部の山からミスリルを採掘しようとする鉱山の開発が行われていた。

しかし周辺に棲み付く強力な魔物が原因で開発は頓挫、ユリの父が死んでからは作業の人員も去り廃れてしまっていた。

だから彼女はレオンという戦力を使つて魔物の掃討をする気だった。

訝しげなユリにレオンは獰猛な笑みで答える。

「もう終わった。それより何かでかい仕事はないのか？ 俺はあんな獣じゃなくて人間とやり合いてえーんだよ」

「領民には手を出すな。余所者なら構わん。ただし隠蔽工作は徹底しろ」

「この前来た連中みたいにか？ 確か冒険者だったか？ だけどアレは駄目だな」

調査に赴いたユリの不在を狙つて、諸侯の老人達に雇われた冒険者達が領地へと侵入していた。レオンはその時のことを思い出したのか不満そうな顔をする。

「だろうな。アレは老害共の嫌がらせだ。一応は冒険者という肩書きだが、本質的にはその辺の盗賊と大差ない。はつきり言つて雑魚だ」

「物足りねえーな。俺は弱い奴を殺したい訳じゃねえーんだよ」

「アレだけ派手に暴れておいて、どの口が言うんだ」

後始末を任せた使用人の話では敵の死体は一つ残らず細切れにされていたらしい。しかも現場には彼ら抵抗した攻撃の痕跡もあった。（機工戦騎なら瞬殺出来た筈だ。弄つて楽しんだか、あるいは）

冒険者とよばれる者の実力を測っていたか、だ。

契約という面では互いに助力しているが、ユリはレオンのことを信用していなかった。

その証拠にユリはレオンに魔術に関する知識は最低限しか与えていなかった。

生身のレオンではユリの魔術障壁を抜けない。セルディオよりも優れた銃やナイフを持っているが、機工戦騎という例外を除いてレオンでは彼女を害することは出来ないのだ。

そう確信していたからこそ、キサラギを相手に不覚をとってしまったのだが……

「ま、その分の報酬は貰う。最初の取り決め通りにミスリルだ。あと食料と酒をくれ」

「ミスリルは好きなだけ使え。食料と酒は屋敷の物を勝手に食うんだな」

「へへっ……そう言だろうと思って一つ失敬させて貰ってるぜ」

既に蔵からくすねて来ていたのかレオンの手にはワインの瓶が何本か握られている。他にも懐から糧食用の干し肉を取り出していた。どうやらこの場で酒盛りを始めるらしい。

「ふん、どうせ酔えはしないんだ。酔えない酒に何の意味がある？」

「意味ならあるさ。酒は美味い。それだけで十分だ。カハハハッ！」

「ふん。程々にしろよ……ん？」

バルコニーに立つユリの下に一羽のコウモリが来る。ユリが手を差し出すとその下にぶら下がった。その足には紙がくくり付けられている。

「何だ？ コウモリが伝令役か。不便だな」

「使えぬ技術よりマシだ」

魔素の影響でナノマシンの機能は大幅に制限されてしまっている。

「ハハッ！ そいつは違くないぜ」

「ふむ。これは……」

皮肉を込めてユリはそう返したのだが、レオンは声を上げて笑った。

彼女はレオンを無視して手紙を読むことにする。内容は帝都に潜ませていた部下からの報告だ。

どうやら“ゲシュト砦”で編成されている部隊の指揮は諸侯の老人達に決まったらしい。

「良い報せだったみてえーだな。顔が笑ってるぜ？」

「ああ、これは間違いなく朗報だ。おい、そいつを寄越せ」

「珍しいじゃねえーか。お嬢ちゃん酒を飲まないタイプだと思っ
てたんだが……」

「そういう気分なんだ。貸せ」

レオンの手からもう一本の瓶を奪い取る。そのまま魔術で栓を開けると、ユリは直接口を付けてワインをラッパ飲みした。

じっくり味わう気などない。ただ少しだけ酔いたかった。

「良い飲みっぷりだな。さて、次の仕事は何だ？ 出来ればキサラギがやったみたいなの派手なのを頼む」

「察しが良いな。お望み通り今度の仕事は派手だ」

「カハハツ！ そいつは嬉しい話だ。それで？ 俺は砦でも落せば良いのか？」

「……………」

何処か冗談めいた口調だったが、レオンの推測は概ね正しい。彼には独自の情報網も無く、恐らく勘で言ったのだらう。大した精度だった。

ユリは改めて目の前の男に警戒を強める。

「標的はゲシュト砦だ。具体的な手段はお前に任せる」

「一応の確認はするぞ。ゲシュトは味方の砦だ。本当に落として良いんだな？」

「ああ、そうだ。安心しろ。人間は“魔神”の対応で手一杯だ。それにゲシュトが陥落してもまだ防衛用の拠点は幾つかある。何の問題も無い」

「ふ、ふふつ……そうか。問題は無い、か」

レオンは友軍の砦を攻撃する理由を聞きたかったのだが、ユリの答えはレオンが砦を落とした後の心配だった。

「それにお前が帝国の事情を気にする必要はない。そうだろ？ 傭^イ備^ガ」

兵」

「ク、クハハツ！ 確かにお前の言う通りだ。俺には誰が味方なんて関係ない。依頼通りに敵を殺すだけだ」

「お前は依頼通りに砦を落せば良い。ただし」

「ユリが小さく呪文を唱える。“記録”と呼ばれる魔術で術者が見た物を、空間に投影して他者に見せる術だ。主に斥候などが優先して取得する魔術である。」

虚空に映し出されたのは何人かの老人だった。その外見から長寿で見た目の老化が遅い魔族にしてもかなりの高齢であることが窺い知れる。

ユリは冷たい声で依頼を告げた。

「こいつ等は消せ。絶対に逃がすな」

「復讐か？」

レオンはその程度の器なら拍子抜けだとも言いたさうである。

「否定はしない。確かにこの老害共は父上の死に関係している」

対外的には前領主は病で死んだと伝えられている。

だが彼女の父は毒で死んでいた。心ない者は鉦山の開発に失敗したユリの父が自殺したと思っっているようだが、それも事実とは違う。「父上はあの老害共 いや、この国の犠牲となった」

今のヴァーリス帝国は古くから生きる老人達が権力の大半を握っている。人間ならば権力を握ろうと数十年で隠居するだろうが、長寿の魔族は世代交代が極端に遅い。

おまけに自尊心が強く、年寄りの中には力を持つ有望な若者を認めない風潮がある。

真に実力のある者ならユリのように逆境の中で生き残ることも可能だが、彼女の父はそうではなかった。

「ただ、父上が弱かった。それだけの話だ」

あの人は老害共に楯突いて勝てるような人ではない。分不相応な力を求めた結果だ。

弱いから父は死んだ。彼女がハーフを嫌悪する理由も彼らが魔族

や人間より脆弱だからである。

「弱い奴は死ぬ。それが世の真理だ」

彼女は心の底からそう思っていた。

しかしだからこそ、ユリには一つ許せないことがある。

「ならば、こいつらに今を生きる資格は無い！」

虚空に向けて腕を一閃。無詠唱で紡がれた風の魔術で虚空に浮かぶ老人達の顔が千切れて消える。

「父上はこの国を愛していた。だが、今の帝国は腐っている。その原因である害虫共は全て駆除する！」

権力に妄執するだけの老人など帝国に必要ない。彼らのように若い芽を潰す害虫が巢食う限り、ヴァーリス帝国の未来を閉ざすことになる。

「なるほど、要するに革命か」

「ふん、そんな大層な物じゃない。これは掃除だ」

「ハハハッ！ なら差し詰め俺は掃除屋って訳だ。そういう仕事なら大歓迎だぜえ！」

革命とは多くの血を流す。セルディオより遙かに進んだ文明に産まれたレオンはそのことを知っていた。

「お前を生かしておいて正解だったぜ。クハハッ！」

「さて、では依頼の報酬についてだが……」

「いや、いつも通り物資の補給だけで良い」

「そうもいかない。今回の依頼はかなりの大仕事だ。それなりの報酬を用意しないと不安だ」

勿論、それはレオンがグリを裏切らないかという意味である。

傭兵という人種には報酬という分かり易い理由が無ければ、依頼する方も傭兵を信頼する材料がないのだ。

「報酬は要らねえ……いや、それも少し違うか」

これから起きる戦いその物がレオンにとっては報酬だ。

何故ならそれだけの大舞台で動けばキサラギは必ず姿を現すだろう。

「奴との勝負。それが俺にとって真の報酬だ」

このまま【テュラン】に乗って“魔の森”に行くという手もあったが、ユリが襲撃したことから、あのキサラギなら既に拠点を移しているとしてレオンは予想していた。

「やけに断言するな。本当にキサラギが来ると思っているのか？」

「ああ、奴は必ず来る。何故なら奴にとって俺は敵だからな」

そう言っただけでレオンは笑みを深めてワインを煽る。ナノマシンの力でアルコールは瞬時に分解され、決してレオンが酔うことはない。

だが、レオンは心地よい高揚感に満足していた。

レオン・ブランデルはユリ・ハイゼンベルグを信用していない。

彼がそう思う理由はユリよりも単純だった。最初から彼は誰も信じていない。彼が信じるのは自分の力だけである。

それは彼を補助するAIも例外ではない。

「モニカ。【テュラン】の調子はどうだ？」

「はい。動力炉以外は問題ありません」

「動力炉の原因は？」

「申し訳ありません。マスター」

モニカはAIらしい無機質な音声で答えるが、その声は少し悲しげであった。

「ふん、役立たずめ。作戦まであまり時間がない。作業を急がせる」
答えの分り切った問答を終えて、操縦席の中でレオンはモニカに指示を出す。

ユリにゲシュト砦の襲撃を依頼されてから既に数日が経っている。作戦決行のタイミングは彼女の指示を仰ぐ必要がある、レオンはキサラギとの一戦に備えて【テュラン】の整備をしていた。

帝国でも僻地に位置するハイゼンベルグ領でも、【テュラン】は更に人気の無い森の中に膝を突き佇む。レオンが乗り込んでいるので胸部のハッチは開いていた。機体各部でナノマシンの作業光が断

続的に発生している。

「ナノマシンの通信状況はどうなっている。何か改善の目途は立ったのか？」

『いえ、通信状況は不良のまま、回復の目途も立っていません』

「キサラギめ。一体どんな魔法を使いやがったんだ？」

襲撃したユリの話を信じるなら【シユナイト】は単独で稼動したらしい。

レオンと同様に向こうも自分の機工戦騎を、他人の手に委ねるような真似は絶対にしない筈だ。ナノマシンの恩恵があっても生身では、ユリのような高位の魔術士が張る魔術障壁を突破することは不可能である。

（ま、既にもう手は打ってあるんだがな……）

ユリは上手くレオンを利用するつもりだろうが、そういう駆け引きならレオンも負けていない。セルディオに来る以前からレオンは危険な依頼を好んで受けていた。

それはより苛烈な戦場を求めての行動だったが、きな臭い依頼は後ろ暗い雇い主が出す物で、裏切られたことは一度や二度では済まない。

（相手が動いてから対処するようじゃ駄目だぜ。お嬢ちゃん）

レオンはそれらの窮地を独自の嗅覚で察知し生き残ってきた。雇い主に報復という礼を返すことも忘れてはいない。

【テュラン】が不調のままでは、キサラギとの戦いを楽しめない。レオンがユリと組むことにしたのも彼女の領主という立場を利用する為である。

「くくくっ……楽しみだ」

「ふん、相変わらず大層な自信だな」

「お嬢ちゃんか……【テュラン】の様子見かい？」

気付けば開いたハッチの向こう側で、ユリが宙に浮きながら嘆息していた。

彼女はこうして定期的に【テュラン】の下に来ては修復状態を確

認する。

尤もこの場に來た理由はそれだけではないのだが……。

「以前と色が違うようだか？」

「ああ、装甲を塗り変えた」

以前の【テュラン】は【シユナイト】と同じ宇宙用の迷彩色である“黒”の塗装が施されていた。しかし地上戦で黒は夜間の迷彩効果しか期待できない配色だった。

今回のレオンのように塗り替えてしまっても機体性能に差が出ることは無い。

だが、その配色は見る者に強烈なイメージを与える。

「ふん、これではまるで“天使”だな」

【テュラン】の装甲は純白に染め上げられていた。大地に跪く機体の腰には二本の剣を帯びており、俯く姿は白の装甲と背部ブースターのお陰か、羽を休める天使のようなシルエットを描いていた。

「キサラギが“黒”なら俺は“白”だ」

「白黒付けるとでも言う気か？」

「奴と俺は敵同士だ。どうせ決着を付けるならコレ位の演出はあった方がよい」

「確かにお前の言うことも一理ある。黒の魔神は両勢力から警戒されている立場だ。そこへ対照的な敵対者が現れれば心象は良くなるかもしれない」

尤も同じ魔神として警戒される可能性の方も十分あるのだが……ユリはあえて口にはしなかった。

「おっと、忘れるところだった。そろそろ“翻訳”が切れる」

レオンもキサラギと同様に“翻訳”の魔術を掛けてもらっている。特に魔晶石の腕輪なんてプレゼントされていないレオンがセルディオで円滑に活動するには必須の工程だ。

「動くなよ。下級の術とはいえ、何度も使うのは面倒だ」

開かれたハッチの上に着地すると、ユリは周囲の空間に満ちる魔素を魔力に変換する。

“魔素”という不可視の存在は、淡く光る“魔力”となつてユリの周囲を漂う。

『マスター。通信状況、動力炉ともに状態が改善されています』

「何だと？ 待て、これは……」

モニカ言葉にレオンは慌てて計器を確認する。先程より動力炉の出力が僅かに上昇 いや、上昇し続けている。

それは【テュラン】の持つ“力”が十全の状態に近付いたことを意味していた。

「くっ、はははっ！ どうやら、お嬢ちゃんと組んだのは正解だったみてえーだなあ！」

詳しい原理はわからない。しかしレオンは直感的に“魔術”の使用が動力炉の不調を改善させたと確信していた。

「何だ？ その様子ではコレは直つたようだな」

術を掛け終えたユリが一人置き去りにされている。

だが、今のレオンはそんなこと気にもしていない。

「カハハハッ！ こつちの準備はもう直ぐだ。あんまり遅いと俺が全部殺しちまうぜえ？」

彼の頭の中を占めているのは一人だけだ。

彼が心から焦がれる相手は一人だけだ。

「キサラギイイー！！」

飢えた獅子の咆哮がハイゼンベルグの森に響く。

主の狂喜に応えるように【テュラン】の単眼が青く灯る。

暴君の名を冠した“魔神”が静かに胎動を始めていた。

18・胎動（後書き）

どうも、如月八日です。

前書きにも書きましたが、今回はキサラギの出番はありません。

次はちゃんとキサラギの話する予定です。

それではまた次の更新でお会いしましょう。

ルシフェラ・セリクスの一日はブライの淹れた紅茶を飲むことから始まる。

その日課はボーレルに引越してからも変わらない。

「それは本当なの？ ブライ」

シエラは金色の瞳を細める。自室でくつろぐ彼女はカラーコンタクトを外し、彼女本来が持つ金眼でブライを見詰めた。

「はい。確かな筋の情報です。お嬢様」

給仕をしていたブライが重々しく肯定する。それだけで爽やかだったシエラの気分が一気に地の底まで沈む。ブライとしても朝から主人の気分を害する報告をしなければならぬことを心苦しく思っていたが、黙っている訳にはいかなかった。

「そう……先に動くのは帝国の方なのね」

ヴァーリス帝国が“ゲシュト砦”に軍を集結させている。彼らの目的が魔神の討伐か人間との戦争かまでは不明だ。しかし“魔の森”が戦場になることは間違いないだろう。

そうなれば恐らくシエラの屋敷も無事では済むまい。

「お嬢様。ここは私が」

「変な気は起こさないでちょうだい。あなたは大事な家族よ」

「しかし、お嬢様。あの屋敷にはお二人との思い出が……」

人目を忍ぶように“魔の森”に建てられた屋敷は、元はシエラの両親が彼女と一緒に暮らす為に造った物だ。屋敷にはシエラの全ての思い出があると言っても過言ではない。

その中には今は亡き両親との大切な思い出もある。

「お願いよ、ブライ。屋敷のことは諦めて……お願い」

それでもシエラは悲痛な想いを押し殺し、ブライに微笑み返す。

彼女に残された家族はもう彼しかいなかったから……

ブライにとってシエラは仕えるべき主人である。

だが、同時に彼女は亡き仲間の忘れ形見でもあった。

「カムラ、ルシール。私はどうすれば良いのですか……」

ブライは己の無力に打ちひしがれていた。彼が如何に凄腕の剣士でも数千にもなる軍隊を相手取ることとは不可能である。一軍の将たるアルフォンスと互角の実力でも一国の軍隊には全くの無力だった。

「お嬢様……」

シエラがブライを家族と慕うように、彼も彼女を家族として大切に思っている。

彼女が悲しむとわかっていてもブライにはどうすることも出来ない。

「いいえ、違いますね」

本当は知っていた。ブライの口から最近馴染みとなってきた名前が零れ落ちる。

「キサラギ様、リート様」

彼らの力を頼れば帝国軍を追い返すことも出来るかもしれない。

だが、それは他ならぬシエラが許さないだろう。

「お二人はもう立派なお嬢様のご友人です。初めて出来た友人を危険に晒すことをお嬢様はお許しにならないでしょう」

最初は単純な興味だった筈だ。知の探究者 錬金術師として彼

女は彼と彼が持つ機工戦騎に興味を持った……本来ならばそれだけで済む話だった。

「お二人がもう少し悪い人なら良かったのですが……」

キサラギは彼女の為に命を賭して戦ってくれた。

身を挺して迫る凶刃からシエラを守ってくれた。

だからこそシエラはキサラギのことを信頼したのだろう。

「私は執事です」

それが主人の意向ならばブライは従うしかない。

ブライは朝食の用意を済ませると、その足でキサラギの部屋へ向

かう。別に起こしに行く訳ではない。キサラギはいつも早起きで、以前のように寝込んでいる時でもない限り寝坊などしたことがなかった。

「キサラギ様。朝食の用意が出来ました」

数回だけ扉をノック。直ぐに聞こえる返事を確認してシエラを呼びに行く。

それがキサラギと暮らすようになってからの恒例だった。

「……おや？」

だが、予想外に反して扉の向こうから返事がしない。聞こえなかったのかと何度かノックと呼び掛けを繰り返す。

しかし幾ら呼び掛けても、キサラギからもリートからも返事が来なかった。

二人の身に何かあったのかもしれない。そんな疑念がブライの脳裏を掠める。

「失礼します」

無礼を承知でドアノブを回す。幸いにも鍵は掛かっていなかったようだ。

あっさりと開いた扉越しに室内を覗き込むとブライは肩を落とすた。

キサラギの部屋には誰も居ない。どうやら彼は不在だったらしい。

「はあーこれではいけませんね」

ブライは先程まで自分が考えていたネガティブな思考を反省する。シエラが落ち込んでいる時だからこそ、執事である自分はいつも通りでなければならぬ。

「それにしても、キサラギ様は一体何処へ？」

私物の少ない閑散とした室内を見回しブライは首を傾げる。

鍵を掛けていないのだから、恐らく散歩にでも出掛けたのだろう。

そのまま踵を返そうとしたブライだったが、机の上に置かれた一枚のメモ紙を視界の端に捉え立ち止まる。

『ちよつと散歩に行つて来る』

キサラギの残した書置きには簡素に一文だけが記されていた。

「こ、これは……」

その一文にブライの顔が青褪める。一見して何の変哲もないメモに見えるソレを彼は文面通り受け取れなかった。

ブライはメモを握り締めると部屋から飛び出す。

「す、直ぐに知らせなくては！ お、お嬢様！」

“グラナ砦”を襲った時もキサラギは同じことを言っていた。

『ちよつと動作テストも兼ねて近場を散歩して来る』

慌しく走るブライの頭の中では、あの時のキサラギの言葉が延々と繰り返される。

ブライは今更、彼の言う“散歩”を額面通りに受け取ることなど出来なかった。

キサラギがその話を聞いたのは全くの偶然だった。

今日の予定も半ば日課となりつつあるギルドの訪問を除けば全くの白紙だ。ギルドの訪問もレオンの搜索依頼の経過さえ確認すれば、進展でも無い限りは一瞬で済んでしまう。

ポーレルに越してからキサラギは時間を持て余していた。

「うーん、シエラでも誘って市場でも冷やかすか……」

『む？ デートですか？ マスター』

「違う、違う。そんな洒落たもんじゃない。ただの暇潰しだ」

『それで市場で屋台を制覇ですか？』

「くくっ！ それも良いな」

『はあ、色気より食い気ですか。マスターは何時まで経っても子供です』

「ほっとけ」

そうと決めたら前もってシエラに伺いを立てねばならない。ポーレルに越してから彼女は自室で研究を続けているようで、昨日も遅くまで熱心に自室に籠っていた。

「刻印魔術か……」

ボーレルに来てから他の“魔術”を目にする機会も増えたキサラギは、薄々感じていたことだが、“刻印魔術” 如いては彼女の研究は異常だった。

いや、それは“異質”と言った方が正しいのかもしれない。セルディオでは魔術を扱うには才能が要る。術自体は下位の物であれば誰でも努力すれば習得できるだろう。

だが、高位の魔術に関しては才能の有無は重要だ。

何より産まれながらの才能という意味では“種族”の差こそが絶対である。

“魔族”と“人間”の両者を隔てる理由の根底には、少なくともこの事実があることは間違いないだろう。

彼女の研究は両者の隔たりを埋める一助となるか、それとも断絶の一撃となるか、余所者のキサラギにはわからなかった。

「そっぴや、最近は何を研究してるんだ？」

彼女が遅くまで研究していることは知っているが、キサラギは何を研究しているかまでは知らなかった。

その疑問に答えたのは意外にもリートだった。

『今は“魔晶石”と“刻印魔術”を応用した発明品を作っている筈です』

「やけに詳しいな」

キサラギは初耳の情報なので、リートがシエラと二人の時に聞いたのだろう。

やはり女同士で話が合うのかもしれない。

そんなことを実感している内にシエラの部屋まで来ていた。

「ん？」

扉をノックしようとした瞬間、強化されたキサラギの聴覚が扉の向こうで繰り返される会話を聞き取る。

思わずキサラギは動きを止め、二人の会話に意識を集中した。

「そっ……先に動くのは帝国の方なのね」

「お嬢様。ここは私が」
「変な気は起こさないでちょうだい。あなたは大事な家族よ」
「しかし、お嬢様。あの屋敷にはお二人との思い出が……」
話を聞いていく内にキサラギの表情が険しくなる。声だけでもキサラギには暗い顔をしているシエラの姿が鮮明に浮かぶ。
「お願いよ、ブライ。屋敷のことは諦めて……お願い」
その言葉を聞いた時、キサラギの心は決まった。

部屋に戻って軍服に着替えると、キサラギは誰にも気取られないよう街から出る。

人目を気にする必要がなくなると同時に黙っていたリートが声を発した。

『また無茶をする気ですか？ マスター』

「不満か？」

『はい。ですが、私にはマスターを怒れません』

「心配を掛けるな」

『それはシエラさんに言ってください。どうせ後で怒られるんです』

「ああ、覚悟しておくよ」

なるべく急ぎたいところだが、今回は移動に馬を使わない。

ポーレルから距離を稼ぐと、キサラギは整備された山道から脇に逸れる。

切り立った斜面の側まで近付く。

「ふっ！」

そのまま傾斜のきつい山肌へ一足で跳び降りた。

「はっ！ ふっ！」

強化した身体能力を駆使して斜面を蹴る。そうやって細かな減速を繰り返していく。

その姿は他人に魔物と見間違われるような動きだった。

「おっとっ！」

大きく横に跳び途中にあった岩を避ける。殆ど落下するような速

さでキサラギは斜面を降りて行く。

大幅なショートカットの甲斐もあり、昼前にはキサラギはドグラ山脈を抜けた。

馬を使った以前よりも遥かに速い。

山から降りて森を抜けると、キサラギの前に深く青い湖面が広がる。

ギルドの試験でも来た“ラグル湖”だ。しかしキサラギは景色を楽しむ為に来た訳ではない。

「頼むぞ。リート」

『了解』

美しい景観には目もくれず、キサラギは以前と同じように湖面に血を垂らす。

レニーも言っていたが、ラグル湖の水は“特別”なのだ。

『DNAマップ照合 確認。システムとのリンクを完了』

「よし、上げる」

『了解。メインシステム起動』

鏡のように穏やかだった湖面が揺れた。陽の光すら届かないラグル湖の深淵で、真っ赤な光点が一つ静かに灯る。

『【シュナイト】 起動』

廠かな歌のような声を合図に湖面を突き破って漆黒の巨体がせり上がる。

シエラの屋敷を出る際にキサラギが最も苦心したのは【シュナイト】の隠し場所だ。

キサラギはボーレルから最も近い湖 ラグル湖に機体を沈めた。距離や人目の問題もある。ラグル湖は隠し場所として理想的だった。

ラグルの水は“魔素”を浸透させない性質を持っている。ギルドの試験に利用されるのも、その性質を使って“湖水”の真贋を容易に鑑定できるからだ。

そして“魔素”を浸透させない性質は、そのままナノマシンの通

信を阻害しないことを意味した。

「リート。ハッチを開け」

キサラギは未だ浮上を続ける機体に飛び移った。肩の部分に着地すると手早くリートに指示を出す。

ハッチが開く。キサラギは滝のように水が流れ落ちる機体に乗り込む。

操縦席に着いて左右のスティックを握る。

「くくつ……」

慣れ親しんだ感覚にキサラギは笑みを浮かべる。離れていたのは僅か数日だったが、【シユナイト】もキサラギにとっては立派な“相棒”だ。

出撃を前に浮かれる気も無いが、思うままに機工戦騎を駆りたいと思ってしまうのは、ある意味で傭兵の性と言えた。

「マスター。作戦内容の確認をお願いします」

「目標はヴァーリス帝国の拠点“ゲシウト砦”の襲撃だ。建造物の破壊と編成中の軍を潰す」

「了解。砦の規模はグラナと大した違いはありません。しかし駐留する部隊の数と質は、恐らく比べ物にならないでしょう」

「ああ、そうだな」

「今回は空も私達に味方してくれませんか」

今日の天気は生憎の雲一つ無い快晴だ。視界は至って良好、例え見張りが呆けていたとしても接近する【シユナイト】に気付くだろう。

「わかってる。だが、時期を選ぶ余裕はない」

街で噂になる位だ。砦に集結する帝国軍の数は相当なものだろう。何より手遅れになることだけは許されなかった。

「絶対に止めてみせる」

「マスター……」

(人間だけじゃなく、魔族の方も早急に手を打っておくべきだった)キサラギは苦々しく顔を歪める。

「今回の件は俺のミスだ」

『そんなことはありません!』

リートが強く否定の声を上げる。

だが、キサラギはそれを制すと頭を振った。

「“人間”の拠点は攻撃したんだ。“魔族”の方も同じように攻撃すべきだった」

敵の侵攻を阻止するには両方を牽制する必要がある。キサラギもそのことを忘れていた訳ではないが、ユリ率いる調査隊の襲撃でそれどころではなかった。

「それに帝国には大きな借りがあるからな。この機会に返すのも良いだろ」

『はい。利子も付けて叩き返してやりましょう!』

威勢よく答えるとリートはシステムを移行させる。

『システムを戦闘モードに移行』

『生体反応 良好』

『機体状況 良好』

『機体接続 良好』

次々と確認事項が読み上げられる。キサラギは目を閉じリートの声に耳を傾ける。耳馴染んだ彼女の声は清らかな歌のような響きがあった。

『【シュナイト】 起動』

巫女の歌が止むと鋼の化身に命が宿る。合成音の咆哮こそ上げないが、漆黒の巨人は乗り手の意志に応えるように、駆動音を唸らせ前進する。

「さて、ちよつとそこまで散歩に行くぞ」

19・散歩（後書き）

どうも、如月八日です。

今日は少し更新が遅くなりました。

最近になって友人が新作を投稿しました。

詳しくは活動報告の方に書くので、興味のある方はどうぞ。

快晴の空の下を漆黒の巨体が歩く。ラグル湖を出撃した当初は、キサラギも森の中などの出来る限り人目を避けたルートを選り進んでいた。

しかしドグラ山脈を越えてからはそれも無理だろう。

『マスター。まもなく作戦区域です』

『よし、機動制限を解除しろ』

『了解』

これ以上の迂回も不可能だ。間接部の疲労軽減の為に作戦区域まで戦闘機動は避けたかったが、生憎と今日の天気は快晴。視界は良好で澄んだ空気のお陰で遙か遠方まで見渡せる。遮蔽物の途切れた状態では機工戦騎の巨体は嫌でも目立つ。山を駆け下りる巨人の姿は、十中八九で“ゲシュト砦”の見張りに察知される筈だ。

そなるとキサラギが選べる最良の手は一つだけだった。

『正面突破だ。突っ込むぞ、リート！』

『はい。単純ですが、最良の手です』

相棒の同意も得られ、キサラギはフットペダルを深く踏み込む。

山肌を蹴って【シュナイト】は疾走する。押し寄せる濁流の如き暴威を秘めて、漆黒の巨人は一直線にゲシュト砦へ迫った。

『前方に展開する部隊を確認。兵種は……騎兵です』

『こちらの接近は気付かれていたか』

だとしても明らかに部隊の展開が速い。【シュナイト】を視界に捉えてから出撃しては間に合わないだろう。

『どうしますか？』

『目標はあくまで帝国の戦力を削ぐことだ。その為に砦は破壊する。守備隊の方は適当な被害を出せば十分だ』

ゲシュトにはグラナの時と違って奪取すべき物資は無い。シエラの屋敷を守る為に必要なのは敵部隊の無力化であり、キサラギも悪

戯に命を奪う気は無かった。

「相手をするのは面倒だ。跳ぶぞ！」

【シユナイト】が一瞬だけ身を屈め、大地を踏み砕く勢いで跳び上がる。キサラギは一連の動作に連動させて背部のメインブースターを噴かす。

大気圏内での単独飛行は【シユナイト】には不可能だが、一時的な滞空や“跳躍”なら話は別だ。

【シユナイト】はその巨体に似合わぬ軽やかな動きで、正面に布陣する敵部隊の頭上を跳び越える。

「……おおっ!?」「」

その非常識ともいえる機動に帝国軍は度肝を抜かれた。果敢に戦いを挑もうとした矢先の出来事に兵士達が浮き足立つ。

(本来ならここで“鳴き声”の一つでも聞かせてやれば効果抜群なのかもしれないが……)

恐らく無駄だろう、とキサラギはそう判断した。

屋敷の襲撃前ならグラナ砦と同じように帝国相手にも“魔神”は恐ろしい怪物と認識させる作戦を取っただろう。

だが、レオンとの繋がりが疑われるユリが居る以上、帝国側も機工戦騎の存在に気付いていると考えた方が妥当だった。

「ならば速攻で潰すだけだ。リート！」

『了解。シールド展開』

狙うのは前回と同じ“城門”だ。堅固なシールドに守られ突撃する【シユナイト】の巨体は、それだけで凶悪な威力を秘めた武器となる。

グラナと同じようにゲシュトの城門も粉々に破壊される……咎だった。

「……ハイマジック・シールド
上位光壁魔術！」

「何っ!?!」

今度はキサラギが驚かされる番だった。重なる詠唱と共に砦を光の壁が包み込む。

【シュナイト】の体当たりが光の壁と真正面からぶつかる。雷鳴のような爆音を響かせ境目では激しく火花が飛び散った。

「ぐっ……馬鹿な！ アレを正面から防いだだと？」

【シュナイト】の巨体が弾かれる。突撃の勢いが生半可ではなかったので、キサラギを乗せた機体が大型車に跳ねられた人間のように宙を舞う。

『マスター！』

「おっと、呆けてる場合じゃない、な！」

キサラギは各部の補助ブースターを駆使して空中で姿勢を制御。

何とか無様な墜落だけは免れたものの、機体は皆から大きく後方へと飛ばされてしまった。

『城壁の上に魔術士らしき集団を確認。推測ですが複数の魔術士による合体魔術ではないでしょうか？』

「畜生、厄介な魔術を使つてきやがる」

城壁の上に並ぶ魔術士達がまた詠唱を始める。彼らの詠唱は最後の一節で意図的に止めてあった。どうやら【シュナイト】の攻撃に合わせて魔術で皆を守る作戦のようだ。

「アレをどうにかしないと皆は落せない、か」

【シュナイト】が真紅の単眼で皆を忌々しそうに睨む。それを好機と見たのか、皆前に展開されていた騎兵隊が追撃を仕掛ける。

「矢を放てえー！」

騎兵達が馬上から矢を射掛ける。鉄の矢では【シュナイト】の脅威にはならない。

「ちっ！」

だが、何十と射掛けられる矢の雨をキサラギは機体をステップさせて回避する。

正確に言えば回避させられたというのが正しい。彼らは“魔神”

の眼 頭部のメインカメラを狙っていた。

そして一連の動きは敵の計算の内であった。

「全てを燃やす灼熱の火よ。今ここに終焉をもたらせ！」

城壁の上で老人が高らかに杖を掲げる。彼が唱える呪文はいつかユリが唱えようとした上位魔術の物だった。

『凄いエネルギーです。マスター！』

リートの警告にキサラギの身体が反射的に動く。シールドではなく、咄嗟に両手の手甲を交差させて防御する。

「上位^{インフェル}燃烧魔術！」

赤々と輝く杖が【シュナイト】へと向けられ、先端の宝玉から巨大な炎の槍が撃ち出される。

だが、【シュナイト】の手甲もレアメタル製の自動盾を改造した物だ。

無骨な赤い色の手甲が燃え盛る業火の槍を阻む。

「ば、馬鹿な……」

まさか防ぎ切られるとは思っていなかったのか、老人が気圧されるようによける。

あれ程の術を一人で行使していた老人は、宮廷魔術士と見て間違いないだろう。

「なるほど、一筋縄じゃいかないってことか」

纏わり付く炎を【シュナイト】は軽く振り払う。

確かに機工戦騎の体当たりを弾く堅固な防壁と、的確な騎兵の援護射撃、それにシールドを抜ける宮廷魔術士の魔術は厄介だろう。

『それでもマスターの敵ではありません』

「ああ、違いない」

【シュナイト】は攻防一体式手甲 “シユライ” を構える。

「くくく……」

キサラギは操縦席で好戦的な笑みを浮かべる。指摘すればキサラギは否定するだろう。

だが、犬歯を剥いて笑う姿は彼が嫌悪する宿敵にそっくりだった。

「まさか上位燃烧魔術すら防ぐとはのう」

改めて“魔神”のとなでもなさを見せ付けられ、アルフォンスは呆れてしまった。

斥候の報告で“魔神”の接近を察知した彼は、誰よりも早く部隊を展開した。

アルフォンスが率いるのは西天騎士団でも精鋭の騎兵達で、前回の接触から“魔神”との戦闘では“魔術”が鍵だと考えていた彼は、自らは皆の魔術士達の援護に徹していた。

「だが、勝機がない訳でもなさそうじゃな」

一度目の攻撃は防がれてしまったが、こちらが奴の攻撃を防いだのも事実である。

それに防いだということは、“魔神”が“魔術”による攻撃を脅威に感じたことも意味している。

「怯むでない！ わしらの役目を思い出すのだ！」

馬上から一括。“魔神”の力に狼狽えていた部下を鼓舞する。手にした剣を掲げるとアルフォンスは切っ先を“魔神”へと向けた。

「悔しいが剣や槍では“魔神”を傷つけられん。攻撃と防御は皆の連中に任せて、わし等は作戦通りその補助に徹するぞ！」

騎兵の機動力は魔神といえども手を焼くだろう。何より皆の外なら戦場を広く使うことが出来る。

「よし、全騎。わしに続けええー！」

アルフォンスはいつもの愛剣ではなく、腰の矢筒から矢を抜くと馬を走らせる。彼は剣の他にも様々な武器に精通しており、弓術もかなりの腕を持っていた。

馬上での戦闘経験も豊富で、今回のように騎乗しながらの射撃もお手の物である。

だが、注意を引こうとした矢先に“魔神”が両手を広げて構えた。「む？ 一体何を……」

警戒を促そうとするアルフォンスの目前で“魔神”の身に変化が起きる。

カシャン！

軽やかな金属音と共に“魔神”の腕から銀の爪が生える。いや、実際に爪が生えてきた訳ではないのだろう。見れば“爪”の正体は先程まで肘から生えていた棘であった。

棘は真逆に向きを変えて、赤い手甲を攻防一体の武器に変貌させている。あれ程の巨体が武器を振るって暴れれば、その威力は想像を絶するだろう。

しかしアルフォンスの関心は別のところにあった。

「あの輝きは!？」

その淡い銀色の輝きにアルフォンスは見覚えがあった。それは“魔神”がグラナ砦を襲った理由でもある。

「ミ、ミスリル……なのか？」

アルフォンスが今一つ確信が持てない様子なのも無理はない。

魔物の襲撃が絶えないセルディオでは、街や城を囲う城壁はとても分厚く造られる。

“魔神”の爪は一刺しで城壁を貫ける程の長さだ。更にそこまで巨大なミスリルの塊はセルディオには存在せず、磨き抜かれた鏡のような光沢は全く別の物にさえ見えた。

“魔神”は両手を広げ重心を落す。長い爪を両手に伸ばし構える姿は、獲物に飛び掛る前の獣を想起させる。

「いかん！ 総員、矢を放てえー！」

アルフォンスの号令に呆けていた騎兵達が一斉に“魔神”に矢を射掛ける。“魔神”は上半身を伏せ、まるで地面を滑るかのように回避した。

「くっ、何度見ても出鱈目なスピードじゃ……」

“魔神”の脅威は何も巨軀から来る怪力だけではない。その巨体からは想像出来ない獣の如き敏捷さが何より厄介であった。

高速で動き回る“魔神”の眼を正確に射抜くことは不可能だ。アルフォンス達の牽制は殆ど意味を成さず“魔神”は再び砦に接近ギリギリと光る銀爪を一閃する。

「『堅牢なる盾よ。敵意を挫き我を守れ!』」

城壁の魔術士達が光壁を展開して、すくい上げるような大爪の一撃を弾く。彼ら役目は全力で砦を守ることだ。人数を生かした防壁の重ね掛けで“魔神”の攻撃を完封する。

その隙に宮廷魔術士が上位魔術で“魔神”を撃退、あるいは討伐する作戦だった。

「大気に漂う精霊よ。我が意に従い顕現せよ」

宮廷魔術士の老人が先程とは別の上位魔術の詠唱を始める。老人の周囲を漂う魔力が徐々にその輝きを増す。

しかし老人の魔術が完成するより先に第二撃は迫っていた。

“魔神”の爪は左右両方の手にある。すくい上げるような右手の一撃から、流れる水のように滑らかな動きで“魔神”の身体が回転。続く二撃目は左手による切り払いだった。

パキンッ！

光の壁に巨大な爪痕が交差する。何十にも張り巡らされた防壁が一枚、乾いた音を立てて砕けた。

キラキラと空気に溶ける防壁の破片を見てアルフォンスの顔が青褪める。

「ぜ、全騎後退！ 急ぎ援護に向かうんじゃー！」

“魔神”の狙いに気付き、急ぎ部隊を向かわせるが、間に合うかは微妙だった。

爪は一撃の威力こそ体当たりには劣るが、代わりに小回りが利く。

全身全霊の突撃さえ弾く強固な防壁も、一点に連撃を集中されれば穴も開くだろう。

パキンッ！ パキンッ！

“魔神”の爪がまた一枚防壁を砕く。“魔神”の連撃は止まらない。独楽こまのように回転しながら銀爪を閃かせる度に防壁が削られる。「大地を砕く天の怒りよ。聖なる刃で断罪せよ！」

砦の方もようやく危機感を覚えたらしい。宮廷魔術士の老人が唱える呪文は“雷”の上位魔術だ。

確かに金属質の身体を持つ“魔神”には炎よりも効果があるかも

しない。

「上位雷撃魔術！」
シャッジメント

天から巨大な雷が雨のように降り注ぐ。場所を対象にした上位雷撃魔術が砦の前面を薙ぎ払う。

「……………」

赤い単眼が僅かに明滅　同時に“魔神”の周囲を翡翠色の光が包み込む。

魔物の群れすら一瞬で蒸発させる稲妻の嵐が、翡翠色をした障壁の表面で弾ける。

場所を対象にしたことが仇となった。広域に拡散する雷は範囲こそ広いが一本一本の威力は中級程度でしかない。

しかも雷は援護に向かうアルフォンス達の足さえ止めてしまう。巻き添えを恐れ立ち止まる騎兵隊は、砦への援護が更に遅れてしまった。

そうなるともう独壇場だった。“魔神”は不思議な翡翠色の守護を消して、猛然と攻撃を再開する。

パキインツ！　パキインツ！　パキインツ！

大爪による執拗な連撃に魔術士達の体力が遂に限界を迎えた。

パキイイインツ！

一際甲高い音を立てて最後の防壁が破られる。

「百人掛りの防壁を力尽くで破るとは……………化け物め」

アルフォンスの言葉は居合わせた帝国軍の誰もが思ったことだ。

勝てない　彼ら身を支配するのは暗く重い“絶望”だった。人智を超越した理不尽なまでの力の化身を前にして帝国軍は諦めていた。

「……………あ？」

諦観に空を仰ぐ兵士の一人が間拔けな声を漏らす。

「おい、何か見え」

釣られるように空を見上げた男は、隣に立つ戦友と同じように硬直した。

「……」

その反応はまるで伝染するかのように次々と帝国軍に広がる。彼らは皆一様に空を見上げると身を強張らせた。

それは帝国軍だけでなく、“魔神”の方も一緒だった。

「ッ!?」

天を見上げた“魔神”が皆への攻撃を中止する。挑むかのように遙か上空を凝視し身構える姿は、天上の神に敵対する“魔神”を描く一枚の絵画のように荘厳だ。

その空気に当てられて誰かがポツリと呟く。

「……天使だ」

空から天使が舞い降りた。

20・天使（後書き）

どうも、如月八日です。

今回も少し短めです。

今回は久しぶりのロボット同士の対決になります。

大空を白い天使が飛翔する。

太陽の光に純白の鋼が煌く。二対の翼は鳥のような羽ばたきを一切行わず、炎を吹き出し青く澄む快晴の空を飛んで行く。

遙か異邦よりセルディオに來た“魔神”
機工戦騎【テュラン】
は真つ直ぐに目的地を目指していた。

『間も無く目標地点の上空です』

モニカの言葉にレオンは外部の映像を確認する。現在の【テュラン】はかなりの高度を飛行中だ。地上からでは豆粒程度の大きさでしか見えないだろう。

レオンが高度を下げようとした矢先、モニカが警告を発する。

『目標地点で大規模な戦闘を確認……襲撃されているようです』

「ほう、人間の軍か？ 随分と手際が良いみたいだな」

“魔素”の影響で機工戦騎のリーダーは機能しない。外部の情報を得るにはカメラによる光学映像か集音マイクの音に頼る他ない。

『いえ、襲撃者は機工戦騎です』

「キサラギか！？ 映像を回せ」

モニカは拡大したメインカメラの映像を映し出す。そこにはレオンが焦がれて止まない宿敵の姿があった。

「ハハハッ！ そうか、お前もここを落とすに來たのか！ さすがはキサラギだぜ。お前も片方だけに喧嘩を売るようなセコイ奴じゃねえーよな。クハッハッハッ！」

漆黒の巨人の姿にレオンは堪らないと、顔を手で覆って笑う。指の間から覗く碧眼に喜悦の炎が燃える。

『外觀や装備に若干の相違が見られます』

狂気すら感じさせる主とは別に、モニカは冷静に己の役目を果たす。

再会した【シュナイト】は両腕部に巨大な爪の生えた赤い手甲を

している。他にも機体各部で淡い銀色が目立つ。以前のままといいことはあり得ないだろう。

「こつちと同じ地上用に改修済みのようだな。クククツ！ 特にあの爪をやり甲斐が有りそうだ」

画面の中で【シユナイト】は両手の爪を巧みに操り、怒涛のような連続攻撃で砦を守る防壁を削っている。

「ク、クヒヒツ！ モニカ！ システムを戦闘モードに移行しろ」

『了解。戦闘モードに移行』

『生体反応 良好』

『機体状況 良好』

『機体接続 良好』

機体各部に掛けられた移動用のロックが解除されていく。

純白の天使は砦の真上で一度静止した。

『【テュラン】 起動』

頭部のメインカメラが青く灯る。枷を外された鋼鉄の巨体が低く唸り声を上げる。

それは物言わぬ人形に魂が宿るかの如く、機工戦騎という名の怪物が歓喜の雄叫びを上げていた。

「さあ！ 楽しもうぜえー、キサラギイイー！！」

【テュラン】は腰に帯びた二本の剣を抜くと、脇目も振らずに突撃した。

「くっ！」

キサラギは咄嗟に機体を飛び退かせて、頭上からの一撃を回避する。空を切った剣が勢い緩まず砦の城壁を抉った。

メインカメラが捉えた【テュラン】の姿に思わずキサラギは舌打ちする。

「ちっ、あの野郎め。やっぱりこの星に来てやがったか」

『気を付けてください。以前と装備が違います』

「ああ、わかつてる」

前の戦いでは【テュラン】はビーム主体の装備だった。しかし“魔素”の満ちるセルディオではビーム兵器は十分な出力を確保できない。

「やはり“剣”か……」

【テュラン】の両手には二本の剣が握られている。刃の緩やかな流線型に反して真っ直ぐな峰 “ファルシオン” と呼ばれる種類の片手剣だ。叩き切ることを前提とした剣で、刀身が短い分取り回しが利く。接近戦を好むレオンらしい武器だった。

「どうやら向こうは飛べるらしいな」

背部の追加ブースターで【テュラン】は単独での飛行が可能らしい。

だが、何も状況は悲観するようなことばかりでもない。

『はい。ですが、遠距離用の武装は無いようです』

あのアンカーワイヤー仕込みの盾も見当たらない。接近武器だけなら攻撃の瞬間はこちらの攻撃も届く筈だ。

『動力炉のこともありません。恐らく空中戦には出力が足りないのでしよう』

それにエネルギー消費の少ない実弾を使った遠距離用の武装も、“魔素”の影響で照準補正が利かない現状では、機工戦騎にとって大した脅威にはならない。

「条件は五分だ。なら」

メインブースターを噴かし爆発的な勢いで機体を前進。そのまま着地した【テュラン】との距離を詰める。

『ハハハッ！ 腕は鈍ってないだろうな。今日こそ』

【テュラン】も両手の剣を構えてそれを迎撃する。

『俺が勝つ！』

奇しくもキサラギの声とレオンの声が重なる。交差する刃と爪が互いに火花を散らす。

互いの硬直は一瞬だった。

「うらあー！」

【シユナイト】が下から左腕の爪を突き出す。容赦の無い操縦席を狙った一撃を【テュラン】は僅かに半身をずらして避ける。

お返しとばかりに【テュラン】が残る剣を真横に薙ぐ。同じように操縦席を狙った必殺の斬撃を【シユナイト】は腕の手甲で弾いた。互いに両手を駆使した攻撃を、双方が見事な防御でさばき合う。

初撃は全くの互角　かに見えた。

「まだだ！」

両手の塞がった状態からキサラギが更なる一撃を繰り出す。跳ね上げるような膝蹴りが【テュラン】の操縦席の前を掠める。

惜しくも回避されたが、【テュラン】は一度大きく後退した。

「はんっ、相変わらず足癖の悪い野郎だな？　キサラギ」

「嬉しそうにするな。お前の方こそ相変わらず気色の悪い奴だ」

毒づくキサラギだったが、その顔に落胆の色はない。お互いに相手の技量はきちんと把握している。この程度で決着が付くとは微塵も思っていないかった。

「さすがはマスター！　接近戦もばっちりこなせています」

慣れない接近戦で【テュラン】を後退させたキサラギが歓声を上げる。

「問題ありません。剣速はこちらの方が上です」

一方でモニカは冷静に状況を読み取る。

互いの声は両者の耳にも届いていた。そして新たな戦いの火蓋が落とされる。

「まだ理解していないようですね。一番強いのは私のマスターです」

「貴方は臆病が過ぎます。AIなら公正な判断をしてください」

「むむむ……」

二人のAIが火花を散らす。ある意味で主人以上に白熱している。だが、その間も戦いは続いていた。

「ハハハッ！　楽しもうぜえー！」

【テュラン】は飛ぶような踏み込みから左右の剣を振る。機工戦

騎の巨体から熟練の剣士のような華麗な連撃が繰り出される。

「お断り、だ！」

【シユナイト】はそれを両手の手甲で防御する。キサラギも防戦一方というわけでもなく、僅かな隙を見付けては操縦席を狙った反撃を見舞う。

キサラギが執拗に操縦席を狙うのには理由がある。現在の【シユナイト】では単独で宇宙に上がる能力は無い。しかし【テュラン】の追加ブースターがあれば出力の問題は残るが、それさえ解決すれば可能になるだろう。

何より相手は同じ機工戦騎である。言ってみれば予備パーツの塊だった。

（なるべく無傷で手に入りたいが……やはり難しいな）

操縦席を潰せば文字通り一撃必殺となるが、勝てるかもわからない相手に妙な色気を出してやられては元も子もない。

きわどい攻撃の応手を交えながら二機の戦闘は続く。

『ふはははっ！ やっぱりお前は最高だぜ。キサラギイー！』

「俺は最悪だよ。この殺人狂が！」

【テュラン】が上段から唐竹に剣を振り下ろす。見え見えの罠だが、避けない訳にもいかず、キサラギは機体を左にステップさせ回避する。

『おいおい、誤解だぜ。俺が一番好きなのは戦うことさ』

「なら何故依頼で無用な殺しを繰り返した！」

レオンが同業者から恐れられるのは卓越した機工戦騎の操縦技術だけでなく、殺しを楽しむ残虐な性格を考慮されたことだった。

事実としてレオンが関わった依頼で死人が出なかったことは一度もない。それも敵味方を問わず、である。

『カハハハッ！ 戦うことは好きだぜ。だが、どうせ戦うなら強え奴が相手じゃなきゃ意味がねえーってこと、さ！』

【テュラン】が振り下ろしの剣が空中で制止。そのまま太刀筋を曲げて追撃の横薙ぎに派生する。

「見え透いた嘘を……お前は敗北を認めた相手ですえ殺す奴だ」

無人兵器の主流となる戦場で、機工戦騎同士が戦うことは稀だ。その中でもレオンが多く、傭兵を葬って来たのは、彼が意図的に相手を殺害しているからに他ならない。

『ハッ！ 別に嘘じゃねえーさ。俺はただ強い奴との戦いを楽しみたいだけだ。弱えのに戦場に居る方が悪いんだよ。戦いで楽しめないならば精々殺して楽しむくらいしかないだろ？』

「く、腐ってやがる」

狂気すら感じさせる不遜な物言いに、キサラギの思考が赤熱する。

【テュラン】の横薙ぎを手甲で受け流すと、キサラギは機体を更に懐へと飛び込ませた。

「そんな戦いたいなら無人兵器と遊んでろ！」

一度“爪”を収納して剣の間合いの内側から拳を突き出す。

『あんな玩具じゃ満足できねえーな』

「なら他を当たれ。俺に付き纏うな！」

突き出す拳から再度“爪”を展開させる。バックステップで避けようとした【テュラン】にミスリルの爪を突き刺す。

『つれないこと言っなよ。お前は別だぜえ、キサラギ』

「くっ……」

だが、それも左右の剣を交差させて受け止められた。

『相手の裏を搔く柔軟な発想、玩具ごときには真似できねえ』

そのまま攻守が逆転。今度は【テュラン】の蹴りが【シュナイト】を襲う。

手甲で受けてしまつては硬直し隙が出来てしまふ。飛んでくる蹴りをキサラギは機体を後退させてかわした。

無論、不用意に追い討ちがくればカウンターを合わせるつもりだった。

『そつだ。その殺気だ。一撃でこっちを殺しに来るような容赦の無い攻撃。やっぱりお前は最高だぜ。腰抜けの傭兵どもとはモノが違』

「ちっ……」

レオンの口から気に入られた理由を知ってキサラギが舌打ちする。そうしなければ殺されていたとはいえ、それが原因でこんな所まで追い回されては堪らない。ふっふつと怒りが込み上げて来るが、激情に駆られて戦うのは危険だ。

相手はあのレオン・ブランデルなのである。

『マスター。このままでは決着が付きません』

「ああ、知ってるよ」

決定打が無いのだ。遠距離用の武装が軒並み使えなくなってしまった今、【シユナイト】に残されているのは攻防式手甲シユライだけである。それも【テュラン】の双剣が相手では互角。何とかして致命の一撃を叩き込みたいところだが、その為には何かの策が必要だ。

(他に切れる札もない……どうする?)

キサラギが必死に思考を巡らせる。リートも同様に打開策を模索していたが、手持ちの材料では確かな勝ち筋をキサラギに提示することは不可能だった。

一瞬だが戦場に空白が生まれる。二機は互いに睨み合い硬直、先程まで続けられていた苛烈過ぎる攻防は、両者無傷のまま一時的だが鎮火したかに見えた。

だが、それが大きな間違いだった。

「み、認めん」

自分は宮廷魔術士 誇り高き魔族でも最強クラスの魔術使いである。老人はこれまでの長き人生を“魔術”の研鑽けんざんだけに費やして生きてきた。

その自分が唱えた最強の魔術は“魔神”に傷一つ付けることが出来なかった。

彼が研鑽を続けた上位雷撃魔術は、魔神の不可思議な護りによって防がれてしまう。

「認めんぞ」

老人の中で大切なナニカが音を立てて碎ける。それは彼の自信であり、誇りであり、何より老人の人生その物だった。

彼がシヨックで自失してしまったのも無理はないだろう。

気付いた時には既に戦局は激変していた。

「な、何だ。あれは……」

ゲシュト砦の目と鼻の先で、白と黒の二体の魔神が戦っていた。

漆黒の魔神が両手の爪で純白の魔神を襲う。だが手にした双剣を巧みに操り応戦する。

互角であった。あれ程の力を持つ黒の魔神を相手に白の魔神は一步も引いていない。

「くっ……認めん。わしは認めんぞ！」

このような馬鹿げたことがあって良い筈が無い。あの魔神と同格の魔神がもう一体存在したなど、到底受け入れられることではなかった。

「大気に漂う精霊よ。我が意に従い顕現せよ」

老人は再び詠唱を開始する。本来なら防壁を張る役目の部下達は皆、先程の猛攻でへばってしまっていた。

『……………』

二体の魔神は少し距離を置いて対峙すると、無言でにらみ合いを続けていた。

老人はこの機会を逃さぬよう全力の攻撃を放とうと動き出す。

「大地を砕く天の怒りよ。聖なる刃で断罪せよ！」

周囲を漂う魔力が輝きを増す。胸中に渦巻く敵愾心を糧として、全身全霊を込めて術を紡ぐ。膨大な量の魔力が練り上げられる。

「よ、止せ。迂闊に手を出すなああー！」

遠くでアルフォンスが制止の声を上げたが、老人は詠唱を止めない。彼の背中を押すのは長い年月で凝り固まった自尊心と、未知の存在を認めようとする固定観念だった。

制止を振り切り老人は詠唱を完了させる。

「上位雷撃魔術！」

天より幾本もの雷が雨となって降り注ぐ。その数と太さは黒の魔神に撃つた時の2倍以上だった。ありつたけの魔力を込め放たれた術は、間違いなく彼の生涯でも最大の威力を叩き出すことだろう。

「うー！？」

まさかの横槍にも白黒の魔神は不可思議な護りを使ってその身を
守る。

しかし出力が上がった雷の何本かは、障壁を突き破り内部の魔神へと直撃した。障壁に威力の一部を殺されたとはいえ、人ならば一本だけで蒸発させる威力がある。

「はははっ！ 消し炭になるが良い！ ふはははっ！」

初めて通用した攻撃に老人は哄笑を上げた。その成果は彼の周囲に座り込む部下達にも伝播していく。

「お、おい。今の……」

「ああ、攻撃が、攻撃が当たったぞ！」

「ははっ！ ざまあみるってた。魔神め！」

「勝てる。勝てるぞ！」

部下達が歓声を上げる。始めてまともに攻撃が当たり、ようやく見えた勝機に彼らは鬨の声を上げた。

だが、彼らの熱気は一瞬の後に凍り付くことになる。

『貴ッ様力アアアアー！！』

白の魔神から恐ろしい絶叫が響き渡る。変声機を通しているので声質は濁り不鮮明だったが、そこに込められた感情だけは薄れようもなかった。

「ひっ！？」

青く灯る単眼が真っ直ぐに老人を射竦める。無機質な眼は寒々しい青色の筈なのに、煮え滾る殺意が揺らめいていた。

再び白の魔神が空を舞う。跳躍というより飛翔に近い動きで砦を飛び越えて、反対側に回り込み逆手に構えた両手の剣を大地に突き立て固定する。

続く変化は劇的だった。魔神の胸部が四方に開き、中からナニカが迫り出す。

『馬鹿な！ カデンリュウシホウだと！？』

静観していた黒の魔神が驚愕の声を漏らす。荷電粒子砲 老人を含む帝国軍の誰一人としてその意味を知らなかったが、彼らは本能的に理解した。

アレは危険だ。アレを使わせてはいけない。

「に、逃げ」

老人の声は最後まで言葉となることはなかった。

『カハハツ！ 死ネエ』

魔神の胸部で迸る紫電が弾け 破滅の光が放たれた。

迸る荷電粒子の奔流は、進路上に存在する全ての物質を呑み込み消し去る。

その日……ゲシユト砦は跡形もなく消滅した。

21 光（後書き）

どうも、如月八日です。

最近暑い日が続き少しへばりそうです。

皆さんも健康には十分気を付けてください。
それではまた次の更新でお会いしましょう。

22・賭け

「馬鹿な！ 荷電粒子砲だと!？」

【テュラン】の胸部から荷電粒子の光が放たれた。

暴力的なまでの閃光の奔流が石造りの砦を紙屑のように消し飛ばす。“魔素”の影響が射線が大幅に拡散してはいたが、それは本来有り得る筈のない光景だった。

「リート。出力五割の状態で荷電粒子砲の使用が可能だと思うか？」

「ありません。【テュラン】の動力炉は正常に稼働しているのか、あるいは」

「何かタネがあるのか……だな」

小型とはいえ荷電粒子砲は戦艦の砲撃に相当する武装だ。その使用には莫大なエネルギーを必要とする。【シュナイト】のように動力炉が本調子でない状態で易々と撃てる代物ではない。

「戦闘は俺がする。お前は【テュラン】を調べろ」

「了解。無理はしないでください」

「それは保障しかねる、な！」

両手の爪を展開 発射後の硬直で棒立ちする【テュラン】へ機体を駆る。

馬鹿正直に正面から攻めても駄目だろう。なので狙うのは操縦席ではなく右腕だ。

先程の一射で【テュラン】は地面に剣を突き立てていた。恐らく荷電粒子砲発射の反動を抑える為の動作だろう。

「まずはソレを潰す！」

「はん、甘えぜ！」

銀の巨爪が閃く。奇襲の一撃は狙いすましていたかのように右手の剣で迎撃される。

既に【テュラン】の硬直は解けていた。素早く大地から剣を抜くと、【テュラン】は左右の剣を握り直す。

キサラギは追撃を選択しなかった。機体を後退させると【テュラン】の間合いから外に出る。

レオンも追い討ちをかける気はないようで、両者は互いに一足で切り込める距離を維持したまま睨み合う。

「狙いは悪くなかったぜ。まったく、油断ならねえ奴だよ。お前は『まさか荷電粒子砲が使えたとはな』

「お前を倒す為に高い金を出して取り付けた“とっておき”だ。一回しか使わないのは勿体無いだろ？」

「くっ……その一回で俺はえらい目に遭ったがな」

この星に来た原因を思い出し、キサラギが苦虫を噛み潰す。

「はははっ！ お前はここがあまり気に入らなかったようだな」

「ふん、お前は楽しそうだな？」

「ああ、楽しいぜ。この星には“戦い”が満ちてやがる」

「それは向こうも一緒だ。だから俺達みたいな職業が成り立つ」

無人兵器が主流となり人が死ぬことが極端に少なくなっても、戦争があるからキサラギのような傭兵が必要とされる。キサラギはそう考えていた。

だが、レオンはそうではなかった。

「違うね。所詮、向こうの戦争はお遊びだ。戦うのは玩具ばかり……戦争つてのは生きてる奴がするもんだ。こんな風に、なッ！！」

【テュラン】の姿がブレる。一瞬とはいえ、この時のキサラギは完全に【テュラン】の動きを捉えきれなかった。

ブンッ！

振り下ろされた剣が大地を割る。瞬時に【シュナイト】の側面に回りこんだ【テュラン】は何も無い空間を切った。

「一応は依頼なんだな。逃がしやしねえーよ」

地面にめり込む刃の下から赤い染みが広がる。側に転がる棒切れには見覚えのある宝玉が嵌められていた。

「マスター。あれは……」

「ああ、さっきの宮廷魔術士だ。あの一瞬で逃げていたのか」

そのことにも驚いたが、何より不可解なのは一連の【テュラン】の高速機動である。

別に出鱈目なスピードという訳ではない。標準的な性能の機工戦騎ならば、あの程度の機動は造作も無いことだろう。【シユナイト】にも同じことが出来る。

「万全の状態なら、な……」

「ええ、間違いありません。どういうカラクリかは分かりませんが、【テュラン】の動力炉は百パーセントの出力で稼動しています」

「ちつ……予想以上に不利な状況みたいだな」

元々の機体性能は互角だとしても、それを動かす為の動力炉に明確な差があれば勝負の結果は自ずと見えてくる。

(こりゃ、真剣にヤバイかもしれないな)

離脱は不可能だ。何せ相手は空を飛べる。地上を走る【シユナイト】では逃げ切れないだろう。

交戦も論外だった。こちらは機体性能の面で最低でも一世代は差を付けられていると言って良い状態である。まともにやり合っても勝てる見込みは皆無だ。

「さあ、邪魔者は消えた。第二ラウンドと行こうか？」

「何とか勝機を見付けるしかないか……」

「ハツハアー！ まだまだ楽しもうぜえ、キサラギイー！」

突撃して来る【テュラン】を迎え撃つ。双剣の一撃を正面から受けずに、手甲の丸みを利用して外側へ逸らす。決してこちらから攻撃に転じることはしない。

キサラギはひたすら攻撃を受け流すことだけに専念する。

「頼むぜ。相棒……」

今は相棒を信じて時間を稼ぐ。それがキサラギの打てる最善の手だった。

「信じられん。これ程の力を持っているとは……」

アルフォンス率いる騎馬隊は生きていた。ゲシュト砦が荷電粒子砲の洗礼を受けた時、彼らはアルフォンスの機転のお陰で難を逃れていた。

「は、はは……何だよ。これ」

「砦が……消えちまったぞ」

「だ、団長！ 我々はどうすれば」

部下達は白い魔神が放つ謎の光で砦が消失。その一部始終を目撃した者の大半がパニックを起こしていた。アルフォンスも出来るものなら彼らのように喚き散らしたいが、彼は西天騎士団の団量で部隊を指揮する将である。

「うろたえるな！ 部隊を集める。ここから撤退するんじゃない」

「よ、よろしいのですか？」

副官の男が聞き返す。魔神の討伐を視野に入れていたが、彼らが本来命じられた任務は砦の防衛だった。今のアルフォンスの命令はその任を放棄することにも取れる。

「構わん。責任はわしが取る。それに護る砦が消えては陛下も怒りようがないわい」

ならば一人でも多くの兵を生かす。砦に居た部隊を指揮していた宮廷魔術士が死に、アルフォンスには生き残った兵を無事に帰す責任がある。

「お前は部下を率いて砦に行け。生き残っている者が居れば救助するんじゃないぞ。踏み潰されるんじゃないぞ」

「はっ！ お前らは俺に続けえー！」

「……おおおー！」

副官が部下を率いて砦の跡地へと向かう。その側では未だに白と黒の魔神が激突を繰り返していた。

「白の方が有利じゃない……」

ぶつかり合う二体は、先程までと違って優劣がはっきりしている。怒涛のように攻める白い魔神に対し、黒い魔神は防ぐので手一杯に見えた。

「……………」

追い詰められる黒の魔神をアルフォンスは複雑な思いで見詰める。部下を何人も殺した相手の窮地を喜ぶべきか。現れた新たな脅威に嘆くべきか。

「む……………」

魔神同士の戦いは移動しながら続いている。魔神の巨体で人間同士の戦いのように戦闘を行えば、戦場が荒れるのは必然だろう。

白い魔神の斬撃を黒い魔神は受け流すが、地力の差か少しずつ後退を余儀なくされている。

「いかん！」

後退する魔神の向かう先には、生存者が居ないか調べに行った部下達が居た。

このままでは踏み潰されてしまう。

しかし援護するのは危険だった。そもそも砦を消滅させるような一撃を使わせた原因は、宮廷魔術士がした不意打ちにある可能性が高い。

「ぐっ……………ぬう」

アルフォンスは歯噛みして見守るしかなかった。むざむざ兵を危険に晒す訳にはいかない。生き延びた自分達には“白の魔神”という新たな脅威を皇帝に伝える義務がある。

覚悟を決めるアルフォンスだったが、その予想は意外な形で裏切られた。

「受け止めた……………じゃと？」

砦が消失してからずっと黒の魔神は攻撃を受け流して持ち堪えていた。

だが、何故か今回は流しも、避けもせず正面から受け止める。

「何故じゃ！？ 何故受け止めた」

別に黒い魔神の力が増した訳でもない。力で勝る相手の剣を正面から受ければ、押し切られることは予想が出来た筈だった。

しかし現実とは違う。黒の魔神は斬撃を受け切れずに姿勢を崩す。

『貰ったあー!!』

よろめく漆黒の巨人に断罪の剣が振り下ろされる。

奇しくも肩口に深く剣を食い込ませたその姿は、アルフォンスが斬ったあの時の人間を想起させた。

だが、魔神の置かれた状況はあの時より絶望的である。

ザンツ!

白の魔神は力任せに剣を振り切る　煌く銀の軌跡に沿って黒い腕が宙を舞う。

本当の理由はアルフォンスにもわからない。それは全くの偶然なのかもしれない。

ただ確かなことは彼の部下は死ななかった。

憎むべき黒の魔神の片腕かたきと引き換えにして……

キサラギも別に彼らを助ける気など無かった。

一度は敵対した者同士。しかも指揮しているのはキサラギを斬ったあの老人だ。

自身の保身を第一に考える傭兵でなくとも、彼らを見捨てる選択をするだろう。

【テュラン】の猛攻をさばき続けて来た【シュナイト】だったが、そろそろボロが出始める頃合だ。

「まだなのか、リート!　これ以上はもう持ちそうにないぞ」

今もきわどい距離で【テュラン】の剣が通り過ぎる。キサラギは絶るような気持ちで相棒に助けを求めた。

『申し訳ありません。過去のデータと検証しましたが、確証は得られませんでした』

「推測でも何でも良い。打てる手を打たずに死ぬのは御免だ!」

今でこそ奇跡的に被弾していないが、どこか一箇所でも攻撃が当たれば、逆手の一手すら打てなくなってしまう。

『装備や間接にこちらと同じミスリルによる改修が見られます。し

かしこれらが動力炉の回復と直接関係があるようには思えません」
「ああ、それだけが理由なら【シュナイト】にも同様のことが起こっても良い筈だ」

『はい。そこで気になったのが【テュラン】の“頭部”です』
「頭だと？」

指摘され始めて【テュラン】の頭部を注視するが、ミサイル迎撃用のバルカン砲の発射口が無くなって以外は変わりないように見える。

『だから妙なのです。“魔素”で照準補正が利かずとも歩兵の掃討くらいには使えます。仮にミサイルの脅威に晒されないからと言って、態々取り外すでしょうか？』

「確かに妙だな」

『しかし確証はありません。単純に弾切れや、他の装備に流用した可能性も』

「作戦タイムは終了だ。来るぞ」

迫る一撃を瞬時に見極める。上段から振り下ろされる剣は、こちらの回避を誘う囷だと判断 【シュナイト】は袈裟に振り下ろされる一刀を流さずにその身に受けた。

『貰ったああー!!』

【テュラン】の剣が【シュナイト】の片腕を切断する。バツサリと切り落とされた左腕が宙を舞う。操縦席に被弾を報せるアラームがけたたましく鳴り響く。

『マスター!?!』

突然の奇行にリートが悲鳴を上げる。自棄でも起こしたのかと危ぶむが、そうではない。

今の【テュラン】と【シュナイト】の間には超えられない壁がある。攻撃をさばきながら反撃するには両者の性能は離れ過ぎていた。「こつちも余裕が無いんだ。片腕一本で我慢しろよ、な！」

キサラギが獰猛な笑みを浮かべる。

それは文字通り機会を窺い研ぎ続けられた反撃の“爪”だった。

「シユライ攻防式手甲　グリュウエン放熱！」

残された右手の爪が赤く輝く。供給をカットした左腕の余剰エネルギーを注ぎ込まれたミスリルの爪が膨大な熱量をその身に宿す。

「ぶち抜けえええー！！」

繰り返すのは捨て身のカウンターだ。回避しながらの攻撃が不可能なら回避せずに攻撃するしかない。まさに肉を切らせて骨を断つ、である。

『うおッ！？』

迫る渾身の“突き”を【テュラン】は双剣を交差させ防ぐ。

銀の双剣と真紅の爪が火花を散らし激突する。

『ぐ、ぬう！？』

赤熱する爪は単純な馬力の差を覆す。【テュラン】の双剣が僅かに溶け出したのだ。

『ちいいい！』

忌々しげな舌打ちと共に【テュラン】が双剣を手放し後退する。半ばまで焼き切られた双剣が大地を焦がす。【シユナイト】が腕一本を犠牲にして放った一撃は、見事に【テュラン】の武器を破壊した。

『今です、マスター！　追撃を！』

「わかつてる！」

双剣を失った【テュラン】に残された武器は一つしかない。

反動を抑える為の双剣を無くしたとはいえ、撃てない訳ではない筈だ。

（撃たせる前に叩く！）

チャージする時間は与えない。キサラギは果敢に距離を縮めて攻め切ろうとする。

武器を無くしたとはいえ、こちらも片腕を失っている。おそらく接近戦は【テュラン】の方がまだ有利だろう。

（ちっ、まだ分の悪い賭けが続きそうだぜ）

腹を括るキサラギだったが、事態は思わぬ展開を迎えた。

後退した【テュラン】は荷電粒子砲を撃とうともせず空へと逃れる。

『ふん、どうやら時間切れ（・・・）らしい』

【テュラン】は空中に留まると【シュナイト】を見下ろす。だが、その動きはふらふらとして頼りない。

「何？ それは一体どういう意味だ」

その様にキサラギは違和感を覚えるが、深く考える時間は与えられなかった。

『依頼は既に果たした。お前との決着は次の機会に預ける。その時を楽しみに待っているんだな、キサラギ！ ハハハッ！ ハッハッハッ！』

【テュラン】は大空へと上昇。あっという間に高度を稼ぐと雲の中にその身を隠し飛び去ってしまう。

その場にレオンの高笑い、片腕を失った機工戦騎だけが残された。

22・賭け（後書き）

どうも、如月八日です。

今回も完成した分を投稿します。

今話で戦闘も一区切りです。次回は久しぶりにヒロイン視点の予定
です。

新たな“魔神”の出現。その話題は瞬く間に大陸中へと広まる。いわく、純白の翼で自由に大空を舞う姿はまるで天使のようだった。

いわく、堅固な砦を一撃で消滅させた様はまるで悪魔のようでもあった。

信じ難い情報に大陸中の国々が躍起になって情報の真偽を調べようとしたが、数日とせずには彼らは知ることになる。

白い魔神 【テュラン】は大陸中の国々を攻撃したのだ。

この数日間で【テュラン】が陥落させた砦の数はもう一つや二つではない。まるでキサラギのやり方は手緩いとも言わんばかりに……

しかも【テュラン】は“魔の森”からも離れた南部の国さえ襲撃の標的としていた。

これらの襲撃に南部の国々は大きな打撃を被る。彼らからすれば“魔神”のことなど精々が“危険な魔物”……悪く言えば対岸で起きた山火事程度にしか考えていなかった。

そこへ突然の襲撃、それも相手は遙か上空を飛行してやって来る。しかも白の魔神には砦さえ一撃で消滅させる“光”があるのだ。

そして“魔神”の標的に“人間”と“魔族”という区別はない。

【テュラン】が訪れた場所は一日とせずには焦土と化す。

まさに降って沸いた“天災”だった。

しかし“魔神”がもたらしたことは何も悪いことばかりではない。この未曾有の事態を前にしてお互い戦争どころではなくなり、“魔の森”の消失を端にする“人間”と“魔族”の戦争は回避された。空から落ちて来た“魔神”が原因で起きようとしていた戦争が、今度は空を飛ぶ“魔神”によって避けられるのは皮肉である。

セルディオに住む者達は等しく“白の魔神”を恐れた。彼らはい

つ来るかわからない“魔神”の恐怖に晒されながら日々を祈るように生きていた。

「白の魔神がダイン共和国を襲撃……今度は東の方に行ったみたいね。まったく、コイツもやりたい放題やってくれるわ」

シエラは手にした新聞の一面を見て不満げに唸る。

別に襲われたダイン共和国の心配をしている訳ではない。彼の国が物資を提供し、ロキア王国に“魔の森”を突破させようとしたことを彼女は忘れていなかった。

シエラが不満なのは新聞に書いていることではない。むしろあることが書かれていないことに不満があった。

「それでキサラギ達の足取りは掴めたの？」

「申し訳ありません。お嬢様」

ブライは申し訳無さそうに俯く。シエラが求めているのはキサラギの情報である。彼にはこの数日の間、キサラギや黒い魔神についての情報を集めて貰っていた。

シエラ達の話盗み聞きしたキサラギは勝手に飛び出したきり、あの日から行方が掴めないでいる。

「ブライが謝る必要はないわ。悪いのは全部あの馬鹿よ。まったく、いつも雇い主の私に黙って勝手に動くんだから……人の気も知らないで」

「お嬢様……」

「大丈夫よ。落ち込んでいてもキサラギ達が見付かる訳でもないわ。ポーレルでキサラギの帰りを待つのも良いけど、やっぱり待ち続けるのは私の性に合わないと思うの」

「まさかご自身の手でお探しになる気ですか？ そのようなことは執事である私にお任せください」

「駄目よ。毎日留守番なんて退屈過ぎるし、それに気になるのよ」
屋敷を守る為に出撃したのならば、キサラギの目的地はゲシユト

砦だった筈だ。

行方不明となったキサラギ達と入れ替わるように現れた“白い魔神” とても無関係とは思えなかった。

「私は一刻も早く機工戦騎が研究したいの。キサラギったら、何だかんだと理由を付けて結局触らせてもくれなかったのよ？ さっさと見付けて解た　いいえ、研究がしたいの」

「……………」

「ま、まあ、幸いこの白い奴のお陰で“魔の森”に近くの拠点は全て潰れたわ。“人間”も“魔族”も白い奴の警戒で手一杯みたいだし、良い機会だから屋敷に戻りましょう」

前回は急ぎだったので、置いて行かざるを得なかった研究も幾つかある。

それにこれだけ探してもキサラギの目撃情報が無いのは、そもそも人目が無い場所だったからではないか、とシエラは考えていた。

「さあ、夜までには着くようにしたいわ。準備をしてちょうだい」

「畏まりました。お嬢様」

ブライは来た時と同様に静かに退室する。

残されたシエラも旅行鞆を用意すると研究途中の物を何個か中に詰める。これらの品は物によっては繊細な扱いと深い知識を必要とし、ブライだけに任せる訳にもいかない。

何個か詰め終わると、不意にシエラが顔を上げて辺りを見回す。

幸い目的の物は直ぐに見付かった。

「いけない、いけない。これを忘れちゃ駄目よね」

シエラが手に取ったのはナノマシン用の小型端末だった。まだ屋敷に住んでいた頃は、よくこれでリートと話していた。

「キサラギの奴、ちゃんとリートの言うこと聞いてるかしら。あまり無理をしていないと良いけど……………」

姿は見えなくてもシエラにとってリートは友人である。キサラギには彼女を心配させるような無茶な行動はして欲しくなかった。

「す、少し位なら…………あの馬鹿も心配して上げて良いわね」

尤も理由はそれだけでもないのだが……シエラにその自覚はなかった。

ブライの操る馬車に揺られて、シエラは一路“魔の森”へと向かう。

その道中は整備されているとはいえ山道なので、快適とは言い難かったが予定通り日が沈む前にはドグラ山脈を降りられたる事ができた。

「ふふ……」

退屈凌ぎに窓から景色を見ていると、思わずシエラは苦笑してしまふ。

ブライが怪訝そうに振り返るが、長年の経験でシエラの表情から心配ないと判断したのか、そのまま馬車の運転に努める。

彼の読みは正しく、実際シエラが笑っていた理由も深刻に考えるような内容ではない。

彼女達が今走っている場所は厳密には“魔の森”と呼ばれる場所だが、窓の外には草木一本すら生えていない。

「まったく……人騒がせな奴だわ」

これは“証”であった。【シユナイト】の落下に始まり、グラナ、ゲシウトと二つの砦への攻撃と続いて、キサラギ達が確かに存在したという痕跡でもある。

その中に一つだけ彼女を惹き付けるものがあつた。

「どうやら、そんなに遠くには行ってないようね」

シエラが見付けたのは大きな足跡だった。ゲシウト砦のあつた位置からすっかり木が寂しくなってしまった森の中へと続いている。

キサラギは所在がばれるような痕跡は残さないよう心掛けていると話していたので、今回のコレは追跡の目を誤魔化す為の陽動なのかもしれない。

だが、彼女の勘はコレが当たりであると囁いていた。

「うふふ……待ってなさい。キサラギイイイ」

「……………」
シエラは獰猛な笑みを浮かべる。歯を剥いて笑う主の姿にブライは珍しく見て見ぬフリをした。

「ッ!？」

『どうしたんですか、マスター？ 少し脈が乱れているようですが？』

「いや……少し悪寒がしたただけだ」

『当然です。マスターの体調管理は万全です。病気になど私がさせません』

「ま、ただの勘だ。何の科学的根拠もない。気にするだけ無駄だろう」

それに今のキサラギにはもつと考えなければならぬことがある。
【テュラン】との対決に敗れたキサラギ達はシエラの屋敷に身を潜めていた。

結果的には生き残りはしたが、あのまま戦い続ければ負けていただろう。

レオンはこの決着は次に預けると言っていた。

奴の言う“次”が一体何時なのかわからない。だが、早急に【シユナイト】を修理しなければならぬことだけは確かである。

「しかしあまり芳しくない、か……」

今の【シユナイト】は例によって屋敷の裏地に横たえていた。野晒しでは【テュラン】の目に留まる危険があるので、草や土で最低限のカムフラージュは施してある。

（だが、あの戦闘狂のことだ。気付いていても見逃す可能性が高いけどな）

レオンならこちらが万全の状態になるのを待つ位のこととはするだろう。

尤も、その憂さ晴らしで大陸中の国々が【テュラン】に襲撃され

ていたことまでは、ずっと森に居たキサラギが知る由も無かった。
『屋敷に入る際に結界を壊してしまったのが不味かったようです。

“魔素”の影響かナノマシンの稼働率が落ちていきます。このままでは自動修復も俟たないです』

「ああ……だが、普通に直すだけじゃ駄目だ」

ただ直すだけでは【シユナイト】は【テュラン】に勝てない。

どういうカラクリか不明だが、【テュラン】は動力炉の力を完全に引き出せる。

機工戦騎としてはそれが正しい姿なのだろう。だが、“魔素”という未知の要素で満ちたセルディオでは“異常”とも呼べた。

「こつちも機体を本調子にする。それ以外に手はない」

『機体の修理は私が見ます。マスターは打開策を検討してください』
「ああ、頼む」

キサラギは修理をリートに任せて、自分は機体の側に置いた椅子へと腰掛ける。

元はテラスにあつたのを勝手に拝借した物だが、何故か座るだけで無性に喉が渴くような気がした。

「そういえば座るのは何時もこの椅子だったな」

紅茶が趣味なだけあってシェラと話す時は殆ど決まってお茶を飲んでいた。

この椅子はテラスの椅子なので、初めて出会った日にもキサラギは座っている。

（はは、まるで“パブロフの犬”だな）

腰掛けただけで喉が渴くとは　キサラギの調教は順調だった。

（しかし腹が減った。嗚呼……ブライの料理が懐かしい）
それ以上に餌付けの方が進んでいた。

ここ数日は【シユナイト】に元々積んでいた携帯食料を食べて過ごしている。それはブライという凄腕料理人の味を知ってしまった彼には“拷問”とも呼べる日々だった。

「止めだ、止めだ。考えるだけ余計に腹が減る」

そんなことより【シュナイト】の改造案を練るべきだろう。空腹を誤魔化す為に携帯食料の残りかじりながら思案する。

「ああー！ 畜生、駄目だ」

しばらく黙考してみたが全く名案は浮かんでこない。

動力炉の問題は初期の頃から直面していた重大な課題だ。それが少し考えた位で解決するなら、とつくの昔に改善されているだろう。早くもキサラギは行き詰まっていた。これなら機体の修理をリートに代わって貰うべきだったかもしれない。

(いや、それじゃ意味がないな)

リートは優秀なAIだ。その彼女が即座に解決策を提示しなかったのだから、彼女にこれ以上を望むのは酷というものだろう。

彼女もキサラギに自分が思い付かないような妙案を期待している筈だ。

「その期待に応えやりたいところだが ん？」

強化されたキサラギの耳が微かな物音を感知する。

足音だった。数は恐らく二人……珍しいことに侵入者のようだ。

「空き巣か？ 人様の家に無断で入るとは無粋な奴らだ」

自分のことを完全に棚に上げて、キサラギは侵入者を迎え撃つことにした。

作業に集中するリートの邪魔をしては悪い。キサラギは黙って準備をすると音も無く正門に移動する。

タイミングは完璧である。侵入者達が森を抜けて出て来る所だったらしい。

「おっと、ここは人様の家だぜ。大人しく帰った方が」

キサラギは素早く彼らの目の前に踊り出ると銃を抜き警告する。

「え？」

だが、それも相手の顔を確認するまでだった。

「あら、ブライ。大人しく帰れ、ですって」

「それは困りました。私達はお屋敷に帰ろうとしていたのですが…

…」

「そうね。これは困ったわ。ところでキサラギ。確かここは私の家の筈だけど……これは私の勘違いかしら？」

「め、滅相もない！　ここはあなたの家です。はい」

混乱のあまり言動が少しおかしくなるキサラギだったが、頭の方はそれ以上にパニックになっていた。

シエラの言う通りここは彼女の屋敷なので、帰って来ても何らおかしい話ではない。

問題は何故今このタイミングで帰って来たか、だ。

（ま、まま、不味い！）

家主に黙って泊まっていたこともそうだが、何より都合が悪いのは、キサラギがまた（・・・）彼女らに黙って出撃したことである。

「リート！　頼む、助け」

『因果応報……黙って怒られるのもケジメです。マスター』

「リートオオオオ！」

頼みの綱だった相棒にも見放された。

それでも諦め切れずに縋る思いでシエラの様子を横目に窺うが、キサラギは見て直ぐに後悔した。

「ッ！」

「シエラ……」

彼女の目は少しだけ潤んでいる。今更になってキサラギは、彼女にどれだけ心配を掛けたのか自覚した。

だが

「とりあえず一発ね」

「は？　ぐほお！？」

しおらしくしていたのは一瞬だった。

先程までの儂げな姿が幻だったかの如く、腰の入ったシエラの拳がキサラギの鳩尾に抉り込まれる。研究大好きのインドア派とは思えないキレのある良いパンチだった。

「ふん、これで勘弁してあげるわ」

シエラは蔑むような冷たい目でキサラギを見下ろす。どうやら相

当頭に来ていたらしい。普段は口で言うタイプのシエラが直接殴ったのだから、その怒り凄まじさが窺えるだろう。

『ご心配をお掛けしました』

「いえ、私はお二人の無事を信じておりました」

そんな殺伐としたやり取りなどまるで見えないかのように、リーとブライは和やかに話し始める。

「さて、次は私の屋敷を勝手に使った分よ」

「何！　今ので全部チャラじゃないのか!?!」

「誠意が足りない。どうやら躰が必要みたいね」

結局、シエラの“一発”は合計五回までその数を増やすことになった。

23・帰宅（後書き）

どうも、如月八日です。
今回は少し短めになります。

シエラ達と合流したキサラギはテラスのテーブルへと場所を移す。目の前のカップに琥珀色の液体が注がれる。先程までキサラギが欲しがっていたブライの淹れる紅茶だ。

湯気と共に心安らく甘い芳香が広がる。場所と時間だけ見れば彼女の屋敷ではお馴染みの茶会だったが、珍しくその席に菓子類は出されていない。

「……………」

キサラギは黙って紅茶を飲む。本当ならば久しぶりに携帯食料でないブライの料理を食べたかった。

だが、今は駄目である。この場を支配する空気はとても飯など頼める物ではなかった。

「さて、聞かせて貰おうかしら？ あの白い魔神は何？」

シエラは優雅な仕草でカップを傾ける。その額には青筋が浮かんでいた。

「純粋な戦闘力でシエラはキサラギの脅威とはならない。

「わ、わかった」

しかし、この時ばかりは彼女の迫力に気圧された。今のシエラに半端な誤魔化しは通用しないだろう。

キサラギもさすがに腹を決めた。

「まずは白い魔神だ。アレは【シュナイト】と同じ“機工戦騎”

【テュラン】だ」

「やっぱり、そうね。あんな物が他にあって堪るもんですか」

キサラギの口から聞かずとも最初から予想はしていたのかもしれない。呟くシエラの顔には確信の色があった。

「何で黙っていたの？」

「俺の都合だ」

キサラギも好き好んでレオンのことを黙っていた訳ではない。

シエラの関心は“機工戦騎”にある。ざつくばらんに言えば、彼女にとってキサラギは“機工戦騎”のおまけ程度の価値しかないのだ。

そんな彼女に他の機工戦騎が存在することを話せばどうなるか？ 出会って間もないキサラギに確かな答えは出せないが、シエラにとってキサラギという傭兵の“価値”が無二の物でなくなることは確かだった。

「他にもアレがあると知れば、お前がどうするか……俺にはわからなかった」

尤も、彼女が今でもそう考えているとはキサラギも思っていない。しかし当時の彼女ならキサラギを切って、レオンを取る可能性があった。

「来たばかりの俺が他に頼る当てはない。それに奴が来ている確証もなく、自分が不利になるだけの情報を渡す訳にはいかなかった」
『シエラさん。マスターを責めないでください。私はいざとなれば貴方達を切り捨てる位のことは考えていました。ですが、マスターは本心から貴方達の為に戦おうと』

「はい、ストップ。別に私もそのことで二人を責める気はないわ。誰だって自分の都合を優先するもの」

シエラは　まあ、切り捨てる云々はあまり良い気がしないけどと、苦笑した。

だが、それで終わりではない。彼女は不意に表情を引き締め直し続ける。

「でも、問題はその後よ。キサラギは今この時までそのことを黙っていた。話す機会は幾らでもあった筈だわ。そのことについてはどう説明する気かしら？」

それは即ち“信頼”の問題だった。互いに出会ったばかりの頃から話せないのも無理はないが、一緒に暮らす内に二人の間には確かな関係が築かれている。

「そ、それはだな。あの……その……」

「何よ。私には言えないってことなの？」

「いや、別にそういうつもりは」
「ッ！」

言い淀むキサラギの姿にシエラは表情を悲しげに歪める。

シエラは異邦人のキサラギに様々なことを教え助けた。

キサラギはシエラをアルフォンスの剣から己が身を挺し救った。

リートやブライとの付き合いに比べればまだまだ短い時間だったが、確かに二人の間には“信頼”が芽生え始めていた筈である。

無論、キサラギもシエラのことは信頼していた。しかし今度はその信頼が、彼女に事情を説明させることを躊躇わせていた。

それでもキサラギは話さなければならぬ。ここで話さなければ、セルディオに来てから一月あまり、シエラとここまで築き上げた“信頼”が壊れてしまう。

「シエラには【テュラン】……いや、レオンと関わって欲しくなかつたんだ」

「レオン？ 【テュラン】ってのが“白い魔神”の名前なのはわかるけど、レオンって前にキサラギがギルドで探していた男よね」

「ああ、レオンは危険な相手だ。それは奴が俺と同じ“機工戦騎”を持っているからじゃない。何より危険なのは“人格”の方だ」

「そのレオンって奴が白い魔神の持ち主なんですよ？ なら危ない奴かどうかは一目瞭然ね。ここ最近の行動を見れば改めて言われるまでもないわ」

「野郎が何かやらかしたのか？」

「何かしたなんてもんじゃないわよ。白い魔神といえば、今や大陸中で知らぬ者の居ない災厄の象徴なんだから」

「聞かなきゃ良かった……」

レオンの傍若無人な振る舞いにキサラギも頭が痛くなる。一部の国では【シュナイト】も同様の扱いを受けているのだが、この時のキサラギは微塵も思っていなかった。

『あの男は殺しを楽しむ外道。“戦い”を求める生粋の“戦闘狂”』

です』

「そうなの？ 確かに大陸中で暴れ回ってるらしいけど、無抵抗の都市を襲ったって話は聞かないわね」

『あの男はマスターとの決着を望んでいます。憂さ晴らして狙われるのは戦う力のある者だけです。しかし』

「戦う奴が誰も居なくなれば、奴は力を持たない者でも殺すだろう」
「何ですって!？」

「しかもその理由は何と暇潰しだ。まったく、迷惑な野郎だ」
「なっ……」

常軌を逸したレオンの人物評にシエラは言葉を失う。しかし苦り切ったキサラギの顔やリートが訂正しないことから、それが事実だと理解したのだろう。

彼女は何時になく深刻な剣幕でキサラギに詰め寄る。

「そ、そんなことが……そんなことが許される訳ないわ!」
「倫理の上ではそうだな」

『しかし圧倒的な“暴力”の前には倫理など紙屑同然です』

「悔しいが【テュラン】は強い。性能だけなら間違いなく【シユナイト】よりも上だろう。現に俺は奴に一度敗れている」

キサラギは視線を【シユナイト】へ向ける。横たわる漆黒の巨人の隣には、赤い手甲を着けた片腕が転がっていた。

「嘘……キサラギでも勝てなかったの？」

シエラは呆然としていた。それはキサラギに対する信頼の裏返しでもある。

彼女は実際に機工戦騎が戦う場面を見たことはないが、【シユナイト】の片腕を切り落とす“化け物”を相手に“人間”や“魔族”が勝てると思えるほど楽天主でもなかった。

「……………」
「お嬢様……………」

絶望に俯くシエラをブライが気遣う。それでも彼女の不安が晴れることはない。

出来る者が居るとするなら、それはセルディオで一人だけだった。

「レオンは俺が倒す」

『マスター？』

「黙ってやると、またシエラに怒られるからな。先に言っておく」

「キサラギ……それで何か勝算があるの？」

「残念ながら今は無い。だが、まだ時間はある」

愉悦の為に戦うレオンは一つ傭兵として致命的な欠点がある。本来ならレオンはキサラギを生かして返すべきではなかった。

だが、レオンは戦いを楽しむ為に敵を見逃した。今はまだキサラギに勝つ為の算段は付いていないが、レオンが与えた時間はキサラギに渡すには過ぎた塩であった。

「奴が居る限り俺に安息は訪れないんだ。ならお望み通りにぶっ殺してやるだけさ」

『そうですね。マスターの言う通りです。あのストーカー野郎は息の根を止めてやりましょう！』

「……は、はは……」「……」

さらりと過激なリートの発言を三人は苦笑いで流す。彼女のお陰で暗くなりかけていた空気が少しだけ弛緩した。

だが、ずっとこうしている訳にもいかない。レオンから対決までの猶予は与えられたが、その時間は有限である。

のんびりしている暇は無かった。

「シエラ。屋敷の結界を直せないか？ アレが無いと【シユナイト】を直せないんだ」

「力づくで破るからよ。悪いけど数日は掛かるわ」

「そうか……」

今は少しでも時間を無駄にしたくない。キサラギは彼女にとっておきの切り札を使うことにした。

「残念だ。折角、【シユナイト】に触らせてやろうと思ったのに」

「任せて！ 一晩で終わらせるわ！」

「さすがは天才。話が早いな」

『正気ですか、マスター！？』

「ちよつと、それどういう意味よ」

『あ、いえ……』

「良いんだ、リート。今回はシエラの意見も聞こうと思ってる」

シエラ達の予期せぬ訪問ですっかり忘れていたが、【シユナイト】の改良でキサラギは行き詰っていた。既にリートとキサラギでは出せる案に限界が来ている。

その点でシエラなら“魔術”という二人にはない知識がある。何か画期的なアイデアを出してくれるかもしれない。

(ま、ちよつと怖いのは確かなんだけどな)

背に腹は代えられない。不安げなリートを何とか宥めながらキサラギはカップに残る紅茶を飲み干す。

「ご馳走さま！ おつしゃあー！ やるわよおおー！！」

普段の優雅さは何処へ行ったのか、シエラは物凄い勢いで紅茶を流し込むと、一目散に研究室へ駆けて行く。

「良かったですね。お嬢様」

淑女らしからぬ主人の姿をブライは嬉しそうに見送っていた。

「申し訳ありません。陛下」

アルフォンスは深々と頭を垂れて、皇帝に自分の非を報告する。

彼の居る場所は諸侯会議の席ではなく、皇帝の執務室であった。

室内には彼と皇帝の二人しか居ない。無論、扉の向こうには近衛騎士が守っている。こうして二人だけで話せるのは、アルフォンスに対する信頼の顕れであった。

「陛下より賜った任……果たすことが出来ませんでした」

「構わん。此度の顛末は聞き及んでいる。ゲシュトの件はお前の責任ではない。お前は良くやってくれた」

長年仕えた忠臣にアスラは皇帝として労う。

だが、アルフォンスは頭を上げようとしな。彼の心は無念に満ちていた。

本来ならアルフォンスに責任はない。彼の指揮に不備は無く、その証拠に彼が率いた騎馬隊に大きな犠牲は出ていなかった。アスラもそのことを正しく理解している。

しかし砦に居た者達は誰一人として帝都に帰ることは叶わなかった。

彼らは死体でさえ帝都に帰れなかった。

「陛下。わしは……いえ、私は……」

「よい。お前には幼少の頃より世話になっている。他の者の目が無い今、気遣いは無用だ」

「そうでしたな。あの鼻垂れ小僧が立派になったもんじゃわい」

「口の聞き方に気を付けろよ？ ジジイ」

「ふっ……」

「ふふっ……」

「うはっはっはっ！」

二人同時に笑い出す。明らかに空元気だったが、これからする話のことを考えると無いよりマシであった。

笑いが治まるとアスラは歯切れ悪い口調で話を切り出す。

「此度の“白”の件、我は……帝国は一体どうすれば良い？」

懸念となるのは新たに出現した“白い魔神”についてである。神出鬼没で行く先々で破壊を振り撒く、まさに悪夢のような存在だった。

「わしが言えた口ではないが、安易な刺激は与えない方が良いでしょう。白い方の目的がわからん以上は迂闊に動けん。都市部の防衛に専念するべきじゃ」

「最早大陸全てが直面する危機だ。今は“人間”のことを気にする必要が無いだけ良いだろう」

“魔の森”が消失してからアスラは“人間”との全面戦争を避けようとしていた。

頭の固い“魔族”を纏めるのは骨が折れたが、“白”という新たな脅威の前に“人間”が攻めて来られなくなったのは思わぬ行幸でもあった。

しかし悩みの種は尽きることはない。

「それよりも問題は“ハイゼンベルグ”じゃ……」

渦中の“白”はどうやらハイゼンベルグ領を拠点にしているようなのだ。

近隣からは空へと飛翔する“白”を見たという証言が帝都にも届けられている。

「うむ。ハイゼンベルグ卿も無事だと良いのだが……」

彼女とは領地での謹慎を命じてから、今も全く連絡が取れない状態が続いていた。

“白”の出現と時期が被ることからも、諸侯会議でも彼女の生存は絶望視されている。

「今はまだ抑えておるが、若い者達が無茶をせんとも限らん」

「ハイゼンベルグ卿は若い諸侯に慕われていたからな」

彼女の見た目もそうだが、若いながらたった一人で領地を治め、魔術の最高峰である宮廷魔術士の位を持つ天才 若い者の間では彼女はちよつとしたアイドルだった。

「何も無ければ良いんじゃないが……」

「彼女は優秀な魔術士だ。きつと逃げ延びているだろう」

アスラは西の窓から外を窺う。残念ながら帝都からはキシル山脈が邪魔で、ハイゼンベルグを直視することは叶わない。

「そうじゃな……」

呟くアルフォンスの表情は何故か硬い。純粹に彼女の身を案じるアスラと違って、彼には一つ気に掛かっていることがあった。

「歳は取りたくないのう」

疑り深くなつて敵わん……呟き山脈を見詰める老人の顔は、長きに渡って帝国を守り続けた油断無き騎士の物であった。

24・疑念（後書き）

どうも、如月八日です。

今回も何とか日付が変わる前に更新出来ました。

レオン・ブランデルは自分のことを“騎士”だと思っている。

本物の騎士が聞けば、激怒して切られるようなことであつたが、彼は本気でそう思つていた。尤も、彼の考える“騎士”とは戦う者であり、総じて戦場での強者を意味する。そこに騎士の誇りなんて無価値な物は含まれていない。

“ブランデル”の家系は騎士の末裔だつた。その起源はまだ人類が宇宙で暮らす前の時代まで遡れる。

しかしレオンが産まれた時には、“騎士”という存在は既にフィクションの中だけの存在であり、彼の家系が“騎士”の血を引いているという事実も全く意味の無い物だつた。

だが、レオン・ブランデルには“騎士”の血が流れている。

それは誇りと忠義を重んじる尊い物でなく、力と闘争を求める浅ましいモノだつた。

「くくくつ……待つてろよ。キサラギイ」

薄暗い操縦席の中でレオンは愛おしそくに宿敵の名を呼ぶ。

大陸中を荒らし回つていた【テュラン】も、今は一時の休息を取つている。各国を荒らす程度なら今の状態でも可能だつたが、いつまでも丸腰で居る訳にもいかない。

彼が求める宿敵との対決には“剣”が必要だつた。

「あの一撃は見事だつたあ……」

ゲシュト砦での一戦で、片腕を犠牲にして【シュナイト】が繰り出した一撃は今もレオンの脳裏に焼き付いている。

“騎士”の末裔として産まれたレオンには戦いの才能があつた。だが、産まれる時代が悪かつた。今の戦場は人間の兵士よりも、優秀でコストの掛からない無人兵器が幅を利かせていた。

それでも“戦い”を求めるレオンが、傭兵イーガーとなつたのは必然だつた。

戦場ならば正当に人と殺しあえる　期待していたレオンは直ぐに失望することになる。

彼は強過ぎた。狂犬の如く執拗に機工戦騎だけを狙う彼の噂は直ぐに広まった。傭兵と言えども死にたくはない。危険な相手なら戦わないで逃げるのも立派な戦略だ。

しかしソレではレオンの渴きは癒せない。そこに彼はレオンの前に現れた。

「やっぱり、お前は最高だぜえ……ギサラギイ」

キサラギこそレオン・ブランドルが求めた宿敵だ。彼が失望した無人兵器の陰に隠れてばかりの情弱な傭兵どもとは違う。機工戦騎の操縦もそうだが、何より不利な状況下でも自分を殺そうとする気が心地良かった。

キサラギなら“戦い”を求めるレオンの飢えを満たせる。

「早くしてくれよ。俺は我慢するのが苦手なんだぜえ」

ナノマシンを使って新たな剣を製造するのに一週間は掛かる。それが終わればまた暇を潰して待つしかない。

キサラギに用意された時間はあまり多くなかった。

「お、終わったわ……」

「うお！？　す、凄い顔だな」

翌日の朝食の席にシエラはやって来た。

キサラギは彼女の登場に啞然としてしまふ。徹夜で結界の復旧作業をしていたのか、目の下には濃いくまが出来ており、身に纏う空気が黒く淀んでいる。

折角の美少女が台無しの姿であった。

「うふふ。一晩で終わらせたからね。大変だったわ」

「今のお前を見ればわかるよ」

疲労困憊の筈なのに目だけがキラキラと輝いている。余ほど【シユナイト】に触りたかったらしい。

「気持ちはわかった。だから【シュナイト】を見るのは寝てからにしてくれ」

「ちよつと！ 私は直ぐに見たいのよ」

「無理するな。寝ぼけて【シュナイト】を壊されたら洒落にならん」

「またそうやって私に触らせない気ね。そうは行かないわよ。そうは！」

「違う。今のお前の頭じゃ良い案は期待できない」

「ぐっ……むっ」

シエラも理屈はわかるようで渋い顔をして唸る。自慢の頭脳も寝不足では、キサラギの期待には応えられないだろう。

「仕方ないわね。でも、ご飯だけは食べさせてちょうだい」

「何か軽めの物をご用意します」

ブライは彼女の為に用意していた皿を下げようとする……が、その手はキサラギによって止められる。何かと視線を向けるブライにキサラギは自分の皿を差し出す。

「畏まりました。キサラギ様」

キサラギの前にシエラの方だった料理を残してブライは厨房へ戻る。

シエラは寝ぼけ眼ながらも、一連の流れを見て呆れた。

「相変わらず朝からよく食べるわね」

「ナノマシンがある分、沢山食わなきゃ駄目なんだよ」

「そうなの？」

『はい。ですが、マスターの大飯食らいをナノマシンだけの所為にしないでください』

「事実だろ。だからこれも栄養補給なんだよ。うん」

キサラギは幸せそうにブライの料理を堪能する。シエラの方も入れば既に三人前になるのだが、ブライの料理は何度食べても飽きることのない至高の一品だった。

『なるほど、栄養補給ですか……なら今後はマスターの料理は必要ないです。まだ携帯食料の残りがありません。昼からはソレを食べて

ください。栄養価も高いですし
『勘弁してくれ』

『それならもう少し自重してください。今のマスターはタダ飯食らいの身なんですから』

「くっ……わ、わかった」

キサラギは苦悩に満ちた表情で頷くと、料理を食べるペースを緩める。どうせ最後なら味わって食べることにした。

やはりシエラは眠いのか会話が弾むことはない。そのまま食事が終わるとシエラは眠そうに欠伸をする。

「ふわぁ〜あ……それじゃ、少し部屋で寝るわ」

(少しと言わずに好きなだけ寝てくれ……)

主に【シユナイト】の安全の為に……そうは思っても口にしないキサラギであった。

最後まで眠そうにシエラは自室へ戻る。

そうして独り食堂に残されたキサラギは席を立つでもなく、窓の向こうにある【シユナイト】を見ていた。

『マスター。何もしなくて良いんですか？』

「ああ、今はすることが無い」

時間は惜しいが別に焦っても状況が好転する訳でもない。屋敷の結界が直り“魔素”の影響が無くなった今、直すだけならばナノマシンに任せても問題はない。

キサラギはのんびりとシエラの目覚めを待つことにした。

結局、シエラが目覚めたのはすっかり日も暮れた夜だった。

「さあ！ 行くわよ。キサラギ！」

寝起きとは思えないテンションでシエラはキサラギを先導する。今日も徹夜する気なのか、その手にはブライが用意したバスケットが握られていた。

「頼むから壊すのだけは勘弁してくれよ」

些か活き活きとし過ぎているシエラに今更だがキサラギの不安が

増す。

リートはとつくに腹を括っていたのか、先程から沈黙を続けていた。いや、既に諦めている可能性もあるだろう。

二人は屋敷の裏地に出る。暗くてよく見えないが、そこには夜闇に溶け込むような漆黒の巨人が横たわっている筈だ。

キサラギは片手にランタンを持ちながら器用に【シュナイト】によじ登る。

「ほらよ。梯子だ　って、何やってるんだ？」

「はあ〜ようやく、ようやく、触ることが出来た……」

シエラが【シュナイト】に頼ずりしていた。

「アホなことやってないでさっさと登れ」

「うふ、うふふ……楽しみだわあー」

「悪口にも反応無し、か……こいつはヤバイかもしれん」

普段なら噛み付きそうな言葉にも全くの無反応である。彼女の【シュナイト】に対する好奇心はキサラギの想像を絶していた。

下調べと称して機体をバラバラにしかねない雰囲気である。

『マスター。大丈夫ですよ？　【シュナイト】はきっと大丈夫ですよね！？』

不安に耐えかねたのかリートが泣きそうな声を出す。だが、キサラギには今のシエラを止める術に心当たりがなかった。

「すまん、リート。俺は間違ってしまった……かもしれん」

『そ、そんな！？　た、助けてください。マスター！　【シュナイト】が、このままじゃ【シュナイト】が！』

「くっ、許せ……」

等と漫才をしていると、シエラが縄梯子を登って操縦席の場所まで来た。キサラギはハッチを開くとシートの裏に回る。

今日この椅子に座るのはキサラギではなく、シエラであった。

「リート。システムを待機モードで起動しろ」

『了解。システム起動』

「搭乗者の認証は全てカットしろ。あと駆動系の操作は全て受け付

けないようにしておけ……危険だ」

『わかってます』

重苦しく答えるリートの声にキサラギも操縦席のシエラに視線をやる。

「ウホホホッ！ この椅子に座って【シユナイト】を動かすのね。

あら？ これは一体何かしら……」

「危険だな」

『ええ、シエラさんが今押したボタンは炸裂障壁バンツァーのスイッチです』

「ぐっ、もし起動していたら」

屋敷が跡形もなく吹き飛んでいたかもしれない。思わず想像してしまい背筋を冷たい汗が伝う。このまま彼女の好きにさせるのは心臓に悪過ぎる。

「止せ。好き勝手にボタンを押すな」

キサラギはシートの後ろから手を回すとシエラの手を掴み彼女を止めた。

「あ……」

掴まれた手の平を見てシエラが小さく声を漏らす。その頬がほんのりと色付く。

キサラギは彼女が急に大人しくなったのを好機だと判断した。

『むむむ……』

リートは気付いていたが黙ってハッチを閉じる。キサラギの指示に従って彼女の気を逸らすべく、本題である機体情報を正面モニターに表示させた。

「これは！ 興味深いわ」

その効果はてき面で、彼女は金色の瞳を輝かせてモニターを覗き込む。シエラはキサラギ達の文字が読めないなので、リートと二人で図面に書かれた単語の意味を伝える。

さすがの“天才”も複雑な構造を持つ“機工戦騎”を全て理解することは不可能だ。

大まかな部分を説明したキサラギは本命の図面を表示させる。

「次はこれを見てくれ」

「これは……内部の機関みただけで何処の部分なの？」

「機工戦騎の“動力炉”　言つて見れば“心臓”に当たる部位だ」

「へえーコレが機工戦騎の心臓なのね」

彼女に見せたのは“動力炉”の設計図だ。その横には現在の稼働率を表す60の数字が浮かび上がっている。

「この数字が動力炉の稼働率を表してる。これを出来るだけ100の状態に近付けたい」

「確か前居た場所では数字は100だったのよね？」

「はい。動力炉が正常に稼働すれば数字は100になります。それと今は60まで上昇していますが、外では50まで低下します。その分も考慮する必要があるでしょう」

「外だと低下？　じゃあ、【シュナイト】は屋敷の敷地内の方が本来の力を発揮出来るってこと？」

「そうなります。細かい理屈はまだ分かっていません。ですが、動力炉の不調は“魔素”が原因なことは確実でしょう」

「まあ、セルディオが“魔素”で満ちた世界なんだ。そこで動かすからには動力炉の方に手を加えるしかないからな」

だからキサラギはシエラの意見が聞きたかった。魔術研究の専門家である彼女ならば、キサラギヤリートとは違う視点で考えることが出来る。

「ふーん……“魔素”が邪魔なら取り除いちゃえば良いんじゃない？」

「……………」

シエラの何気ない言葉に二人は揃って絶句した。

天才ゆえの閃きなのか、発言した筈のシエラは至って冷静に補足を続ける。

「“魔素”が邪魔なんですよ？　なら動力炉……いえ、いつそ【シュナイト】の内部に存在する“魔素”を全部取り除けば良いのよ」
まさにキサラギが求めていたアイデアだった。キサラギが求め

る【シユナイト】の改造とは、レオンの【テュラン】と対等に戦える条件を整えることである。

動力炉から“魔素”を取り除き稼働率を100パーセントにまで引き上げられれば、少なくとも出力の差は埋まる。

だが、それも出来ればの話である。

「で、出来るのか？」

キサラギは震える声でシエラに確認を取った。それに対する返答は不敵に笑うシエラの顔だった。

「任せなさい。それに丁度試してみたいと思った研究があるの」

『た、試す？ まさかシエラさん。【シユナイト】を使って実験するつもりじゃあ……』

「キサラギが置いて行った端末を見て思いついたんだけどね。中に入っていた変な板みたいに刻印を」

『無視しないでください！』

凶星だったのかシエラはリートの言葉に聞こえないフリをした。

一方で誤魔化すように自分の新たな研究を饒舌に語る。

『助けてください、マスター！ このままじゃ【シユナイト】が実験台にされてしまいます！』

リートが悲痛な声で助けを求める。

だが、他に手は無いのだ。キサラギはそれを涙を呑んで黙殺する。「すまん。リート……」

零れた懺悔の言葉は、シエラの捲くし立てる声とリートの泣き声で誰の耳にも届くことはなかった。

25・閃き（後書き）

どうも、如月八日です。

何とか今日中に書き上げられました。

次回の更新も日曜日になります。

『ロキア王！ 援軍が送れんとは一体どういうことじゃ！』
ダイン共和国の代表モーデイス・ハガートの怒声が響き渡る。今にも唾を飛ばしそうな剣幕だったが、彼が吐いた唾は会議に出席する二人に届くことはない。

何故なら彼らが座る会議とは“遠話の間”を使った三国会議だからである。モーデイスの怒声は“遠話”の魔術で残るダリオの下に届けられはしたが、実際には彼らの肉体は遙か遠く離れた場所にある。

しかし、彼らの間にあるのは何も物理的な距離だけとは限らなかった。

「そのままの意味だ。歳で耳が遠くなったのかな？ モーデイス爺」
熱を上げるモーデイスとは対照的に、ダリオは興奮で顔を紅潮させる老人を冷やかな目で見ていた。

始まりは“白”の襲撃を受けたダイン共和国が、ロキア王国に援軍を要請したことが始まりだった。

共和国は経済力に優れ豊富な資金を持っていたが、その反面で商業に傾倒するあまり国が持つ軍事力は貧弱であった。それでもこれまで共和国が存続していられたのは、モーデイスが持つ政治的な手腕と、大陸で戦争の無い平和な時代が続いていたからである。

「我が国は自分のことで手一杯だ。そちらに援軍を送る余裕は無い」
小競り合い程度の戦なら傭兵を雇えば済む。現にこれまで共和国はそうやって自国を守って来た。

ダリオは暗に今回もそうしろ、と言っていたが、それにモーデイスが頷くことはない。

『このままではダインが“魔神”に滅ばされてしまっくんじゃぞ！？』
今回の敵は“魔神”……それも文字通り降って湧いて来た“白”の方だった。“白”の悪名は既に大陸中に轟いている。これまで神

出鬼没で予測不可能の襲撃を繰り返していた“白”だが、ここに来て明確な目的で襲撃するという新たな動きを見せている。

それがモーデイスの抱える問題でもある“ミスリル鉱山の占拠”であった。

「腹が減ってるのだろう。満腹になれば帰るのではないか？」

「そんな悠長なこと言っておる場合か！ 魔神は直ぐ側に来ておる。奴の気まぐれでダインが滅ぼされる訳にはいかん！」

「少し落ち着いてください。モーデイス爺」

これまで静観していたセラリス法王が、声を荒げ訴えるモーデイスを制する。

「おお……セラリス様。どうか魔神討伐の為、聖国より神殿騎士団の派遣を……」

ロキア王国は当てにならないと判断したのか、モーデイスは絶える予先をセラリス聖国へと変更する。女神キュクレの信徒である彼女なら、邪悪な魔神の脅威から自国を救ってくれる。モーデイスはそう思っていた。

「何を言ってるいるのです？ 神殿騎士団には神聖なる神殿を守る使命があります。それを疎かにする訳にはいきません」

今や迷える子羊となった老人にセラリスはそれこそ女神のように微笑み返す。

だが、その笑顔から出る言葉は決して“救い”などではない。

「な、何を言っておるんじゃ！ 共和国にこのまま滅びると言うつもりか！？」

「そうは言っていないせん」

「なら、一体どうしろと言っんじゃ！」

頼みの綱である聖国にまで見放されては、モーデイスにはもう後が無い。彼は半ば八つ当たりのような調子でセラリスに食って掛かる。

しかし対する彼女の返答はモーデイスの理解を超えていた。

「祈るのです」

「……は？ な、何じゃと？」

「女神に祈りを捧げるのです。モーデイス爺も女神キュクレの敬虔な信徒。女神キュクレの大いなる愛を信じ、女神による救いを祈りましょう。私も聖国より祈り続けます」

「……………」

得も言われぬ脱力感がモーデイスの身体を支配する。興奮に立ち上がっていた老体が、糸の切れた人形のように力なく椅子に倒れ込む。

呆然とするモーデイスの顔は絶望に染まっていた。

「どうやら話がついたようだ。なら、会議はここまでだ」

ダリオは頃合と見ると会議を終わらせた。今は特にセラリスと話すことも無く、モーデイスがあの状態では会議を続ける意味は無いだろう。

「それではロキア王、モーデイス爺。あなた方に女神キュクレのご加護があらんことを」

「……………」

鏡に映るモーデイスの顔は虚ろだった。そこには老いてなお覇気に溢れたかつての面影は無く、朽ち逝く時を待つ老人にしか見えなかった。

“遠話”が終わり、二つの鏡には見慣れた自身の顔だけが映るようになる。

「ふん……………」

不機嫌そうな自身の顔にダリオは不快そうに鼻を鳴らす。

理由なら既にわかっている。これまで戦争こそしてはいたが、長年張り合ってきたモーデイスが抜け殻のようになってしまったからだ。

だからと言ってダリオが共和国に援軍を送ることは無い。彼はそんな私情で国を危険に晒すような暗愚ではなかった。

だが…………彼は玉座へと戻ると兵に命令を出す。

「ニールとグレッグの隊を出撃させる。目的地はダイン共和国だ」

それは援軍の部隊ではなかった。

「うふ、むふふ……」

シエラの口元が湧き上がる高揚感でだらしなく緩む。

彼女は今にも涎を垂らしそうな顔で【シユナイト】の改修作業に打ち込んでいた。

横たわる漆黒の巨人の上でシエラは作業を続ける。彼女の手には特殊な塗料を馴染ませた筆が握られており、彼女はそれを使って【シユナイト】の全身に線を描いていく。

頭部や手足といった末端から伸びる線はやがて胸部へと収束する。それはスケールの大きい落書きのようだった。

「右腕はこんな感じで良いわね。お次は……」

向かう視線の先には元通り接合された“左腕”がある。結界が戻り活動を再開したナノマシンは数日で切断された腕を元通りに復元していた。

現在、シエラが行っている作業は“刻印魔術”を刻み付けである。言葉にすれば単純な物だが、その為にはシエラが機体表面を塗料でマーキングし、各部の改修をするリートのナノマシンを補助しなければならぬ。

何故そんな面倒なことをするのかと言うと、シエラが“魔術”で直接加工するには機工戦騎の装甲は堅過ぎであり、また“刻印魔術”を扱えないリートが一人で作業するのも無理だからだ。

そんな訳で今のシエラは大腕を振って【シユナイト】に触れた。シエラは隅々まで脳に焼き付けようと機体を観察する。

「間接はこんな風になってるのね。うふ、うひひっ！」

途中で興味深い部分を発見し笑う姿は、普段の美少女が台無しになる醜態だった。それでも本人はこの上なく幸せなのだろう。作業を続ける手は一時も止まることはなく、【シユナイト】の改修作業は淀みなく進む。

念願叶って遂に機工戦騎の研究が出来て、シエラは大変ご満悦だった。

『シ、シエラさん？ あまり怖そうに笑わないでください。思わず振り落としたくなります』

一方で彼女のお目付け役を任されたリートは、作業しながらも前触れも無く笑い出すシエラの狂態に戦々恐々としていた。

【シュナイト】の強化の為にやむを得ないとはいえ、シエラを野放で作業させるのは危険だと判断したキサラギは、彼女の見張り役を信頼出来るリートに任せていた。

ちなみに彼がこの場に居ないのは、食料の買出しを任されたからである。シエラ達が馬車に一杯に積んだ食料は数日でキサラギの胃の中に消えた。

さすがに食うだけでは居心地が悪い、とキサラギが自主的に買出し役を申し出たという訳である。

今後の戦局を左右する大役を任されたリートだったが、それは同時に修理の為に【シュナイト】と一体化している彼女にとって“恐怖”との戦いでもあった。

「嗚呼あ……良い。本当、本当に素晴らしいわ！」

『そ、そうですね……』

「あら？ 何だか元気がないみたいね」

貴女の所為です と、口に出して言うことは出来ない。仮にもこちらは改造を頼んでいる立場である。シエラの機嫌を損ねて作業を中断されてしまったては事だ。

尤も、今のシエラは止めても勝手に改造するだろうが……

『いえ、何でもありません。それよりシエラさんに聞きたいことがあるんです』

少し露骨な話題転換だったが、機工戦騎に夢中で注意力が散漫のシエラには有効だった。

それに聞きたいことがあるのは事実である。

『以前から聞きたかったんですが、シエラさんはどうして機工戦騎

に興味があるんですか?」

「簡単な話よ。機工戦騎が素晴らしいから、コレに尽きるわ。“魔術”も使わずにこんな巨体が人間みたいに自在に動くのよ? それだけでも素晴らしい技術だわ!」

シエラは金眼を星のように輝かせる。その眼は既に機工戦騎という未知の技術に魅入られていた。

だが、それが一般的な反応なのかと言えば答えは否だろう。

「シエラさんの感性を否定する訳ではないですが、機工戦騎は今のセルディオの科学力だと構造を理解するだけで数百年は掛かる代物ですよ? はつきり言ってシエラさんみたいに研究したがる奇特な人は他に居ないと思います」

「無理もないわね。セルディオは“魔術”で発達した文明だもの。

“魔術”を全く使わない“機工戦騎”は異端の技術でしょうね」

「なら、シエラさんもまず興味より畏怖が湧くと思うんですが?」

全く未知の存在に対する生物の反応は“無視”か“拒絶”の二択であろう。それが危険を避ける生存本能というものだ。その原因が途方も無い技術の差から来るものであっても、未知の物を避けようとするのは当前の反応である。

「個人の感性は人それぞれ、よ。私は一目で機工戦騎の有用さが理解できた。他の連中がどう思おうと関係ないわ。うん、私は“機工戦騎”が欲しいの」

「あげませんよ?」

「ええ、結構よ。私が欲しいのは“機工戦騎”だもの」

「まさか……【テュラン】を手に入れる気ですか!? 止めてください。命を無駄にするだけです!」

「あははは! 大丈夫よ。私は誰からも“機工戦騎”を貰うつもりは無いから」

「シエラさんの身に何かあればマスターが え?」

これは緊急事態だと慌てるリートだったが、シエラにその気が無いことを理解する。

同時に彼女の発言に存在する矛盾に気付き思わず聞き返す。

『じゃ、じゃあ一体どうする気なんですか？』

「無いなら造るわ。私を誰だと思ってるの？ 欲しい物が無きゃ自分で造る。それが私よ」

その為にこうやって調べさせて貰ってるし、と続けるシエラの瞳は燃えていた。

『ほ、本気で機工戦騎を造る気なんですか？ さすがに無理なんじゃ……』

「いいえ、絶対に造ってみせるわ。その為に一度【シユナイト】を動かしてみたいんだけど駄目かしら？」

『その手には乗りません。素人が機工戦騎を動かすのは危険です。』

あ、先に言っておきますが、マスターとの相乗りでも駄目ですよ？』

「もう、けちね。……ん？ ははあくん。わかったわ」

シエラは不満そうに頬を膨らませていたが、何か思い至る物があったのか途端に笑みを浮かべる。

「私が愛しのマスターと仲良くするのが嫌なんでしょう？」

何処か意地の悪そうな顔で、シエラは自分が思い至った理由を口にした。

『なッ！？ ち、ちち、違います！ 何を根拠にそんなことを……』

「見事な狼狽えようね。いつそ清々しい位だわ」

『本当に違います！ 機工戦騎は傭兵イーガーにしか動かせないんです！！』

「あら、どうして？」

『シエラさんは動いてる所を見たことがないので、イメージするのは難しいでしょう。“機工戦騎”は操縦者に掛かる負荷を一切考慮していないんです。頭の良いシエラさんならこれだけで理解できると思います』

「ああーなるほど、そう言う訳なのね」

つまり普通の“人間”では操縦の負荷に耐えられない、ということだ。

キサラギやレオンのようにナノマシンで身体を強化された傭兵イーガーな

らば問題ないが、そうでない者には機工戦騎の機動　まして戦闘
など自殺行為でしかない。

『歩く位なら酔うのを我慢すれば可能です。しかし走ったり跳んだ
りはアウトです。機工戦騎同士で殴り合いなんてした日には、一瞬
で挽肉ミンチに早変わりです』

「う……嫌なこと想像させないでよ。ま、まあ……完璧に再現する
のは無理そうだからね。うん、多少のアレンジは必要だね。大丈夫、
私ならきつと出来る……答よ」

この時ばかりは自称“天才”の彼女も言葉尻が弱かった。それで
もシエラは機工戦騎の研究を止めないだろう。彼女も“刻印魔術”
という成果に一応の満足してはいるが、自分の身近により優れた物
がある以上、ルシフェラ・セリクスが黙って見過ごすことは無いの
だ。

『でも、それなら魔術の一般化の方は良いんですか？　さすがに両
立は無理だと思いますが……』

“魔術”については学の浅いリートから見ても、シエラの“刻印
魔術”は画期的だ。

それでも彼女の掲げる“魔術の一般化”は容易い道では無い筈だ。
途中で投げ出すなど中途半端なことを嫌う性格のシエラらしくない。
リートの疑問は的を射ていたが、結局シエラは理由を教えてくれ
なかった。

「大丈夫……行き着く結果は一緒だから。さあ、作業に戻りましょ
う」

そのままシエラは話を終わらせた。誤魔化されてしまったが、確
かに彼女の言う通りこれ以上の無駄話は作業に支障をきたす恐れも
ある。

リートはそのまま黙して作業に専念することにした。

「……………」

『……………』

シエラは先程までとは一転、二人は黙々と作業を続けていた。

【シュナイト】の黒いボディには何本もの線が描かれ、まるで凝った意匠のようである。

それらの線が引き終わるとリートはナノマシンで塗料と装甲の構成物質を組み替えて行く。塗料の中には“魔力”を通し易い物質が含まれている。リートはナノマシンでそれらを“魔力”を通す為の“導線”に変化させていた。

「それにしてもこの“カイロ”……だつたかしら？ キサラギの居た世界の人間は凄い物を考えるのね」

『はい。こちらと違って科学しかありませんでしたから』

機体各部を走る無数の“導線”は心臓部である“動力炉”へと繋がっている。それはシエラが携帯端末に使われた“集積回路”をヒントに考えたアイデアだった。

動力炉には“魔晶石”が仕込まれており、内部の“魔素”を“魔力”に変換。それらの“魔力”は“導線”を伝って機体各部で放出される仕組みである。

「でも、折角の“魔力”をただ垂れ流すだけってのは……考えてみれば勿体無いわね」

『い、いえ！ このままでも良いのではないですか？』

リートは不吉な予感に従って、シエラをそれとなく止めようとする。

だが、“魔晶石”と繋がった“導線”は“魔晶石と同じ性質を持つ”という面白い特性があった。つまり機体の全身に張り巡らされた“導線”も、“魔晶石”と同様に“魔素”から“魔力”を生み出せるということだ。

本来なら“動力炉”の稼働率を戻す為に“魔素”を取り除くことが目的なので、それでも良いのだろうが、“魔術”の専門家のシエラからしてみれば、資源の無駄遣いに思える。

「そうよ。余剰魔力はたっぷりあるし……クヒヒ！ これを使わない手は無いわ！」

シエラが熱っぽい視線で【シュナイト】を見詰める。彼女の口は三日月の形に裂けていた。警鐘を鳴らしていたリートの嫌な予感が、確かな質量を持った現実となる。

『あの……シ、シエラさん？』

魔改造　そんな三文字がリートの脳裏に過ぎった。

「さて、やるなら直ぐ作業に取り掛からなきゃ……キサラギが帰って来る前に」

【シュナイト】の集音マイクは優秀だ。最後の方は小声だったシエラの言葉もばっちり拾っている。

『ひーん、マスター！　早く帰って来てくださあーい！』

今のシエラを自分では止められない。シエラに出来るのは一刻も早い主人の帰りを祈ることだけだった。

26・改造（後書き）

どうも、如月八日です。

何とか今日中に上げることが出来ました。
来週も間に合うよう頑張ります。

キサラギが食料の買出しから戻って来たのは日が暮れてからだった。

食材をブライに渡すとキサラギは屋敷の裏地に足を向ける。

リートに作業の進捗具合を聞くつもりだった。シエラという危険人物に【シュナイト】を委ねて大丈夫だったのかも気になる。

『あ……マスター。お帰りなさい』

「お、おう？ ただいま」

出迎えたリートは何処か上の空で、心此処にあらずといった状態だった。

シエラは夜通し作業を続ける気なのか、キサラギの到来にも気付かず黙々と【シュナイト】に刻印を施している。

薄暗くなる時間帯だが【シュナイト】の周囲は暗闇とは無縁だった。横たわる機体の周囲には、刻印魔術なのだろう光りを発する棒が何本も突き立っている。

だが、何よりリートの様子が気になった。

「俺が居ない間に何かあったのか？」

『何もありませんでした』

「そうなのか？ でも」

『何もありませんでした』

「いや、絶対何かあっただろ！？」

『何も、何も……うう……思い出したくありません』

「……すまん。リート」

嗚咽交じりに否定するリートの訴えに、キサラギはそれ以上の追求が出来なかった。半分以上言ってしまったような物であったが……

「はあ、シエラに聞くしかないか」

あまり気は進まないが、キサラギは作業を続けるシエラの元に近

付く為に機体の上によじ登る。

「ウヒ、ヒヒヒッ！ コレも足してちゃおうかしらあ」

（ち、近付きたくねえ……）

丁度陰になっていて顔を直視することは出来なかったが、彼女の口元は三日月のように裂けていた。

シエラは近づくキサラギに気付かず、怪しさ全開の笑いと共に装甲に塗料で刻印を描いている。

（それにしても随分と大掛かりなんだな）

胴体を中心に機体各部へ伸びる刻印は、特に手足などの末端に集中している。

（ま、物が大きいからな。それだけ規模も大きくなるのか）

“刻印魔術”について無知なキサラギにはわからなかったが、【シユナイト】に施された刻印の量は“魔素の排除”の為にしては明らかに多過ぎていた。

キサラギはそのことに気付かず、不気味なテンションで作業を続けるシエラに声を掛ける。

「戻ったぞ。作業の方は進んでるみたいだな？」

「あら、帰っていたのね。作業の方は………順調よ」

「何か間が無かったか？」

「いいえ、そんなこと無いわ。うふふ………今とっても気分が良いの。だから今夜はこのまま徹夜で続けるわね」

「そ、そうか………あまり無理はするなよ」

シエラの妙に上機嫌な態度に違和感はあるが、その言い知れない迫力に気付けばキサラギは首を縦に振っていた。

その従順な態度に気を大きくしたのか、シエラは躊躇っていた疑問を口にする。

「キサラギは………その………レオンって奴を倒したらどうする気なの？」

「……………」

その問いが含む重要な意味にキサラギは即答できなかった。

【テュラン】を倒すことはキサラギが抱える最も大きな問題である。シエラの改造で“動力炉”の問題が解決すれば、【テュラン】を倒せるかもしれない。

そしてレオンに勝ったキサラギを待つのは大きな選択だった。

このままセルディオに残るか？

それともセルディオから出て行くか？

悩むキサラギは搾り出すように声を発する。

「まだ……決めてない」

キサラギにはそう答えるのが精一杯だった。

それにどちらを選ぶにしても、相応の準備が必要なのも事実である。

だが、何時までも先延ばしに出来ることではないだろう。

「答えはレオンを倒してから考えるよ」

問題の先送りでしかなかったが、レオンに勝てなければ全て徒労だ。

今は目の前の戦いに集中すべきだった。

その後は【シュナイト】の改修作業は続けられた。途中でブライが夜食の差し入れなどがあつたりして、時刻は既に深夜を回っていた。

「……………」

“刻印魔術”ではキサラギに手伝えることが無い。彼は黙ってシエラの作業を見守る。

「ふん、ふんぐん」

月明かりの下で金の少女が黒き巨人に淡く光る紋章を刻む。それは御伽噺の一説に登場しそうな神秘的な光景だった。

その光景にキサラギはしばし呆けていたが、何かに気付いたのかシエラは作業する手が止まる。

キサラギが声を掛けようとするより早く、シエラは自身が感じた疑問を口にしていった。

「そういえば【テュラン】の方はどうやったのかしらね？」

「何？ どういう意味だ？」

「鈍いわね。“動力炉”のことよ。【シュナイト】は私が居るから大丈夫だけど、向うはそうも行かない筈でしょ？」

『「……あ」』

言われて初めて思い至ったのか、二人は同時に声を上げた。重要な話題に自然とリートの調子も戻って来る。

『そうです！ こちらのことで手一杯で考えていませんでした。【テュラン】は一体どんな方法で解決したんでしょう？ 同じ手を使うにしても……』

「ああ、シエラ。“刻印魔術”を他に使える奴が居たりしないか？ 自分達を知る唯一の方法である“刻印魔術”が真つ先に浮かぶ。それ以外の方法を知らないキサラギとしては当然の考えなのだが、どうやらシエラの気に障ってしまったらしい。

「居る筈が無いじゃない。アレは私が開発したのよ。少なくとも私は世間に公表したことは無いし、似たような物が開発されたって話も聞かないわ」

シエラは懺然とした顔で否定する。研究者として自分の発明と同じ物が、他にも存在するとは思えないのだろう。

「それに【シュナイト】みたいに完全自立型で術を起動させるには“魔晶石”が必要だわ」

『魔晶石を用意すれば良いのではないですか？』

「無理ね。断言出来るけどアレの生成は私以外にも不可能よ」

「そんなに貴重な物だったのか……」

キサラギは腕輪に嵌められた空色の石を見る。彼女の言う通りならセルディオに二つとない貴重な品だ。それにキサラギも“翻訳”の魔術には随分と助けられている。

「と・も・か・く！ 実物を見たことは無いけど刻印魔術じゃないことは確かよ。別の方法だと考えるのが自然じゃないの？」

『うーん。そうですか……』

「あればこっちが試してるからな」

他に方法が無いから“刻印魔術”という候補が出ていた訳であり、それが否定されてはもうキサラギにお手上げだった。

そもそも他に方法があればキサラギも【シユナイト】をシエラに委ねるような危ない橋を渡ろうとはしない。

結局、【テュラン】の動力炉の謎は分からないままだろう。二人はそう思っていたが、シエラはキサラギ達とは違う点に着目していた。

「ねえ、【テュラン】に魔術士が乗ってるんじゃないの？」

「無理だな。シエラは知らないかもしれないが、機工戦騎が全力で動けば傭兵以外の奴は負荷で挽き肉に」

「ああ、いいわ。その説明はリートに聞いたから」
「……………」

ぞんざいに説明を遮られ、キサラギが寂しそうな目でシエラを睨む。

いじける主人を補佐すべく、リートが話を引き継ぐ。

『なら、それをどう説明するんですか？』

「ふふん、まだ二人は“魔術”をみくびっているようね。衝撃なら防護の魔術で何とか防げる……………かもしれないわ」

「何だか曖昧な言い方だな。確証はないのか？」

「少なくとも私じゃ出来ないわ」

「そうだな。シエラは術理を探求する錬金術師としては超一流だろうが、術を行使する魔術士としては三流以下 だったか？」

「む……………前半は良いけど、後半は改めて他人から言われると何か腹が立つわね」

「ふん、お互い様だろ」

先程の意趣返しなのか、キサラギの口調は刺々しい。このままで話が進みそうもないので、リートはシエラに水をやることにする。『具体的にはどの程度の腕前が必要なんですか？』

「そうね。乗ったことが無いから断言は出来ないけど、“宮廷魔術

士”位の腕があれば耐えられるんじゃないからしら」

「ああ……そう言われれば候補が居るな」

ユリ・ハイゼンベルグ キサラギを苦しめた宮廷魔術士だ。ゲシュト砦の時にも老人の魔術士が居たのだが、あの時は直後にあった【テュラン】との激闘の所為か印象が薄い。

『なるほど、マスターと戦った女ですか……そういえば、マスターはあの男との繋がりを懸念していましたね』

「そうなの？ キサラギ」

「確証は無かったが、な。裏を取る為にレオンの搜索をギルドに依頼していたんだが……」

尤も既に今日の買い物でギルドに寄って依頼は取り下げている。

【テュラン】が大っぴらに姿を現すようになったので、レオンの居場所を探す必要が無くなったのだ。

「あの女が一枚噛んでいる可能性は高いわね。忌々しい」

ユリに襲撃されたことを思い出したのか、シエラが苦り切った顔で吐き捨てる。

彼女程の技量があれば機工戦騎への同乗は可能かもしれない。

だが、それには一つ問題があるとキサラギは考えていた。

「なあ、“魔術”ってのは、そんなに長時間維持できるものなのかな？」

「使う術にもよるわよ。下位の術ならそれこそ何時間と維持できるけど……」

『わかりました。機工戦騎の負荷を防ぐには上位の術でなければ不可能です。そうなれば持続時間の方で無理が出る、そうですね？』

「ああ、それなら【テュラン】の不自然な撤退にも説明が付く」

レオンは“時間切れ”と言っていた。それが動力炉の正常稼働のタイムリミットだとすれば、戦闘狂のレオンが撤退する理由として申し分ない。

あの男は戦うことを渴望する一方で勝利に執着している。メインの武器である双剣を失っていたあの場で、動力炉の出力が下がるの

は捨て置けないマイナスだろう。

「本当なら思わぬ好機かもしれないな。くくくつ……」

後に控えるレオンとの戦いに思わぬ光明が見えたかもしれない。
キサラギは来る決戦に思いを馳せた。

『それで私に話とは一体何ですか？』

「まあ、ちよつと……ね」

【シュナイト】の上でシエラは手元の端末から視線を逸らす。

この場にはシエラとリートの二人だけだ。作業が一段落付いたので、キサラギには食堂まで夜食を取りに行つて貰っている。

『マスターが居ては話難いことですね？』

「う、うん……」

注文した料理は少し手間の掛かる一品だ。この場に彼が戻つて来るまでの時間を少しは稼げるだろう。

折角、作ったチャンスも有限である。

シエラは勇気を振り絞り絞つて彼の相棒に訪ねてみた。

「その……リートなら、わかるんじゃないかと思つて……」

『マスターがここに残るか　ですね？』

「はあー、全部お見通しみたいね」

『二人のやり取りを見ていればわかります』

シヨックで呆然自失していたかと思えば、きちんと話は聞いていたらしい。

口を挟まなかったのは彼女なりの気遣いだったのかもしれない。

『私の口からマスターの意志を勝手に話すことは出来ません』

それでも彼女の口からは明確な拒否の言葉が紡がれた。

リートは誰よりもキサラギの味方である。その彼女が本人の居ない場所で、彼の心の内を漏らすような真似をする筈がなかった。

だが、彼女も何か思う所があるのか言葉を続ける。

『ですが、私の個人的な意見ならお教え出来ます』

「リート……」

『お礼は結構です。あくまで私の意見ですから』

「それでも良いわ」

キサラギを説得する上で彼女の意見は無視できない問題だ。

『此処に残る方がマスターの為には良いと思っています。例え帰ったとしてもマスターを待っているのは“傭兵”としての戦いの日々です。マスターは若いんですから、もっと人生を楽しむべきだと思います』

「うん、うん」

『それに依頼中の失踪はマスターの信頼を大きく傷付けていると思われます。傭兵業を続けるにしても、そんな状態ではまともに食べていけません！』

「う、んん？」

『それに訓練校の借金だってまだ沢山残ってるんです！ マスターはその辺に疎いから気にしてませんが、マスターは自分の腕を過小評価しています。マスター程の実力ならもっと依頼料をふんだくることがだって』

「あくリートさん？」

『そもそも！ あの戦闘狂とかち合う依頼が多かったのも、マスターが任務を選び好みしないからと、好き勝手に危険な依頼ばかり回してくるからで』

「……………」

どうやらリートはスイッチが入ってしまったらしい。何処で押ししてしまったのかもわからないが、日頃の不満が出て来る、出て来る。「ストップ、ストップよ。リート」

このままではキサラギの今後について相談するつもりが、リートの愚痴を聞くだけで終わってしまう。

『むう……………』

「ごめんね。愚痴には今度付き合っただけあげるわ」

まだ話し足りなそうなりートには悪いが、シエラは話の軌道を元

に戻すことにした。

「リートはキサラギに残って欲しいのよね？」

『はい。その方がマスターは平穩に暮らせる筈です』

リートの返事に迷いは無い。彼のことを第一に考えている彼女は、時として彼の為なら無断で行動することもあるのだ。

尤もシエラもソレが原因で“魔の森”が消滅したとは思っていなかったが……

「なら私達の利害は一致しているわね」

『つまり？』

「同盟よ」

こうしてキサラギの与り知らぬ所で小さな同盟が結ばれた。

目的はキサラギを帰さないことだが、その為に二人は出来る限りのことをする。

リートは公私に渡って彼を支えることだろう。

そして発案者であるシエラは既に行動を始めていた。

「それとね。実は」

シエラは不敵に微笑むと、盗み聞きを警戒してそつと囁く。

『ええー！？』

思わずリートが驚きの声を上げるが、聞き咎める者は居ない。

二人の密談を知るのは夜空に浮かぶ月だけであった。

27・密談（後書き）

どうも、如月八日です。

今回の分を更新しておきます。

28・問題（前書き）

どうも、皆さん。お久しぶりです。

試験も終わり新作を投稿することが出来ました。

『機体状態……全て正常です』

「……ああ」

液晶の光が灯る仄暗い操縦席にリートの声が響く。座席に腰掛けたキサラギは何処か不満そうに返事をする。

今日は待ちに待った【シュナイト】の動作テストの日だった。レオンの【テュラン】に対抗すべく、シエラに依頼していた改造が先日になって遂に完了したのだ。

本来喜ぶべき日に、キサラギがそんな顔をする原因は彼の膝の上にあった。

「ふふん、当然よ。私が作ったんだから問題なんかある筈ないわ」

『はい。信頼は（・）しています』

「……………」

シエラはリートと仲睦まじく談笑している……キサラギの膝の上で、だ。

今回の改造は全てシエラの先導の下に行われた訳で、【シュナイト】に刻まれた“刻印”が正しく機能しているかは彼女にしか判断が付かない。

だが、【シュナイト】の操縦はキサラギにしか出来ず、折衷案としてシエラと同乗を渋々ながらも了解した次第であった。

（くっ……何だ？ この居心地の悪さは……）

シエラは小柄なので膝の上に座られても重い訳ではない。

しかし、これまで傭兵業一筋で潤いとは無縁だったキサラギに、このような形で異性と接触した経験がある筈もなく、彼の平静を否応なしにかき乱す。

（落ち着け。落ち着くんのだ。相手は子供だ。子供相手に何を動揺する必要がある？）

言い聞かせるようにキサラギは自身を落ち着かせる。本人が聞け

ば激怒すること必至の台詞だが、直接口に出すような愚は冒さない。尤もキサラギの理論には一つ大きな誤解があった。

シエラは“魔族”の血を引いている。外見こそ小柄で幼く見えだが、実の年齢ではキサラギよりも上なのだ。

そんなことを微塵も知らないキサラギは、何とか精神の安定を取り戻して来ると、二人の会話に耳を傾ける余裕が出て来る。

『相手はあの狂人です。備えは幾らあっても足りないでしょう』

『出来る限りの手は施したわ。後は今日のテスト結果次第よ』

シエラの言葉にキサラギは計器の最終確認を済ませる。動揺しながらも無意識下で続けていたソレも完了して、後は実際に動かしてテストするしかない。

試験と言っても内容は単純だった。機体の“刻印魔術”を発動させた状態で“動力炉”を含む機体データを確認するのである。

その為にまず試験前に【シユナイト】を屋敷から移動させていた。シエラが太鼓判を押しているとはいえ、どんな事故が発生するかわからない。予期せぬ“暴走”で屋敷を吹き飛ばしてしまう可能性もあったので、テストには屋敷から離れた場所を選んでいる。

「よし、テストを開始する」

既に移動も完了し、【シユナイト】は無人の荒野に直立している。テストは迅速に行われるべきだろう。

周囲に気を配ってるとはいえ、長居すれば【テュラン】の目に留まってしまう。

キサラギも試験の結果もわからない状態で、【テュラン】と戦闘することは避けたかった。

「それじゃあ、キサラギはその窪みに魔晶石をセットしてちょうだい。それで“刻印”は起動するわ」

シエラの指示に従いコンソールに新たに拵えられた窪みに魔晶石を詰め込む。窪みは溶かしたミスリルで描かれた回路によって外部の“刻印”と繋がっている。

機体の全身を走る“刻印”を起動させるには“魔力”が必要とな

る。一度起動さえしてしまえば、“刻印”で発生する分で維持は可能なので、初回に分さえ用意できれば理論上は永久に稼働させることが出来る……らしい。

「……うん。ちゃんと問題なく動いてるわ」

「そうか、リート」

『はい、動力炉の出力 60……70……まだ上昇中です』

「よし！ 良いぞ」

「やったわね。キサラギ」

『出力 100%で安定。マスター！』

「ああ、これならいけるぞ」

期待通りの結果にキサラギ達は喝采を上げる。

“動力炉”の出力が正常に戻れば、【シユナイト】は本来の性能を遺憾なく発揮できる。

それに出力の都合で使用を断念していた武装も幾つかある。それらの解禁だけでもキサラギには十分な成果だった。

久しぶりの全快であったが、修理した左腕の具合も確認しなければならぬ。

勿論、シエラことを考慮し戦闘機動などはせず、あくまで緩慢な速度での動作だけに留める。

「よし、シエラ。少し動くぞ」

キサラギが注意を促すと、機体をゆっくりと動かす。

「え？ うわわっと!？」

「おっと……もっと確り掴まっていた方が良いぞ」

「あ……そ、そうね。わかったわ」

揺れにシエラがよろめいたが、側に居たキサラギが難なく支える。先程のようにどきまぎしていても、いざとなれば自然に身体が動くキサラギであった。

その後も機体の点検は続けられる。一通りの動きを確認するとキサラギは機体を直立させた。

無人の荒野に【シユナイト】は静かに佇む。漆黒のボディに走る意匠のような“刻印”は周囲の“魔素”を“魔力”に変換、淡い青色の燐光となつて漂う。

科学の申し子たる“機工戦騎”は、その身に新たな魔術ちからを宿していた。

「リート。左腕の調子はどうだ？」

「特に問題は無いです。急に出力が正常値に戻った影響で、修復部の強度が足りなくなるかと懸念していましたが、正常に動作します。接合部への負荷も許容の範囲内です」

「そうか。なら後は武装のチェックだが……」

ちらりと視線を膝の上に腰掛けるシエラへと向ける。歩いたりする分には問題ないが、武装の点検ともなれば、多少は激しい動きもする必要があつた。

“魔族”の血こそ引いているが、シエラの身体はそこまで頑丈ではない。

機工戦騎の戦闘機動には耐えられないだろう。

「一度屋敷に戻るぞ」

シエラが何か言うかもしれない。キサラギは返事も待たずにコンソールの“魔晶石”を取り外した。

淡く輝いていて“魔力”が霧散し、機体の“刻印”もその輝きを急速に失う。

後は元通りの状態になる筈であつたが……突如、リートが悲鳴のような声を上げた。

「大変です！ 出力が低下しています！」

「魔晶石を外したんだ。元の五割程度の状態に戻るの^は当たり前前だろ？」

「違います。出力が下がり過ぎてるんです！」

「なんだと!？」

慌てて計器を確認すると、確かに彼女の言葉通り“動力炉”の出力が低下していた。

それも稼働率が10パーセントに届く程の下がりようである。ここまで下がってしまうと、もう機体を歩かせることすら不可能なレベルだった。

明かに異常である。

「シ、シエラ。これは一体」

「うーん。さすがに天才の私も詳しく調べてみないとわからないわね」

「そうか……そうだな」

「出力低下の原因が“魔素”や“魔力”にあるのなら、ずっとこのままってことは無いでしょう。だけど“刻印”の使用には何かしらの反動がある、と考えた方が良いみたいね」

「ああ……」

喜んでいた矢先の落とし穴だった。それでもリスクに対し、余りあるリターンがあつたことも確かである。

全力で稼働する【テュラン】に対抗するには他に手は無い。

『戦闘時の出力を維持できません。システムを待機モードに移行させます』

赤く灯る単眼が光を失う。漆黒の巨人が力なくうな垂れる。その身に刻まれた無数の“刻印”も今はもう輝いていない。佇み眠る巨人の姿はまるで骸のようであつた。

「ふん、やはり思った通りだな」

玉座に腰掛けたダリオは伝令の兵を下がらせると、誰にでもなく呟いた。

報告は“ロキア共和国”に向けた部隊からの物である。彼らはダリオの指示通りに部隊を少数の班に分け、広く薄く展開しながら緩やかに共和国に侵攻していた。

「“魔神”が狙うのは“砦”や“大軍”だ。奴らの目に兵など地を這う虫けらにしか見えんのだろうよ」

人間が一匹の虫に敵意を向けることはない。そもそも両者には圧倒的な格差が存在し、自身よりも遥かに矮小な個体を識別しているとは思えなかった。

それはこれまで“魔神”が襲撃した場所が証明している。「群がる虫が屠られるというのなら目立たぬように軍を分ければ良いのだ」

事実、薄く展開した王国軍は“魔神”の目を掻い潜って、今も混乱する共和国の喉笛に食い付いている。

だが、極力人数を抑えた軍隊では城を落とすことは出来ない。各地で奮戦する共和国軍だが、破滅の時は刻々と近付いていた。

「モーデイスよ。“魔神”はミスリルをご望らしい。お前の国はたんまり持っているからな。さぞや魅力的に見えることだろうさ」数日前に襲来した“白”が未だにマオルベルグから動かないのがその証拠だろう。

援軍を断られたモーデイスは軍を集結させ、首都の防衛に当たっている。

「くくつ、籠城は下策だ。群がり騒げば“魔神”が来るぞ！」

これは傑作だ、とダリオは笑う。共和国は既に詰んでいる。“魔神”という特大の脅威に狙われ、商業という生命線を断られた共和国は以前のような強国ではない。

ダリオは共和国に点在する交通の要所を制圧し、共和国軍を少しずつ追い詰めた。

後は勝手に“魔神”が引導を渡してくれるだろう。万が一にも“魔神”に滅ぼされずとも、共和国が力を取り戻す前に平らげてしまえば良いだけの話だ。

「“白”はロキア共和国に破滅をもたらした。ならば“黒”は」
何に破滅をもたらすのか？

ダリオは今も姿を晦ませている漆黒の“魔神”に思いを馳せた。

「うーん……」

キサラギは屋敷に戻ると居間で地図を相手に唸っていた。

動力炉は数分後に正常な状態に戻った。詳しい原因は不明だがシエラは携帯端末^{リット}を連れて今も原因の解明に取り掛かっている。今夜も徹夜する気のように、ブライに夕食は軽食で良いと頼んでいた。

キサラギも彼女を手伝いたいのには山々だったが、魔術の分野では役に立てず、機工戦騎についてもリットが居れば十分だった。

そのような理由から現在、キサラギを悩ませているのは別の案件である。

「さて、候補としてはこんな所か」

居間の大机には地図が広げられ、上には目印代わりの銃弾が二個置かれていた。

渋い顔をするキサラギは手の平で残りの弾を弄ぶ。候補となっている場所は二箇所……“魔の森”と“ラグル湖”である。

「うん、ここなら余計な横槍の心配は要らないな。周囲への被害も最小限で済む」

どちらも人気とは無縁の場所だ。荷電粒子砲を持つ【テュラン】を相手に遮蔽物が少ないのはマイナスだが、地上での接近戦に限れば平らな地形はむしろプラスに働く。

「誘き寄せるなら拠点から近い“魔の森”の方が良い、が……」

“ラグル湖”の性質は上手く利用すれば、こちらの手札として使うことも出来る筈だ。

キサラギとしても切れるカードは一枚でも多く持っていたい。

「ま、この件は保留で良いだろう。あれこれ考えても奴が誘いに乗るとは限らない」

尤もそうなる可能性は高い筈だ。相手はあのレオンである。キサラギが姿を現せば文字通り飛んで来るだろう。

“魔素”でリーダーが使えない以上、【テュラン】のように空を飛ばない限りこちらから奇襲するのは不可能だった。

「野郎に先制を取られるのは癪だけだな」

“出力”では同じ土俵に立てても装備では相手側に分がある。その差を少しでも埋める為に今は少しでも行動すべきだ。

「差し当たっては新しい情報が欲しいな」

ブライは確か厨房だったか、と席を立とうとした矢先に控えめなノックが聞こえた。

「キサラギ様。少しお時間を頂いてよろしいでしょうか？」

「ああ、大丈夫だ」

計ったようなブライの登場にキサラギは思わず監視を疑うが、彼が押すカートの存在で疑念は直ぐに氷解した。

何のことは無い。シエラの夕食を運び終えたブライが次はキサラギの所にやって来ただけに過ぎない。

「“白い魔神”について何か新しい情報は入ってないか？」

出された料理には手を付けず、キサラギは先に話を切り出す。

ブライは少しだけ残念そうな顔をする。料理にがつつかないキサラギの反応が寂しかったのだろう。

「おほん、特にこれと言った動きは無いようです」

だが、それも一瞬のことだった。直ぐに気持ちを切り替え、ブライはいつもの執事然とした態度に戻る。

「特に大きな動きはなしか」

「はい。“白い魔神”にこれと言った動きは無いようです」

ブライは念を押すように同じ言葉を繰り返す。その言いようはキサラギの脳裏に引く掛かった。見ればブライは口元に微笑すら浮かべている。

そのことに気付いた時、キサラギにもブライの言わんとしていることの意味がわかった。

「もしかして全く動いていないのか？」

「はい。今もマオルベルグに留まっていますようです」

「狙いは大量のミスリルか。良い予感がしないな」

レオンがこのタイミングでミスリルを欲する理由は一つだろう。

以前の戦闘で破壊された装備の修復……いや、ひょっとしたら新

たな装備を製作しているのかもしれない。

「場所がわかっててもこっちから仕掛けるのは無理か」

夜陰に紛れても【シユナイト】の接近は感知される可能性が高い。そもそもレオンが【テュラン】から降りてなければ奇襲の意味は無いのだ。

（あの野郎が敵地のだ真ん中を生身でうろつくとは思えないしな）

やはりレオンとの戦いは正面からぶつかり合う以外ないだろう。

来るべき決着の刻は近い。知らずキサラギは拳を握り締めていた。

28・問題（後書き）

どうも、如月八日です。

書くのは久しぶりで少し苦労しました。

本作を待つて下さっていた方ありがとうございます。

お待たせしました。今後も日曜の更新を目標に連載を再開します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1282s/>

空から魔神が！？

2011年12月4日23時17分発行